

平成 23 年度  
山口大学の FD 活動

山口大学大学教育機構  
山口大学教学委員会

# はじめに

現在、高等教育機関に進学する者が8割に達しようとしており、高等教育が我が国の多くの若者にとって社会に出る直前の教育段階となっている。このことを踏まえ、高等教育において、学校から社会・職業への移行を見据えたキャリア教育・職業教育の改善・充実が課題となっている。このような課題を踏まえて大学設置基準の改正が行われ、各大学には、「大学・学部等の教育上の目的に応じ、学生が卒業後自らの資質を向上させ、社会的・職業的自立を図るために必要な能力を、教育課程の実施や厚生補導を通じて培うことができるよう、大学内の組織間の有機的な連携を図り、適切な体制を整えること」が求められることになった。

この大学設置基準の改正（平成23年4月1日から施行）を受け、山口大学では、学士課程を通じて学生のキャリア意識を高めるため、教員養成に係る教職カルテや医学部保健学科と工学部の一部に導入されたものにとどまっていたポートフォリオを全学的に導入することとした。

平成23年度の教育改善FD研修会では、すべての学部が大学教育センター・学生支援センターと合同で、ポートフォリオ導入のためのFD研修を実施し、導入の趣旨の確認と各学部の現状についての情報交換を行った。また、ポートフォリオを活用した統合的な修学支援を行っている佐賀大学から講師を招いて全学FD講演会を開催し、学習改善のための省察的実践により、学習への動機づけを強固にし、能動的学習につなげることを目的に試験とは異なる学生の学習過程評価としてポートフォリオが導入されたことを学んだ。このようなFD活動の結果、ポートフォリオ全学導入の準備が整い、ポートフォリオの基本フォーマット作成に取りかかることができた。

2005年に発行された山口大学FDハンドブック第3部「大学における授業改善ヒント集」を改訂し、改訂版を同FDハンドブック第4部として発行した。この7年間に、全学的FDの取組として、グラデュエーションポリシー（GP）の策定、カリキュラムマップ（CUM）の作成とその改善、カリキュラムフローチャート（CFC）の作成などが行われ、それらの取組がさまざまな授業改善の実践につながっている。改訂版には多くの実践事例が含まれており、それらを活用することで、授業改善がさらに進むことが期待される。

GPC(Grade Point Class Average)と成績分布をWeb上に表示させる成績分布共有システム(SSS)が完成し、共通教育実施部会の各分科会や各学部において、SSSを通じた適正な成績評価の検証と改善の取組が開始された。例えば、「基礎セミナー」クラス間の成績分布の違いを認識し、統一シラバス化を目指したFD活動を展開したり（人文学部）、「物理学Ⅰ、Ⅱ」の成績分布の差異の確認作業を行ったり（理学部）した例が挙げられる。

平成24年3月27日付で、学部・研究科再編等会議により、「新しい共通教育について」と題する報告がなされた。平成24年度に入り、平成25年度のスタートを目指して、新しい共通教育の実施体制を検討する作業が始まっている。この新しい共通教育は、一貫した学士課程教育の構築を目指すものである。これにより、FD活動がさらに活性化し、授業改善が大きく進むことを願ってやまない。

山口大学 大学教育機構  
副機構長・大学教育センター長  
糸長 雅弘

第1部 全学FD活動.....	1
第1章 大学教育機構主催のFD活動.....	2
第1節 大学教育機構主催の講演会及び研修会一覧.....	2
第2節 大学教育機構主催の講演会及び研修会の概要・報告.....	9
第2章 共通教育授業科目別分科会のFD活動.....	41
第3章 学生授業評価及び教員授業自己評価.....	44
第1節 実施方法・実施状況.....	44
第2節 授業評価の結果について（全学）.....	51
第3節 学生授業評価の結果について（共通教育）.....	66
第2部 学部・研究科のFD活動.....	90
第4章 人文学部のFD活動.....	91
第1節 授業公開.....	91
第2節 学部・研究科主催FD研修会.....	91
第3節 教育改善に関する活動.....	92
第4節 学生授業評価・教員授業自己評価.....	92
第5節 FD実施経費報告書.....	92
第6節 来年度の課題.....	93
第5章 教育学部のFD活動.....	106
第1節 授業公開.....	106
第2節 学部主催FD研修会.....	107
第3節 教育改善に関する活動.....	111
第4節 学生授業評価・教員授業自己評価.....	112
第5節 FD実施経費報告書.....	114
第6節 来年度の課題.....	114
第6章 経済学部のFD活動.....	116
第1節 授業公開.....	116
第2節 学部・研究科主催FD研修会.....	129
第3節 教育改善に関する活動.....	133
第4節 学生授業評価・教員授業自己評価.....	133
第5節 FD実施経費報告.....	134
第6節 来年度の課題.....	134
第7章 理学部のFD活動.....	135
第1節 授業公開.....	135
第2節 学部・研究科主催FD研修会.....	142
第3節 教育改善に関する活動.....	149

第4節	学生授業評価・教員授業自己評価.....	153
第5節	F D実施経費報告.....	155
第6節	来年度の課題.....	156
第8章	医学部のF D活動.....	157
1.	医学科.....	157
2.	保健学科.....	159
第9章	工学部のF D活動.....	167
第1節	授業公開.....	167
第2節	学部・研究科主催F D研修会.....	177
第3節	教育改善に関する活動.....	181
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価.....	182
第5節	F D実施経費報告書.....	183
第6節	来年度の課題.....	183
第10章	農学部のF D活動.....	184
第1節	授業公開.....	184
第2節	学部・研究科主催F D研修会.....	189
第3節	教育改善に関する活動.....	191
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価.....	198
第5節	F D実施経費報告書.....	201
第6節	来年度の課題.....	202
第11章	人文科学研究科のF D活動.....	203
第12章	教育学研究科のF D活動.....	205
第1節	授業公開.....	205
第2節	研究科主催F D研修会.....	205
第3節	教育改善に関する活動.....	205
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価.....	205
第5節	F D実施経費報告書.....	206
第6節	来年度の課題.....	207
第13章	経済学研究科のF D活動.....	208
第1節	授業公開.....	208
第2節	F D実施経費報告書.....	208
第3節	来年度の課題.....	209
第14章	医学系研究科のF D活動.....	210
第15章	理工学研究科のF D活動.....	211
	理学系	
第1節	授業公開.....	211

第2節	学部・研究科主催FD研修会.....	211
第3節	教育改善に関する活動.....	211
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価.....	211
第5節	FD実施経費報告.....	213
第6節	来年度の課題.....	213
工学系		
第1節	授業公開.....	213
第2節	教育改善に関する活動.....	214
第16章	農学研究科のFD活動.....	216
第1節	授業公開.....	216
第2節	学部・研究科主催FD研修会.....	217
第3節	教育改善に関する活動.....	217
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価.....	217
第5節	FD実施経費報告.....	219
第6節	来年度の課題.....	219
第17章	東アジア研究科のFD活動.....	220
第1節	平成23年度東アジア研究科FD計画.....	220
第2節	東アジア研究科FD研修会.....	220
第18章	大学院技術経営研究科のFD活動.....	232
第1節	授業公開.....	232
第2節	学部・研究科主催FD研修会.....	233
第3節	教育改善に関する活動.....	239
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価.....	243
第5節	FD実施経費報告書.....	249
第6節	来年度の課題.....	249
第19章	連合獣医学研究科のFD活動.....	250
第1節	.....	250
第2節	共通ゼミナール.....	250
第3節	各大学における特別講義.....	254
平成23年度	山口大学 教学委員会 名簿.....	257
平成23年度	山口大学 学部・研究科FD担当者 名簿.....	258
平成23年度	山口大学 大学教育センター 名簿.....	259

## 第 1 部 全学 FD 活動

# 第1章 大学教育機構主催のFD活動

山口大学のFD活動は全学レベルと学部・研究科レベルで実施されている。本章では、全学レベルのFD活動として大学教育機構および事務局が主催するFD活動の報告を行う（一部にSD・TAD活動を含む※）。

※FD(Faculty Development、大学教員の職能開発)、SD(Staff Development、大学職員の職能開発)、TAD(Teaching Assistant Development、大学院生が行うTAの職能開発)。

## 第1節 大学教育機構主催の講演会及び研修会一覧

以下の表は平成23年度の大学教育機構主催FD講演会・研修会の一覧である。講演会は夏に1回行われ、参加者は71名であった。また研修会は14種類・計15回開催され、参加者は計624名であった。また、各学部・研究科と大学教育機構が共同で実施する「教育改善研修会」への参加者は合計360名であった。延べ1055名が本年度はFD活動を行った計算となる。多くの教職員は自主的に、また職務上の必要性から参加し、積極的にFD活動を実施した。

I 講演会									
	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
1	ポートフォリオを活用した統合的修学支援:佐賀大学における取り組み	平成23年8月10日(水)	13:30~15:00	吉田地区・常盤地区・小串地区	共通教育メディア講義室(旧SCS教室)	滝澤 登(佐賀大学大学院工学系研究科教授 ポートフォリオ専門委員長)	本学教育職員ほか及び県内他大学関係者	佐賀大学では本年度から学習ポートフォリオの導入が始まっている。今回の講演会では、「学修成果自己評価シート」を用いた学生自身による学修・教育目標の達成度評価の手法について説明していただくとともに、学生にどのような意識の変化が起きてきたのか、この評価システムを稼働させるまでの経緯と実際の状況および課題について講演。	教職員71名
									参加者計71名

II 研修会									
	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
1	新任教員研修会（第1回）	平成23年4月4日（月）	15:00～16:40	吉田地区・常盤地区・小串地区	第1テレビ会議室（遠隔講義システムを利用）	吉田 一成（大学教育機構長）、岩部浩三（大学教育センター長）、小川 勤（大学教育センター教授）、吉田 香奈（大学教育センター准教授）	平成22年8月2日以降に新規採用された助教以上の教育職員	GP、カリキュラムマップ、20年度に教育GPに採択された「目標達成型大学教育改善プログラム」、修学支援システム、観点別シラバスの作成方法、webシラバスの入力法、学生授業評価システム、教員授業自己評価システムの内容について説明する。	教員40名
2	共通教育TA・SA研修会	平成23年4月7日（木）	13:00～15:15	吉田地区・常盤地区・小串地区	共通教育メディア講義室（IBSCS教室）工学部E21番教室 医学部第3講義室	岩部 浩三（大学教育センター長）、小川 勤（大学教育センター教授）、吉田香奈（大学教育センター准教授）、岡田耕一（大学教育センター講師）、森本宏志（保健管理センター講師）、神田誠司（共通教育係長）	共通教育において前期にTAに採用された大学院生、SAに採用された学部生、およびTA・SAを採用する教員	TA・SAの役割や責任、また、各分科会に分かれて、それぞれの授業におけるTA・SAの仕事の確認と留意点などについて理解を深める。	教職員28名 学生143名
3	障害学生に対する修学支援のための研修会方法	平成23年4月19日（火）	15:00～16:00	吉田地区	人文学部・理学部第1小会議室	岩部 浩三（大学教育センター長）、小川 勤（大学教育センター教授）、該当学生が所属学部の学生委員	障害学生が所属する学部教職員、大学教育センター、学生相談所カウンセラー、共通教育係、保護者	発達障害のある学生の修学状況の把握と修学支援の方法および授業中・授業外における支援方法を学ぶ。	教員4名 職員5名 保護者2名
4	各学部・研究科FD担当者研修会	平成23年5月11日（水）	17:40～18:20	吉田地区・常盤地区・小串地区	第一テレビ会議室・工学部E21番教室・医学部第3講義室	岩部 浩三（大学教育センター長）、小川 勤（大学教育センター教授）、吉田香奈（大学教育センター准教授）	各学部・研究科のFD担当者	各学部・研究科のFD委員を対象に、本年度の機構主催のFD計画について説明するとともに、各学部でFD計画を立てる際に注意すべき点やFD予算要求の際の注意点などについて研修を行う。	教職員17名

	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
5	「大学における授業改善ヒント集」改訂に関する研修会	①平成23年5月11日(水) ②平成23年10月21日(金) ③平成23年10月28日(金) ④平成23年10月31日(月) ⑤平成23年11月8日(火)	①18:20～18:50 ②13:00～14:00 ③13:00～13:30 ④13:30～14:00 ⑤16:10～16:40	①吉田・常盤・小串地区 ②吉田地区 ③常盤地区 ④小串地区 ⑤吉田地区	①第一テレビ会議室・工学部E21番教室・医学部第3講義室 ②共通教育棟2F会議室 ③第1セミナー室 ④第2会議室 ⑤共通教育棟2F会議室	吉田 香奈(大学教育センター准教授)	各学部・研究科のFD担当者など	グループワーク。2005年に策定された大学における授業改善ヒント集」を改訂するために、各学部・研究科のFD担当を中心に、優れた教育実践事例を収集し、内容の再編集を実施する。	①教員17名 ②教員9名 ③教員4名 ④教員3名 ⑤教員14名
6	PBL型授業の進め方～課題解決型学習の展開方法～	平成23年8月1日(月)	17:00～18:30	小串地区	総合研究棟S3	川崎 勝(医学部医学教育センター副センター長) 吉田香奈(大学教育センター准教授)	希望者	PBL型授業の設計方法、シナリオの作成方法、グループ討論による問題抽出の方法、チューター教員の役割、成績評価の方法などについて学び、実際にシナリオを作るワークショップを実施する。	教員33名
7	成績評価方法入門～ルーブリック評価を用いた成績評価の推進～	平成23年8月22日(月)	15:00～16:30	吉田地区	理学部会議室	小川勤(大学教育センター教授)	希望者	「ルーブリック評価」を取り上げ、具体的にどのように評価を実施していくのかを事例を交えながら解説。また、クラス間の成績評価差異の解消のために、成績分布共有システムを活用した組織的な教育改善の方法についても解説する。	教員17名
8	大学生のメンタルヘルス入門～新型うつ病？社交不安障害？～	平成23年8月31日(水)	15:00～16:00	吉田地区	理学部会議室	今井佳子(学生相談所カウンセラー)	希望者	「新型うつ病」や「社交不安障害」の症状と対応について臨床心理士の立場から解説する。	教員18名
9	キャリア教育入門～大学教育とキャリア教育・ポートフォリオ～	平成23年9月7日(水)	15:00～16:30	吉田地区	人文・理学部大会議室	平尾元彦(学生支援センター教授)	希望者	大学生の就職活動・企業の採用活動の動向と、大学に求められるキャリア教育のあり方を解説。さらに就職支援の現場から、学生たちが何を悩み、どう動いているのかを伝える。	教職員14名

	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
10	キャリア教育入門～大学教育とキャリア教育・ポートフォリオ～	平成23年9月21日(水)	14:30～15:10	吉田地区	農学部2F大会議室	平尾元彦(学生支援センター教授)	希望者	大学生の就職活動・企業の採用活動の動向と、大学に求められるキャリア教育のあり方を解説。さらに就職支援の現場から、学生たちが何を悩み、どう動いている(動けないでいる)のかを伝える。	教職員30名
11	新任教員研修会(第2回)	平成23年9月22日(木)	14:40～16:30	小串地区	医学部霜仁会館	小川 勤(大学教育センター教授)、吉田 香奈(大学教育センター准教授)、木下 真(大学教育センター准教授)	平成22年8月2日以降に新規採用された助教以上の教職員	GP、カリキュラムマップ、20年度に教育GPに採択された「目標達成型大学教育改善プログラム」、修学支援システム、観点別シラバスの作成方法、webシラバスの入力法、学生授業評価システム、教員授業自己評価システムの内容について説明する。	教員30名
12	初習外国語履修者に対する効果的な教育法について	平成23年11月2日(水)	14:30～18:00	吉田地区	共通教育41番教室	萩桂秀(松雷快捷漢語国際文化傳播有限公司総経理 クイックチャイニーズ教育法開発者)	希望者	模擬授業を行い、独自に開発した初心者用の教材とそのユニークな教育法を説明する。	教員18名 学生53名
13	大学生のメンタルヘルス入門～新型うつ病? 社交不安障害?～	平成23年11月30日(水)	13:00～14:30	吉田地区	経済学部B-201	今井佳子(学生相談所カウンセラー)	希望者	「新型うつ病」や「社交不安障害」の症状と対応について臨床心理士の立場から解説する。	教職員7名
14	山口大学における国際活動へのヒント～事例紹介を含めて～	平成23年12月21日(水)	16:00～17:30	吉田地区	経済学部A棟2F第1会議室	今津 武(経済学部教授(特命))	希望者	平成19年11月に「国際協力活動推進プラットフォーム」が設立され、極力負担を軽減する形で現在の研究、教育活動をベースとした国際活動を目指してきた。このプラットフォームの活動事例を含めて、どのような国際活動が可能なのかについて、それぞれの部局の現状も踏まえた議論をする。	教員46名

	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
15	情報セキュリティモラル研修会	平成24年2月28日(火)	16:30～18:00	常盤地区・吉田地区	工学部D棟4F情報処理演習室・共通教育メディア講義室	市川 哲彦(メディア基盤センター教授), 王 躍(メディア基盤センター准教授), 岡田 耕一, 小川 勤(大学教育センター), 木村 友久(技術経営研究科教授)	希望者	共通教育の情報セキュリティ・モラルの授業における統一教材の内容および厳正な成績評価方法をテーマに研修を行った。教材利用では、放送大学のテキスト利用や知財関係の教材利用について検討した結果に基づいて研修を行った。厳正な成績評価では成績分布共有システムの活用と利用上の課題について研修を行った。	教員13名
16	山口大学における国際活動へのヒント～事例紹介を含めて～	平成24年3月5日(月)	16:00～17:30	小串地区	医学部総合研究棟S3	今津 武(経済学部教授(特命))	希望者	平成19年12月に「国際協力活動推進プラットフォーム」が設立され、極力負担を軽減する形で現在の研究、教育活動をベースとした国際活動を目指してきた。このプラットフォームの活動事例を含めて、どのような国際活動が可能なのかについて、それぞれの部局の現状も踏まえた議論をする。	教員31名
17	成績評価方法入門～ルーブリック評価を用いた成績評価の推進～	平成24年3月23日(金)	16:00～17:40	小串地区	医学部総合研究棟S3	小川勤(大学教育センター教授)	希望者	「ルーブリック評価」を取り上げ、具体的にどのように評価を実施していくのかを事例を交えながら解説。また、クラス間の成績評価差異の解消のために、成績分布共有システムを活用した組織的な教育改善の方法についても解説する。	教員28名
									参加者 計624名

Ⅲ 教育改善研修会									
	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
1	大学教育センターと理学部、理工学研究科(理学系)・医学系研究科(理学系)との教育改善FD研修会	平成23年7月13日(水)	15:00～15:40	吉田地区	人文・理学部大会議室	岩部 浩三(大学教育センター長)、吉村 誠(学生支援センター長)、糸長 雅弘(大学教育センター主事)、小川 勤(大学教育センター教授)、木下 真(大学教育センター准教授)	各学部・研究科の全教員	大学教育の質保証の一環としてキャリア教育を含むポートフォリオの策定に向けて意見交換を実施。また昨年度提出されたカリキュラム・フローチャートの点検結果とカリキュラム改善についても意見交換を行う。	教員61名
2	大学教育センターと教育学部・教育学研究科・東アジア研究科(教育系)との教育改善FD研修会	平成23年7月20日(水)	17:00～17:30	吉田地区	教育学部21番教室	糸長 雅弘(大学教育センター主事)、中田 充(大学教育センター主事)、木下真(大学教育センター准教授)	各学部・研究科の全教員	大学教育の質保証の一環としてキャリア教育を含むポートフォリオの策定に向けて意見交換を実施。また昨年度提出されたカリキュラム・フローチャートの点検結果とカリキュラム改善についても意見交換を行う。	教員79名
3	大学教育センターと工学部、理工学研究科(工学系)、医学系研究科(工学系)との教育改善FD研修会	平成23年9月7日(水)	13:00～13:30	常盤地区	工学部D棟3F D31教室	岩部 浩三(大学教育センター長)、平尾元彦(学生支援センター教授)	各学部・研究科の全教員	大学教育の質保証の一環としてキャリア教育を含むポートフォリオの策定に向けて意見交換を実施。また昨年度提出されたカリキュラム・フローチャートの点検結果とカリキュラム改善についても意見交換を行う。	教員53名
4	大学教育センターと人文学部・人文科学研究科・東アジア研究科(人文系)との教育改善FD研修会	平成23年9月28日(水)	13:00～13:30	吉田地区	人文・理学部 大会議室	岩部 浩三(大学教育センター長)、平尾元彦(学生支援センター教授)	各学部・研究科の全教員	大学教育の質保証の一環としてキャリア教育を含むポートフォリオの策定に向けて意見交換を実施。また昨年度提出されたカリキュラム・フローチャートの点検結果とカリキュラム改善についても意見交換を行う。	教員35名

	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
5	大学教育センターと医学部保健学科・医学系研究科との教育改善FD研修会	平成23年10月5日(水)	17:00～17:45	小串地区	総合研究棟S1教室	岩部 浩三(大学教育センター長)、平尾元彦(学生支援センター教授)	各学部・研究科の全教員	大学教育の質保証の一環としてキャリア教育を含むポートフォリオの策定に向けて意見交換を実施。また昨年度提出されたカリキュラム・フローチャートの点検結果とカリキュラム改善についても意見交換を行う。	教員48名
6	大学教育センターと農学部、農学研究科、連合獣医研究科、医学系研究科(農学系)との教育改善FD研修会	平成23年10月19日(水)	14:30～15:00	吉田地区	農学部2F会議室	吉村 誠(学生支援センター長)、小川 勤(大学教育センター教授)	各学部・研究科の全教員	大学教育の質保証の一環としてキャリア教育を含むポートフォリオの策定に向けて意見交換を実施。また昨年度提出されたカリキュラム・フローチャートの点検結果とカリキュラム改善についても意見交換を行う。	教員42名
7	大学教育センターと経済学部・経済学研究科・東アジア研究科(経済系)との教育改善FD研修会	平成23年11月16日(水)	16:00～16:40	吉田地区	経済学部会議室	岩部 浩三(大学教育センター長)、吉村 誠(学生支援センター長)	各学部・研究科の全教員	大学教育の質保証の一環としてキャリア教育を含むポートフォリオの策定に向けて意見交換を実施。また昨年度提出されたカリキュラム・フローチャートの点検結果とカリキュラム改善についても意見交換を行う。	教員42名
									参加者 計360名

## 第2節 大学教育機構主催の講演会及び研修会の概要・報告

### 1. 講演会

#### (1) ポートフォリオを活用した統合的修学支援：佐賀大学における取り組み

##### 組み

日時：平成23年8月10日（水）13:30～15:00

会場：メディア棟 情報メディア講義室

参加者：参加総数 71名（昨年32名）（内訳）吉田地区 36名（当日参加者21名 うち大学教育センター教員3名含む）小串地区 24名 常盤地区 11名

講師：滝澤 登 佐賀大学大学院工学系研究科教授（高等教育開発センター教授 兼任）佐賀大学 大学教育委員会・ポートフォリオ専門委員長

##### 内容

「ポートフォリオを活用した統合的修学支援」というテーマで佐賀大学におけるポートフォリオの全学的な取組について具体的な説明があった。佐賀大学では高等教育開発センターが中心となって、高等教育の改善に努めてきたが、今年度（平成23年度）より「ポートフォリオ学習支援統合システム」を全学的に導入して、①学生の自省をともなった修学意欲の改善と学習への取組み強化、②それらを支援するチューター制度の充実、③学士力の達成度評価、④教員の教育改善につなげるティーチングポートフォリオへの統合的な取組みなどの取組を開始したそうである。講演会では、ポートフォリオの意義や導入の背景、全学導入への取組の経過、「ポートフォリオ学習支援統合システム」の仕様や機能などについて詳しい説明があった。導入の背景としては、講義中心から課題中心の能動的学習促進や、単位制度の趣旨に沿った十分な学習量の確保のために、「授業時間外の学習時間の確保」や「学生の主体的な学習を促すことが大学側・教員側に求められていることが背景にあったことが説明された。

ポートフォリオの導入理由については、学習改善のための省察的実践により、学習への動機づけを強固にし、能動的学習につなげることを目的に試験とは異なる学生の学習過程評価としてポートフォリオが導入されたことが説明された。また、チューター/メンターとの共同作業による、学生の独りよがりでない、客観的でより深い省察が行えるという導入の教育的な効果についての説明があった。



設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	6	10.7%
良かった	33	58.9%
どちらとも言えない	8	14.3%
あまり良くなかった	6	10.7%
良くなかった	1	1.8%
無回答	2	3.6%
合計	56	100.0%

研修会後のアンケート調査結果からは「非常に良かった」および「良かった」がアンケート全体の69.6%を占め、講演内容に対する満足度が高い結果となった。また、自由記述には「ポートフォリオに対するイメージがつかめた」、「講演の中で話されていた担任制度（チューター制度）に対して大変関心がある。」、「今回の講演内容は本学の教員が聞きたかった内容だったからよかった」「山口大学でもぜひ導入すべきだ」など佐賀大学におけるポートフォリオの全学導入に対して本学の教員もかなり刺激を受けた様子を伺うことができた。今回の全学講演会は本学の教育改善の具体的な方向性を考える上で意義のある講演会であった。

## 2. 研修会

### (1) 平成23年度 新任教員研修会（第1回）

日時：平成23年4月4日（月）15:00～16:40

会場：吉田地区：第一テレビ会議室（事務棟1号館2F）

常盤地区：工学部テレビ会議室（本館1F）

小串地区：テレビ会議室（本館6F）

参加者：40名（内訳：吉田地区16名、常盤地区8名、小串地区16名）

内容

例年8月に開講されていた当該研修会を本年度は第1回目を4月に、2回目を8月上旬開催することになった。4月に第1回目を開催する趣旨としては新任教員に対して就任当初の時期から本学の教育と研究に関する方針や具体的な取組方法について理解を深めていただくためである。丸本学長には本学の現状と新任教員に対して期待することについて講話をしていただいた。また、三池副学長（学術研究担当）には本学の研究活動や競争的研究資金獲得の状況および資金不正流用防止について、吉田副学長（教育学生担当）には大学教員として本学で教育活動を行う際の心構えなどについて講話をしていただいた。その後、大学教育センターから「山口大学における教育改善のPDCAについて」（岩部大学教育センター長）、「授業の実施方法について（教育方法、障害学生支援、TAの使い方等）」（吉田准教授）、「山口大学における授業評価とFD活動」（小川教授）という3つのテーマについて、それぞれの講師が説明を行った。

研修会に参加した全体の感想としては「非常に良かった」と「良かった」を合せると、79.0%であり、概ね好評であった。参加した先生方からの意見としては、「学長、副学長、大学教育センターの先生方から熱いメッセージや教育・研究への助言を頂いて感謝したい」、「教育・研究の基本について学ぶことができ貴重であった」、「ビジョンを共有し、改善していく場は必要である。このような機会をもっと増やしてほしい」、「新任なので授業の進め方に関してとても参考になった」という意見が多かった。しかし、一方で「今回の内容的であればもう少し研修時間が増やして欲しい」、「短い時間で実施できる研修会でないと思う」という意見もあり、次年度以降、研修内容や研修時間をどのようにするか課題も残った。



開催時期については、「良い」と回答した割合が 92.1%であった。今回の 4 月開催が赴任直後というタイムリーな時期でもあり、参加者から賛同する意見が多かった。この点では第 1 回目の開催を 4 月に持ってきた目的はある程度達成されたと考えられる。

また、実施場所については、「良い」と回答した割合が 84.2%であった。「良くない」と回答した方の意見としては「開催場所が分かりにくかった」、「プレゼンを表示装置に示せるようにしてほしい」という意見があった。また、小串地区（医学部）は当初会場が狭いので不満があると考えていたが、会場に関してはそれほど強い不満はなかった。

今回、4 月開催という初めての試みであったが、一様の成果をあげることができたと考えられる。しかし、参加者からの意見にもあるように、「研修時間」や「研修内容」について再検討が必要であると感じている。今回は第 1 回目のスタートアップ的な研修会としての意義は果たせたが、学部 F D や全学 F D と今後どのようにつなげていくのかといった「研修の体系化」が必要である。具体的には年間を通して、「学生の心を探る手法」、「多人数授業の教授法」、「アクティブラーニングの手法」、「ICT の活用法」などの新任教員として今後身に付けて欲しい内容をテーマにした研修をどのように継続的・体系的に実施していくかを総務部人事課や大学教育センターだけでなく、教学審議会や教学委員会などで組織的に検討・対応する時期にさしかかっているように感じた。

#### 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	5	13.2%
良かった	25	65.8%
どちらとも言えない	4	10.5%
あまり良くなかった	3	7.9%
良くなかった	1	2.6%
無回答	0	0%
合計	38	100.0%

## (2) 平成 23 年度 共通教育 TA・SA 研修会

主催：山口大学 大学教育機構

日時：平成 23 年 4 月 7 日（木）13:00～15:15

場所：全体研修：共通教育メディア講義室(旧 SCS 教室)、工学部 E21 番教室、医学部第 3 講義室  
個別研修：共通教育棟（分科会ごと）

対象：共通教育において前期に TA に採用された大学院生、SA に採用された学部生、および TA・SA を採用する教員（初めて採用する場合は必ず出席してください）

※なお、今年度から学部生をスチューデントアシスタント(SA)に採用できることになりました。

内容

大規模授業の多い共通教育において、TA・SA による授業の補助は、きめ細かな指導の実現のために必要不可欠です。TA・SA のみなさんにとっても将来社会人になるにあたって望まれる基本的な資質（コミュニケーション力、行動力、計画力、責任感、状況把握力など）を身につける良い機会となります。また、経済的支援を得られることもメリットです。そこで、本研修会ではみなさんが TA・SA の役割を十分に果たすことができるよう、必要な知識について学びます。

## 報告

共通教育の授業の補助を行うティーチングアシスタント(TA)およびスチューデントアシスタント(SA)のための研修会が4月7日13:00より吉田・常盤・小串地区で同時開催された。本研修会は年1回行われており、今年で5年目となる。今年度から学部3・4年生をスチューデントアシスタントに採用すること可能になったため、参加者数は全体で171名(吉田地区:教員23名、学生106名、常盤地区:教員5名、学生37名)と過去最多となった。詳細は以下のとおりである。

まず、第一部では岩部大学教育センター長より山口大学の共通教育の特徴とTA・SAへの期待について説明があり、次に大学教育センターの吉田教員よりTA・SAの職務内容と注意点について説明があった。続いて大学教育センターの岡田教員より出席確認システムの使い方について解説があり、さらに全学労働安全衛生管理室主任・保健管理センターの森本宏志教員より大学の授業における安全衛生について解説があった。最後に教育支援課共通教育係よりTA・SAの諸手続について説明が行われた。

第2部の個別研修では、共通教育棟の各教室に分かれてグループ別にTAの心得や機器の使用方法等について研修が実施された。ただし、グループ別研修に適さない科目については授業担当者が個別に事前研修を行うこととした。各グループの講師は共通教育授業科目別分科会にお願いしたが、多人数・講義系授業科目については多数の分科会に関係するため大学教育センターが担当した。各グループでは、TAの心構え、留意事項、共通教育係・印刷室等の案内、AV機器操作実演、演習・実験補助の方法などについて研修が行われた。

参加した大学院生・教員からの事後評価では半数以上から肯定的な回答が寄せられた。自由記述では「TAになるにあたっての心構えが分かった」「TAとしての自覚が深まり、この研修会はよい機会となった」などの意見が寄せられた。一方、「資料の数が足りなかったため、教務手帳など確認できなかった」「安全衛生のスライドの文字は見え、誰も聞き取れなかった」「安全クイズの答えはもらえるのでしょうか?もらえるならそのことを書いた方がいいと思います」「一斉に行わず各キャンパスで行ってほしい。マイクの声が聞きづらい」「時間が長すぎる」「教員向けと学生向けを別に行って欲しい」「TA・SAになる学生が最初の方ずっと私語をしていた(注意するまでやめなかった)。学生の質に問題はないのか?研修内容はよいと思う」「事務手続きの資料が欲しい」などの意見も寄せられた。

また、今後受けてみたい研修としては「先輩TAの経験談」「実験の安全に関する研修会や実験・実習科目の指導法」「コミュニケーション力を上げるもの」「実際にSAをする実験の内容」「応急処置や非常時の対応についての実習」「共通教育の設備の講習」などが寄せられた。

来年度は研修内容・方法の再検討を行い、改善を図ることが課題である。

### 設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか?

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	10	9.3%
良かった	51	47.2%
どちらとも言えない	38	35.2%
あまり良くなかった	5	4.6%
良くなかった	4	3.7%
無回答	0	0.0%
合計	108	100.0%

### (3) 平成 23 年度 F D 担当者研修会

主催：山口大学 大学教育機構

日時：平成 23 年 5 月 11 日（水）17:40～18:20

場所：第一テレビ会議室、工学部 E21 番教室、医学部第 3 講義室

対象：各学部・研究科 F D 担当者（参加者：担当教員数：12 名、参加総数：17 名（オブザーバー、大教センター主事・教員含む）

#### 報告

最初に岩部大学教育センター長より、本研修会の開催趣旨が説明された。すなわち、従来の全学的な教育課題解決に対応する全学講演会や教員個人の教育課題の解決を支援する全学アラカルト型研修会から各学部・研究科がそれぞれの部局が抱える教育課題を組織的に解決するための学部 F D、研究科 F D という F D 活動が現在重要視されつつあること。したがって、大学教育センターから講師を派遣して、それぞれの教育課題解決の支援を実施する講師派遣型研修会が今後中心的な F D 研修会になることが述べられた。また、ここ 3 年間で実施してきた「教育改善研修会」も本年度も実施すること。本年度の研修テーマはポートフォリオの導入に関することや各学部から 3 月に提出されたカリキュラムフローチャート（CFC）の外部チェックの結果の公表と意見交換が中心テーマになることが明らかにされた。



次に、大学教育センターの小川勤教授より、本年度の教育機構主催の研修会の特徴と各学部・研究科 F D 担当者に対してセンターからの依頼事項が明らかにされた。依頼事項は、講師派遣型研修会の開催日時の報告、全学講演会の参加依頼、教育改善研修会の開催日時の報告について締め切り期日までにそれぞれ報告をしてほしいということであった。

最後の意見交換が行われた。講師派遣型の研修会では研修内容が分からないと選択できないのでそれがわかるようなものを公表して欲しいという意見があった。これに対して、センターの小川教授からは今月（5 月）の教学委員会に機構主催研修会の「実施要項」を配布する予定であるのでこれを参考にしてほしいという回答があった。さらに、独立研究科にこの情報が流れない可能性があるため全 F D 担当者に対しては教育企画係から実施要項を送付することも明らかにされた。

当該研修会後のアンケートからは、研修時期については 88.9%がこの時期でよいという回答であった。また、今後受けてみたい研修としては「e ポートフォリオ研修会」「e ポートフォリオに関わる学生面接実施方法に関する研修会」などの e ポートフォリオ関係や「大学の国際化」等の高等教育の国際化に関する取組紹介などの研修会への参加希望が多かった。

#### 設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	1	10.0%
良かった	6	60.0%
どちらとも言えない	3	30.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	10	100.0%

## (4) 「大学における授業改善ヒント集」改訂に関わる研修会

主催：山口大学 大学教育機構

日時：平成 23 年 5 月 11 日 (水) 18:20～18:50

場所：第一テレビ会議室、工学部 E21 番教室、医学部第 3 講義室

対象：各学部・研究科 FD 担当者 (参加者：担当教員数：12 名、参加総数：17 名 (オブザーバー、大教センター主事・教員含む))

報告

吉田香奈大学教育センター准教授より、2005 年に策定された『大学における授業改善ヒント集』は 6 年ほど経過し、内容的にも古くなった部分もあり、本年度全面的に改訂したいという本研修会の開催趣旨の説明が行われた。続いて、現在考えている章立てや改訂案の概要があった。前回は事例集を中心に編集したが、今回の改訂では授業改善の理論を含む基本編と各教員の取り組みをまとめた実践編の 2 部構成とすることや、実践編は一事例につき 1-4 ページ程度とすることが明らかにされた。

また、吉田准教授からは特に、各学部・研究科から先進的な授業改善の取組事例の紹介をお願いしたいとの依頼があった。

その後、参加者との意見交換が行われた。『大学における授業改善ヒント集』については、ただ先進的な授業改善の取組だけを集めて掲載するだけでなく、収集された内容をワーキング・グループ等で検討・吟味する必要があるのではないかという意見があった。これに対して吉田准教授からは、先進的な授業事例を挙げていただくのであまり内容についてチェックをいれる必要は感じないが、今伺った意見を踏まえて、当該研修会を 2 回目以降、開催するかどうかを含めてどのように対応するかは大学教育センターで考えさせてもらいたいという回答があった。

## (5) PBL 型授業の進め方 ～医学部モデルの反省から～

講師：川崎 勝 先生 (医学部医学教育センター副センター長・准教授)

開催学部：医学部(保健学科主導)

開催日時：平成 23 年 8 月 1 日 (月) 17:00～18:30

場所：総合研究棟 S3

研修対象者：医学部保健学科・医学系研究科の教職員

研修スケジュール (約 90 分)

17:00～17:02 開催挨拶(保健学専攻長)、スケジュール説明 (FD 担当)

17:02～18:00 講演

18:00～18:28 質疑応答

18:28～18:30 閉会挨拶 (保健学科 FD 担当)

報告

PBL(Problem/Project-Based Learning)とは、学生が主体となって能動的に学ぶアクティブ・ラーニングの一形態であり、実社会で問題となる課題をグループに与え、他者と協働しながら解決策を検討することにより問題解決力やコミュニケーション力などを身につけていく学習方法である。山口大学では医学部医学科が 2002 年度より「展開医学系テュートリアル」において PBL 型授業を実施しており、シナリオに表現された患者(paper patient)の事例をもとにグループ討論を行い、自学自習とディスカッションを繰り返しながら仮説検証を進め、最後にグループ発表を行っている。そこで、本



研修では、PBL 型授業の設計方法、シナリオの作成方法、グループ討論による問題抽出の方法、チューター教員の役割などについて学び、保健学科の授業への導入可能性について検討する一助とすることとした。参加者は 33 名(アンケート提出者 32 名)であった。

研修は「1.PBL の理論的背景」「2.PBL-tutorial-医学科モデル」「3.医学科モデルの問題点」「4.PBL-tutorial-新たな展開へ」の 4 点について詳しい説明が行われた。まず、理論的背景について



は、医学教育学における pedagogy から andragogy へのパラダイムシフト、成人学習理論(Adult Learning Theory)とは何かについて説明があった。続いて、医学科で行われている PBL-tutorial の発祥と普及、具体的内容・方法、その利点・注意点についてハワイ大学及び山口大学の事例をあげながら詳しい解説が行われた。なお、日本では現在数多くの医学部で PBL 型授業が導入されているが、すべてが順調であるとは必ずしも言えない状況にあり、例えば学生側の問題(動機付けの面、グループ学習に不慣れ、前提となる知識が不十分など)、教員側の問題(人的・時間的・精神的なリソースが不足)が指摘されている。しかし、従来の Medical School Model(医学科モデル)ではなく、例えば Floating Facilitator Model(促進者巡回モデル)、Peer Tutor Model(学生チューターモデル)、Large Class Model(大教室モデル)などの柔軟な方法を導入すれば解決できることが紹介された。また、事例として三重大学看護学科の一教員が 1 授業(15 コマ)で PBL を実践する例も紹介された。

なお、フロアーからは「PBL-tutorial のアウトカムは何か」という質問が寄せられた。これに対しては知識の獲得のみならず、グループ学習を通して対人コミュニケーションスキルやチームワーク、問題解決能力を向上させ、能動的な学習態度や情報を共有する姿勢、互いの意見を尊重する姿勢を培うことにある、という回答があった。また、フロアーからは「専門的な知識のまだない 1 年生の段階で PBL を入れることも検討すべきである」という意見が寄せられた。

最後に事後アンケートでは「PBL が広く応用できる可能性がわかった」「学生が自ら学ぼうとする姿勢を動機づけていく所が難しそうだと感じたが、上手くいけば学生が主体的に学ぶようになり、効果の高い教育方法だということが分かった」等の意見が寄せられた。一方、「シナリオをもとにして、どのような仮説、問題、学習項目、学習行動計画が抽出され解決したのかについて具体的な説明が欲しかった」という意見もあった。

#### 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	5	15.6%
良かった	16	50.0%
どちらとも言えない	4	12.5%
あまり良くなかった	6	18.8%
良くなかった	0	0.0%
無回答	1	3.1%
合計	32	100.0%

## (6) 成績評価方法入門 —ループリック評価を用いた成績評価の推進—

日時：平成 23 年 8 月 22 日(月) 15:00~16:30

場所：理学部 会議室

講師：小川 勤 (大学教育センター教授)

参加者：17 名

## 内容

本テーマについての初めての講師派遣型アラカルトFD研修会が理学部で開催された。研修会は5部構成で実施された。第1部は、認証評価への対応と客観的な成績評価というテーマで大学の認証評価制度のしくみと認証評価と成績評価との関係について、本学の事例も交えて説明があった。第2部では、観点別到達目標とシラバスおよび成績評価との関係について説明があった。第3部では観点別到達目標と到達度の測定について、本学のGPを事例に、GPで示された資質・能力の到達度の測定をどのように考えたらよいのかという内容で説明があった。



第4部は、当該研修会において主要なテーマであるルーブリック評価について、その評価方法の概要と特徴についてまず説明があった。その後、授業への具体的な導入例の紹介があり、どのようにしてルーブリック評価を展開するのかについて説明があった。

第5部では、本年2月に公開された「成績分布共有システム」について、まず最初に、当該システムを開発した背景説明があった。その後、このシステムの使用方法や当該システムを組織的なFD活動に活用してほしいという説明があった。

研修会終了後、参加者からは、「ルーブリック評価」が理系の授業のどのような場面で活用できるのかについて質問があった。また、理学部の場合、「知識・理解領域」や「思考・判断領域」に関する授業内容が多く、あまりこの成績評価方法が活用される場面はないかもしれないが、「卒業研究」や「課題研究」などの成績評価には部分的に活用できそうだという意見や感想が多くあった。

さらに、研修会中に「成績分布共有システム」を使用したことがあるかどうか聞いたところ、ほとんどの教員が利用したことがあると答えたのには少し驚いた。かなり当該システムに対する認知度は意外に高いことがわかった。また、自分の成績評価と他人の評価を比較するだけでなく、学科やコース単位でのFD活動にこのデータを利用した方がFD活動が活発化するのではないかといった意見も寄せられ参考になった。

### 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	0	0.0%
良かった	10	71.4%
どちらとも言えない	3	21.4%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	1	7.1%
合計	14	100.0%

## (7) 理学部 FD 研修会「大学生のメンタルヘルス入門」

日時：平成 23 年 8 月 31 日(水) 15:00～16:00

場所：理学部 会議室

講師：今井佳子（山口大学学生相談所 臨床心理士）

参加者：18 名

内容

本研修会では、大学生の不登校を理解するために、このところ話題にのぼる新型うつ病と社交不安障害（以下、SAD<sup>1</sup>）の特徴と対処の方法について講演がなされた。新型うつ病の症状には従来型のうつ病とは顕著に異なる点（気晴らしができる、自分に対する罪責感が乏しいなど）があり、他人からは単なる怠慢と捉えられがちである。一方、SAD は他人からどのように見られているのかを常時かつ極度に気にする症状を有するが、外目には誰でも経験する不安を感じているだけにしか見えず、本人だけで苦しみ続けるケースが少なくない。いずれの病気もはっきりと目に見える病態を伴わないために周囲の理解が得られない状況におかれることがある。また、罹患している本人でさえ病気という認識がない場合もある。そのため病気が進行して不登校に陥るケースも少なくない。したがって教員はこのような学生に対しては、十分なコミュニケーションをとりながら、これらの疾患の早期発見につながるよう努める必要がある。

次に、これらの問題を抱えている学生への対処方法が説明された。教員は学生の話丁寧に聞く必要があるが、メンタルヘルスや学生相談所の話題にはネガティブな印象を持つ学生が少なくないため、話の入り口としては修学相談とした方がスムーズな場合が多い。また、学生の抱える問題へのアプローチには保護者がキーパーソンであるが、保護者に連絡をする際には教員が直接連絡するのではなく、修学支援状況など客観的な観点から学務係等の事務を通じて連絡する方が学生に不信感を与えにくいと思われる。学生相談所では教員からの相談も随時受け付けているので是非利用してほしいとの話があった。

講演終了後の質疑応答では、「SAD の可能性がある学生がいるが、自分の過去を引き合いに共感を示すのは良くないのか」、「急に休学したいと言い出した学生への対処をどうすればよいのか」、「突然連絡できなくなる学生に対して保護者を介して連絡するのは良いか」、「プライドが高く傷つきやすい学生にカウンセリングを勧めるにはどうしたらよいのか」、「問題のある学生がいる場合、教員の職務として何をすべきなのか」等の具体的なケースに関する数多くの質問があった。これに対して講師からはそれぞれのケースに関する対処案が示された。

研修会後のアンケートでは、ほとんどすべての参加者から今回の研修会が有意義であったとの回答を得た（表 1）。具体的な感想としては「事例に基づくメンタルヘルスカの話は役立つ」、「思い出すこと、反省することがたくさんあった」、「今の学生に対することだったので、学生への対応について勉強になった」といったコメントが寄せられた。

今後取り上げてほしいテーマについては、「メンタルヘルスについて更に具体的な学生への対応方法」、「生活習慣とメンタルヘルスについての詳しい話」、「自宅学習、自己学習をどうやってさせるかについて」等のコメントが寄せられた。



表 1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	10	55.6%
良かった	6	33.3%
どちらとも言えない	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	2	11.1%
合計	18	100.0%

<sup>1</sup> Social Anxiety Disorder

## (8) キャリア教育入門～大学教育とキャリア教育・ポートフォリオ～

講師：平尾 元彦 先生（学生支援センター教授）

開催学部：理学部

日時：平成23年9月7日（水）15:00～16:30

場所：人文・理学部大会議室

報告

学生支援センターの平尾教授より、約1時間にわたってキャリア教育の現状および大学生の就職活動の状況について詳しい説明が行われた。参加者は教員13名、職員1名の計14名であった。以下に要点をまとめる。

キャリア教育とは「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」であり、本年4月1日には大学設置基準の改正が行われ、社会的・職業的自立を図るために必要な能力を培うための体制の整備が義務づけられたところである(第42条の2)。これを契機として、本学ではさらなるキャリア教育の体制強化に取り組んでいる。

大学生の就職活動の現状で最も注目されるのは日本経団連が2013年以降の採用選考にあたり「選考に関する企業の倫理憲章」を大幅に改訂した点である。大きく変わったのはインターネットを通じた不特定多数向けの情報発信以外の採用広報活動(いわゆるプレエントリー)を12月1日以降の開始と設定し、また選考活動の開始を4月1日以降とした点である。これまではプレエントリーは10月開始であったので、従来よりも広報活動が2ヵ月短縮され採用選考は短期集中型となったことを意味する。1～2月の土日は企業説明会が集中することが予想されている。現在、山口大学就職支援室では「働くことをもっとリアルに」をスローガンに様々な学内業界・企業研究会やインターンシップ・シゴト体験学習等を行っている。山大生は下手な就活をしている学生が多い。今後は①就職状況の適切な把握、②一人ひとりの充実した学生生活を→ポートフォリオ、③特別な支援が必要な学生への早期かつ重点的な支援、が必要であると考えられる。

次に約30分間にわたって質疑応答が行われた。まず「働くことをもっとリアルに」の中身は何か?という質問については「本物と会うこと。例えば営業職の人にとって話を聞くことである」との回答があった。また、「特別な支援が必要な学生はどのようにして見つけるのか?」という質問に対しては「非常に難しい。就職支援室や学内業界・研究会にはまず出席していない。各先生から声をかけていただければ」という回答があった。「理学部の学生は具体的な就職のイメージを持たない1年生が多い。スイッチが入るのは就活が始まる時期であり遅すぎる。いい手だては?」との質問については「日頃から学生の耳に就職の情報を入れることが大切である。ポートフォリオを低学年から作成して早期にスイッチを入れる工夫も必要である」との回答があった。「卒業後3年間は新卒扱いになるように変わったが、学生へのアドバイスはどうしたらよいか?」という質問に対しては「政府からの要請で企業がそのように対応しているが、実際には受けるチャンスがあるだけで採用されるかどうかは難しい」との回答があった。「大学設置基準の改正はカリキュラムにキャリア教育科目を入れなければならないということか?」との質問に対しては「そうではない。キャリア関連の授業を開設すればよいということではない。大切なのは大学内の組織間の有機的連携による体制づくりである」との回答があった。最後に「就職支援に関する学内外での優れた取り組みを紹介してほしい」との質問については「例えば人文学部ではキャリアカウンセラーを投入して徐々に成果を挙げている。また私学では例えば金沢工大は担任制による学習・生活指導を行っている」との紹介があった。



研修会終了後のアンケート結果は表のとおり好評であった。自由記述には「今年度のキャリア・就職について新たな情報をお聞きできて大変参考になりました」「キャリア教育の具体的な取り組みの情報を得ることができた」といったコメントが寄せられた。

研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	5	38.5%
良かった	8	61.5%
どちらとも言えない	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	13	100.0%

## (9) キャリア教育入門～大学教育とキャリア教育・ポートフォリオ～

講師：平尾 元彦 先生（学生支援センター教授）

日時：平成 23 年 9 月 21 日（水）14:30～15:10

場所：農学部 2F 大会議室

報告

学生支援センターの平尾教授より、約 20 分間にわたってキャリア教育の現状および大学生の就職活動の状況について説明が行われた。参加者は教職員 30 名であった。以下に要点をまとめる。

キャリア教育とは「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」であり、本年 4 月 1 日には大学設置基準の改正が行われ、社会的・職業的自立を図るために必要な能力を培うための体制の整備が義務づけられたところである(第 42 条の 2)。これを契機として、本学ではさらなるキャリア教育の体制強化に取り組んでいる。大学生の就職活動の現状で最も注目されるのは日本経団連が 2013 年以降の採用選考にあたり「選考に関する企業の倫理憲章」を大幅に改訂した点である。大きく変わったのはインターネットを通じた不特定多数向けの情報発信以外の採用広報活動(いわゆるプレエントリー)を 12 月 1 日以降の開始と設定し、また選考活動の開始を 4 月 1 日以降とした点である。これまではプレエントリーは 10 月開始であったので、従来よりも広報活動が 2 ヶ月短縮され採用選考は短期集中型となったことを意味する。1～2 月の土日は企業説明会が集中することが予想されている。現在、山口大学就職支援室では「働くことをもっとリアルに」をスローガンに様々な学内業界・企業研究会やインターンシップ・シゴト体験学習等を行っている。山大学生は下手な就活をしている学生が多い。今後は①就職状況の適切な把握、②一人ひとりの充実した学生生活を→ポートフォリオ、③特別な支援が必要な学生への早期かつ重点的な支援、が必要であると考えられる。



続いて、約 15 分間にわたって質疑応答が行われた。まず、「リクナビやマイナビに掲載していない企業を学生は知らないし行きたがらない。就職支援室ではどのように説明しているのか？」という質

問があった。これについては「学内業界・企業研究会等で直接話を聞く機会を設けている。またリクナビやマイナビ以外の就職関連サイトに掲載している企業もあるので様々なサイトをみるよう指導している。しかしなかにはサイトに掲載しない企業もあるので、地方主催の企業説明会やハローワークを訪ねることも有効であると説明している」という回答があった。次に「通常3年から始める進路指導を1～2年から始めることによりニート、フリーターの率が下がるといった実例はあるか？」という質問があった。これに対しては「難しい質問である。実際のデータはおそらくないのでは」との回答があった。最後に「全国の企業からみて山口大学の学生はどのような特徴があると見られているのか？」という質問があった。これについては「素朴で真面目と見られている。企業からみると大学によってカラーが違うという話をよく聞く。山大生と相性がよいと思ってくれている企業は学内での説明会に毎年来てくれている。毎年400社くらいが企業の資金で本学に来てくれているので、学生にはできるだけ出会いを作って欲しいと思っている」との回答があった。

事後アンケートは約8割の教員から肯定的な評価が寄せられた。自由記述には「就職に関する情報が得られた」「大学が学生の就職支援についてどのように教えているか理解できた。また自分が学生にどのようにアドバイスすべきか考えがまとまった」「普段知る機会・考える機会がないことを説明していただけるのは役に立つ」という感想が寄せられた。また「もう少し時間をとって、より具体的な話が進められればよかった」という意見もあった。

今後参加したい研修内容としては「キャリア教育」「学生の就職活動で身につける事柄、企業が求める学生像」「理想論と現状の問題解決が結びついたものが有難いです。どちらかだけでは消化不良になりがちです」「今回はキャリア教育のノウハウの細かいところまで聞けなかったので第二弾を希望します」「学生に対して我々教員ができることを具体的に示して頂けるような内容を希望します」という意見が寄せられた。

#### 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	4	19.0%
良かった	12	57.1%
どちらとも言えない	4	19.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	1	4.8%
合計	21	100.0%

## (10) 平成23年度 新任教員研修会 (第2回)

日時：平成23年9月22日(木) 14:40～16:30

場所：医学部霜仁会館

参加者：新任採用教員 30名

内容

研修会は2部構成で実施した。以下、研修内容について報告する。

### I. シラバス・授業評価についての研修

来年度シラバスの入力について、センターの木下准教授から、GP・カリキュラムマップとの関係を踏まえて本学のシラバス



図1 授業評価についての研修

の内容や特徴について説明があった。

また、学生授業評価の閲覧と教員授業自己評価の入力について、センターの吉田准教授から、教育改善のためのPDCAサイクルの関係から授業評価（学生・教員）の意義について説明が行われるとともに、データの使われ方についても併せて説明があった。

## II. グループワーク

最初に、センターの小川教授からグループワークの開催趣旨と話し合うテーマ・話し合いの進め方について説明があった。また、各グループに付くファシリテータの紹介もあった。1グループ、3名～6名程度が予め参加者名簿に付記したグループ分けにしたがってグループを編成した。全体で7グループであった。また、ファシリテータは、アドバイザーとして新任教員に対して適切なアドバイスを与えるために参加した。話し合ったテーマは次の通りである。①本学に赴任して授業などの教育活動や研究活動で感じたこと。②本学の学生の様子（他大学の学生との比較）、③現在、困っていること・悩んでいること。以上の3点について1時間ほど話し合った。



図2 グループワークの様子

### 評価・意見など

今回、初めてグループワークを当該研修会に取り入れたが、参加者からは概ね好評であった。普段、同じ学部・キャンパスでもお互いじっくり話し合う機会が少なく、各教員の専門分野や日頃、教育活動や研究活動で各自が悩んでいることをお互いに共有することができたことは有意義であったという意見が多かった。グループ分けの際にできるだけ同じ学部・同じキャンパスに所属する教員を同じグループで編成したことが話題や課題が共通する部分が多く良かったものと思われる。具体的な意見としては「他学部・他コース、他センターの方と知り合い、情報交換ができてよかった」、「同じ悩みや同じ考えを持っている先生方も自分以外にいたことが分かりよかった」「着任後の状況について他の先生方と話し合うことができてよかった」などの意見があった。

一方、前半の研修内容については、「大学の現状、事務的な手続き、授業評価の方法や意義などを短時間で集中的に修得することができてよかった」という肯定的な意見の一方で、「一部の講師はかなり時間をオーバーして話しをしている。講師は配分時間をしっかり守って欲しい」という厳しい意見もあった。

次年度は今回の試みを反省して、どのような新任教員研修会を開催したら新任の先生方にとって、有意義なものになるかを検討していきたい。

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？	人数	割合(%)
選択肢		
非常に良かった	3	11.5%
良かった	15	57.7%
どちらとも言えない	5	19.2%
あまり良くなかった	2	7.7%
良くなかった	1	3.8%
無回答	0	0.0%
合計	26	100.0%

# (11)「大学における授業改善ヒント集」改訂に関わる研修会 報告書

## (第2～5回)

日時・場所・参加者

【吉田地区 第2回】

日時 2011年10月21日(金)13:00-14:00

場所 共通教育棟 2F 会議室 9名

【吉田地区 第3回】

日時 2011年11月8日(火) 16:10-16:40

場所 共通教育棟 2階会議室 14名

【常盤地区】

日時 2011年10月28日(金) 13:00-13:30

場所 第1セミナー室(工学部本館棟1階西側) 4名

【小串地区】

日時 2011年10月31日(月) 13:30-14:00

場所 第2会議室(医学部本館6階) 3名 合計 30名



講師 鷹岡 亮 (教育学部附属教育実践総合センター准教授)

川崎 勝 (医学部医学教育センター副センター長・准教授)

吉田 香奈 (大学教育センター・准教授)

対象 授業改善ヒント集執筆予定の先生方

報告 平成23年3月に発行を予定している山口大学FDハンドブック『大学における授業改善ヒント集』(改訂版)の制作にあたり、執筆予定の先生方を対象に執筆方法に関する勉強会を開催した。本ハンドブックは山口大学の教員が取り組んでいる授業改善の事例集であり、2005年に制作された山口大学FDハンドブック第3部を大幅に改訂するものである。今回の改訂版では、授業設計や授業の方法から学生指導まで幅広い内容を掲載し、より多くの教職員が授業改善および学生指導のノウハウを共有できることを目指している。吉田地区第1回目の勉強会では前回に引き続き今回も執筆される鷹岡亮・教育学部准教授と川崎勝・医学部准教授を講師にお招きし、執筆原稿をもとにポイントをお話いただいた。また吉田地区第2回目、常盤地区、小串地区においては吉田香奈・大学教育センター准教授が執筆方法を説明し、参加者と意見交換を行った。

事後アンケートでは、「ヒント集の具体的な記述方法が分かったので参加して良かった」「他学部・他分野での教授法等が分かってよかった」といった意見が寄せられた。一方で、「非常に良い取り組みだと思います。しかし、専門性の高い個別の授業(の改善事例)から何が自分に取って役立つのかを見出すのが(ヒント集の事例を読んだだけでは)難しいように思われました。これこそが教員の資質向上の責務だと思いますが」という意見も寄せられた。そこで、来年度はこの意見を踏まえ、ヒント集執筆者によるFD研修会を開催することも検討している。

### 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	8	34.8%
良かった	15	65.2%
どちらとも言えない	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	23	100.0%

## (12) 初習外国語履修者に対する効果的な教育法について

講演者：郝桂秀 (かく けいしゅう) (快捷漢語国際文化伝播有限公司総経理クイックチャイニーズ教育法開発者)

日時：平成23年11月2日(水) 14:30～18:00

場所：共通教育41番教室

対象：語学関係教育職員、非常勤講師  
及び関心のある教員・学生等

参加者：専任教員10人、非常勤講師5人、  
他大学ほか3人、学生53人

内容

研修会初めに、岩部大学教育センター長によるご挨拶がありました。それから講師の郝桂秀先生による1時間近くの模擬授業を行い、休憩を挟んで、参加教員に対して、2時間弱にわたり、独自に開発した初心者用の教材とそのユニークな教育法を説明しました。

模擬授業は、音声付きなどの独特の教材と教具を使い、ユニークな教育法を展示しながら行われました。教材はさることながら、その教育法は、初心者に対して、母語を使わずに、身振り手振りで熱心に、しかも効果的に教えることが、とても印象的でした。学生のアンケート結果でもあったように、おおむね好評でした。特に全部中国語による授業は、とても新鮮で、驚きながら楽しんだという意見が多かったです(学生アンケート結果及びコメントは次のページに添付)。

休憩を挟んで、先の模擬授業を例にして、独自に開発した教材及びその教育法を詳しく紹介しました。特に語学の初心者に対して、聞く、話すが先行し、読み、書きに続きという段階教育理念などは、新鮮に聞こえました。ハイテクな教材も目を引きました。

講師は熱心すぎて、話し時間が長かったことと、一部本題と関係の少ない内容が含まれてしまったことに反省の余地がありました。

本学の語学教育には多くの非常勤講師の貢献によって成り立っています。この研修は、初めて本学の非常勤の教員にも案内し、5名の先生が参加していただきました。このような研修会に参加する機会があまりないので、とても参考になったと後に評価してくれました。また大学コンソーシアムを通じて他大学にも案内して、下関市立大学ほかからも参加者がいました。

附：参加教員の声

- ・音声から入った学習法が興味深かった。
- ・各先生の説明を聞いて、これから自分の教授方法の改善に大変役立つと思います。
- ・このような研修会がたまに行うならいいと思います。
- ・普段あまり会わない先生たちが集まって交流することだけでも意味があると思います。
- ・少し長かった。



設問1研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	6	66.7%
良かった	2	22.2%
どちらとも言えない	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	1	11.1%
合計	9	100.0%



模擬授業参加学生アンケート結果及びコメント：

設問1 今日の授業全体について

選択肢	人数	割合(%)
とても満足	17	36.9%
満足	19	41.3%
どちらともいえない	8	17.4%
不満	2	4.3%
とても不満	0	0.0%
合計	46	100.0%

設問3 今日のようなやり方なら、全部中国語で授業しても良いと思いますか？

選択肢	人数	割合(%)
強くそう思う	4	8.7%
思う	21	45.7%
どちらとも言えない	5	10.9%
あまり思わない	16	34.8%
全然思わない	0	0.0%
合計	46	100.0%

設問5 今日の教材があったらほしいと思いますか？

選択肢	人数	割合(%)
強くそう思う	2	4.3%
思う	20	43.5%
どちらとも言えない	12	26.0%
あまり思わない	4	8.7%
全然思わない	3	6.5%
合計	46	100.0%

設問2 教員の話した中国語が分かりましたか？

選択肢	人数	割合(%)
全部分かった	1	2.1%
大体分かった	20	43.5%
どちらとも言えない	12	26.0%
あまり分からなかった	12	26.0%
全然分からなかった	1	2.1%
合計	46	100.0%

問4 今日使った教材は使いやすいと思いますか？

選択肢	人数	割合(%)
強くそう思う	7	15.2%
思う	24	52.1%
どちらとも言えない	10	21.7%
あまり思わない	5	10.9%
全然思わない	0	0.0%
合計	46	100.0%

設問6 今日の教材なら、現行教材と比べどのくらいの値段なら買っても良いと思いますか？

選択肢	人数	割合(%)
プラス500円	29	63.0%
プラス1000円	14	30.4%
プラス1500円	2	4.3%
プラス2000円	0	0.0%
プラス2500円	1	2.1%
合計	46	100.0%

- ・ 家でも復習できる教材はとても使いやすいと思いました
- ・ 中国語しか使わないといわれたので、最初は不安でしたが、ジェスチャーなどを使ってわかりやすく教えてくださったので、思っていたより難しいとは思いませんでした。日本語に頼らずにやるので、より外国語を習得できるように感じた。
- ・ 自分がわからないところが、わからないままになってしまうかもしれないとは思ったが、中国語をずっと話さなければならぬところで力がつくのもかもしれないと思った。
- ・ 全部中国語だったけれどとてもおもしろかった、
- ・ 授業に集中できて、あっという間に時間が過ぎて、楽しかったです。
- ・ 楽しく中国語が学べました。ありがとうございました。
- ・ 興味がわく楽しい授業だった。また受けてみたいと思った。
- ・ 何を言っているかわからないことのほうが多かったけど楽しかったです。ありがとうございました。

- ・ 教材で他言語の発音も聞けるのが良いと思いました。
- ・ 全部が中国語だと良く聞いて理解しようとするのですごい良い授業だった。
- ・ たまになら全部中国語で授業すると楽しいかもしれません。
- ・ 実際に全部中国語で授業を受けてみて、とてもおもしろかったと思う。
- ・ 楽しく学べました。みんなで参加するところが良いなと思いました。
- ・ 導入されたらいいなと思います。
- ・ 外国語を短期間で身につけるならば、今日のように聴覚情報が中心の方が良いと思った。
- ・ 中国語を学ぶ時は中国語で説明された方が実用的だと思いました。
- ・ 貴重な経験をすることができて、とてもよかった。
- ・ これまでに学習してきたことが単語として出来たので、復習にもなったし、楽しかったです。翻訳のお姉さんの発音から最初日本人かと思いました。惚れました。
- ・ 中国語の単語は分かったけど、時々何を言っているか分からなかった。
- ・ 勉強になりました。教材がハイテックでびっくりしました。
- ・ 今までと全く違うやり方ですごく楽しかったです。
- ・ とても分かりやすそうな教科書だったと思う。
- ・ 家で自学するのであれば、あの教材は良いと思うが、授業時間で多くの人が使うのであればあまりよくないと思う。
- ・ 身近な名詞を学んでたので良かった。
- ・ 中国語のみの授業は聞いていると分からないところがあって難しかった。日本語を混ぜながらの従来の方法がよいと思った。
- ・ まったく中国語を学んでない人には難しいのではないかと思う授業でした。
- ・ 全部が中国語の授業はとても難しいと思いました。

### (13) 大学生のメンタルヘルス入門

日程：平成23年11月30日(水)

13:00~14:30

場所：経済学部B棟2階B201講義室

講師：今井佳子 カウンセラー

(山口大学学生相談所 臨床心理士)

参加者：7名

内容

本研修会では、本学における学生相談所の状況を中心に、大学生のかかえる心の問題について講演が行われた。学生相談所には、いろんな悩みを抱えた学生が相談に来るが、その悩みはゼロにはできないので、少しでも軽減できるよう活動されている事を述べられた後、ここ数年は毎年150名前後の新規相談者が学生相談所に訪れており、延べ面接回数は年間1200回前後に上ることが紹介された。講演の中でポイントとなりそうに思えた内容のいくつかを以下に列挙する。



#### 設問1

#### 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	3	50.0%
良かった	3	50.0%
どちらとも言えない	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	6	100.0%

- 精神的な病気は目に見えない。五体満足でも悩んでいてそれが辛い。目に見えないから理解してもらえない。本人も分かっておらず自分は単に怠けているだけじゃないかと悩んでいる。
- ゴールデンウィーク明けや、夏休み明け(10月)に相談件数が増える傾向にあり、男女比に差はほとんどない。冬休み前には、後期の単位が取れるか等の悩みも多い。
- いろんな方向から話を聞いている。相談内容を他の人に聞かれない空間が大切。まず、主訴を聞き、その心当たりを聞いている。1つ目では分からないが2〜3聞くと、そこに(原因に)近い内容が含まれていることが多い。
- 何もかもがうまく行っていないと悩んでいる学生も、必ず出来ているところがある。自信を持ってもらうためにそれを探してあげる。
- 8割方の学生は死にたいと口にする。ドキッとしますが、言わせないと言えない苦しみがある。深刻そうな学生には死にたいと思った事あるのかと聞いて、死んでほしくないことを伝える。
- 友達とワイワイやっているグループに入りたいが、悩むという少数派にいる劣等感を感じている。過呼吸やリストカット等、頭でなく体で反応する、行動化する学生が多い。
- 相談があると来て来る学生は第一段階をクリアしている。黙って立っている学生が多い。
- 日本は自殺大国(年間3万人、1日80数人)。社会的環境にも左右される。今年は福島のことがあったので自殺率が上がっていると思う。自殺の原因はわからない事が多いが、去年は就職失敗を理由とした自殺が増えた。就職失敗による大学生の自殺が全国で40数名。
- 不登校は先生も保護者も困る。カウンセラーも困る。相談に来た子には来なくなったら連絡して良いかメールと電話のどちらが良いかあらかじめ聞いている。連絡しても返事はないが、連絡がないと見捨てられたと思うらしい。先生方も負担にならないように1ヶ月に1回等決めてメールすると良いと思う。
- 大学に来てないねとか、テストが近いとか、単位がマズイとか言われるとどうしようもなくなっちゃうので、眠れているか?食べられているか?等の基礎的な事を聞くのが良い。健康な子でも1日1食の子はいるので、1食でも食べていれば良いと思う。
- 大学生の1%は不登校。1万人なら100人(うち30人は長期ひきこもり状態)。院生は学部生より比率高い。契機は学業の躓き(33%)、精神保健上の問題(26%)、対立・対人関係(14%)。

8月31日に行った理学部FD研修会の内容とも共通する内容があるので参照されたい。

質疑では実体験に基づく質問が多く出た。アンケートの今後参加したい研修には、「学生指導の手法・技能」、「学生への対応」、「今回のような、学生への対応に関する研修」が挙げられていた。

## (14) 山口大学における国際活動へのヒント～事例紹介を含めて～

日程：平成23年12月21日(水)16:00～17:30

場所：経済学部A棟2F第1会議室

講師：今津 武 (経済学部教授[特命])

参加者：46名

内容

グローバル化社会の中で、大学間の競争は教育・研究両面において厳しさを増しつつある。こうした状況において、日本の大学の国際化が不十分であるとの指摘も多く、文部科学省も大学の国際化を迅速に行う必要があると考えている。本学においても、『国際社会への貢献』、『国際社会の要請に応えた人材育成』、『国際的な共同研究と研究者交流』等の目標を掲げて積極的に国際化を図る方針を打ち出している。しかしながら、「大学の国際化は必要なのか?」、「大学にとっての国際化とは何か?」という疑問を持つ教職員も少なくはなく、これらについての共通認識が十分とはいえない。そのため具

体的に何をすべきか、人材と資金を誰がどのように準備するのか等の議論が進んでいない。本研修では、これまでの山口大学における国際化関係の活動の紹介をするとともに、大学の国際化とは何か、国際化に向けての活動にはどのようなものが含まれるかについて以下の視点から説明が行われた。

#### 1. 研究活動の国際化について

研究活動の国際化においては、国際的な場で自らの研究を遂行するための能力の習得を支援するという意味で、教員の外国語能力の向上や外国語による授業方法の改善等に関して大学として体系的な方策が必要である。

#### 2. 教育の国際化

大学教育における国際化というと「留学生の受け入れ」に偏りがちであるが、日本人学生の語学力や国際的な場で自分の意見や考えを述べる力（ディベート力）、自分とは異なる文化や論理に柔軟な対応ができる能力を涵養するために、日本人学生に海外経験をさせる機会を増やす必要がある。例えば、モンゴルに設立された「新モンゴル高校」においては、日本や海外への留学を視野に入れたカリキュラムを設け、留学によってこれらの能力を涵養しようとしている。このような取り組みが日本の大学においても必要ではないか。

#### 3. 国際化推進支援体制の在り方

教員や職員の国際化に対する共通認識が十分でない状態において、大学にどのような組織や体制が必要なのかに関する議論が不足していると思われる。教員と事務の互いに全く別の組織が重なり合うような新たな組織を構築しても国際化を進める原動力を得にくい構造であるのかもしれない。教員と事務の組織を統合して「国際化センター」といった形で組織の一元化が必要かもしれない。また、大学外に幅広いネットワークを有する外部人材の登用も有効ではないだろうか。

#### 4. 国際貢献に対する評価と周知に関する問題点

山口大学憲章や「明日の山口大学ビジョン」では、国際貢献に関する積極的な姿勢を謳っており、各学部・研究科においては個々の教員の努力によって JICA や ODA、JENESYS 等への積極的な協力が既に行われている。しかしながら、このような活動に参加する教職員の努力が十分に評価されず、学内におけるこれらの活動の周知も十分に行われていない点を改善すべきである。

また、これらの説明に加えて本学の国際活動を推進する組織である国際協力活動推進プラットフォームの紹介および山口大学大学院経済学研究科「公共管理コース」における国際化に関する取り組みに関して説明がなされた。

研修会後のアンケートでは、表1のように「非常に良かった」「良かった」と回答した参加者が全体の半分以上を占めている。具体的な感想としては、「教育面で日本人学生を海外に派遣することの重要性については同感する」「留学の機会拡大に賛成である」「学生を海外に連れてゆくための資金援助などの支援が欲しい」「具体的な国際活動についてよく分かった」「商品資料館の国際情報室についてもう少し聞きたい」「英語で授業することはかなり難しい」といった回答が寄せられた。

今後取り上げてほしいテーマについては、「日本の国際化について」「大学の国際化」、「学生のメンタルに関するテーマ」「英語で講義を行うための研修」等の回答が寄せられた。

**表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？**

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	8	17.4%
良かった	18	39.1%
どちらとも言えない	10	21.7%
あまり良くなかった	3	6.5%
良くなかった	2	4.3%
無回答	5	10.9%
合計	46	100.0%

## (15) 情報セキュリティモラル研修会

講師：市川 哲彦, 王 躍 (メディア基盤センター), 岡田 耕一, 小川 勤(大学教育センター), 木村 久 (MOT)

運営サポート：小柏 香穂理 (メディア基盤センター)

場所：常盤キャンパス D 棟 4F 情報処理演習室 (主会場), 吉田キャンパスメディア教育棟 2F 情報処理教室

研修対象：情報処理分科会所属教員, 平成 24 年度共通教育情報関係授業担当者, 当該研修内容に興味関心のある本学の教職員

日時：平成 24 年 2 月 28 日 (火) 16:30~18:00

参加者：出席者数 13 名 (吉田地区：4 名 常盤地区：9 名) アンケート回収数 13 枚

報告

最初のメディア基盤センターの王准教授より、約 20 分間にわたって、情報セキュリティ・モラルの授業で活用されている moodle 利用環境の変更点について説明があった。従来より、moodle を用いた e-learning 環境を利用してもらうように、メタコースによる教材配布を行ってきたが、moodle コースの作成は各担当の先生にお願いしてきた。しかし、2012 年度から、開講科目に付いて自動的に moodle コース登録がされるように変更されたので、変更点を整理したうえで、改めて利用方法について説明があった。

次に、大学教育センター岡田講師より、共通教育の情報科目に関する授業評価アンケートの結果及び成績分布状況について報告があった。2011 年度の授業評価アンケート(前期分) がまとまった。また、成績分布に関しても閲覧システムを通じてアクセスできるようになっている。そこで、今回あらためて、提示をさせていただき、活用方法に関して意見交換を行った。このシステムの存在を初めて知った教員や、このシステムを利用した教員の感想など意見が活発に行われた。次に、メディア基盤センターの市川教授から、共通教材改訂ポイント について説明があった。情報セキュリティ・モラルの教育内容については社会的な動きは継続的で、教材の内容に関しても定期的に改訂が必要となること。今回特に、2010 年 1 月の著作権法改正、2011 年 6 月の刑法改正などの動きと、関連する教材の変更点について説明があった。次に、技術経営研究科の木村教授から、「知的財産権及び情報セキュリティに関する補助教材の紹介」というテーマで、最初に「情報セキュリティ・モラル」の授業で利用しているプレゼン教材について、知的財産という観点からいくつかの改訂すべき指摘があった。また、「情報倫理デジタルビデオ小品集 3」(メディア教育開発センター(現、放送大学 ICT 活用・遠隔教育センター)制作) を共通教材に組み込んで利用しているが、その他にも知的財産に関する本学開発の教材が活用できることや、放送大学の情報セキュリティ及びリテラシーに関する教材の柔軟な活用方法についても検討が必要である点が指摘された。最後に、大学教育センターの小川教授から、現在本学で導入されている推奨ノートパソコン制度について、本学では従来より入学予定者に対して、大学推奨パソコンの提案を行ってきた。しかし、この度、教学委員会より推奨制度の在り方についての意見収集に関する提案がなされたとの経緯が説明された。その上で、「授業担当者」という立場から見た推奨パソコンの意義や必要性に関して意見交換を行った。時間がなかったのであまり意見交換は行われなかったが、分科会としては、ノートパソコンを使用した授業を継続せざるを得ない状況もあるため、現在の推奨制度を継続したい旨の報告があった。

事後アンケートは約 9 割の教員から今回の研修内容に対して肯定的な評価が寄せられた。自由記述には「今回の研修会に参加して、情報セキュリティ・モラルの授業の問題点や課題を共有することができてよかった」、「この分野の最近の動向を把握することができ、整理できてよかった」という感想が寄せられた。また「もう少し時間をとって、より具体的な話が進められればよかった」、「もう少し意見交換が活発化することができればよいと思う」という改善意見もあった。

今回の研修会は、「情報セキュリティ・モラル」の教材の改訂内容や他の教材(放送大学など)利用

に関して授業担当教員間で共有することができたことや、知的財産の観点から、現在の教材においてどのような課題があるかを再認識することができてよかった。また、推奨ノートパソコン制度について、授業を実施している者として、さまざまな課題が存在することを共通理解することができてよかった。

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	6	46.2%
良かった	5	38.5%
どちらとも言えない	2	15.4%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	13	100.0%

## (16) 山口大学における国際活動へのヒント～事例紹介を含めて～

日程：平成24年3月5日(月) 16:00～17:30

場所：医学部総合研究棟 S3

講師：今津 武（経済学部教授[特命]）

参加者：31名

内容

本研修会では、山口大学における国際化関係の諸活動を紹介するとともに、大学の国際化とは何か、その具体化に向けてどのような取り組みが必要であるかについて説明がなされた。



現在のグローバル化した社会においては大学間の競争も厳しさを増し、日本の大学の国際化が課題になっている。本学においても、『国際社会への貢献』、『国際社会の要請に応えた人材育成』、『国際的な共同研究と研究者交流』を目標として積極的に国際化を図る方針を打ち出している。しかしながら、そもそも具体的に国際化とは何かを言及した文書がないため、教職員の所属する組織や立場によってその捉え方は様々でコンセンサスを得難く、具体化についての議論は歩みが遅い状況にある。国際化について多様な視点があることは良いことだが、視点の違いによって組織間の摩擦が生じて動き難くなるような組織の在り方は今後再検討する必要があると思われる。また、国際化を進めるにあたって、個別の教員に過大な負担が掛からないような配慮も重要である。

大学に求められる国際化とは何かについて考えてみると「大学が得たものを世界に広めてゆくこと」、「国際的に活躍できる人材の育成」等があげられる。大学教員の場合は研究中心の視点から国際化を捉える方は多いが、教育の視点からみた国際化にも期待が集まっていることにも注目していただきたい。例えば途上国の医療現場においては「患者のために」という意識に乏しい医療従事者が少なくない現状にあり、知識や技術の側面だけでなく患者に対する倫理観を涵養する教育も必要とされている。また、大学においては「国際化＝留学生を増やす」という見方に偏る傾向があるが、日本人学生に海外経験を積ませるといった視点も重視する必要がある。国際的な場で活躍する人材を育成するためには語学力（英語）だけでは不十分であり、海外経験を積ませることによって英語でコミュニケーションをとることに気後れすることのない「国際力」を涵養することも非常に重要である。そのためには、大学が設けるプログラムに加えて海外青年協力隊等の海外経験を積む機会を設けるべきである。これについては、日本人学生は一般に内向きで積極性に欠けると思われるので、海外経験を積むことで一定の単位を認める等のインセンティブを与えるといった策も併せて検討すべきである。また、学内においては、日本人学生と留学生が交流する場をもっと増やすべきであると思う。現状では日本人は日

本人のグループ、留学生は留学生同士のグループを形成して授業やゼミ以外の場を除いて交流が生まれにくい状況にある。今後は教職員がもっと積極的に留学生の日本語をサポートしながら、日本人学生と交流しやすい新たな場を作る配慮も必要である。また、留学生の募集については、留学生の経済的な負担を減らすために入試を現地で行う等の策をもっと検討すべきであろう。

これらの説明に加えて、本学の国際活動を推進する組織である国際協力活動推進プラットフォーム（以下、プラットフォーム）の紹介および山口大学大学院経済学研究科「公共管理コース」における取り組み等について紹介がなされた。

質疑応答においては、「学生のクラブで『国際協力クラブ』があるが、学生は何をやればよいのか迷っている。学生の活動にも協力してもらえないか」、「短期的あるいはスポット的に海外から教員を招き、学生たちを含めて英語で交流する機会が必要であるが予算的に余裕のない状況にある。このような場合、プラットフォームは予算の面も含めてバックアップをしてもらえるのか」、「公共管理コースの留学生は自国で修士号を既にとっているケースが多いと聞かすが、学費の援助はどのようにしているのか。日本はどのような援助をしているのか」との質問があった。これに対して、「学生サークルの件についてもできるだけ協力してゆきたい」、「海外の教員を招くことは教育上有意義だと思う。予算的なバックアップは現状では困難であるが、できるだけ協力したい」との回答がなされ、各国における大学院への就学援助の概要が説明された。また、保健学科の教員から「保健学科では入試に際して国際化を宣伝しているが、本質的には国家ライセンスを国際化する必要もあると思う」という見解も示された。

研修会後のアンケートでは、表1のように「非常に良かった」「良かった」と回答した参加者が多かった。本研修会の感想等については、「各国の医療水準に差異が大きく、日本の看護学はJICA等からの協力を求められることは多いと思う。その一方で、日本の学生や教員も高度な医療を実現した国で更に学ぶ機会が欲しい。海外から受け入れるばかりで、日本から海外に留学する機会がなくては国際化には程遠いのではないか」、「違った考えの国際化論が聞けて興味深かった」、「若いうちに海外で経験することは重要だと思う」、「同じ大学にしながら国際的なプロジェクトや英語での講義が行われていることを知らなかったのが、大変有意義だった」、「国際化とは何か。日本の長所を提供することだけなのか」、「今何が求められているか理解できた」、「一般論が多かった。海外、特に欧米人との『協働』の経験について聞きたかった」、「アジアへの支援では、目線が高いのでは……。また、文化や、日本人が西洋化を目指してきた歴史の違いは大きな問題である」、「保健学科においても数名は個人的に欧米人と対等に協働し、若い人の交流もさせている。しかし、委員会は『文化交流のみの企画』が主であるため、業績とならない点が問題である」、「本学における具体的な活動が聞けて、大変興味深かった。国際活動については興味があるものの、なかなか敷居が高く見えないところがあるので、その方向性を聞けて良かった」、「大いに共感できた」、「他学部における国際化の取り組みがよくわかった」とのコメントが寄せられた。

今後取り上げてほしいテーマについては、「世界からみた日本の医療の現状」、「日本における山口の特徴」、「大学教員、研究者としての素養」、「研究手法について」、「教育方法および教育理論について」、「教員の質の向上（FDの幹）について。各教員組織における自主・自己革新・自助努力の促進を目指す方策」、「研究費や留学について」等の回答が寄せられた。

**表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？**

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	5	19.2%
良かった	19	73.1%
どちらとも言えない	1	3.8%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	1	3.8%
合計	26	100.0%

## (17) 成績評価方法入門—ルーブリック評価を用いた成績評価の推進—

日程：平成24年3月23日(金) 16:00～17:40

場所：医学部総合研究棟3階S3講義室

講師：小川 勤 (大学教育センター教授)

参加者：28名 (アンケート回収数23枚)

内容

本テーマについて2回目の講師派遣型アラカルトFD研修会が医学部保健学科で開催された。研修会は5部構成で実施された。まず、第4部のルーブリック評価の部分を除いた、4つの領域についてまず話が以下のようにあった。

第1部は、認証評価への対応と客観的な成績評価というテーマで大学の認証評価制度のしくみと認証評価と成績評価との関係について、本学の事例も交えて説明があった。第2部では、観点別到達目標とシラバスおよび成績評価との関係につい

て説明があった。第3部では観点別到達目標と到達度の測定について、本学のGPを事例に、GPで示された資質・能力の到達度の測定をどのように考えたらよいのかという内容で説明があった。第5部では、本年2月に公開された「成績分布共有システム」について、最初に、当該システムを開発した背景説明があった。その後、このシステムの使用法や当該システムを組織的なFD活動に活用してほしいという説明があった。

第4部では、当該研修会において主要なテーマであるルーブリック評価について、その評価方法のしくみと特徴について説明があった。特にシラバスから、どのようにルーブリック評価を行っていくのかについて具体的な事例を用いて紹介があった。

研修会終了後、参加者からは、「ルーブリック評価」のしくみを、シラバスから成績評価に至る流れを大変わかりやすく説明していただいていた大変参考になったという意見が多かった。また、研修会後の質問では、就職のことを考えると、ついつい成績評価が甘くなりがちになるが、必ず正規分布のような評価結果にしなければならないのかという質問があった。これに対して講師からは、そもそも評価規準や評価基準という概念に基づくルーブリック評価は絶対評価を厳格に実施していくために考えられた成績評価手法である。このため、評価手段や評価基準、採点基準が明確であり、これに基づいて厳格に評価された結果であれば、必ずしも正規分布にならなくてもよいと考えているという回答があった。それよりも、受講生(学生)に採点基準や観点別の評価規準や評価基準を事前にして提示することにより、評価の方法や基準に関する学習者への説明責任を果たし、学習者の意欲付けに活用することの方が大切である。また、学習者が自らの学習過程を振り返り、新たな自分の目標や課題をもって学習を進めていけるような評価を行うことこそが重要であるという見解が示された。



### 設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	4	17.4%
良かった	17	73.9%
どちらとも言えない	2	8.7%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	23	100.0%

### 3. 教育改善研修会

#### (1) 理学部・理工学研究科（理学系）・医学系研究科（理学系）

日時: 平成 23 年 7 月 13 日(水) 15:00～15:40

場所: 人文・理学部大会議室

参加者: 61 名 (内訳): 理学部教学委員、FD 担当教員、理学部教員など合計 56 名、岩部大学教育センター長、吉村誠学生支援センター長、糸長雅弘大学教育センター主事 (教育学部)、小川勤・木下真 (大学教育センター) 合計 5 名

#### 研修内容:

理学部の拡大教授会の場で全教員を対象に、ポートフォリオの導入の意義と期待される効果、導入方法などについて、大学教育センター長および学生支援センター長から、それぞれの立場から話があった。岩部大学センター長からは大学設置基準の一部が「社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を教育課程の実施及び厚生補導を通じて培うことができる」ように改訂された (平成 22 年 2 月 25 日施行)。これを受けて本学では平成 23 年度計画で「学士課程教育を通してキャリア意識を高めるために、ポートフォリオを全学的に導入する。」計画を立てていることが明らかにされた。また、吉村学生支援センター長からは、ポートフォリオとは何か。そのしくみはどのようにになっているか説明があった。その後、本学ではどのようなポートフォリオの導入を考えているか具体的に説明があった。また、就業力支援の立場からポートフォリオ導入の意義が説明された。特に企業はじめ社会からは、「大学生活を有意義にする力を持った学生」の育成が求められており、そのためには学生自らが「大学生活を充実できているか」、「世の中への興味・関心を持ち、未来を創造できるか」「表現する力・伝える力があるか」について、自主的にチェックするとともに、教員との面談を通して自らの年度ごとの目標の達成度や課題の確認を経年的に実施する必要がある。そのためにはポートフォリオの導入は大学教育にとって欠かせないものであるという考えが示された。

その後、意見交換が行われ、プレゼンで示されたポートフォリオの雛形は確定的なものか。また、まず紙ベースで各学部・学科がポートフォリオに取り組み、その結果を受けて各学部で最も適したポートフォリオのフォーマットを考え、さらにそれを電子化していくという手順を踏むべきでないかという意見があった。これに対して、両センター長とも、同様な考えを持っており、最初にシステム化ありきという考えではないと回答があった。また、先進大学の事例を示して欲しいという要望があったので、岩部センター長および大学教育セ



図 3 理学部における研修会の様子

#### ■ ポートフォリオの効果 就業力育成の観点から

- ① 書くことによる意識付け
- ② SOSの発信
- ③ 教職員との信頼関係の醸成

就業力育成のための自己管理システムとしてポートフォリオは効果を発揮し、就職活動にもよい影響をもたらすことが期待される。

図 2 ポートフォリオの効果

ンターの小川教授から8月10日(水)13:30から全学講演会を開催し、その中で佐賀大学のポートフォリオ全学導入の経緯とポートフォリオの実態について佐賀大学の先生に講演していただく予定なのでぜひ講演会に参加して研修を積んでほしいとのお願いがあった。本年度、最初の教育改善研修会であったが、ポートフォリオ導入の意義やポートフォリオの実態については理学部の教員にかなり理解してもらえたと感じている。研修後のアンケート結果からも研修内容に関しては概ね好意的な意見が多かった。

## (2) 教育学部・教育学研究科・東アジア研究科 (教育系)

日時：平成23年7月20日(水) 17:00～17:30

場所：教育学部21番教室

参加者：79名

内訳：教育学部教学委員、FD担当教員、教育学部教員など76名、  
大学教育センターから糸長雅弘大学教育センター主事(教育学部)、中田充大学教育センター主事(教育学部)、木下真(大学教育センター)の3名

### 概要

教育学部の拡大教授会の場で全教員を対象に、ポートフォリオの導入の意義と期待される効果、導入方法などについて、糸長大学教育センター主事から説明があり、それについての質疑応答・意見交換を行った。

### 内容

#### I. 「ポートフォリオ導入の背景と課題」についての説明

はじめに、ポートフォリオに関する一般的な説明と山口大学における導入の背景と課題について、大学設置基準の一部が「社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を教育課程の実施及び厚生補導を通じて培うことができる」ように改訂されたことと、これを受けて本学では平成23年度計画において、学士課程教育を通してキャリア意識を高めるために、ポートフォリオを全学的に導入する予定である事などが説明された。

#### II. 「就業力支援から見たポートフォリオ導入の必要性」について

つづいて、就業力支援の立場からポートフォリオ導入の意義が説明された。特に、企業をはじめ、社会からは、「大学生活を有意義にする力を持った学生」の育成が求められていることを、企業のエントリーシート具体例を挙げつつ説明し、これに応えるためには、「大学生活を充実できているか」、「世の中への興味・関心を持ち、未来をソウゾウ(想像・創造)できるか」、「表現する力・伝える力があるか」について、学生自らが自主的にチェックするとともに、教員がそれを支援する働きかけを行うことが不可欠であること、そして、そのためにはポートフォリオの導入は大学教育にとって欠かせないものであるという考えが示された。



図4 研修会の様子1



図5 研修会の様子2

### 質疑応答・意見交換など

糸長大学教育センター主事からの説明終了後、意見交換が行われ、「ポートフォリオをどのように具体的に運用するのか。その方針は決定されているのか。」という質問があった。これに対して、現状では大学教育機構としての原案を策定中であること、また、先行事例紹介として、8月10日(水)に全学講演会を開催し、その中で佐賀大学のポートフォリオ全学導入の経緯とポートフォリオの実態について講演していただく予定であるのでぜひ参加して頂きたい旨、回答があった。

また、ポートフォリオの保存に関して、「是非、電子化を検討して頂きたい。その際には教員免許に関わる履修カルテの電子化も込みで検討して頂きたい。」とのコメントがあった。これに対して、大学教育機構としても電子化は必須のものと考えており、その際には履修カルテも含めて検討する予定であるとの回答があった。

教育学部においては、既に履修カルテが導入されていることもあってか、導入の是非よりも具体的な運用方法に関する興味関心が高かったように思われる。

### (3) 工学部・理工学研究科(工学系)・医学系研究科(工学系)

日程：平成23年09月07日(月) 13:00~13:30

場所：工学部D棟3F D31 教室

講師：岩部 浩三(大学教育センター長)、平尾 元彦(学生支援センター教授)

参加者：53名(アンケート回収32名)

#### 内容

本研究会では、現在本学で導入を目指しているポートフォリオについて、情報の共有や意見交換を行った。

初めに、岩部大学教育センター長から、ポートフォリオ導入の背景として、平成23年度4月に行われた大学設置基準の改正に伴って、「大学は、

当該大学及び学部等の教育上の目的に応じ、学生が卒業後自らの能力を発揮し、社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を、教育課程の実施及び厚生補導を通じて培うことができるよう、大学内の組織間の有機的な連携を図り、適切な体制を整えるものとする」という項目が加わったこと、これを受ける形で山口大学の平成23年度計画においても「学士課程を通じてキャリア意識を高めるため、ポートフォリオを全学的に導入する」、「ポートフォリオを用いた支援を通じて学生のキャリア意識を高めながら自発的な学習を促す」という2項目を挙げていることが説明された。

続いて、学生支援センターの平尾教授より、「山口大学におけるキャリア教育体制の拡充とポートフォリオ」と題して、以下の2つのテーマについて講演が行われた。

#### ポートフォリオ導入の背景と課題

まず、ポートフォリオ位置づけや導入の背景について説明が行われた。

次に、ポートフォリオで目指すものとして、「自己管理能力の育成と学習意欲の向上」、「学生の実態把握による教育改善」、「問題をかかえる学生の早期発見・重点支援」、「卒業後の進路への準備」、「カウンセラー等による支援の拡充」の5点を挙げられた。

最後に、実施に向けての課題として、「シートの内容・実施方法・強制力」、「面談対象者の範囲」、「面談担当者(学部、学生相談所、自主活動ルーム、就職支援室)」等を学部毎に検討してもらうことが挙げられた。



## 就業力支援から見たポートフォリオ導入の必要性

まず、社会が期待する学生像に対して、最近の学生の特徴として、「無目的・無気力」、「チャレンジ精神の不足」、「社会性の欠如」といったいわゆる二極化現象が顕著になっていることが述べられ、出口の課題として、「大手・有名就職先が少ない中、早目の準備と実力アップ」、「就職先希望の集中に対して、視野を広げ、社会を知ること」、「就業力の弱い学生に対して、早期発見・重点支援」が必要であることが述べられた。

次に、実際に就職活動で使われているエントリーシートも例示され、「大学生活を充実できているか」、「世の中への興味・関心を持ち、未来をソウゾウ(想像・創造)できるか」、「表現する力・伝える力があるか」といったポイントを示された。

最後に、就業力育成の観点からポートフォリオの効果として、「書くことによる意識づけ」、「SOSの発信」、「教職員との信頼関係の醸成」が行われることで、就業力育成のための自己管理システムとして効果を発揮し、就職活動に良い影響をもたらすことが期待されることが述べられ、現在学生支援センターで検討している記入シートの例が示された。

### 質疑応答

3件の質疑がよせられた。

1件目はエントリーシートに関してである。「チャレンジしたことについて聞かれると、アルバイトを挙げてくる学生がいる。それに対して、学校の正規の活動を挙げたほうが良いとアドバイスを行うがなかなか伝わらない。バイトはチャレンジに挙げない方が良いというのは私個人の意見だが、裏付ける意見ないか」という質問に対して、「バイトだからダメというわけではないが、バイトと書くと学業は？と聞かれる。バランスが良い学生かどうか見ている。一生懸命勉強している学生は良いが社会性やチームで成し遂げた経験がないと企業はどうかかな？と思う。学業も大切だが学業以外でもアピールできる充実した大学生活をおくっていただければよいと思う」という回答が成された。

2件目は提案されたポートフォリオの最終的な狙いについてである。「就職のためのステップ、キャリアデザインと認識して良いのか？」という質問に対して、「結果的に就職に役に立つが、就職のためにやるわけではない。第一義的には学業やって充実した大学生活を送ることにある。企業は充実した大学生活送ってきた人を欲しいと思っている。面談は、全員、希望者だけ、外部委託とパターンはいろいろあるが、少なくとも年1回、出来れば2回行い、学年に応じて記録を取っていくことで、学生生活が充実できるようにしていただけると良いんじゃないかと思っている。」という回答が成された。

3件目は例示されたポートフォリオに関してである。「自分の知っているポートフォリオとはかなり違う。面談シートにしか見えない。こちらで使えるものでないと思像しにくい」という意見が出た。これに対しては、あくまで「バリエーションの1つ。簡略的なもの。あくまで例示として出した」という回答が成された。

本講演に続けて、既に工学部で導入されているステップアップノートに関する講演も行われており、ポートフォリオに関する熱心な取り組みを感じ取ることができた。

### 設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	3	9.4%
良かった	16	50.0%
どちらとも言えない	10	31.3%
あまり良くなかった	2	6.3%
良くなかった	1	3.1%
無回答	0	0.0%
合計	32	100.0%

#### (4) 人文学部・人文科学研究科・東アジア研究科（人文系）

日程：平成23年9月28日(水) 13:00～13:30

場所：人文・理学部 大会議室

講師：岩部 浩三（大学教育センター長）、平尾 元彦  
（学生支援センター教授）

参加者：35名（アンケート回収21人）

##### 内容

研修会では、本学で導入を目指しているポートフォリオについての情報の共有と意見交換を実施した。

最初に岩部大学教育センター長から、ポートフォリオ導入の背景として、平成23年度4月に行われた大学設置基準の改正に伴って、「大学は、当該大学及び学部等の教育上の目的に応じ、学生が卒業後自らの能力を発揮し、社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を、教育課程の実施及び厚生補導を通じて培うことができるよう、大学内の組織間の有機的な連携を図り、適切な体制を整えるものとする」という項目が加わったこと、これを受ける形で山口大学の平成23年度計画においても「学士課程を通じてキャリア意識を高めるため、ポートフォリオを全学的に導入する」、「ポートフォリオを用いた支援を通じて学生のキャリア意識を高めながら自発的な学習を促す」という2項目を挙げていることが説明された。

次に、学生支援センターの平尾教授より、「山口大学におけるキャリア教育体制の拡充とポートフォリオ」と題して、ポートフォリオ位置づけや導入の背景について説明が行われた後に、就業力支援から見たポートフォリオ導入の必要性の観点から、出口の課題として、「大手・有名就職先が少ない中、早目の準備と実力アップ」、「就職先希望の集中に対して、視野を広げ、社会を知ること」、「就業力の弱い学生に対して、早期発見・重点支援」が必要であることが述べられた。次に、実際に就職活動で使われているエントリーシートも例示され、「大学生生活を充実できているか」、「世の中への興味・関心を持ち、未来をソウゾウ（質疑応答）

2件の質問があった。1件目はポートフォリオというとレポートや課題を集めておくというイメージがあるが、物理的な収納スペースはどうするのかという質問があった。これに対してセンターからは電子的に対応しようとしているという回答があった。2件目は、以前教学委員会で示されたものより今回示されたポートフォリオの雛形は簡素なものになっているが、どのようになっているのか。この質問に対して、岩部センター長より、まず学生に自分がやってきたことを整理してまとめておくという意識付けが重要であるという回答があった。また、今のところ統一したポートフォリオの形をセンターから提示するということは考えていないという回答もあった。具体的なポートフォリオの形は各学部・学科で今後考えてほしいという指摘もあった。



設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	2	9.5%
良かった	11	52.4%
どちらとも言えない	7	33.3%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	1	4.8%
無回答	0	0.0%
合計	21	100.0%

## (5) 医学部保健学科・医学系研究科

日程：平成 23 年 10 月 5 日(水) 17:00～17:45

場所：総合研究棟 S 1 教室

講師：岩部 浩三 (大学教育センター長)、平尾 元彦  
(学生支援センター教授)

参加者 48 名 (アンケート回収 38 人)

### 内容

研修会では、まず、本学が導入を目指しているポートフォリオについて、岩部大学教育センター長から、導入の背景として平成 23 年度 4 月に行われた大学設置基準の改正に伴って、「大学は、当該大学及び学部等の教育上の目的に応じ、学生が卒業後自らの能力を発揮し、社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を、教育課程の実施及び厚生補導を通じて培うことができるよう、大学内の組織間の有機的な連携を図り、適切な体制を整えるものとする」という項目が加わったこと、これを受ける形で山口大学の平成 23 年度計画においても「学士課程を通じてキャリア意識を高めるため、ポートフォリオを全学的に導入する」、「ポートフォリオを用いた支援を通じて学生のキャリア意識を高めながら自発的な学習を促す」という 2 項目を挙げていることが説明された。そして、引き続いて学生支援センターの平尾教授より、「山口大学におけるキャリア教育体制の拡充とポートフォリオ」というテーマで、ポートフォリオ位置づけや導入の背景について就職支援の立場から説明が行われた。就業力支援から見たポートフォリオ導入の必要性からは、出口の課題として、「大手・有名就職先が少ない中、早目の準備と実力アップ」、「就職先希望の集中に対して、視野を広げ、社会を知ること」、「就業力の弱い学生に対して、早期発見・重点支援」が指摘された。さらに、実際に就職活動で使われているエントリーシートも例示され、「大学生活を充実できているか」、「世の中への興味・関心を持ち、未来をソウゾウ(想像・創造)できるか」といったポイントを示され、これらに対して大学生活を通じて考えていくためにはポートフォリオは有効であるという見解が示された。

### 質疑応答

次のような質問があった。「1 年生にポートフォリオを実施された時に教員が宇部地区にいる場合、どのように対応したらよいか」これに対して、吉田地区の各種相談センターや大学教育センターができるだけお手伝いをする事を考えているという回答があった。また、教員だけでなく、外部の人間もポートフォリオに関する面談に関わらせるといことも考えられるという回答があった。2 つ目の質問としては「医学部の学生は他学部と異なり進路はある程度決まっているが、大学生活を充実させるという観点からは同様に思うがどのように考えたらよいか」、この質問に対しては「社会人になるということはどういうことなのか」という点は共通であり、社会人になるための心がけや社会に貢献するということを考えるきっかけにしていきたいという回答があった。3 つ目の質問としては「大学としてポートフォリオを学生に書かせて、その後どのように流れでこれを扱っていくのが明確でないが、どのように考えているのか」。この質問に対しては「現状としては誰がどのように対応していくのかを決めていない。今回の研修内容を踏まえて今後各学部で導入に向けてどのような流れで対応していくのかを検討してほしい」という見解が示された。今回は医学部保健学科の先生方を中心に医学科先生方も交えてポートフォリオ導入を巡って活発な議論が展開され、充実した研修会となった。



### 設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	4	10.5%
良かった	16	42.1%
どちらとも言えない	13	34.2%
あまり良くなかった	2	5.3%
良くなかった	3	7.9%
無回答	0	0.0%
合計	38	100.0%

## (6) 農学部・農学研究科・連合獣医研究科・医学系研究科（農学系）

日程：平成23年10月19日(水) 14:30～15:00

場所：農学部 2F 会議室

講師：小川 勤 (大学教育センター教授)、  
吉村 誠 (学生支援センター長)

参加者：42名(アンケート回収 22名)

### 内容

本研修会では、本学で導入を検討しているポートフォリオについて、その意義と期待される効果について情報の共有や意見交換が行われた。

最初に大学教育センターの小川教授からポートフォリオ導入の背景が示された。平成23年度4月に行われた大学設置基準の改正では「社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を培うための体制」が加わり、これに対応するために本学の平成23年度計画では学士課程を通じてキャリア意識を高め、自発的な学習を促すためにポートフォリオの全学的な導入を予定していることが説明された。

次に学生支援センター長の吉村教授より、「山口大学におけるキャリア教育体制の拡充とポートフォリオ」と題して、ポートフォリオ導入の背景と課題および就業力支援から見た必要性についての説明が行われた。ポートフォリオの目的は「学生一人ひとりの大学生活の充実」であり、具体的には学生自身の自己管理能力の育成と学習意欲の向上、教職員による学生の実態把握、問題のある学生の早期発見と重点的な支援、進路への準備を促すこと、外部支援機能（カウンセラー等）の学内導入による支援の拡充等がある。課題としては、ポートフォリオへの記入項目や実施方法、記入の強制の有無等がある。就業力支援からみると、ポートフォリオは社会に積極的に関心を持たせ、早い段階からの進路への準備を促すとともに、就業力の弱い学生の早期発見と重点的な支援のために有用であるとの見解が示された。これらの説明においては、企業が実際に用いているエントリーシートを例示しながら、企業側の学生採用の視点には「大学生活を充実できているか」、「世の中への興味・関心を持ち、未来をソウゾウ(想像・創造)できるか」、「表現する力・伝える力があるか」といったポイントがあり、ポートフォリオを書かせることによってこれらを涵養することができるとの説明がなされた。

質疑応答では、「学生が記入したシートに目を通すために必要な作業量はどの程度か。また、どのくらいの頻度で確認すべきなのか」、「教員のみ閲覧であるとしても、信頼関係がないと学生は本音を書かないのではないか。また教員が第三者（他の教員、カウンセラー等）に相談した場合、かえって教員と学生との信頼関係を失ってしまうのではないか」との質問がなされた。これに対して、学生支援センターは「ポートフォリオのチェックは1年に1回、理想的には半期に1回程度が必要ではないかと思われる。教員と学生の信頼関係などについては、他大学の事例を参考にしながら運用に向けて検討を進めてゆきたい。他大学の全学的なポートフォリオ導入の先行事例のひとつとして佐賀大学の事例がある。今後資料を提供するので、参考にさせていただきたい」との回答がなされた。



表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	3	13.6%
良かった	7	31.8%
どちらとも言えない	10	45.5%
あまり良くなかった	1	4.5%
良くなかった	0	0.0%
無回答	1	4.5%
合計	22	100.0%

## (7) 経済学部・経済学研究科・東アジア研究科 (経済学系)

日程：平成 23 年 11 月 16 日(水) 16:00～16:40

場所：経済学部 会議室

講師：岩部 浩三 (大学教育センター長)、吉村誠  
(学生支援センター長)

参加者：42 名 (アンケート回収 18 人)

### 内容

研修会では、本学で次年度以降に導入を目指しているポートフォリオについての情報の共有と意見交換を実施した。

最初に岩部大学教育センター長から、ポートフォリオ導入の背景として、平成 23 年度 4 月に行われた大学設置基準の改正に伴って、「大学は、当該大学及び学部等の教育上の目的に応じ、学生が卒業後自らの能力を発揮し、社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を、教育課程の実施及び厚生補導を通じて培うことができるよう、大学内の組織間の有機的な連携を図り、適切な体制を整えるものとする」という項目が加わったこと、これを受けの形で山口大学の平成 23 年度計画においても「学士課程を通じてキャリア意識を高めるため、ポートフォリオを全学的に導入する」、「ポートフォリオを用いた支援を通じて学生のキャリア意識を高めながら自発的な学習を促す」という 2 項目を挙げて現在なぜポートフォリオを導入しなければならないのかについて背景説明が行われた。

次に、学生支援センターの吉村センター長より、「山口大学におけるキャリア教育体制の拡充とポートフォリオ」と題して、就業力支援から見たポートフォリオ導入の必要性の観点から、出口の課題として、「大手・有名就職先が少ない中、早目の準備と実力アップ」、「就職先希望の集中に対して、視野を広げ、社会を知ること」、「就業力の弱い学生に対して、早期発見・重点支援」が必要であることを実際に利用されている企業 (オムロン社) のエントリーシートを事例に挙げて説明が行われた。

(質疑応答)

研修会では以下のような質問があった。

1 件目は 2 年前に教学委員会で議論された内容と今回のポートフォリオの説明でどのように変わってきたのかという質問であった。これに対して、当初はポートフォリオの捉え方は委員の中でも様々であったが、ポートフォリオ導入は「学生生活を充実させる」ための手段の一つとして教員との面談など通じて学生自らが今後の学生生活を充実させるきっかけとする必要があり、さらに就業力の育成に結び付けばよいと考えている。したがって 2 年前とポートフォリオの捉え方は大きく変わっていないという見解が示された。

2 件目の質問は今回の説明でキャリア教育に関連して「内省」が重要であるということ述べられていたが、今回のシステムの中でそれをどのように反映させていくのかという質問があった。これに対して入学してから現在までに学生が取り組んできたことを考えるきっかけにするとともに、今後の目標を持たせることが重要であり、システムとしては Excel シートに内省した内容を学生に記入させ、教務システムにアップロードする機能を追加することによってそのファイルをサーバーに保存・管理すること考えていることが明らかにされた。

3 件目の質問は、教員のサジェッション (指示) の仕方が難しいと思うが、専門家と教員との役割分担が必要ではないかという質問があった。これに対して、就職支援室には確かに進路カウンセラーなどの専門家が配置されているので活用して欲しいが、先生方をお願いしたいことは日常の学習や研究に対する指導や指示を中心的に実施して欲しい。したがって、ポートフォリオ導入に際して今までと異なる、何らかの新たな指導法を試みて欲しいとは考えていない。また、学生がどれだけ真剣にポ



ートフォリオを記入するかわからないが、ポートフォリオの記入を通じて普段十分話ができいなかった内容について学生と時間をかけて話し合うきっかけになればよいと考えているという見解が示された。

4 件目の質問は、この仕事は誰が担当するのかという質問があった。これに対して、全学で対応するために、一義的には教務や学生指導などを一体的に取り扱っている全学組織である「教学委員会」を通じて各学部をお願いすることになる。ポートフォリオ導入は教育指導、学生指導、就職指導などの多岐の分野におよぶ事項を含んでいるためそれぞれの学部が全体で取り組むことになるという見解が示された。

<b>設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか</b>		
<b>選択肢</b>	<b>人数</b>	<b>割合(%)</b>
非常に良かった	1	5.6%
良かった	4	22.2%
どちらとも言えない	9	50.0%
あまり良くなかった	3	16.7%
良くなかった	0	0.0%
無回答	1	5.6%
<b>合計</b>	<b>18</b>	<b>100.0%</b>

## 第2章 共通教育授業科目別分科会のFD活動

### 1. FD活動を実施した授業科目別分科会

#### (1) 情報処理分科会（分科会長：大学教育センター 小川 勤）

平成23年度には、分科会として「情報セキュリティ・モラル」の教材の改訂、授業へのmoodleの利用、成績分布共有システムを利用した成績評価に付け方の見直し、放送大学教材の利活用、知的財産権に関するDVD教材の授業での活用の可能性に関する検討など実に多岐にわたるFD活動を実施してきた。ワーキンググループは年4回、分科会主催のFD研修会を年1回開催した。ワーキンググループでまず上記のテーマで議論し、原案をある程度策定してからFD研修会を開催した。

最近少し取り扱うテーマが多すぎる傾向があるため、来年度はテーマを絞って研修を行いたいと考えている。特に放送大学から提案のあったプロジェクトに何人から先生方に協力してもらい検証作業を各授業の中を行っていきたいと考えている。

また、成績分布共有システムを活用して授業の達成度を各自が検証するように分科会全体で取り組みたいと考えている。

提供された授業外学習時間の実態を見ると、昨年度とあまり変化していない。情報教育関係は30分未満が多く、かなり少ないことは変化していない。情報スキルの向上や知識理解の定着を図るためには課題を毎回出すような授業形態にする必要があり、今後分科会で検討する必要がある。

#### (2) 英語分科会（分科会長：留学生センター 福屋 利信）

「TOEIC 準備」授業の進め方について英語分科会FDを開催。

平成24年3月13日

共通教育棟41番教室

参加者 11名

提案者 猫田和明（教育学部准教授）

「TOEIC 準備」の教え方

提案者 福屋利信（留学生センター教授）

「TOEIC 準備」の動機づけ

「TOEIC 準備」は、指定教材を使用し、主に1年生2000名に対して行う必須科目であり、一定のTOEICスコアを卒業要件（各学部ごとに設定スコアは異なる）に課す、山口大学英語共通教育にとって根幹をなす授業である。ここ数年、平均点は徐々に向上してきており、平成23年度は過去最高の455.8に達した。しかし、平均500点には到達したいという英語教員全体の悲願があり、それには、それぞれの授業担当者が共通認識部分をしっかりと共有しつつも、そこに独自の教授法を持ちこむことが大切となる。そこで、教え方のスキルの部分を猫田准教授が、TOEICへの社会的ニーズを学生に効果的に伝える部分を福屋が担当し、参加者に提案を行った。

### (3) 哲学分科会 (分科会長：時間学研究所 青山 拓央)

7月28日(木)に人文研究棟2F特別演習室にて、哲学分科会会議を開いた際、通常の会議終了後にFD活動の一環として、各教員の共通教育活動での工夫や問題点について、活発な意見交換を行なった。配布資料、試験答案、レポート等についての意見交換のほか、授業の難度設定、私語への対策などについても、有益な情報を得ることができた。

### (4) 数学分科会 (分科会長：理工学研究科(工学) 柳原 宏)

工学部の数学ⅠのAクラスについて、履修者の基礎学力の把握や単位を落とした学生についての再履修時のクラス分け、ふさわしいテキストの選定などに取り組んだが、JABEEを実施している学科との連携が不十分な点があり24年度の課題である。

### (5) 物理分科会 (分科会長：理工学(理) 増山 博行)

#### ① 「物理学実験B」の授業公開(ピアレビュー)(12月)

- ・工学部及び医学科保健学科1年生対象の「物理学実験B」の授業公開(山口市教育研究会中学校理科部会中高大連絡協議会との合同FD)。
- ・物理・情報科学科教員4名、中・高等学校教諭約20名が参加
- ・授業を参観後、理科実験を中心に意見交換

#### ② 「学生授業評価」の分析(3月)

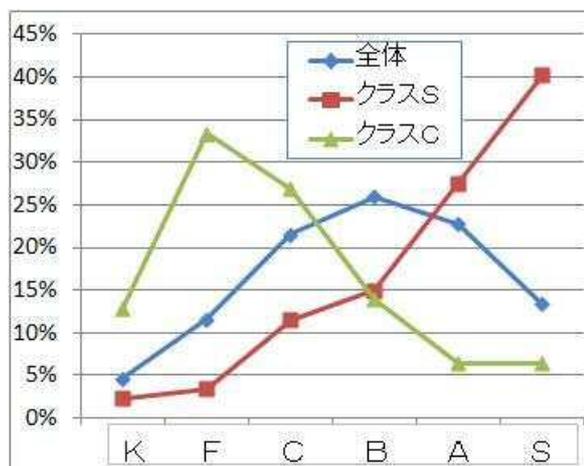
一般に物理学を高校で履修していない学生が少なくないクラスにおいて、学生の満足度が低い傾向がある。既習者からはレベルが低く、初習者からは難しすぎると受け止められるからであろう。また、新たに担当した教員のクラスの一部でも学生の満足度が低かったが、教員の教授力というよりも、教員の想定した学生の学力と実態とのミスマッチと思われる。

#### ③ 「成績分布共有システム」データの分析(3月)

2011年度の物理学Ⅰ(14クラス、受講生合計1017名)および、物理学Ⅱ(11クラス、受講生合計853名)の成績分布を検証する。図に示す物理学Ⅰの同一科目全体の成績は正規的な分布である。その平均的な分布から偏りが見られたクラスの典型例がSとCの2クラスである。クラスSでは秀が40%(うち10数%が100点満点)という、100点以上に中心をもつ分布であり、クラスCでは3分の1の不合格者とCと合わせると6割を越えるという60点以下に分布の中心がある。前者は試験問題が易しすぎ、後者は授業のレベルが学生の学力に比して難し過ぎている可能性がある。

後期の物理学Ⅱでは、受講生は5/6に減じており、前期の履修を経て「淘汰」されているように見え、概して成績分布はプラトー化する傾向がある。

このような成績分布の偏りが一部にあったが、学科で指定されたクラスであるので、クラス間の差が「試験の公正な



実施」に直ちに抵触するとは考えられない。しかし、学生の勉学意欲を助長し、一定レベルの大学教育を保障する観点からは試験の難易度に改善の余地があろう。また、同じ授業科目名であってもそれぞれのクラスの入学時の学力を出発点として、その現実から出発して、いかに能力を伸ばすかということに配慮した授業の組み立てが求められている。

#### **(6) 化学分科会 (分科会長：農学部 藤井 克彦)**

化学実験のピアレビューを実施した。化学分科会以外の教員も含めて多くの教員が参加した。理系学部生に必要とされる知識・技術を涵養するための工夫が授業の随所で見られた。また、さらなる授業改善のための意見も寄せられ、有意義なピアレビューであった。

#### **(7) 地球科学分科会 (分科会長：理工学研究科 (理学) 澤井 長雄)**

11月16日(水)に地球圏システム科学科主催でピアレビューを実施した。対象科目は野外実習(専門教育;3年次の実習)。1年間の実習の結果を報告する発表会をピアレビューとした。当日は主として主催学科のレビューア8名が参加し、同日夕方、この授業に対して授業研究会を実施した。

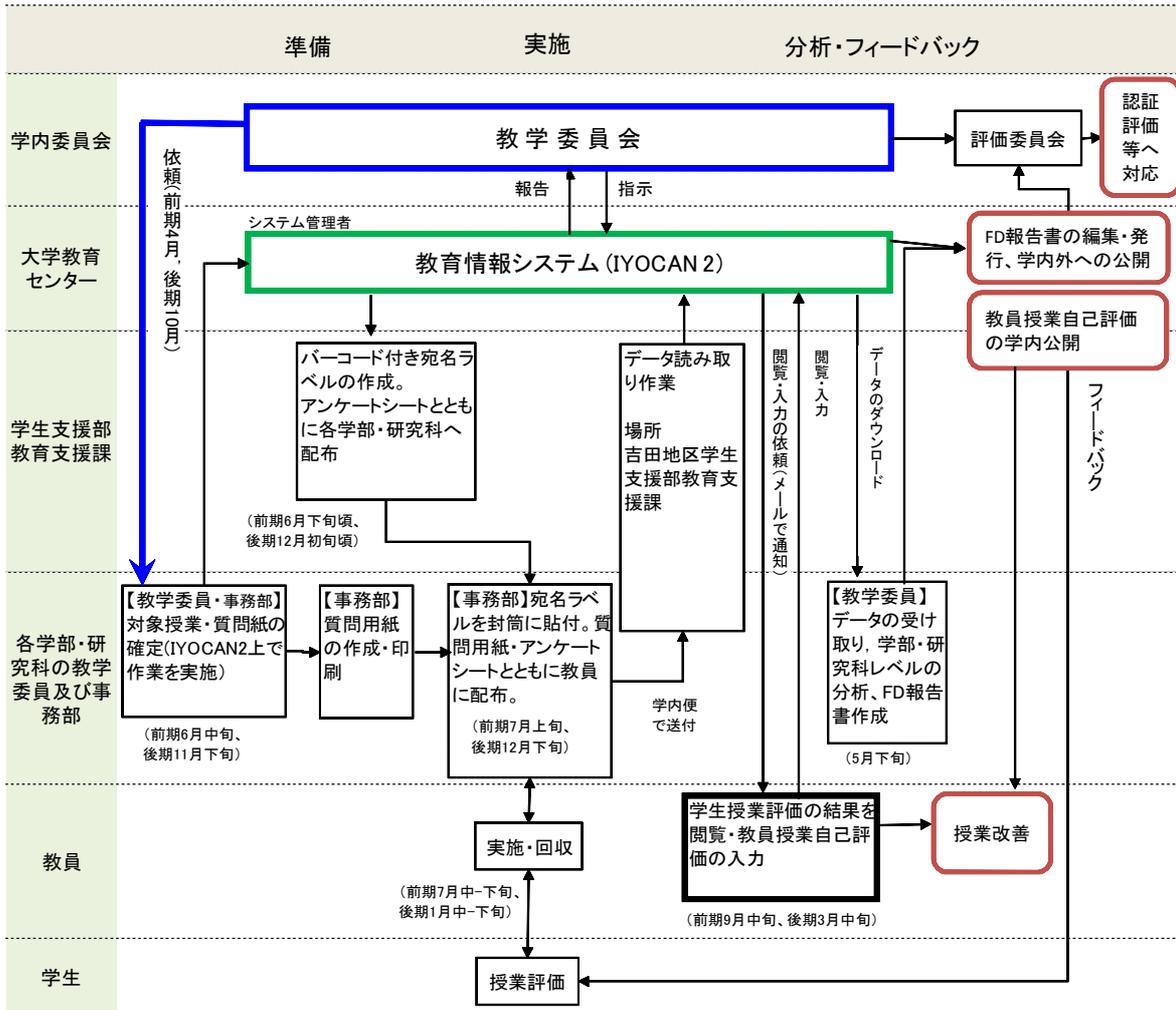
平成24年度は、学部・学科内でのFD研修および地球圏システム科学科のピアレビューと授業研究会に参加する予定。

# 第3章 学生授業評価及び教員授業自己評価

## 第1節 実施方法・実施状況

### (1) 実施方法

#### 1) 教育情報システム(IYOCAN)による学生授業評価・教員授業自己評価



※教育情報システム(IYOCAN2)は授業評価のデータベースであり、共通教育、医学部の除く6学部、一部の大学院研究科の評価を扱っている。医学部は独自のシステムで実施しているためこれには含まれない。

山口大学では、平成17年度前期より、旧大学教育職員能力開発(FD)委員会(～2008年3月。現在は教学委員会)のもとで、学生による授業評価(以下、学生授業評価)および教員による授業自己評価(以下、教員授業自己評価)を全学的にスタートした。平成16年度までは7学部・共通教育でそれぞれ独自に学生授業評価を実施してきたが、効率化・簡便化を図る必要性や、認証評価への対応の必要性から、大学教育センターがこの実施業務を引き受け、現在まで統一的に実施している(医学部を除く)。下図はその一連の流れである。マークシートに記入された回答は教育情報システム「IYOCAN」(Information of Your Course

ANalysis の略、いよかんと呼称)に蓄積され、教員は Web 上で結果の確認と自己評価を行っている。2010 年度からは新データベース「IYOCAN 2」を導入し、教務情報の新システム「修学支援システム」と連動することで様々な情報を授業評価に直接的に利用することが可能となった。

なお、以下に述べるように、医学部（医学科、保健学科）は全学に先駆けて Web による授業評価を実施しており、独自のデータベースを構築しているため IYOCAN は利用していない。

● 授業評価の閲覧・入力画面（大学教育センターホームページ上に配置）



2) 医学部医学科「医学教育総合電子システム eYUME」

平成 13 年度より、医学教育センターが管理する「医学教育総合電子システム eYUME」上で毎回の授業ごとにオンライン授業評価（進行評価）が実施されている。また、ユニット終了時にはマークシート方式による「ユニット学生振り返り評価」「ユニット責任者振り返り評価」が実施されている。その結果は同システム上で公開されている。

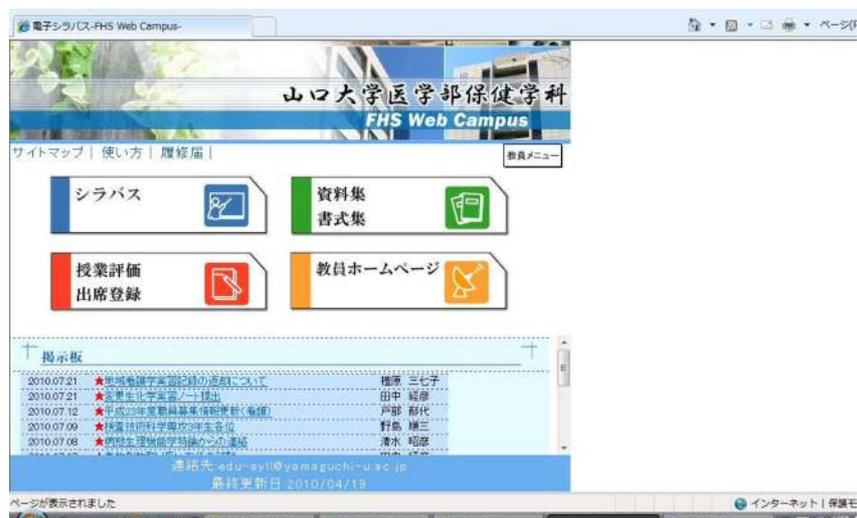
● 医学部医学科 医学教育総合電子システム



### 3) 医学部保健学科「山口大学医学部保健学科授業支援システム」

保健学科ホームページ上から「山口大学医学部保健学科授業支援システム」にログインし、教員が登録した授業評価メニューや出席確認メニューに対して、学生が教員から告げられた期間（時間）内にアクセスしてオンライン授業評価を行っている。

#### ● 医学部保健学科 授業支援システム



## (2) 質問紙の種類

質問紙は各学部・研究科ごとに異なっている。また、授業区分（講義、演習・実験・実習等）ごとに分かれており、学部・研究科独自の質問項目も設けられている（詳しくは4章以降の各学部・研究科のFD報告を参照のこと）。これは各学部・研究科のニーズに合った授業評価を実施するためである。

なお、本学のシラバスでは下表のように様々な授業区分が設けられているが、用いられる質問紙は大まかに分類して以下のようになっている(医学部を除く)。

シラバスの授業区分	質問紙の種類
「講義」の場合	講義用
「講義と演習」の場合	講義用
「講読」の場合	講義用
「演習」の場合	演習・実験・実習用
「実験・実習」の場合	演習・実験・実習用
「その他」の場合	講義用

共通教育では、上記に加えて、外国語系列の授業でシラバスの授業区分に関わらず「語学用」「TOEIC 準備用」の質問紙が使用されている。この2つの質問紙は基本的には「講義用」と同じであるが、授業技術を尋ねる質問の内容が異なっている。

シラバスの授業区分	質問紙の種類
共通教育・外国語系列 「講義」の場合	語学用（TOEIC 準備のみ TOEIC 準備用を使用）
共通教育・外国語系列 「演習」の場合	語学用

※「語学用」の質問紙は農学部専門授業の外国語科目でも使用されている

### （３）質問項目

上述のように学部・研究科ごとに質問紙・質問項目は異なっているが、平成 17 年度からの統一的な実施に際して、全学共通の質問項目が 5 項目設定され、上記の「講義用」「演習・実験・実習用」「語学用」「TOEIC 準備用」の各質問用紙に盛り込まれた。この共通質問項目の導入によって山口大学全学の傾向の分析を行うことが可能となった。ただし、各学部・研究科では、共通質問項目に独自の質問項目を加えたオリジナルの質問紙を作成することができるので、これまで実施してきた学生授業評価との経年比較を行うことも可能となっている。

#### 全学共通質問項目

- ①<授業外学習時間> あなたはこの授業のために授業時間以外にどのくらいの学習（予習・復習・宿題や関連した学習）を行いましたか？授業1コマ当たりの平均で教えてください
- ②<学習目標達成> あなたはシラバスに記載された学習目標を達成しましたか？
- ③<理解> あなたは授業の内容を理解しましたか？（講義、語学、TOEIC 準備）、内容理解や技能のレベルは向上しましたか？（演習、実験・実習）
- ④<満足> この授業はあなたにとって満足のいくものでしたか？
- ⑤<出席> あなたはこの授業にどのくらい出席しましたか？

### （４）実施対象授業

#### 1) 学部

基本的に全ての授業で実施しているが、授業評価の対象として適さない科目(例：教育実習、卒業論文等)については実施対象から除いている(詳しくは第 2 節「学生授業評価の結果について(全学)」の表を参照のこと)。なお、教員授業自己評価については学生授業評価を実施した授業を対象としている。

#### 学生による授業評価実施要項 (H17ー)

	実施対象科目	授業規模	その他
全学部 (学士課程)	全て。ただし、学生授業評価の対象として適さない授業科目については実施対象から除くことができる。	規模に関係なく全ての授業で実施。ただし回答者が5名未満の場合は授業担当者に結果を開示しないものとする。	非常勤講師についても実施

※評価を実施しない授業科目名は一覧にして質問項目とともに大学教育センターに情報を提供。

## 2) 研究科

平成 18 年度より大学院における授業評価は、a)学生授業評価は各研究科で最適な方法を決定・実施する(IYOCAN を利用してもよいし、自由記述形式等の独自の方式でもよい)、b)その代わり、学生授業評価の実施・非実施にかかわらず教員授業自己評価はすべての授業で実施し、授業の振り返りを通じた授業改善を促す、という方式で実施している。

### ●大学院・学生授業評価の実施方法 (H18-)

	実施対象科目	実施方法	その他
全研究科 (修士)	学生授業評価の対象として適する授業科目全て。	各研究科で選定した評価対象授業については、各研究科独自の方法で授業評価を実施する。学士課程と同様の方法を用いる場合は「いよかん」を利用できる。	独自で実施する場合は、質問項目の選定も自由とする

※実施方法および対象授業については大学教育センターに情報を提供。

### ●大学院・教員授業自己評価の実施方法 (H18-)

	実施対象科目	実施方法	その他
全研究科 (修士)	全て	学生授業評価の実施・非実施にかかわらず、全ての授業で自己評価を実施する。自己評価は「いよかん」で行う。 なお、評価項目については学士課程に準じるが、【28. 授業実施上の工夫】(10 項目)は任意とする。	

※授業形態の特殊性等の理由から学生授業評価を実施しない授業についても、教員自身による授業の振り返りを通じた授業改善を促す観点から自己評価については実施する。

なお、平成 23 年度前期からは以下のように変更することが平成 23 年度第 1 回教学委員会 (平成 23 年 4 月 27 日開催)で承認された。

## 大学院における教員授業自己評価の対象授業選定方法の変更について(案)

大学教育センター

この度、大学院における教員授業自己評価の対象授業選定方法を以下のように変更する。

大学院・教員授業自己評価の対象授業

(現) 全て

(新) 学生授業評価と同じ (IYOCAN2 を利用する研究科)

対象として適する授業科目 (独自の方法で実施する研究科)

(理由)

現在、大学院における教員授業自己評価は、学生授業評価の実施・非実施にかかわらず「全て」の授業で実施されている (平成 17 年度第 10 回 FD 委員会承認)。これは、当時、大学院(修士)の授業は規模・形態の面で学生授業評価に適さないものが多いという意見が多数であったため、少なくとも教員授業自己評価だけは全ての授業で実施する、という方針が承認されたものであった。

しかし、現在、すべての研究科では学生授業評価が導入されており、修士論文に関係する科目(課題研究、演習、セミナー等)、集中講義、実習科目など、一部の科目を除いた大多数の授業で評価が実施されている。従って、これまでのように教員授業自己評価を一律に全て実施する必要はなくなっている。

加えて、修士論文に関係する科目や実習科目などは授業の形態上「担当時間数(分)」が入力しにくい面があることが指摘されている。

よって、今回、上記のように選定方法の変更を提案したい。

## (5) 学生授業評価の結果の閲覧方法、教員授業自己評価の実施方法について

これまで各学部・共通教育では個々の教員への学生授業評価の結果の通知を印刷物で行ってきた。しかし、これは非常に手間がかかるため、より効率的で効果的な方法として、Web上での閲覧システムの導入が共通教育は平成16年度から、また専門教育は平成17年度から導入された(医学部医学科は平成13年度より)。

教員は大学教育センターのホームページにアクセスし、公式メールアドレスとパスワードを入力して教育情報システム「IYOCAN」にログインし、学生授業評価の閲覧と自己評価の入力を行うことができる。Web上では過去の評価結果も閲覧でき、PDFでダウンロードすることもできる。また、非常勤講師も学外からデータベースにアクセスできるようになっている。

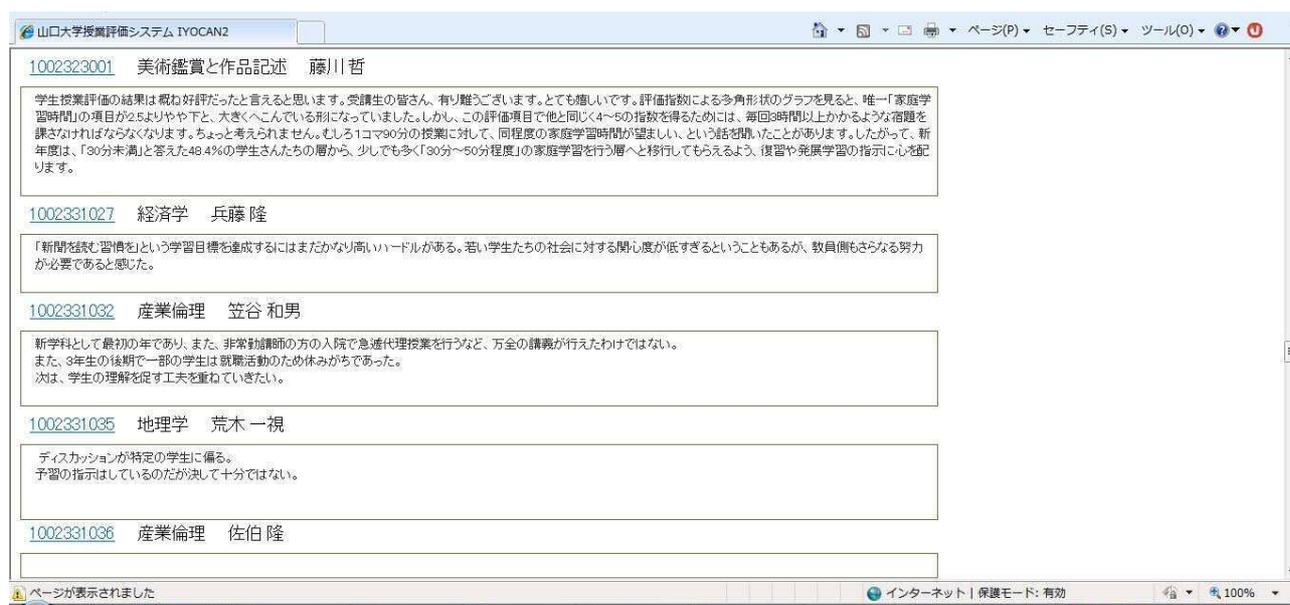
なお、学生授業評価の回答者が5人未満の場合、集計結果は教員には開示されない。これは学生が特定される危険性を避けるためである。

閲覧・入力の手順で工夫したことは、学生授業評価の結果を見る前に、まず教員授業自己評価を行う点である。この目的は、自己の認識と学生による評価の「ずれ」を確認するためである。教員はこのずれを確認した上で、授業の反省点・改善点を記入することになっている。

## (6) 学生への結果のフィードバックについて

平成18年度後期より、学生への結果のフィードバックの第一歩として教員授業自己評価の一部を学内公開した。具体的には【30.授業実施上の問題点・改善点(自由記述)】をWeb上で公開した。

### ●教員授業自己評価の学内公表用画面



The screenshot displays the IYOCAN system interface. The browser title is '山口大学授業評価システム IYOCAN2'. The page content shows a list of course evaluations with the following details:

- 1002323001 美術鑑賞と作品記述 藤川 哲**  
学生授業評価の結果は概ね好評だったと言えます。受講生の皆さん、有り難うございます。とても嬉しいです。評価指数による多角形状のグラフを見ると、唯一「家庭学習時間」の項目が2.5よりやや下と、大きくへこんでいる形になっていました。しかし、この評価項目で他と同じく4~5の指数を得るためには、毎回3時間以上かかるような宿題を課さなければならなりません。ちょっと考えられません。むしろ1コマ90分の授業に対して、同程度の家庭学習時間が望ましい、という話を聞いたことがあります。したがって、新年度は、「30分未満」と答えた48.4%の学生さんたちの層から、少しでも多く「30分~50分程度」の家庭学習を行う層へと移行してもらえよう、復習や発展学習の指示に心を配ります。
- 1002331027 経済学 兵藤 隆**  
「新聞を読む習慣」という学習目標を達成するにはまだまだ高いハードルがある。若い学生たちの社会に対する関心度が低すぎるということもあるが、教員側もさらなる努力が必要であると感じた。
- 1002331032 産業倫理 笠谷 和男**  
新学科として最初の年であり、また、非常勤講師の方の入院で急速代理授業を行うなど、万全の講義が行えたわけではない。また、3年生の後期で一部の学生は就職活動のため休みがちであった。次は、学生の理解を促す工夫を重ねていきたい。
- 1002331035 地理学 荒木 一視**  
ディスカッションが特定の学生に偏る。予習の指示はしているのだが決して十分ではない。
- 1002331036 産業倫理 佐伯 隆**

At the bottom of the page, a message says 'ページが表示されました' (Page displayed).

## 第2節 授業評価の結果について(全学)

### (1) 学生授業評価の実施状況

今年度も山口大学ではすべての学部・研究科(修士課程)において学生授業評価が実施された。次頁に掲載されている「2011年度山口大学学生授業評価および教員授業自己評価結果一覧(経年変化)」(2012年10月16日現在)は、教育情報システム(IYOCAN)で処理された学生授業評価と教員授業自己評価、および IYOCAN を利用しないで独自に授業評価を集計している学部・研究科のすべての授業評価の実施率をまとめたものである。また、学生授業評価の回答数については一覧表の後に別表(2007年度以降の経年変化)として掲載した。

2011年度の学生授業評価はすべての学部・研究科(修士レベル)・共通教育で実施され、回答数合計は98,663人(※IYOCANのみ)であった。

実施率が最も高かったのは技術経営研究科(100%)であり、続いて高かったのは理学部(97.6%)であった。全体的にみて昨年度より上昇した学部・研究科等が6、変化なし2、低下8であった。

### (2) 教員授業自己評価の実施状況

教員授業自己評価は、医学部保健学科を除くすべての学部・研究科等で実施された。教員授業自己評価の実施率は医学部(81.6%)が最も高く、続いて農学部(生物系)(79.1%)が高かった。昨年度より上昇した学部・研究科等は10、変化なし0、低下6であり、多くの学部・研究科で実施率が上昇した。

昨年度は IYOCAN の旧システムから新システムへの移行期であり、入力時期がずれたことから実施率が低下したが、今年度は大幅に改善された。

2011年度 山口大学 学生授業評価および教員授業自己評価 結果一覧 (経年変化)

2012年10月16日 現在

<学部>学生授業評価

データベース	学部等	学生授業評価(2005年度)	学生授業評価(2006年度)	学生授業評価(2007年度)	学生授業評価(2008年度)	学生授業評価(2009年度)	学生授業評価(2010年度)	学生授業評価(2011年度)	対象授業
I Y O C A N 2	共通教育	89.1%	94.2%	94.4%	93.6%	90.2%	89.5%	91.5%	全て
	人文学部	91.6%	90.8%	90.5%	89.2%	86.5%	83.4%	81.0%	卒業論文、集中講義、一部の演習を除く
	教育学部	78.1%	85.6%	86.0%	80.3%	85.4%	84.4%	87.0%	卒業研究、教育実習、事前・事後指導、介護等体験実習を除く
	経済学部	89.6%	90.4%	89.1%	92.1%	87.9%	88.0%	82.2%	卒業論文演習、演習I・IIを除く
	理学部	96.9%	98.0%	97.3%	94.7%	94.7%	98.2%	97.6%	特別研究、集中講義、一部の演習等を除く
	工学部	81.6%	95.4%	89.0%	90.6%	82.1%	87.6%	85.7%	卒業論文、国際実習、社会活動実習、インターシップを除く
	農学部(生物系)	82.7%	89.7%	93.0%	93.0%	83.9%	91.1%	94.7%	卒業論文、集中講義、特別演習、専攻演習、インターシップ等を除く
	農学部(獣医系)			卒業論文、集中講義、特別演習、専攻演習、インターシップ等を除く					
独自	医学部(医学科)	96.7%	95.9%	100.0%	98.7%	98.7%	97.5%	97.5%	自己開発コース、臨床実習1、臨床実習2、を除く
独自	医学部(保健学科)	48.6%	52.9%	55.2%	52.6%	66.7%	72.1%	85.0%	授業評価の必要なものに限定

<学部>教員授業自己評価

データベース	教員授業自己評価入力率(2007年度)	教員授業自己評価入力率(2008年度)	教員授業自己評価入力率(2009年度)	教員授業自己評価入力率(2010年度)	教員授業自己評価入力率(2011年度)	対象授業
I Y O C A N 2	39.1%	43.6%	34.4%	36.5%	40.1%	全て
	49.7%	68.8%	48.5%	50.9%	56.1%	学生授業評価と同じ
	34.1%	47.0%	52.1%	54.2%	48.7%	学生授業評価と同じ
	38.9%	47.5%	31.3%	43.2%	32.4%	学生授業評価と同じ
	57.3%	64.9%	67.5%	62.0%	72.4%	学生授業評価と同じ
	35.1%	36.7%	21.3%	34.3%	38.5%	学生授業評価と同じ
	50.6%	66.2%	54.8%	65.3%	79.1%	学生授業評価と同じ
					78.9%	学生授業評価と同じ
独自	-	-	83.3%	100.0%	81.6%	全て
独自	-	-	-	-	40.0%	-

<大学院>学生授業評価

データベース	学部等	学生授業評価(2005年度)	学生授業評価(2006年度)	学生授業評価(2007年度)	学生授業評価(2008年度)	学生授業評価(2009年度)	学生授業評価(2010年度)	学生授業評価(2011年度)	対象授業
I Y O C A N 2	理工学研究科	90% 80%	79.7%	81.3%	68.7%	71.2%	84.7%	69.2%	学外特別演習、特別講義、演習、集中等を除く
	技術経営研究科	-	90.9%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	全て
	医学系研究科	-	46.5%	54.5%	64.4%	51.5%	57.1%	51.4%	特別研究、オムニバスを除く
	教育学研究科	-	-	-	88.5%	73.1%	76.2%	71.5%	課題研究、総合研究、実習等を除く
	経済学研究科	-	-	-	54.3%	48.7%	39.1%	47.4%	演習、セミナーを除く
独自	人文科学研究科	-	-	-	24.1%	35.3%	36.8%	60.0%	半期の授業全体に対する評価を実施しており、授業ごとには実施していない。後期は実施せず。
独自	農学研究科	-	-	-	28.6%	54.6%	41.2%	36.4%	留学生特別コース対象の授業・日本語による授業でも受講者の少ない授業は対象科目から除外

<大学院>教員授業自己評価

データベース	教員授業自己評価入力率(2007年度)	教員授業自己評価入力率(2008年度)	教員授業自己評価入力率(2009年度)	教員授業自己評価入力率(2010年度)	教員授業自己評価入力率(2011年度)	対象授業
I Y O C A N 2	36.9%	33.1%	25.3%	29.3%	39.7%	全て(ただし2011年度より学生授業評価と同じ)
	56.3%	29.4%	15.2%	67.6%	53.1%	〃
	53.5%	28.8%	26.4%	31.5%	33.6%	〃
	22.4%	38.0%	39.3%	31.8%	48.3%	〃
	36.5%	58.1%	49.2%	47.8%	38.5%	〃
	27.3%	38.0%	22.7%	48.5%	46.1%	〃
独自	48.8%	70.8%	42.2%	46.5%	52.4%	〃

なお、理工学・医学系研究科の博士後期課程、および連合獣医学研究科、連合農学研究科、東アジア研究科(すべて博士後期課程)は実施対象から除いている

学生授業評価 回答数 (IYOCAN2 集計分のみ)

回答数	講義	講読	演習	実験・実習	語学(共通教育)	語学(農学部専門)	その他	未指定	全体平均
共通教育(2007)	33,743		3,657	2,491			9		39,900
共通教育(2008)	41,399			1,544			998		43,941
共通教育(2009)	28,988			2,147	9,512				40,647
共通教育(2010)	27,715			2,328	9,309			238	39,590
共通教育(2011)	27,295			2,544	8,899			52	38,790
人文(2007)	5,017	531	1,117						6,665
人文(2008)	4,927	626	1,368						6,921
人文(2009)	4,852	564	1,212						6,628
人文(2010)	4,301	657	1,132						6,090
人文(2011)	4,287	679	1,104						6,070
教育学部(2007)	8,325	68	894	811			2,794		12,892
教育学部(2008)	8,167		712	635			2,501		12,015
教育学部(2009)	7,404		859	599			2,726		11,588
教育学部(2010)	7,118		710	562			2,744	694	11,828
教育学部(2011)	8,064		791	675			2,788	86	12,404
経済(2007)	10,627								10,627
経済(2008)	10,454								10,454
経済(2009)	9,316								9,316
経済(2010)	10,100								10,100
経済(2011)	8,328								8,328
理(2007)	5,132		428	577			400		6,537
理(2008)	4,599		469	433			442		5,943
理(2009)	4,457		389	383					5,229
理(2010)	4,753		311	440					5,504
理(2011)	4,700		289	467					5,456
工(昼)(2007)	13,920		1,532	1,432			1,264		18,148
工(昼)(2008)	14,301		1,243	1,981			1,462		18,987
工(昼)(2009)	14,667		1,643	1,981					18,291
工(昼)(2010)	15,083		1,596	2,063					18,742
工(昼)(2011)	14,558		1,673	2,167					18,398
農(2007)	3,753		365	1,023					5,141
農(2008)	3,691		268	1,082					5,041
農(2009)	3,198		204	757					4,159
農(2010)	3,711		98	852					4,661
農(2011)	4,006			1,016					5,022
大学院・理工(2007)	3,062		118						3,180
大学院・理工(2008)	5,442		140						5,582
大学院・理工(2009)	2,273		119	11					2,403
大学院・理工(2010)	3,372		163	9					3,544
大学院・理工(2011)	2,859		184	3					3,046
大学院・技術経営(2007)	371		57						428
大学院・技術経営(2008)	315		67						382
大学院・技術経営(2009)								356	356
大学院・技術経営(2010)								325	325
大学院・技術経営(2011)								329	329
大学院・医学系(2007)	213		150						363
大学院・医学系(2008)	234		108						343
大学院・医学系(2009)	350		24						374
大学院・医学系(2010)	277		89						366
大学院・医学系(2011)	199		123					18	340
大学院・教育学(2008)	208		83	38			112		441
大学院・教育学(2009)	247		104	26			128		505
大学院・教育学(2010)	137		110	4			183	8	442
大学院・教育学(2011)	132		78	1			146		357
大学院・経済学(2008)	187								187
大学院・経済学(2009)	146		4						150
大学院・経済学(2010)								138	138
大学院・経済学(2011)								123	123
合計(2007)	84,747	599	8,332	6,398			4,488		104,564
合計(2008)	94,033	626	4,470	5,728			5,515		110,373
合計(2009)	75,898	564	4,558	5,904	9,512		2,854	356	99,646
合計(2010)	76,567	657	4,209	6,258	9,309		2,927	1,403	101,330
合計(2011)	74,428	679	4,242	6,873	8,899		2,934	608	98,663

### (3) 全学共通の質問項目に関する分析

次に、全学共通質問項目である5項目を取り上げ、各学部・研究科ごとに経年変化をみていく。各質問項目の選択肢1～5の平均値を算出し、授業区分別（講義、講読、演習、実験・実習、語学）に結果を整理した。また、全体平均については図にも示した。

なお、大学院については、IYOCANを利用した学生授業評価を行っている研究科とそれ以外の独自の方法で実施している研究科が混在しているため、ここではIYOCANを利用している理工学研究科、技術経営研究科、医学系研究科、教育学研究科、経済学研究科のみの結果を整理した。ただし、教育学研究科については共通質問項目「満足」のデータのみ尋ねているため他の項目はデータが存在しない。

#### (1) 共通質問項目1「授業外学習時間」

**Q. あなたはこの授業において、授業外学習(予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強)をどれくらい行いましたか？総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。**

1. 3時間程度または以上、2. 2時間程度、3. 1時間程度、4. 30分～50分程度、5. 30分未満

共通質問項目1は、授業1回あたりの授業外学習時間を尋ねたものである。平均値は1)3時間程度または以上を5点、5)30分未満を1点として授業区分別の平均値を算出した。

全体平均をみると、学部段階では2011年度の平均値データは2010年度の平均値をほぼすべての学部で上回っており、全体的な授業外学習時間は着実に伸びているとことが確認された。特に、工学部で大幅に数値が上昇している。

なお、各学部・研究科とも講義形式の授業は授業外学習時間が短く、演習や実験・実習の授業の方が授業外学習時間は長い傾向にあるのは昨年度までと同じ傾向である。

#### (2) 共通質問項目2「学習目標達成」

**Q. あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？**

1. そう思う、2. ややそう思う、3. どちらとも言えない、4. あまりそう思わない、5. そう思わない

共通質問項目2はシラバスに記載された学習目標を学生自身が達成できたかどうかについて尋ねたものである。山口大学はシラバスに観点別の到達目標を記載する方式となっており、「知識・理解の観点」「思考・判断の観点」「関心・意欲の観点」「態度の観点」「技能・表現の観点」の5つのうちから教員が用いる観点を選び、それぞれについて具体的な到達目標を学生に示すことになっている。これらの学習目標を達成できたかどうかについて、「1.そう思う」を5点、「そう思わない」を1点として平均値を授業区分別に算出した。

今年度はほとんどの学部・研究科で平均値が上昇している。2009度から修学支援システムが新たに導入されたため、受講登録の際にweb上でシラバスを読み、各授業の到達目標を理解して授業に臨んでいる者が増えていると推察される。授業の到達目標を知り、どのような成績評価方法で評価を受けるのかを事前に知って受講するのとならないのでは大きな差がでる。新システムの導入が学生の受講態度や理解度にいい意味で影響を及ぼしているとするれば喜ばしいことである。

### (3) 共通質問項目3「理解」

**Q. あなたは、この授業の内容を理解したと思いますか？**

1. そう思う、
2. ややそう思う、
3. どちらとも言えない、
4. あまりそう思わない、
5. そう思わない

共通質問項目3は授業の理解度について尋ねた設問である。多くの学部・研究科で昨年度を上回っており、特に共通教育は昨年度に続き、4.0を超えた。これは多くの学生が「そう思う」「ややそう思う」といった肯定的な回答をしていることを意味しており、授業担当の先生方の努力が実っていると考えられる。共通教育という大人数の授業が多い中でこのように高い理解度であることは喜ばしい状況にあるといえよう。

### (4) 共通質問項目4「満足」

**Q. この授業はあなたにとって満足のいくものでしたか？**

1. そう思う、
2. ややそう思う、
3. どちらとも言えない、
4. あまりそう思わない、
5. そう思わない

共通質問項目4は授業の満足度について尋ねた設問である。多くの学部・研究科で平均値が上昇しており、概ね一定の満足度が得られていることが確認できる。特に、農学部で大幅に数値が上昇している。

なお、講義よりも実験・実習や演習の授業の方が平均値は高い傾向にあるのは例年どおりである。

### (5) 共通質問項目5「出席」

**Q. あなたは、この講義にどれくらい出席しましたか？**（括弧内は、15回講義の場合の出席回数参考値）

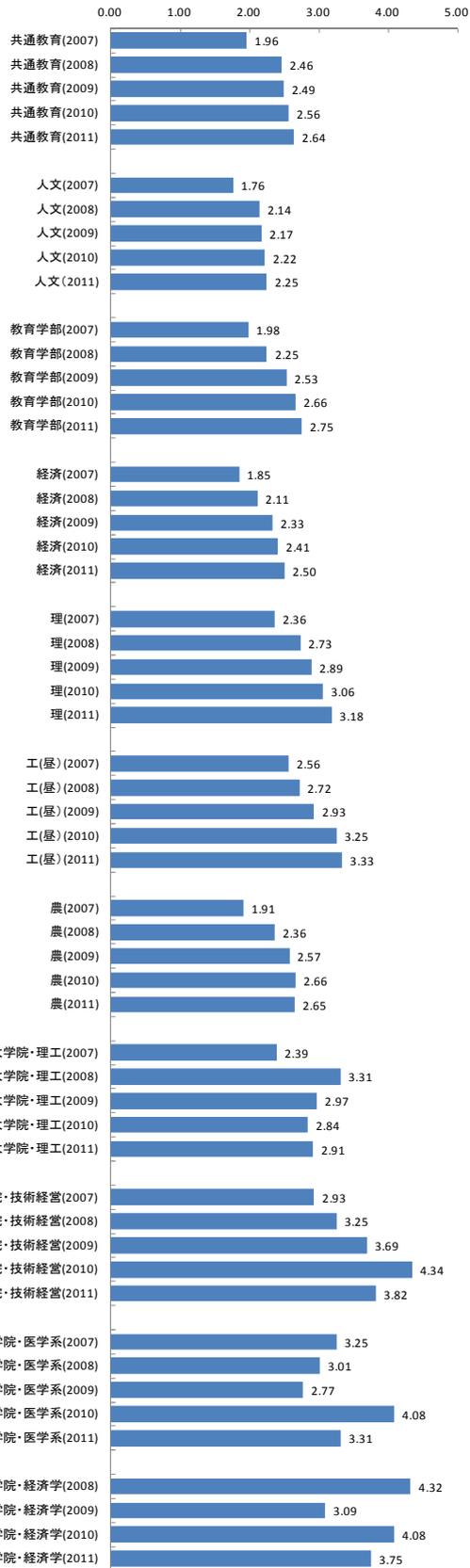
- |                 |                   |                  |
|-----------------|-------------------|------------------|
| 1. 90%以上（14回以上） | 2. 80～90%（12～13回） | 3. 60～80%（9～11回） |
| 4. 40～60%（6～8回） | 5. 40%未満（6回未満）    |                  |

共通質問項目5は授業への出席状況について尋ねた設問である。本質問も選択肢1の90%以上を5点、選択肢5の40%未満を1として計算を行った。すべての学部・研究科で4.5前後の高い平均値となっている。全体的にみて山口大学の学生の授業出席率は非常に良好であるといえる。

< 全学共通質問項目 1 授業外学習時間 >

授業外学習時間	講義	講読	演習	実験・実習	語学(共通教育)	語学(農学部専門)	その他	未指定	全体平均
共通教育(2007)	1.88		2.09	2.79			1.89		1.96
共通教育(2008)	2.42			4.26			1.70		2.46
共通教育(2009)	2.29			3.07	2.97				2.49
共通教育(2010)	2.34			3.44	3.01			2.10	2.56
共通教育(2011)	2.45			3.38	3.01			1.46	2.64
人文(2007)	1.48	2.75	2.53						1.76
人文(2008)	1.80	3.04	2.95						2.14
人文(2009)	1.80	3.26	3.13						2.17
人文(2010)	1.88	3.11	2.98						2.22
人文(2011)	1.92	2.86	3.16						2.25
教育学部(2007)	1.74	1.66	2.57	2.87			2.10		1.98
教育学部(2008)	2.05		3.11	3.15			2.13		2.25
教育学部(2009)	2.32		3.25	3.31			2.68		2.53
教育学部(2010)	2.44		3.49	3.46			2.93	2.22	2.66
教育学部(2011)	2.57		3.15	3.44			3.02	2.34	2.75
経済(2007)	1.85								1.85
経済(2008)	2.11								2.11
経済(2009)	2.33								2.33
経済(2010)	2.41								2.41
経済(2011)	2.50								2.50
理(2007)	2.19		3.32	3.27					2.36
理(2008)	2.55		3.33	3.82					2.73
理(2009)	2.79		3.17	3.84					2.89
理(2010)	2.97		3.59	3.78					3.06
理(2011)	3.09		3.53	3.88					3.18
工(昼)(2007)	2.43		2.91	3.73			2.34		2.56
工(昼)(2008)	2.52		3.19	3.87			2.22		2.72
工(昼)(2009)	2.76		3.31	3.91					2.93
工(昼)(2010)	3.11		3.56	4.04					3.25
工(昼)(2011)	3.20		3.57	4.67					3.33
農(2007)	1.78		2.34	2.22					1.91
農(2008)	2.21		3.48	2.59					2.36
農(2009)	2.44		3.31	2.92					2.57
農(2010)	2.58		2.74	3.02					2.66
農(2011)	2.54			3.07					2.65
大学院・理工(2007)	2.36		3.08						2.39
大学院・理工(2008)	3.29		3.94						3.31
大学院・理工(2009)	2.95		3.39	2.45					2.97
大学院・理工(2010)	2.80		3.57	2.78					2.84
大学院・理工(2011)	2.84		3.98	4.00					2.91
大学院・技術経営(2007)	2.92		3.02						2.93
大学院・技術経営(2008)	3.15		3.71						3.25
大学院・技術経営(2009)								3.69	3.69
大学院・技術経営(2010)								4.34	4.34
大学院・技術経営(2011)								3.82	3.82
大学院・医学系(2007)	2.97		3.65						3.25
大学院・医学系(2008)	2.90		3.24						3.01
大学院・医学系(2009)	2.67		4.13						2.77
大学院・医学系(2010)	4.12		3.70						4.08
大学院・医学系(2011)	3.37		3.16					3.78	3.31
大学院・経済学(2008)	4.32								4.32
大学院・経済学(2009)	3.09								3.09
大学院・経済学(2010)								4.08	4.08
大学院・経済学(2011)								3.75	3.75

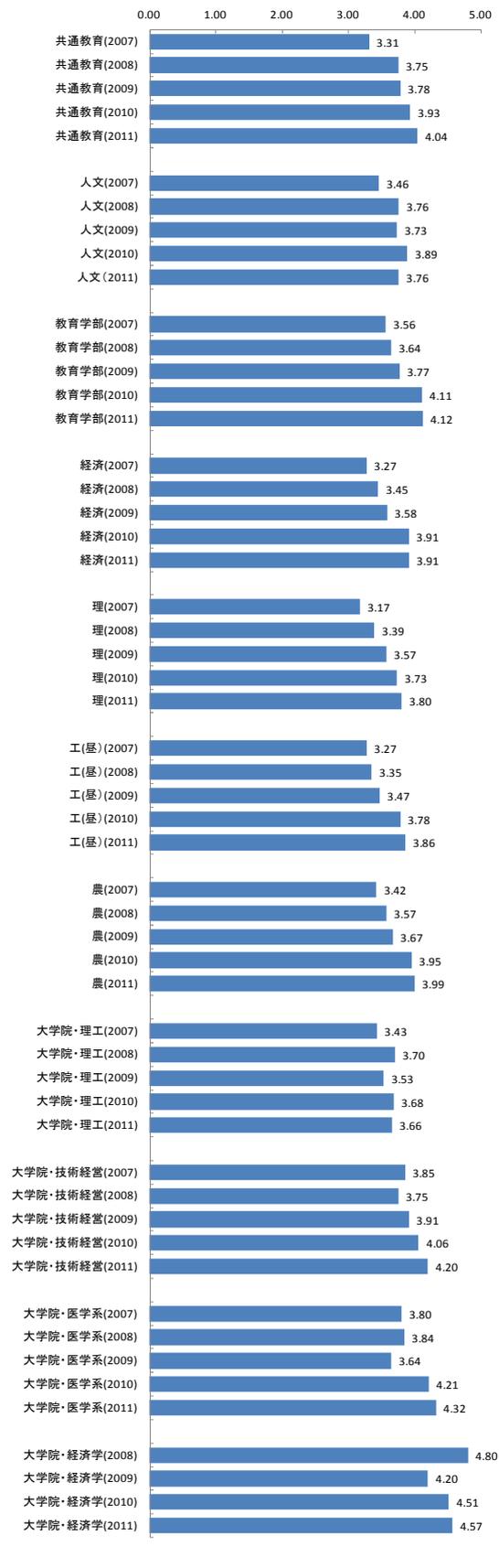
### 授業外学習時間(全体平均) —経年変化—



< 全学共通質問項目 2 学習目標達成 >

学習目標達成	講義	講読	演習	実験・実習	語学(共通教育)	語学(農学部専門)	その他	未指定	全体平均
共通教育(2007)	3.27		3.37	3.69			3.78		3.31
共通教育(2008)	3.72			4.12			4.21		3.75
共通教育(2009)	3.73			4.13	3.87				3.78
共通教育(2010)	3.88			4.25	4.02			4.20	3.93
共通教育(2011)	3.98			4.52	4.10			3.37	4.04
人文(2007)	3.37	3.75	3.76						3.46
人文(2008)	3.73	3.81	3.75						3.76
人文(2009)	3.66	3.91	3.93						3.73
人文(2010)	3.82	4.00	4.08						3.89
人文(2011)	3.66	3.89	4.07						3.76
教育学部(2007)	3.49	3.16	3.76	3.85			3.43		3.56
教育学部(2008)	3.60		3.84	3.95			3.63		3.64
教育学部(2009)	3.70		3.97	4.05			3.82		3.77
教育学部(2010)	4.04		4.28	4.17			4.16	4.33	4.11
教育学部(2011)	4.07		4.29	4.31			4.17	4.29	4.12
経済(2007)	3.27								3.27
経済(2008)	3.45								3.45
経済(2009)	3.58								3.58
経済(2010)	3.91								3.91
経済(2011)	3.91								3.91
理(2007)	3.12		3.45	3.51					3.17
理(2008)	3.32		3.77	3.78					3.39
理(2009)	3.53		3.71	3.95					3.57
理(2010)	3.70		3.99	3.97					3.73
理(2011)	3.78		3.91	3.98					3.80
工(昼)(2007)	3.25		3.35	3.48			3.25		3.27
工(昼)(2008)	3.28		3.52	3.62			3.35		3.35
工(昼)(2009)	3.44		3.60	3.62					3.47
工(昼)(2010)	3.76		3.84	3.94					3.78
工(昼)(2011)	3.83		3.91	3.99					3.86
農(2007)	3.34		3.72	3.60					3.42
農(2008)	3.47		3.95	3.83					3.57
農(2009)	3.63		3.90	3.80					3.67
農(2010)	3.91		3.92	4.15					3.95
農(2011)	3.95			4.17					3.99
大学院・理工(2007)	3.41		3.86						3.43
大学院・理工(2008)	3.70		3.62						3.70
大学院・理工(2009)	3.52		3.78	3.36					3.53
大学院・理工(2010)	3.68		3.65	4.00					3.68
大学院・理工(2011)	3.66		3.63	4.33					3.66
大学院・技術経営(2007)	3.85		3.86						3.85
大学院・技術経営(2008)	3.72		3.85						3.75
大学院・技術経営(2009)								3.91	3.91
大学院・技術経営(2010)								4.06	4.06
大学院・技術経営(2011)								4.20	4.20
大学院・医学系(2007)	3.76		3.86						3.80
大学院・医学系(2008)	3.81		3.90						3.84
大学院・医学系(2009)	3.62		3.96						3.64
大学院・医学系(2010)	4.26		4.13						4.21
大学院・医学系(2011)	4.31		4.36					4.17	4.32
大学院・経済学(2008)	4.80								4.80
大学院・経済学(2009)	4.20								4.20
大学院・経済学(2010)								4.51	4.51
大学院・経済学(2011)								4.57	4.57

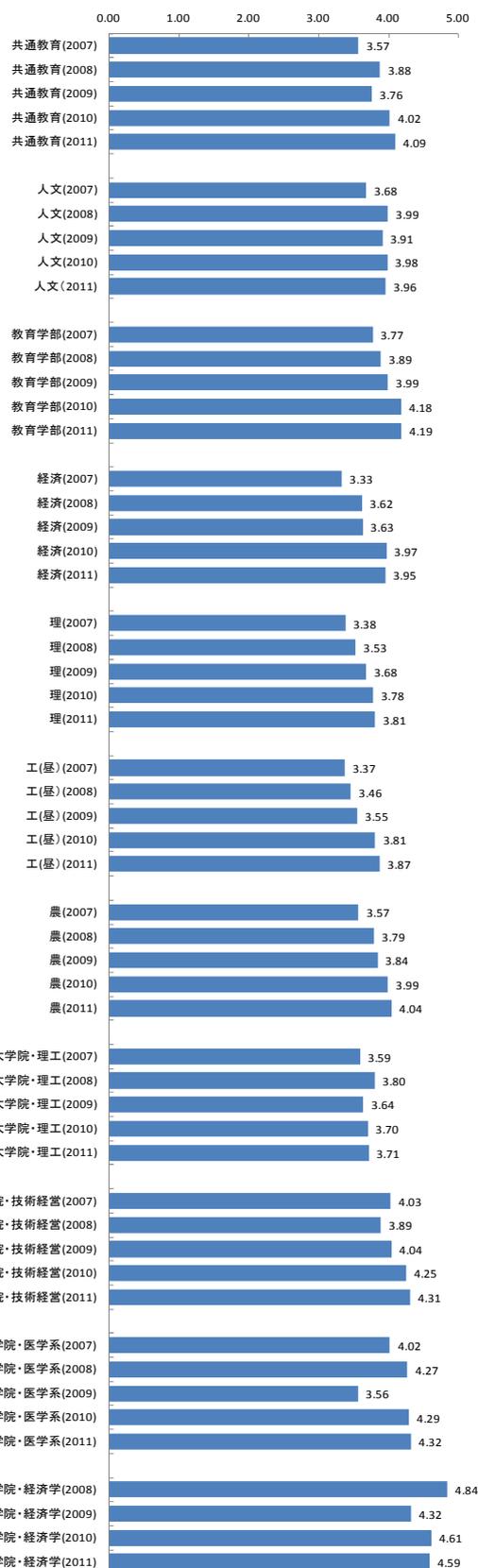
学習目標達成(全体平均)  
— 経年変化 —



< 全学共通質問項目 3 理解 >

理解	講義	講読	演習	実験・実習	語学(共通教育)	語学(農学部専門)	その他	未指定	全体平均
共通教育(2007)	3.52		3.77	3.96			4.33		3.57
共通教育(2008)	3.85			4.15			4.52		3.88
共通教育(2009)	3.89			2.14	4.12				3.76
共通教育(2010)	3.95			4.32	4.16			4.35	4.02
共通教育(2011)	4.03			4.36	4.23			3.25	4.09
人文(2007)	3.57	3.95	4.02						3.68
人文(2008)	3.84	4.09	4.03						3.99
人文(2009)	3.84	4.07	4.14						3.91
人文(2010)	3.90	4.11	4.21						3.98
人文(2011)	3.85	4.81	3.85						3.96
教育学部(2007)	3.72	3.32	3.95	4.07			3.62		3.77
教育学部(2008)	3.86		4.14	4.12			3.89		3.89
教育学部(2009)	3.94		4.21	4.26			4.01		3.99
教育学部(2010)	4.12		4.40	4.25			4.21	4.39	4.18
教育学部(2011)	4.14		4.36	4.40			4.22	4.39	4.19
経済(2007)	3.33								3.33
経済(2008)	3.62								3.62
経済(2009)	3.63								3.63
経済(2010)	3.97								3.97
経済(2011)	3.95								3.95
理(2007)	3.34		3.74	3.76					3.38
理(2008)	3.47		3.89	3.91					3.53
理(2009)	3.63		3.89	4.05					3.68
理(2010)	3.74		4.09	4.08					3.78
理(2011)	3.76		4.08	4.08					3.81
工(昼)(2007)	3.31		3.56	3.72			3.34		3.37
工(昼)(2008)	3.40		3.57	3.69			3.59		3.46
工(昼)(2009)	3.51		3.72	3.71					3.55
工(昼)(2010)	3.78		3.88	3.95					3.81
工(昼)(2011)	3.85		3.93	4.01					3.87
農(2007)	3.42		4.16	3.91					3.57
農(2008)	3.66		4.55	4.08					3.79
農(2009)	3.76		4.47	4.01					3.84
農(2010)	3.94		4.11	4.19					3.99
農(2011)	3.99			4.24					4.04
大学院・理工(2007)	3.57		4.14						3.59
大学院・理工(2008)	3.80		3.91						3.80
大学院・理工(2009)	3.63		3.87	3.27					3.64
大学院・理工(2010)	3.70		3.65	3.56					3.70
大学院・理工(2011)	3.72		3.64	4.67					3.71
大学院・技術経営(2007)	4.03		4.02						4.03
大学院・技術経営(2008)	3.84		4.14						3.89
大学院・技術経営(2009)								4.04	4.04
大学院・技術経営(2010)								4.25	4.25
大学院・技術経営(2011)								4.31	4.31
大学院・医学系(2007)	3.92		4.16						4.02
大学院・医学系(2008)	4.23		4.36						4.27
大学院・医学系(2009)	3.75		2.17						3.56
大学院・医学系(2010)	4.37		4.15						4.29
大学院・医学系(2011)	4.30		4.35					4.22	4.32
大学院・経済学(2008)	4.84								4.84
大学院・経済学(2009)	4.32								4.32
大学院・経済学(2010)								4.61	4.61
大学院・経済学(2011)								4.59	4.59

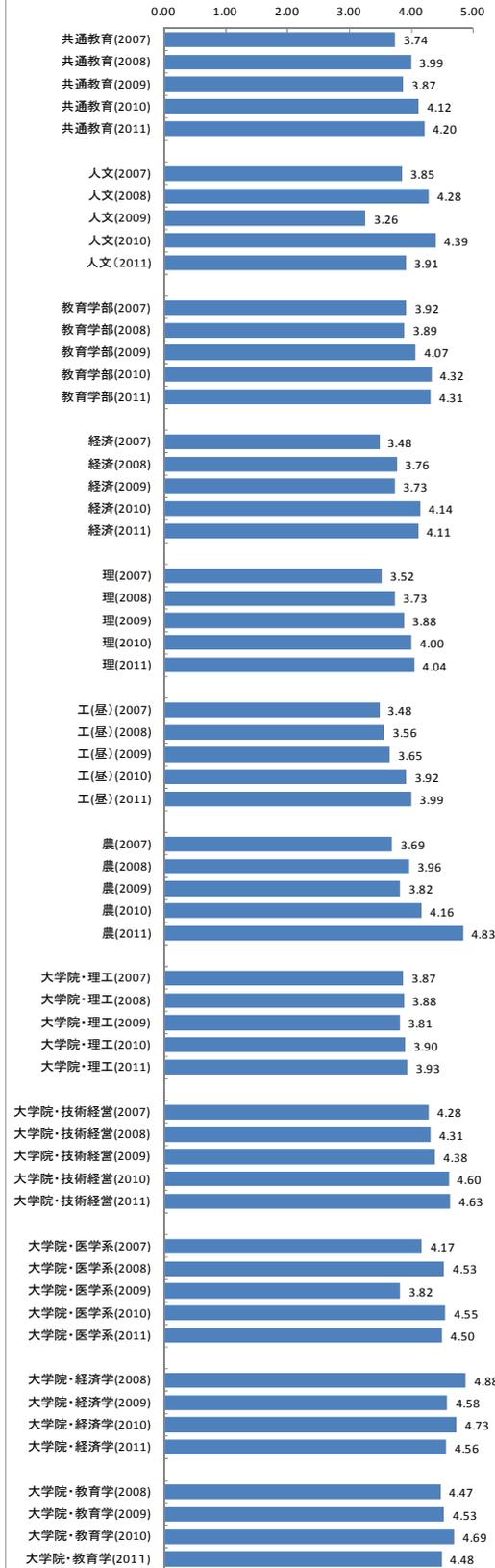
### 理解(全体平均) 一経年変化一



< 全学共通質問項目 4 満足 >

満足	講義	講読	演習	実験・実習	語学(共通教育)	語学(農学部専門)	その他	未指定	全体平均
共通教育(2007)	3.72		3.75	4.07			4.33		3.74
共通教育(2008)	3.97			4.26			4.60		3.99
共通教育(2009)	3.97			1.87	4.18				3.87
共通教育(2010)	4.05			4.32	4.28			4.49	4.12
共通教育(2011)	4.14			4.42	4.34			3.40	4.20
人文(2007)	3.75	4.21	4.12						3.85
人文(2008)	4.22	4.50	4.39						4.28
人文(2009)	4.05	2.23	2.16						3.26
人文(2010)	4.31	4.54	4.60						4.39
人文(2011)	4.03	4.32	3.20						3.91
教育学部(2007)	3.87	3.51	4.16	4.27			3.70		3.92
教育学部(2008)	3.86		4.14	4.12			3.89		3.89
教育学部(2009)	4.02		4.38	4.34			4.06		4.07
教育学部(2010)	4.26		4.62	4.35			4.35	4.52	4.32
教育学部(2011)	4.27		4.47	4.43			4.35	4.60	4.31
経済(2007)	3.48								3.48
経済(2008)	3.76								3.76
経済(2009)	3.73								3.73
経済(2010)	4.14								4.14
経済(2011)	4.11								4.11
理(2007)	3.48		3.95	3.78					3.52
理(2008)	3.68		3.99	4.05					3.73
理(2009)	3.84		3.94	4.23					3.88
理(2010)	3.97		4.14	4.30					4.00
理(2011)	4.02		4.17	4.16					4.04
工(昼)(2007)	3.46		3.58	3.62			3.55		3.48
工(昼)(2008)	3.51		3.68	3.79			3.71		3.56
工(昼)(2009)	3.61		3.84	3.79					3.65
工(昼)(2010)	3.89		3.99	4.05					3.92
工(昼)(2011)	3.97		4.06	4.13					3.99
農(2007)	3.65		3.47	3.91					3.69
農(2008)	3.84		4.49	4.25					3.96
農(2009)	3.73		4.39	4.07					3.82
農(2010)	4.11		4.32	4.40					4.16
農(2011)	4.80			4.97					4.83
大学院・理工(2007)	3.85		4.31						3.87
大学院・理工(2008)	3.88		3.76						3.88
大学院・理工(2009)	3.80		4.20	3.45					3.81
大学院・理工(2010)	3.91		3.79	3.56					3.90
大学院・理工(2011)	3.94		3.85	5.00					3.93
大学院・技術経営(2007)	4.29		4.19						4.28
大学院・技術経営(2008)	4.27		4.53						4.31
大学院・技術経営(2009)								4.38	4.38
大学院・技術経営(2010)								4.60	4.60
大学院・技術経営(2011)								4.63	4.63
大学院・医学系(2007)	4.05		4.34						4.17
大学院・医学系(2008)	4.52		4.56						4.53
大学院・医学系(2009)	4.05		2.08						3.82
大学院・医学系(2010)	4.60		4.46						4.55
大学院・医学系(2011)	4.52		4.43					4.72	4.50
大学院・経済学(2008)	4.88								4.88
大学院・経済学(2009)	4.58								4.58
大学院・経済学(2010)								4.73	4.73
大学院・経済学(2011)								4.56	4.56
大学院・教育学(2008)	4.37		4.64	4.63					4.47
大学院・教育学(2009)	4.46		4.79	4.31			4.50		4.53
大学院・教育学(2010)	4.76		4.76	4.75			4.58	4.88	4.69
大学院・教育学(2011)	4.55		4.37	5.00			4.48		4.48

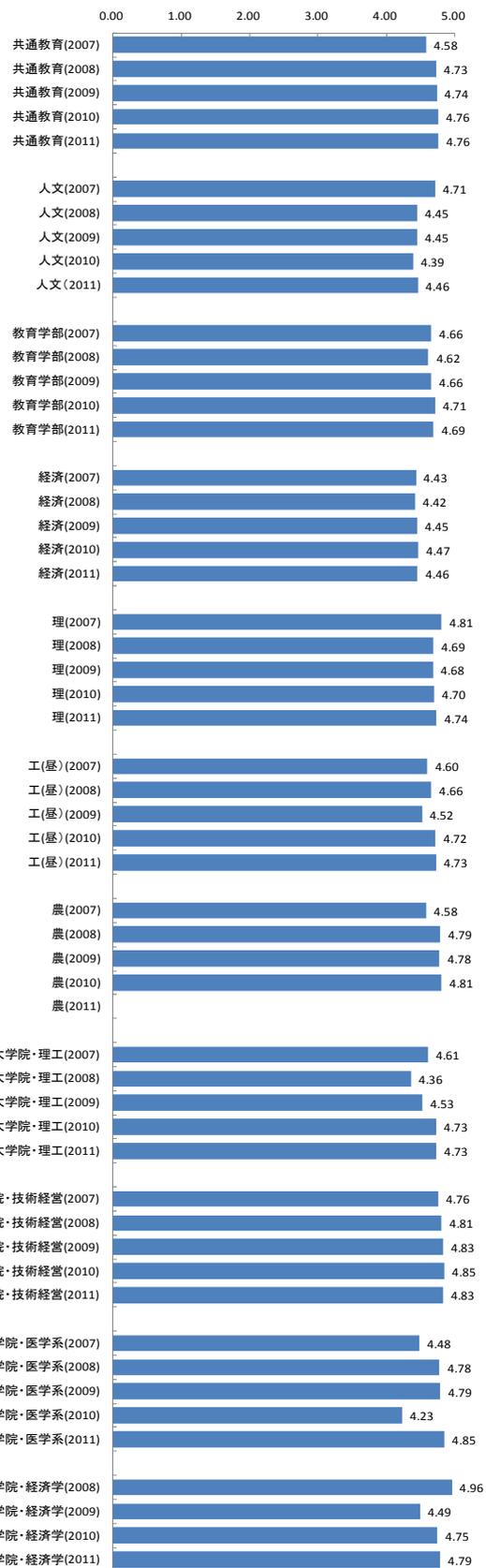
### 満足(全体平均) 一経年変化一



< 全学共通質問項目 5 出席 >

出席	講義	講読	演習	実験・実習	語学(共通教育)	語学(農学部専門)	その他	未指定	全体平均
共通教育(2007)	4.57		4.64	4.65			4.89		4.58
共通教育(2008)	4.58			4.66	4.73				4.73
共通教育(2009)	4.73			4.81	4.74				4.74
共通教育(2010)	4.75			4.82	4.77			4.68	4.76
共通教育(2011)	4.76			4.83	4.77			4.94	4.76
人文(2007)	4.70	4.72	4.72						4.71
人文(2008)	4.45	4.52	4.41						4.45
人文(2009)	4.47	4.42	4.38						4.45
人文(2010)	4.41	4.38	4.32						4.39
人文(2011)	4.50	4.43	4.34						4.46
教育学部(2007)	4.65	4.69	4.57	4.74			4.65		4.66
教育学部(2008)	4.62		4.52	4.73			4.52		4.62
教育学部(2009)	4.64		4.61	4.76			4.71		4.66
教育学部(2010)	4.69		4.67	4.73			4.74	4.75	4.71
教育学部(2011)	4.68		4.69	4.77			4.72	4.67	4.69
経済(2007)	4.43								4.43
経済(2008)	4.42								4.42
経済(2009)	4.45								4.45
経済(2010)	4.47								4.47
経済(2011)	4.46								4.46
理(2007)	4.81		4.84	4.91					4.81
理(2008)	4.65		4.82	4.88					4.69
理(2009)	4.65		4.78	4.91					4.68
理(2010)	4.68		4.81	4.87					4.70
理(2011)	4.71		4.86	4.92					4.74
工(昼)(2007)	4.59		4.64	4.74			4.65		4.60
工(昼)(2008)	4.64		4.68	4.77			4.75		4.66
工(昼)(2009)	4.49		4.66	4.61					4.52
工(昼)(2010)	4.70		4.77	4.84					4.72
工(昼)(2011)	4.71		4.76	4.84					4.73
農(2007)	4.64		3.78	4.61					4.58
農(2008)	4.73		4.95	4.93					4.79
農(2009)	4.74		4.90	4.95					4.78
農(2010)	4.77		4.84	4.97					4.81
農(2011)									
大学院・理工(2007)	4.76		4.77						4.61
大学院・理工(2008)	4.36		4.39						4.36
大学院・理工(2009)	4.52		4.70	4.55					4.53
大学院・理工(2010)	4.73		4.72	5.00					4.73
大学院・理工(2011)	4.72		4.84	4.67					4.73
大学院・技術経営(2007)	4.74		4.44						4.76
大学院・技術経営(2008)	4.82		4.81						4.81
大学院・技術経営(2009)								4.83	4.83
大学院・技術経営(2010)								4.85	4.85
大学院・技術経営(2011)								4.83	4.83
大学院・医学系(2007)	4.54		4.41						4.48
大学院・医学系(2008)	4.77		4.80						4.78
大学院・医学系(2009)	4.79		4.83						4.79
大学院・医学系(2010)	4.17		4.78						4.23
大学院・医学系(2011)	4.84		4.85					4.95	4.85
大学院・経済学(2008)	4.96								4.96
大学院・経済学(2009)	4.49								4.49
大学院・経済学(2010)								4.75	4.75
大学院・経済学(2011)								4.79	4.79

### 出席(全体平均) — 経年変化 —



## 第3節 学生授業評価の結果について（共通教育）

次に、第3節では共通教育に絞って2011年度の学生授業評価の結果を考察する。前節で示したデータのとおり、今年度の共通教育の学生授業評価実施率は91.5%、教員授業自己評価実施率は40.1%であった。昨年度より前者は2.0%、後者は3.6%、共に上昇した。なお、回答数は合計38,790人であり、内訳は講義27,295人、実験・実習2,544人、語学8,899人、その他52人であった。

なお、以下に示す学生授業評価の結果は質問紙の種類（講義用、語学用、TOEIC準備用、実験実習用の4種類）別に分野別の平均値の変化を経年で示したものである。各分野に含まれる授業科目および開設科目は附表に掲載した。また、詳しい質問項目は節末に質問紙を掲載したので、適宜ご参照いただければ幸いである。

### （1）講義系科目の結果について

以下の表・図は4種類の質問紙のうち「講義」用を使用している講義系科目を系列・分野別に整理し、評定平均値を算出したものである。講義系科目には大きく分類して「初期教育系列」「一般教養教育系列」「専門基礎教育」に分けられる。またそれぞれ分野別に細かく分かれている。「思想と歴史」「ことばと芸術」が各質問項目において、平均値が昨年度と比べ大幅に上昇している。

Q1の出席状況は「1. 90%以上（14回以上）」を5点、「5. 40%未満（6回未満）」を1点として平均値を計算したものである。すべて4.5を超えており良好である。

Q2の授業外学習は予習・復習・宿題やレポート作成、試験勉強を行った総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算した時間を尋ねたものである。「1. 3時間程度または以上」「2. 2時間程度」「3. 1時間程度」「4. 30-50分程度」「5. 30分未満」をそれぞれ5,4,3,2,1として平均値を算出した。最も高い「思想と歴史」が3.04、次に高かった「初期教育」が3.02であり、その他の授業についても昨年度より増加しており、良い傾向にある。なお、大学設置基準には「1単位の授業科目は45時間の学修を必要とする」と規定されており、この中には授業時間の他に予習、復習の時間が含まれている。例えば、2単位の講義を行う場合90時間の学修が必要であり、このうち授業の30時間を除く60時間が授業外学習となる。つまり、半期15回の授業では1回の授業2時間に対して4時間の授業外学習が必要という計算になる。単位の実質化という観点から、現在の傾向がさらに進むことが期待される。

Q3の教員の話し方が明瞭で聞き取りやすかったかについては「1. そう思う」「2. ややそう思う」「3. どちらとも言えない」「4. あまりそう思わない」「5. そう思わない」をそれぞれ5,4,3,2,1として平均値を算出した。すべての科目で3.5を上回っており4.0を超えている科目も多い。

Q4の専門用語や理論的な話が適切に説明されたかについては前問と同様に「1. そう思う」「2. ややそう思う」「3. どちらとも言えない」「4. あまりそう思わない」「5. そう思わない」をそれぞれ5,4,3,2,1として平均値を計算した。ほとんどの授業で4.0を上回っており、全体的に昨年度よりもやや上昇している。

Q5のテキストやプリントなどの教材が効果的に使われたかについてとQ6の板書やOHP、ビデオ、コンピュータなどが効果的に使われたかについてはQ4と同様の計算方法で平均値を算出した。なお、これらの設問には「6. この授業は該当しない」という選択

肢があるが、平均値の計算には含めていない。多くの分野で平均が 4.0 を超えており、良好である。

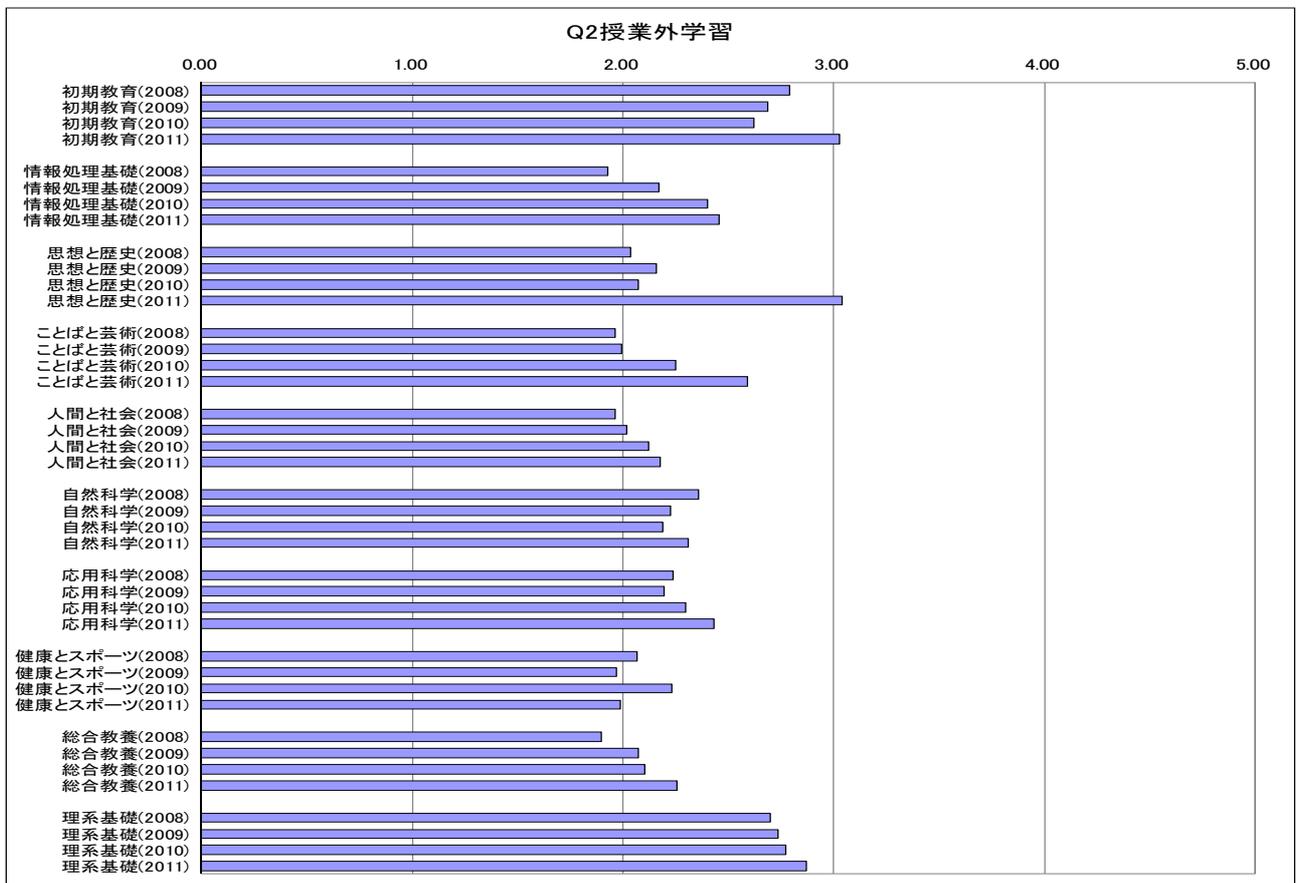
Q7 の学生の疑問や質問への対応は充分でしたか？という問いについては、多くの分野で平均が 4.0 を超えており、良好である。共通教育は規模の大きな授業が多く、質問への対応が小規模授業で比べて難しいと考えられるが、学生授業評価の結果は現在のところ良好である。

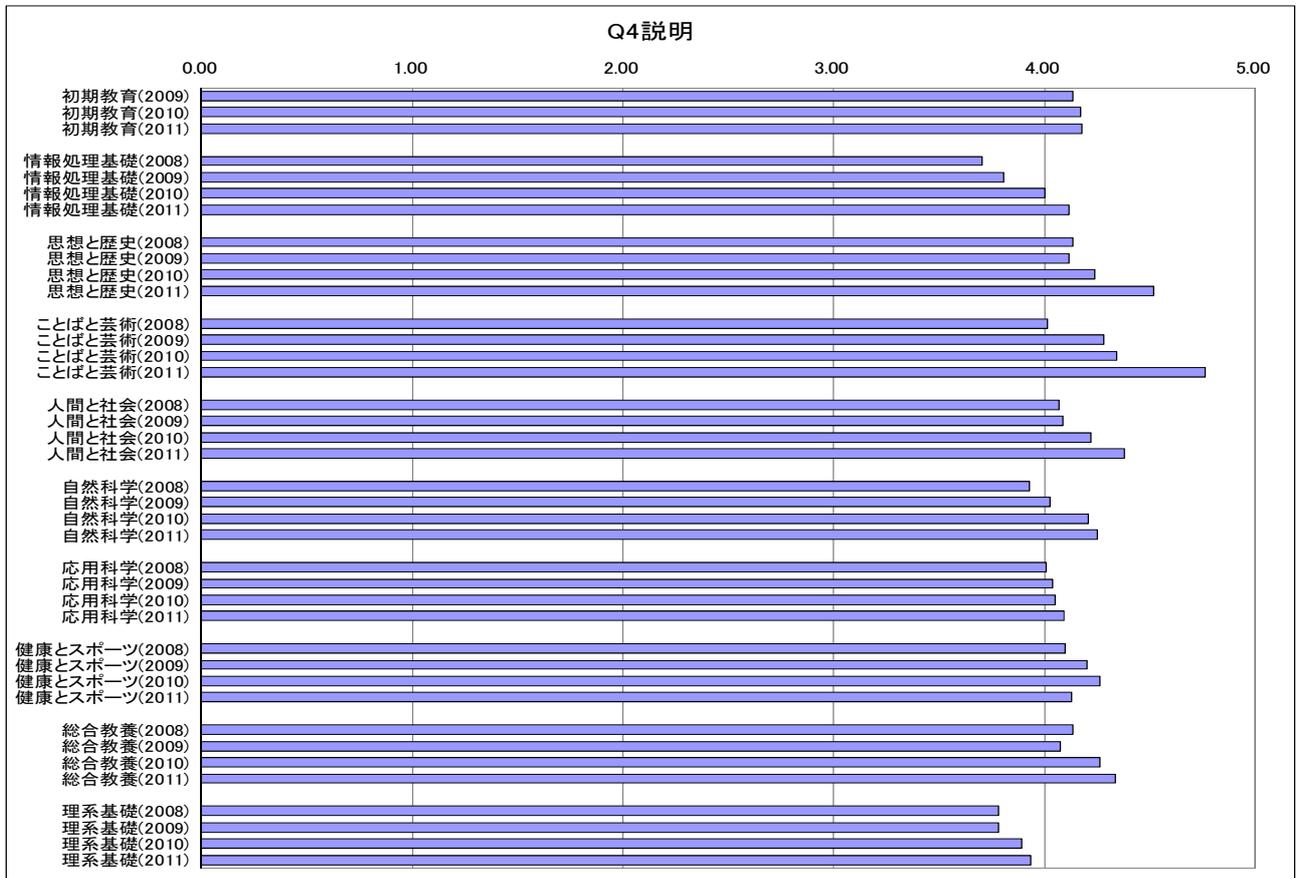
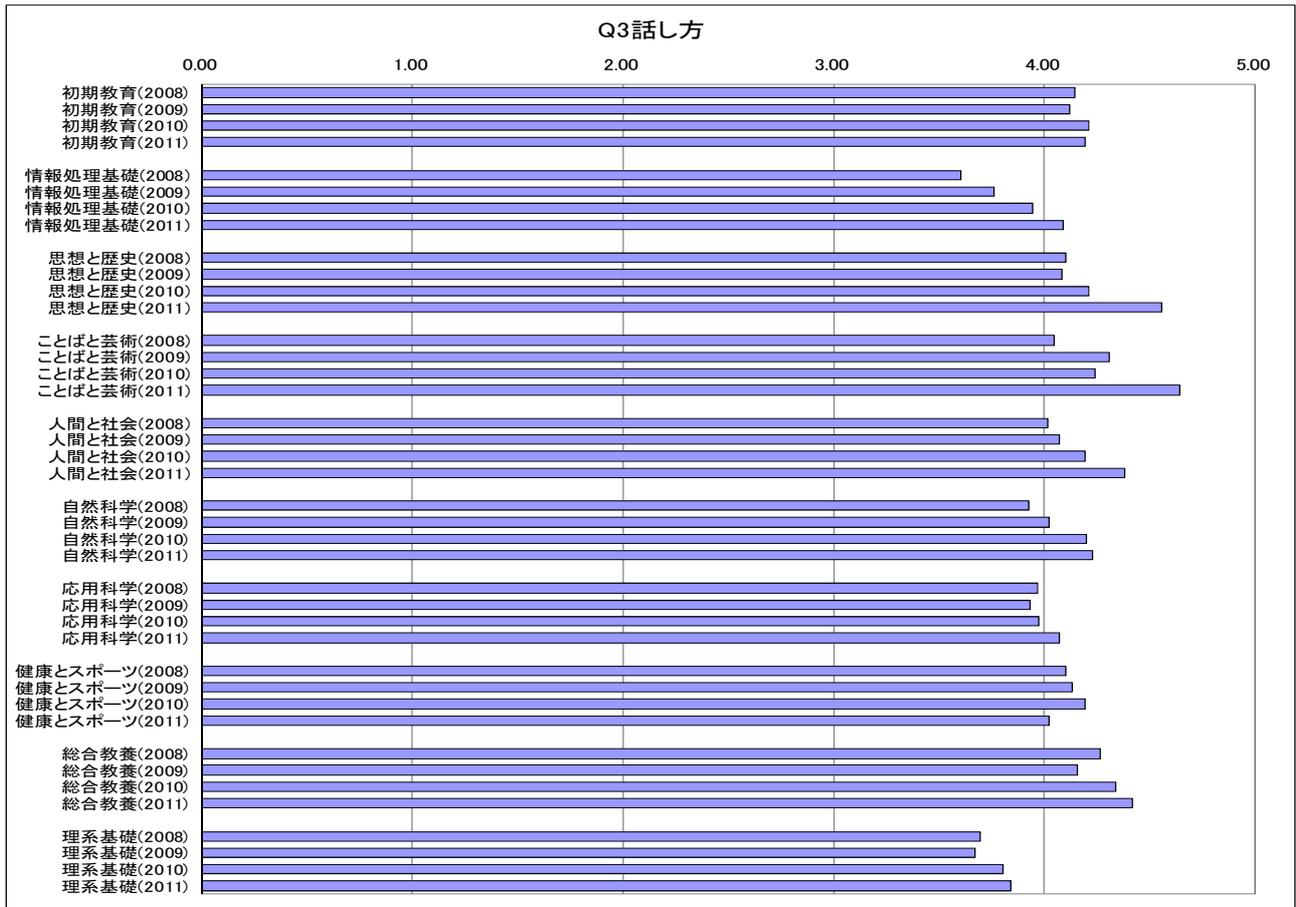
Q8 のシラバスに記載された学習目標を達成したかについては「1. そう思う」「2. ややそう思う」「3. どちらとも言えない」「4. あまりそう思わない」「5. そう思わない」を 5,4,3,2,1 とし、「6. 答えられない」は平均値の計算から除いた。これはシラバスを読んでいない学生や学習目標を忘れた学生のために設けられた選択肢である。平均値はすべての科目で 3.5 を上回っており良好である。また、昨年度に続き、すべての分野で上昇している。

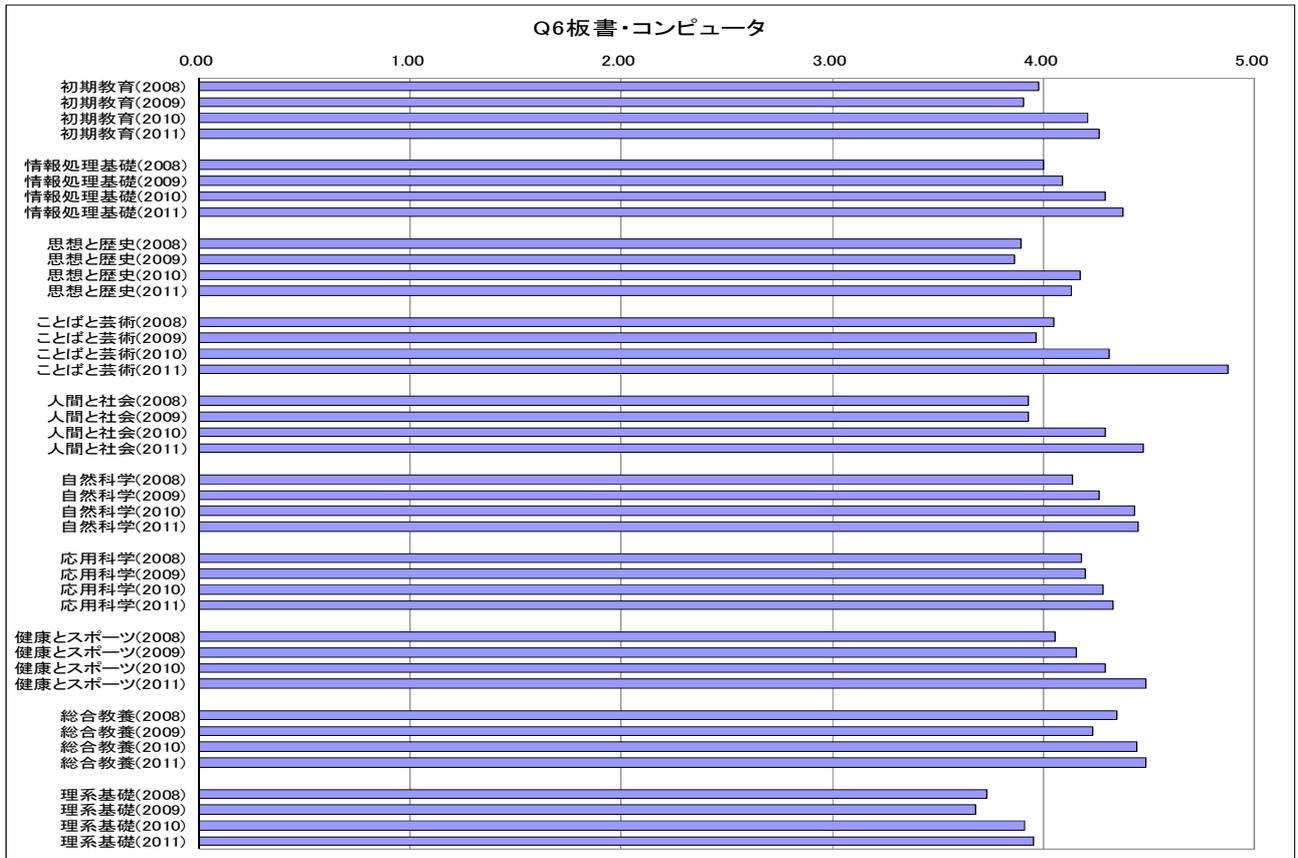
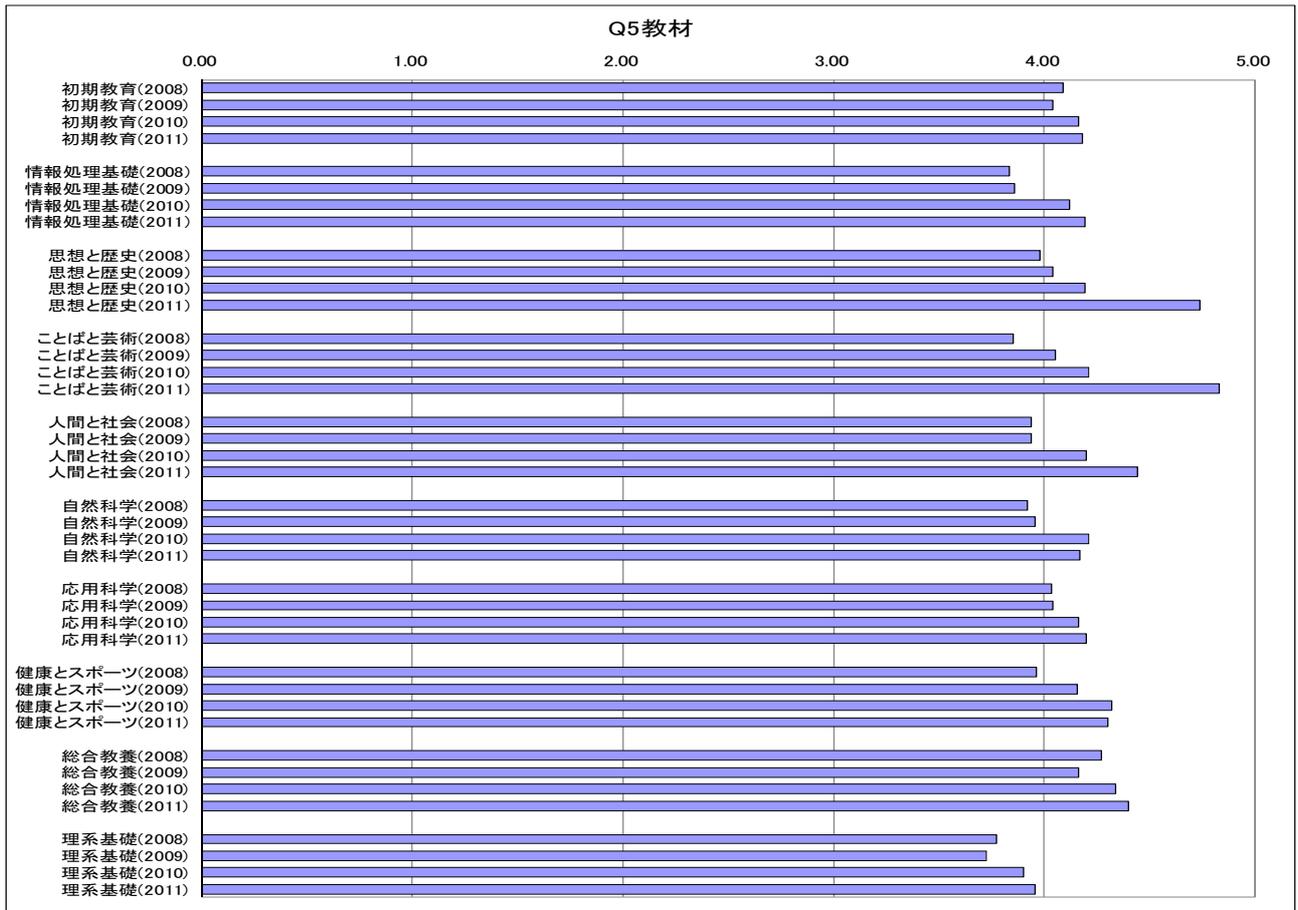
Q9 のこの授業の内容を理解できたかという質問についてはすべての科目で 3.5 を上回っており良好であった。

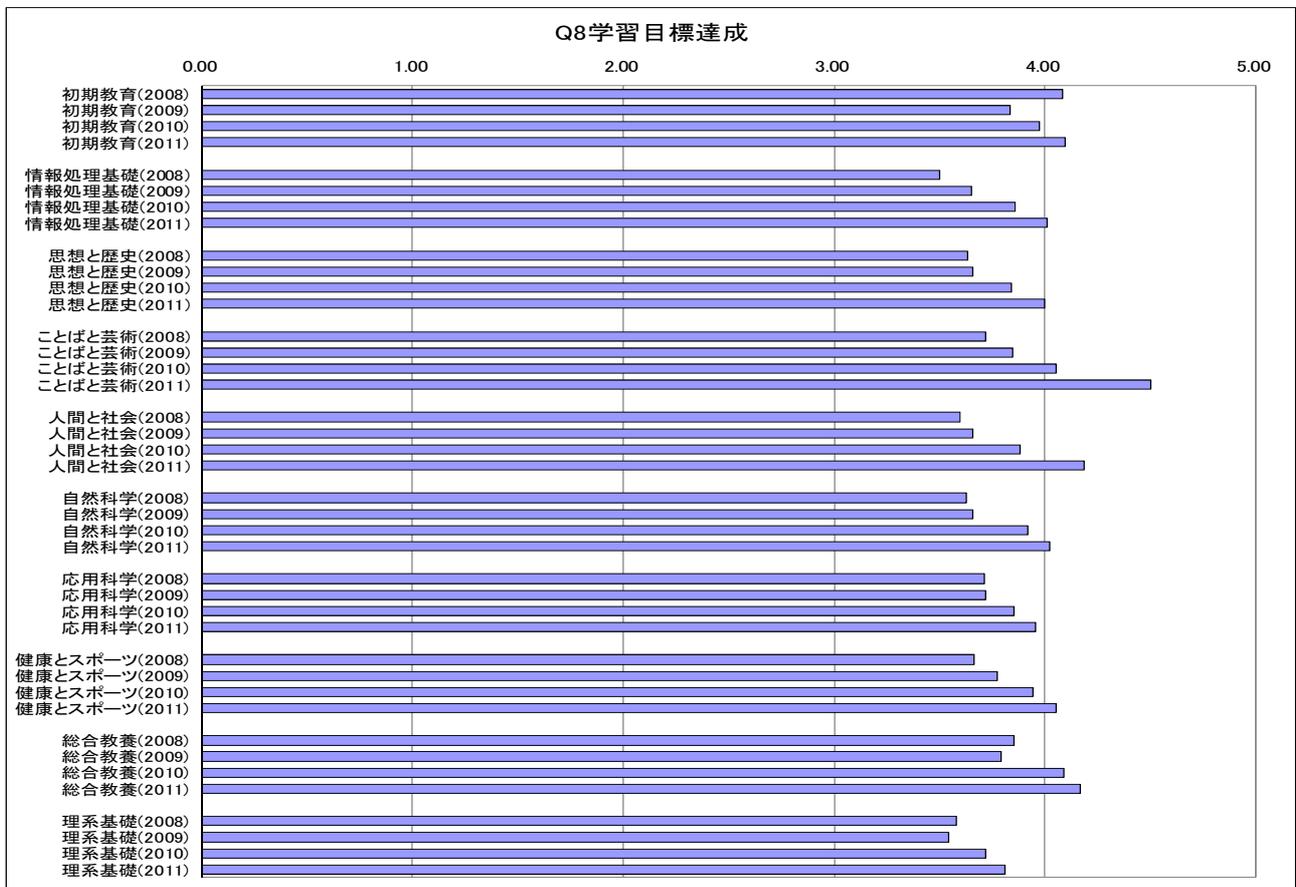
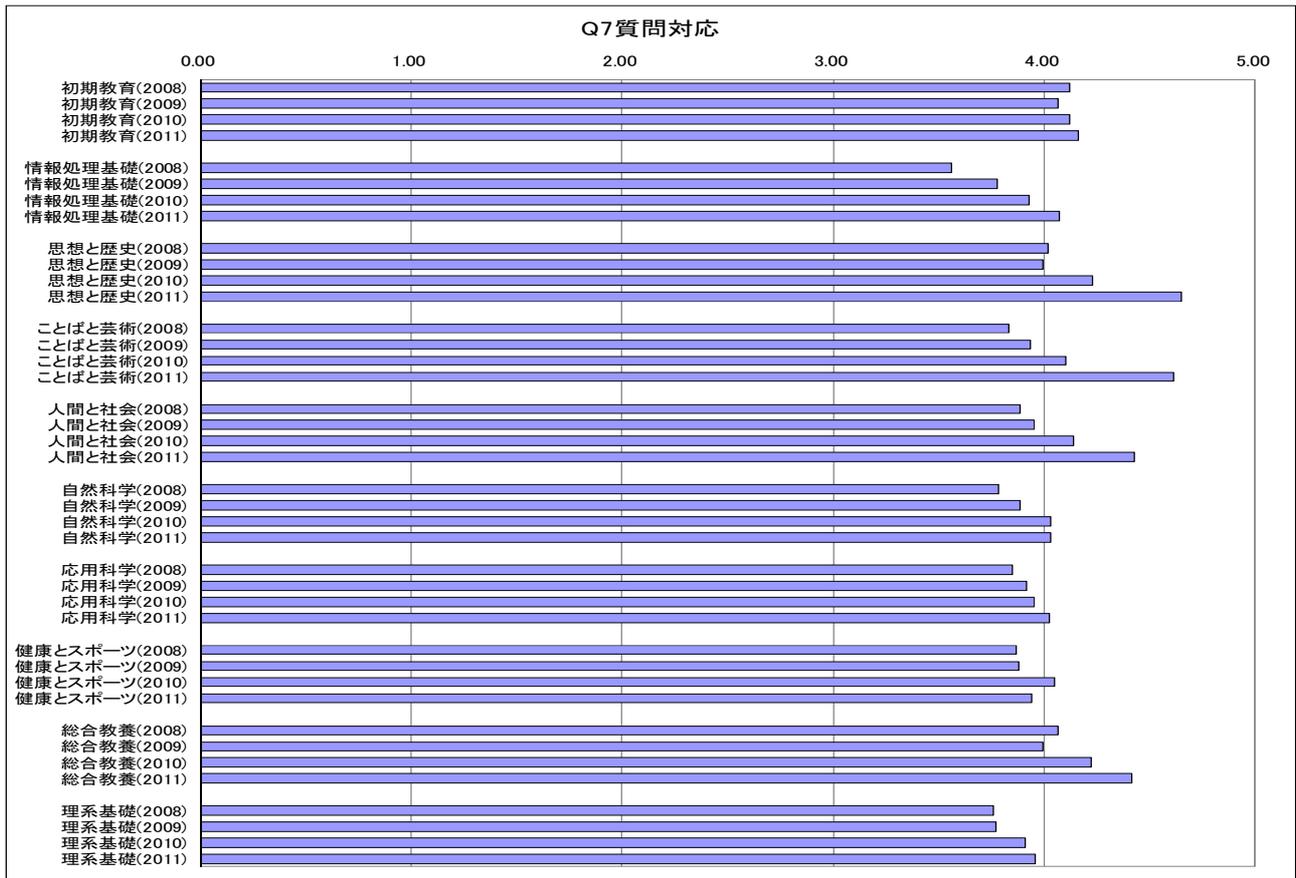
最後に Q10 のこの授業はあなたにとって満足のいくものだったかという質問については最も平均値が高かったのはことばと芸術(4.77)であり、次に高かったのは思想と歴史(4.44)であった。

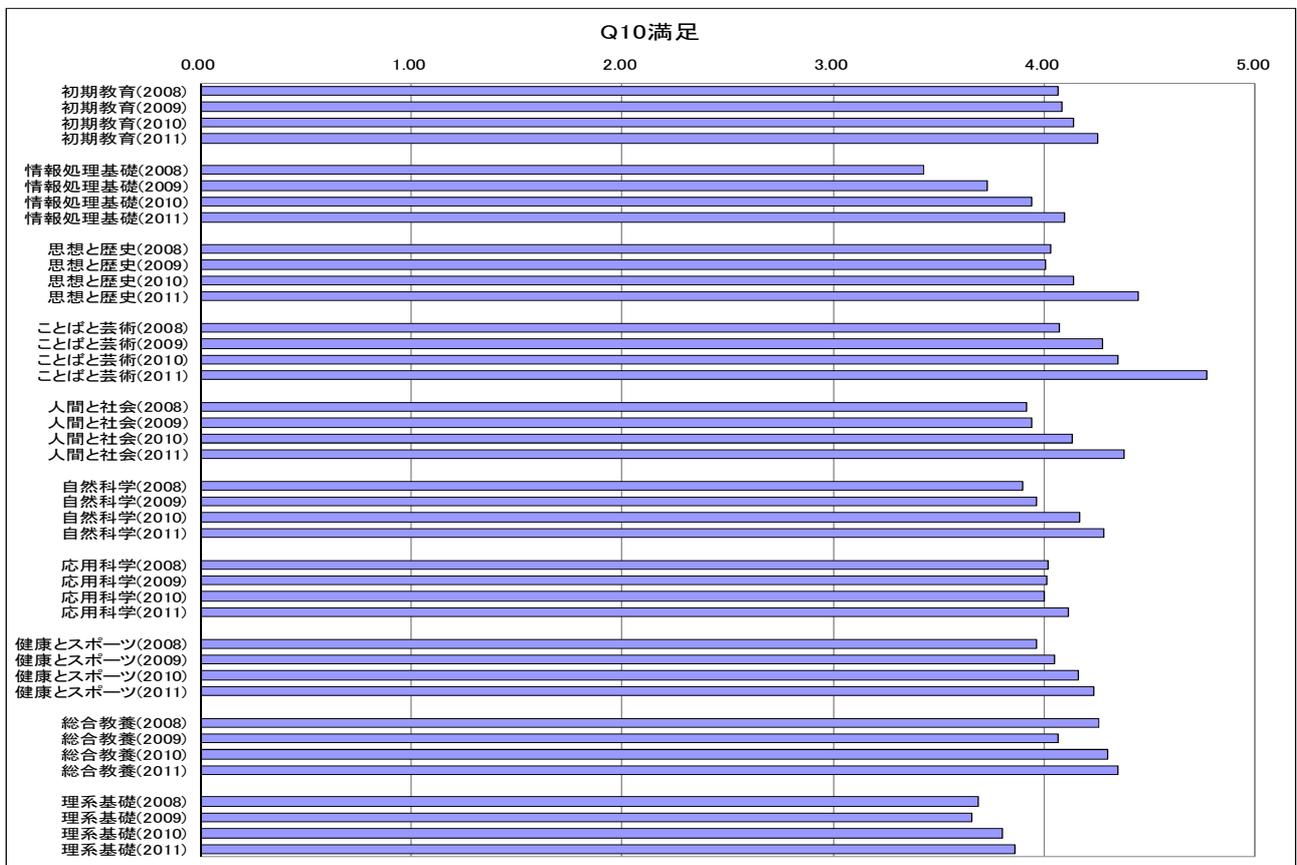
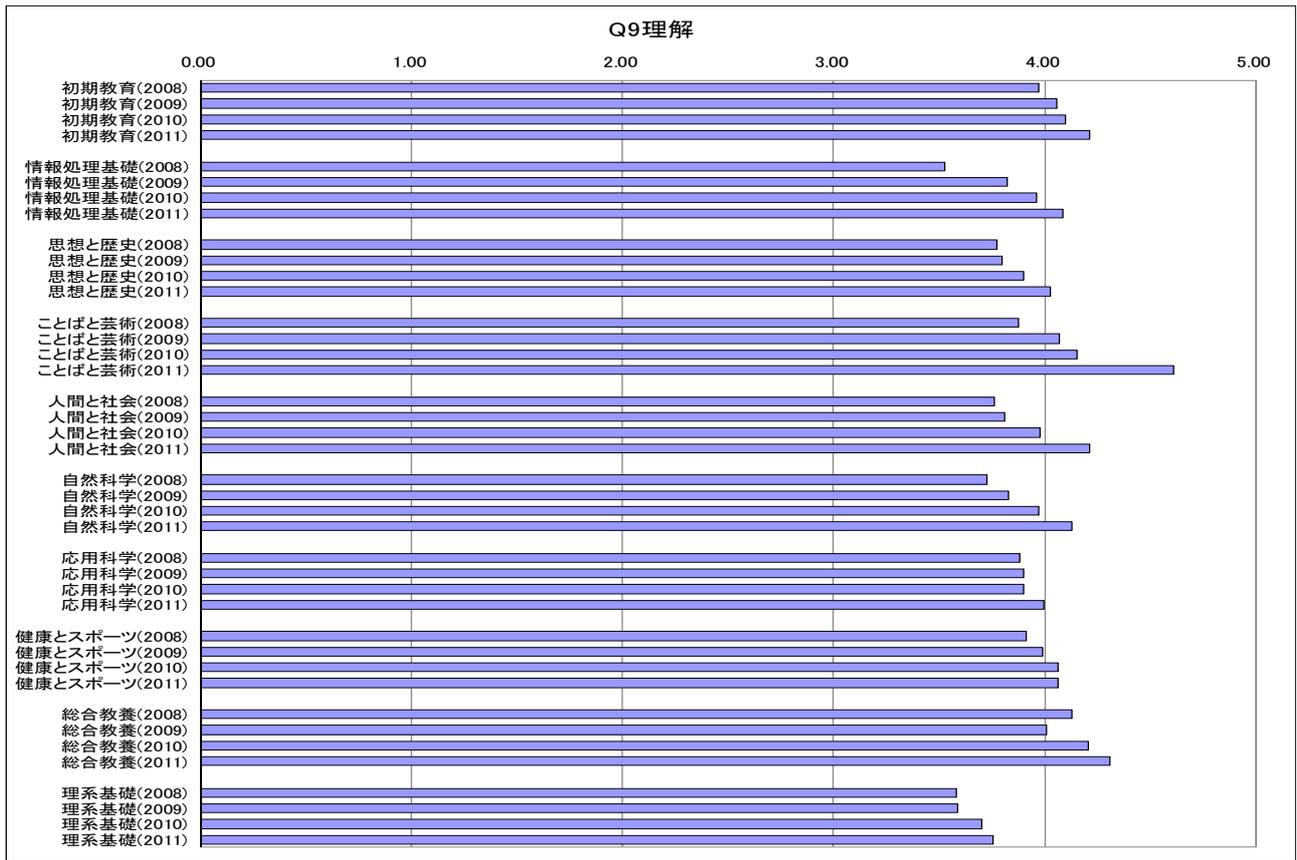
系列	分野	授業区分(質問紙)	Q1出席	Q2授業外学習	Q3話し方	Q4説明	Q5教材	Q6板書・コンピュータ	Q7質問対応	Q8学習目標達成	Q9理解	Q10満足
初期教育	初期教育(2008)	講義	4.81	2.79	4.14	4.08	4.09	3.97	4.12	4.09	3.97	4.07
初期教育	初期教育(2009)	講義	4.75	2.69	4.12	4.13	4.04	3.91	4.06	3.83	4.06	4.08
初期教育	初期教育(2010)	講義	4.80	2.62	4.21	4.17	4.16	4.21	4.12	3.97	4.10	4.14
初期教育	初期教育(2011)	講義	4.84	3.02	4.19	4.18	4.18	4.26	4.16	4.09	4.21	4.25
初期教育	情報処理基礎(2008)	講義	4.85	1.93	3.60	3.70	3.84	4.00	3.56	3.50	3.53	3.43
初期教育	情報処理基礎(2009)	講義	4.80	2.17	3.76	3.81	3.86	4.09	3.78	3.65	3.82	3.73
初期教育	情報処理基礎(2010)	講義	4.91	2.40	3.94	4.00	4.12	4.29	3.93	3.86	3.96	3.94
初期教育	情報処理基礎(2011)	講義	4.92	2.46	4.09	4.12	4.19	4.38	4.07	4.01	4.09	4.10
一般教養教育	思想と歴史(2008)	講義	4.67	2.04	4.10	4.13	3.98	3.89	4.02	3.64	3.77	4.03
一般教養教育	思想と歴史(2009)	講義	4.56	2.16	4.08	4.12	4.04	3.86	3.99	3.66	3.80	4.01
一般教養教育	思想と歴史(2010)	講義	4.67	2.07	4.21	4.24	4.19	4.17	4.23	3.84	3.90	4.14
一般教養教育	思想と歴史(2011)	講義	4.83	3.04	4.56	4.52	4.74	4.13	4.65	4.00	4.02	4.44
一般教養教育	ことばと芸術(2008)	講義	4.74	1.96	4.04	4.01	3.85	4.05	3.83	3.72	3.87	4.07
一般教養教育	ことばと芸術(2009)	講義	4.66	1.99	4.30	4.28	4.05	3.96	3.93	3.84	4.07	4.28
一般教養教育	ことばと芸術(2010)	講義	4.74	2.25	4.24	4.34	4.21	4.31	4.10	4.05	4.15	4.35
一般教養教育	ことばと芸術(2011)	講義	4.68	2.59	4.64	4.76	4.83	4.87	4.61	4.50	4.61	4.77
一般教養教育	人間と社会(2008)	講義	4.71	1.96	4.02	4.07	3.94	3.93	3.89	3.60	3.76	3.91
一般教養教育	人間と社会(2009)	講義	4.62	2.02	4.07	4.09	3.94	3.93	3.95	3.66	3.81	3.94
一般教養教育	人間と社会(2010)	講義	4.71	2.12	4.19	4.22	4.20	4.29	4.14	3.88	3.98	4.13
一般教養教育	人間と社会(2011)	講義	4.73	2.17	4.38	4.38	4.44	4.47	4.43	4.18	4.21	4.38
一般教養教育	自然科学(2008)	講義	4.73	2.36	3.93	3.93	3.92	4.13	3.79	3.63	3.73	3.90
一般教養教育	自然科学(2009)	講義	4.65	2.22	4.02	4.02	3.95	4.26	3.88	3.66	3.83	3.96
一般教養教育	自然科学(2010)	講義	4.75	2.19	4.20	4.21	4.21	4.43	4.03	3.92	3.97	4.17
一般教養教育	自然科学(2011)	講義	4.69	2.31	4.23	4.25	4.17	4.45	4.03	4.02	4.13	4.28
一般教養教育	応用科学(2008)	講義	4.71	2.23	3.97	4.01	4.03	4.18	3.85	3.71	3.88	4.02
一般教養教育	応用科学(2009)	講義	4.63	2.19	3.93	4.04	4.04	4.19	3.92	3.72	3.90	4.01
一般教養教育	応用科学(2010)	講義	4.71	2.30	3.97	4.05	4.16	4.28	3.95	3.85	3.90	4.00
一般教養教育	応用科学(2011)	講義	4.67	2.43	4.07	4.09	4.20	4.33	4.02	3.95	4.00	4.11
一般教養教育	健康とスポーツ(2008)	講義	4.81	2.06	4.10	4.10	3.96	4.05	3.87	3.67	3.91	3.96
一般教養教育	健康とスポーツ(2009)	講義	4.71	1.97	4.13	4.20	4.16	4.15	3.88	3.77	3.99	4.05
一般教養教育	健康とスポーツ(2010)	講義	4.79	2.23	4.19	4.26	4.32	4.29	4.05	3.94	4.06	4.16
一般教養教育	健康とスポーツ(2011)	講義	4.80	1.99	4.02	4.13	4.30	4.48	3.94	4.05	4.06	4.23
一般教養教育	総合教養(2008)	講義	4.68	1.90	4.27	4.13	4.27	4.35	4.07	3.85	4.13	4.26
一般教養教育	総合教養(2009)	講義	4.68	2.07	4.15	4.07	4.16	4.23	3.99	3.79	4.01	4.07
一般教養教育	総合教養(2010)	講義	4.72	2.10	4.34	4.26	4.34	4.44	4.22	4.09	4.21	4.30
一般教養教育	総合教養(2011)	講義	4.74	2.25	4.42	4.33	4.40	4.49	4.41	4.17	4.31	4.35
専門基礎教育	理系基礎(2008)	講義	4.76	2.70	3.69	3.78	3.77	3.73	3.76	3.58	3.58	3.69
専門基礎教育	理系基礎(2009)	講義	4.64	2.73	3.67	3.78	3.72	3.67	3.77	3.54	3.59	3.66
専門基礎教育	理系基礎(2010)	講義	4.73	2.77	3.80	3.89	3.90	3.91	3.91	3.72	3.70	3.80
専門基礎教育	理系基礎(2011)	講義	4.75	2.87	3.84	3.93	3.95	3.95	3.96	3.81	3.76	3.86









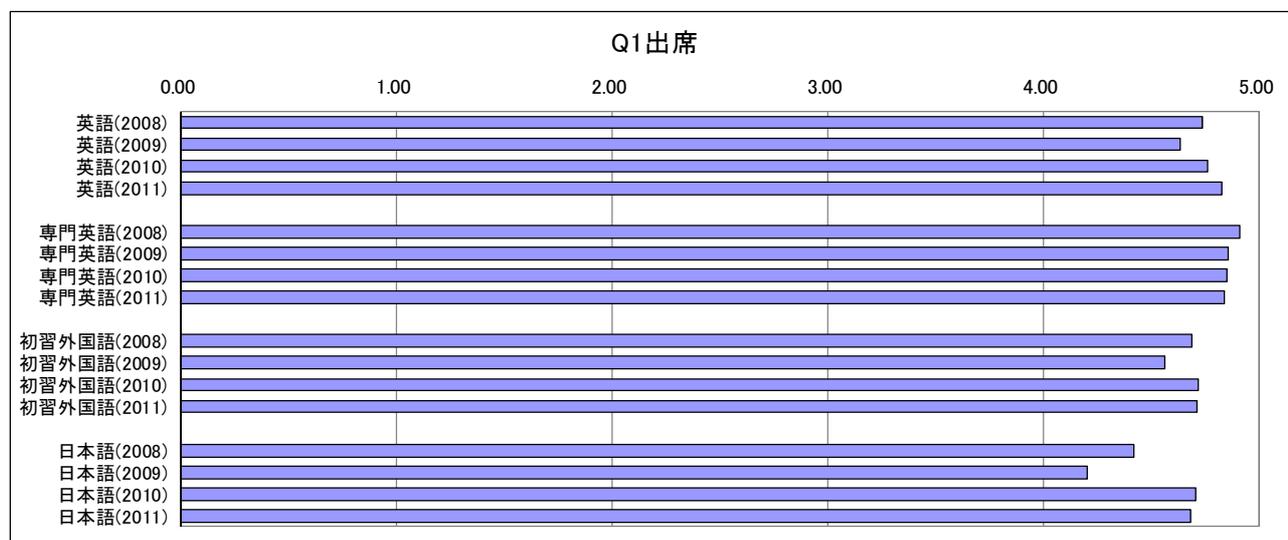


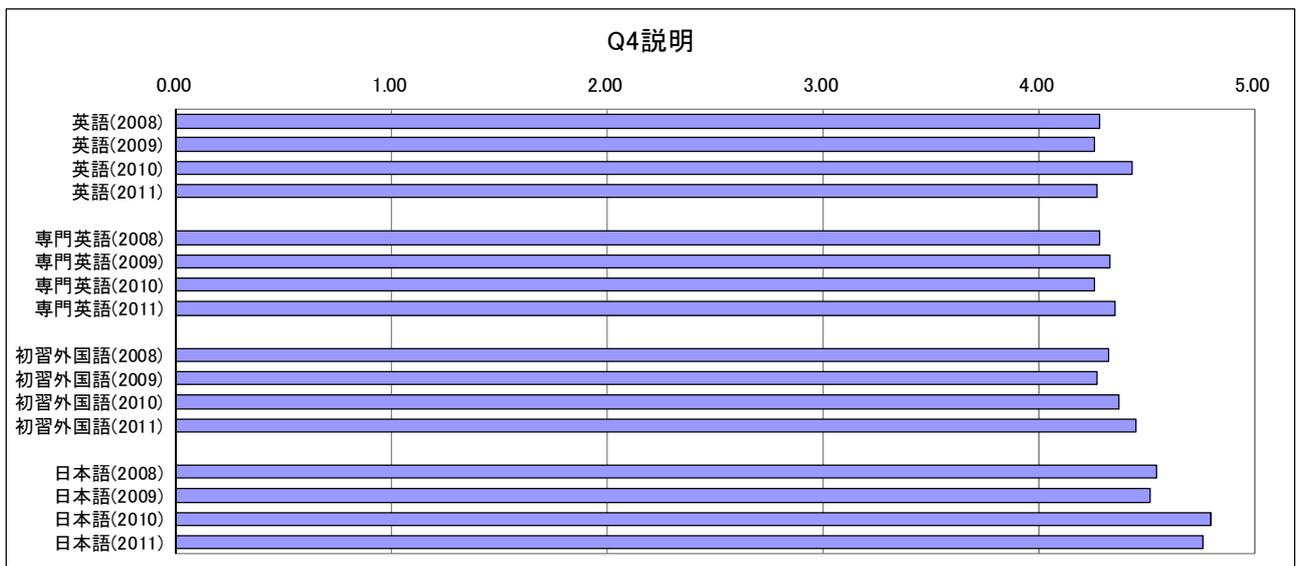
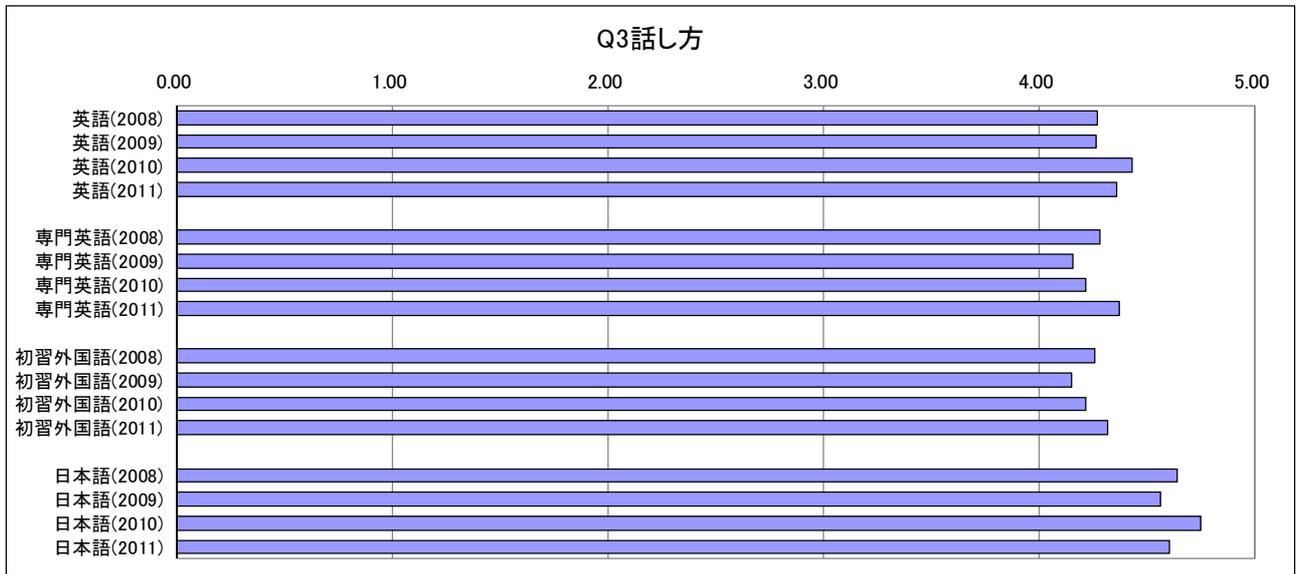
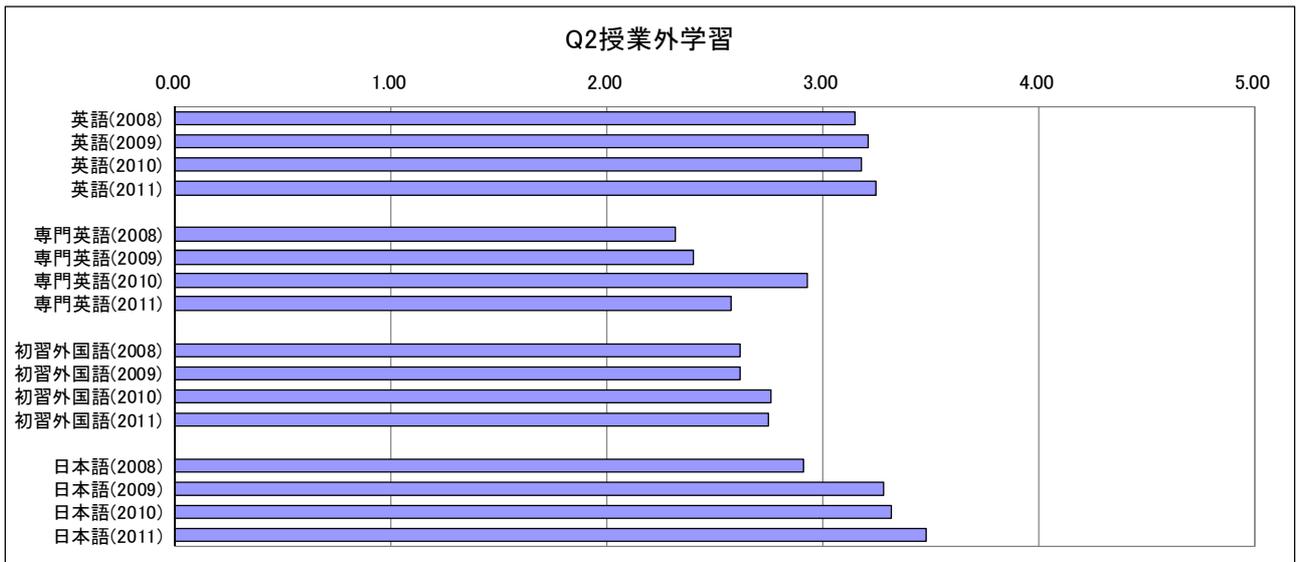
## (2) 外国語教育科目の結果について

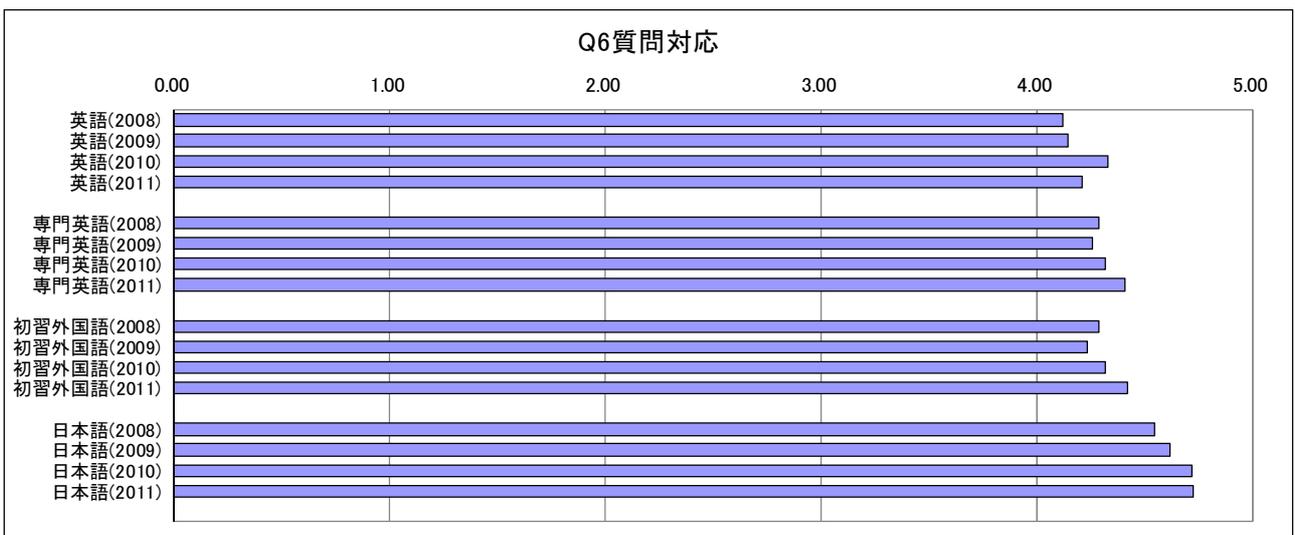
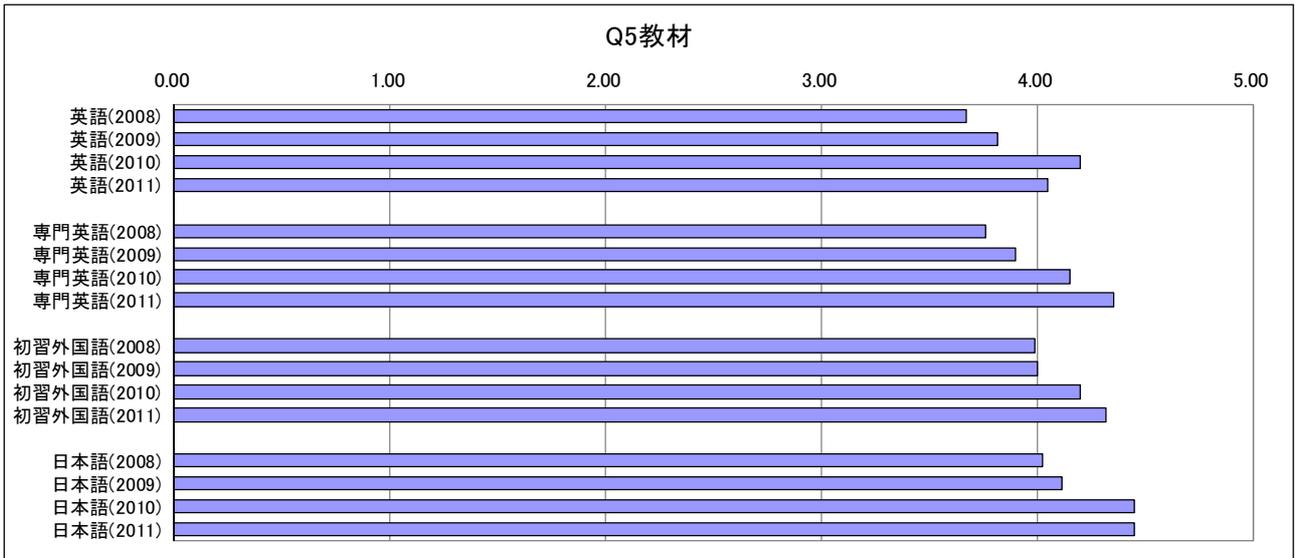
以下は「語学」の質問紙を用いた外国語科目の平均値である。「英語」「専門英語」(\*ここでは医療系英語科目を便宜的にこう呼称する)「初習外国語」「日本語」の4つの分野のそれぞれに含まれる授業科目の評価の平均値を表している。

Q1の出席はすべて4.5以上を維持しており良好である。Q2の授業外学習は日本語分野が最も高く、次いで英語分野が高い。Q3の話し方とQ4の説明は昨年度と比較して大きな変動はないが、日本語分野は平均値が特に高い。Q5の教材はすべての科目で4.0以上であるが、英語がやや低下した。Q6の質問対応はどの分野も非常に高い。Q7は教員が授業内容の説明以外に学生に演習や練習の時間を十分に与えましたか?という質問である。これもすべて4.0以上を維持しており良好である。Q8の学習目標達成は昨年度に続き、すべての分野で4.0以上であった。Q9の理解、Q10の満足もすべて4.0以上を維持しており良好である。

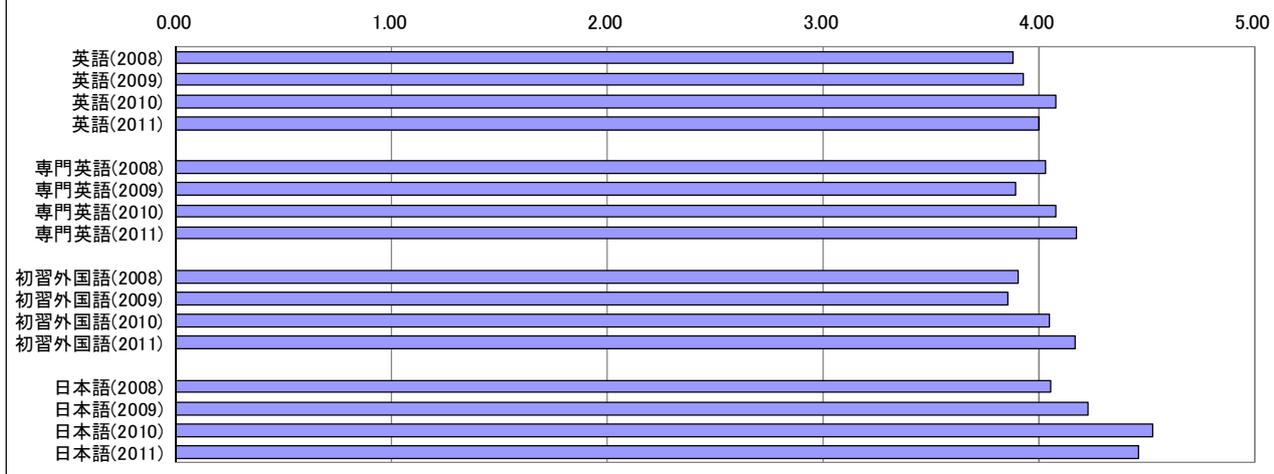
系列	分野	授業区分(質問紙)	Q1出席	Q2授業外学習	Q3話し方	Q4説明	Q5教材	Q6質問対応	Q7演習時間	Q8学習目標達成	Q9理解	Q10満足
外国語教育	英語(2008)	語学	4.74	3.15	4.27	4.28	3.67	4.12	4.26	3.88	4.07	4.15
外国語教育	英語(2009)	語学	4.63	3.21	4.26	4.26	3.81	4.14	4.24	3.93	4.12	4.17
外国語教育	英語(2010)	語学	4.76	3.18	4.43	4.43	4.20	4.33	4.39	4.08	4.21	4.36
外国語教育	英語(2011)	語学	4.83	3.25	4.36	4.27	4.05	4.21	4.36	4.00	4.18	4.22
外国語教育	専門英語(2008)	語学	4.91	2.32	4.28	4.28	3.76	4.29	4.37	4.03	4.25	4.32
外国語教育	専門英語(2009)	語学	4.86	2.40	4.16	4.33	3.90	4.26	4.45	3.89	4.22	4.27
外国語教育	専門英語(2010)	語学	4.85	2.93	4.22	4.26	4.15	4.32	4.31	4.08	4.27	4.22
外国語教育	専門英語(2011)	語学	4.84	2.57	4.37	4.35	4.35	4.41	4.65	4.17	4.30	4.41
外国語教育	初習外国語(2008)	語学	4.69	2.62	4.26	4.32	3.99	4.29	4.33	3.91	4.13	4.33
外国語教育	初習外国語(2009)	語学	4.57	2.62	4.15	4.27	4.00	4.23	4.29	3.86	4.07	4.25
外国語教育	初習外国語(2010)	語学	4.72	2.76	4.22	4.37	4.20	4.32	4.37	4.05	4.15	4.33
外国語教育	初習外国語(2011)	語学	4.71	2.75	4.32	4.45	4.32	4.42	4.45	4.17	4.25	4.44
外国語教育	日本語(2008)	語学	4.42	2.91	4.64	4.54	4.03	4.54	4.50	4.06	4.60	4.35
外国語教育	日本語(2009)	語学	4.21	3.28	4.56	4.51	4.11	4.62	4.52	4.23	4.38	4.43
外国語教育	日本語(2010)	語学	4.71	3.32	4.75	4.80	4.45	4.72	4.62	4.53	4.73	4.69
外国語教育	日本語(2011)	語学	4.68	3.48	4.60	4.76	4.45	4.72	4.61	4.46	4.66	4.68



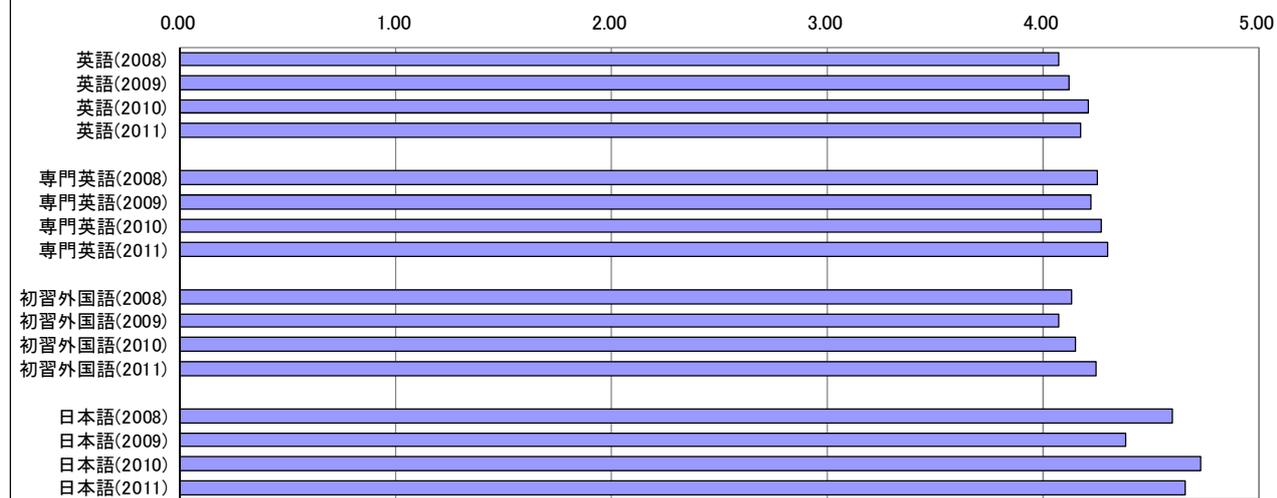




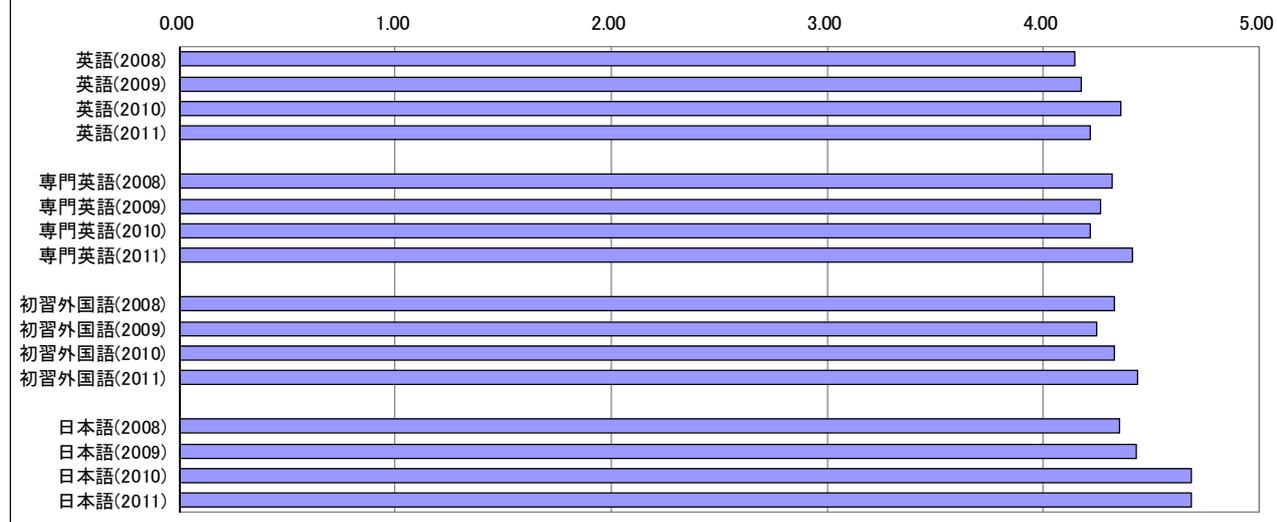
### Q8学習目標達成



### Q9理解



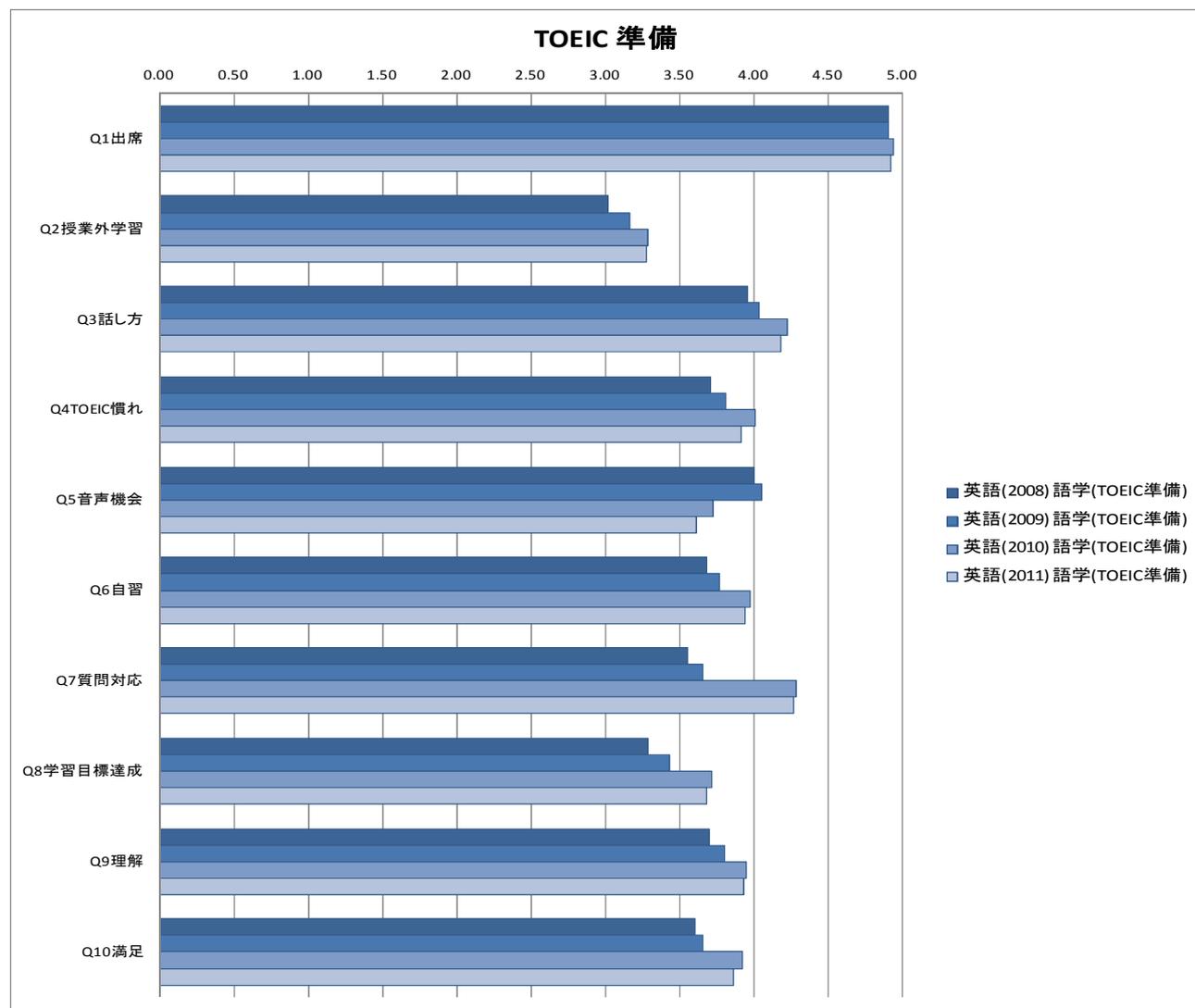
### Q10満足



### (3) 外国語科目 (TOEIC 準備) の結果について

以下は外国語科目 (TOEIC 準備) の平均値を示したものである。TOEIC 準備は1年生全員が受講する必修科目であり、山口大学が学生の英語力を高めるために全国に先駆けて導入したことから、この科目に限って専用の質問紙を準備して評価を行っているものである。昨年度と比較すると、全体的にやや低下傾向にあるが、概ね現状維持の状況にある。

系列	分野	授業区分(質問紙)	Q1出席	Q2授業外学習	Q3話し方	Q4TOEIC慣れ	Q5音声機会	Q6自習	Q7質問対応	Q8学習目標達成	Q9理解	Q10満足
外国語教育	英語(2008)	語学(TOEIC準備)	4.90	3.02	3.96	3.70	3.99	3.68	3.55	3.28	3.69	3.60
外国語教育	英語(2009)	語学(TOEIC準備)	4.90	3.16	4.03	3.81	4.05	3.77	3.65	3.43	3.80	3.65
外国語教育	英語(2010)	語学(TOEIC準備)	4.94	3.28	4.22	4.01	3.72	3.97	4.28	3.71	3.95	3.92
外国語教育	英語(2011)	語学(TOEIC準備)	4.92	3.28	4.18	3.92	3.61	3.94	4.27	3.68	3.93	3.86

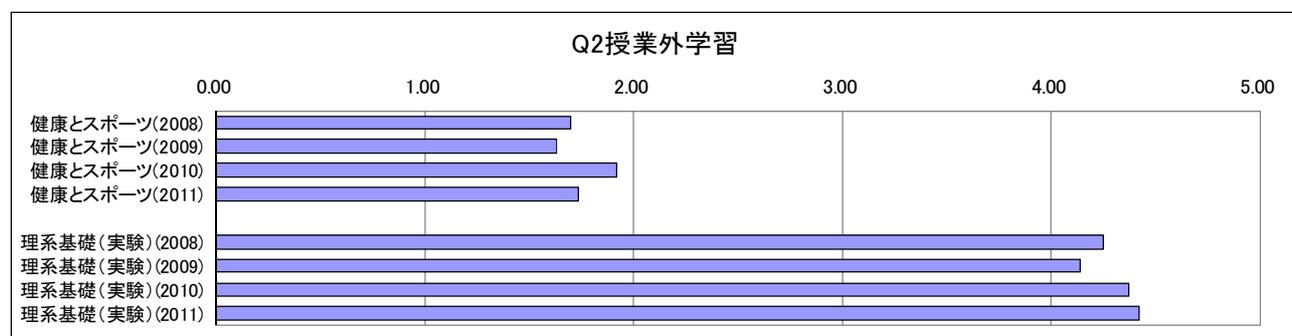
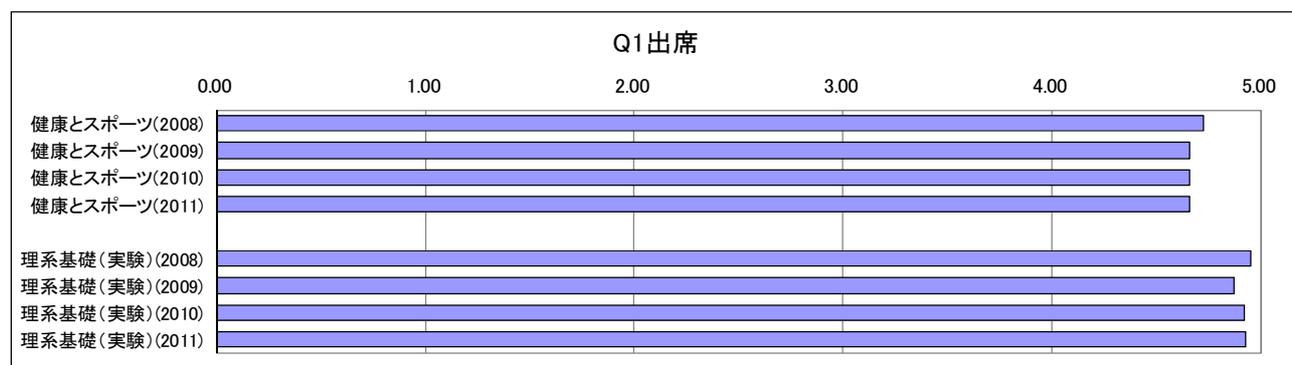


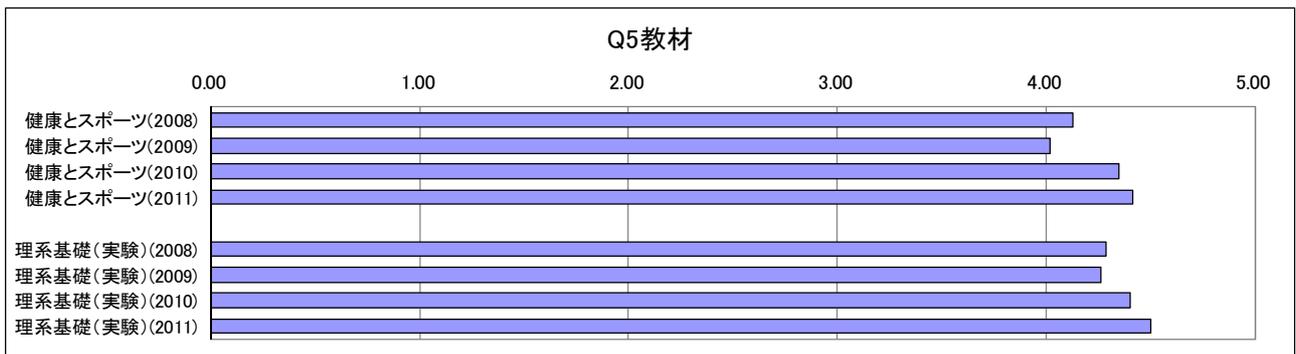
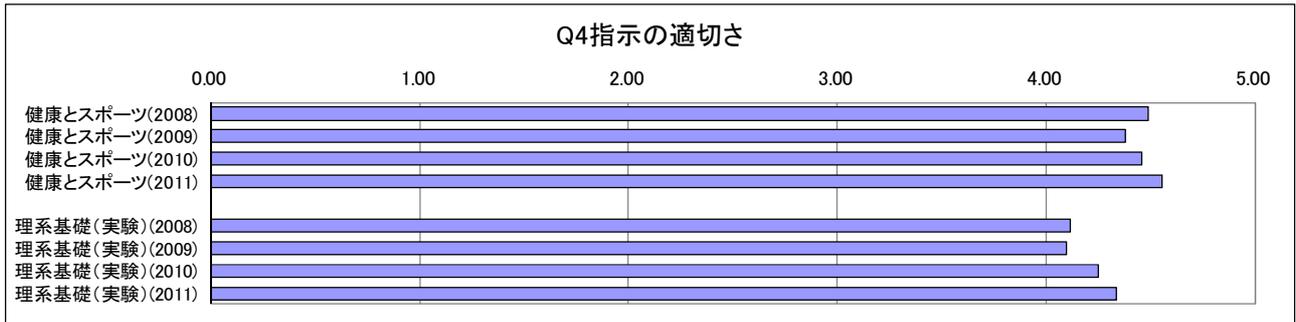
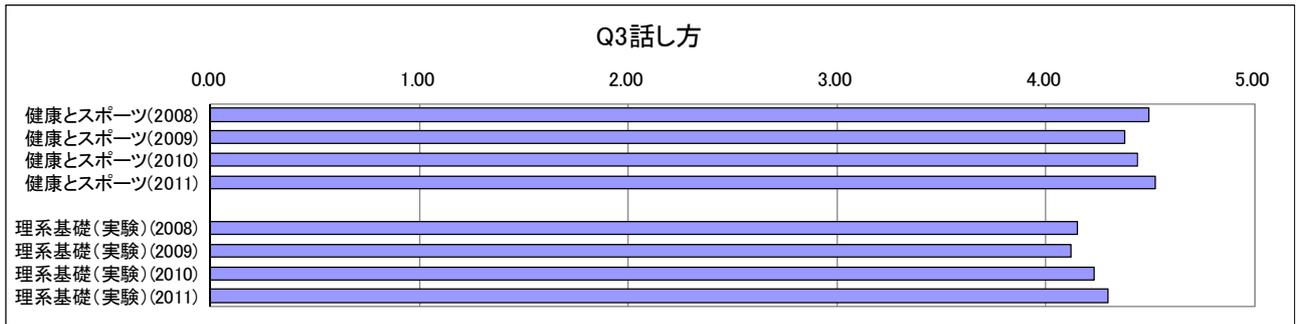
## (4) 演習・実験・実習系科目の結果について

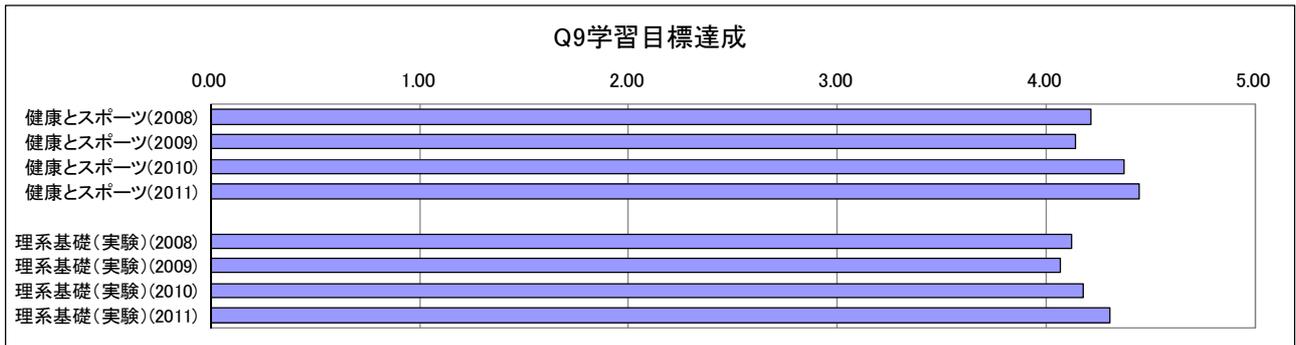
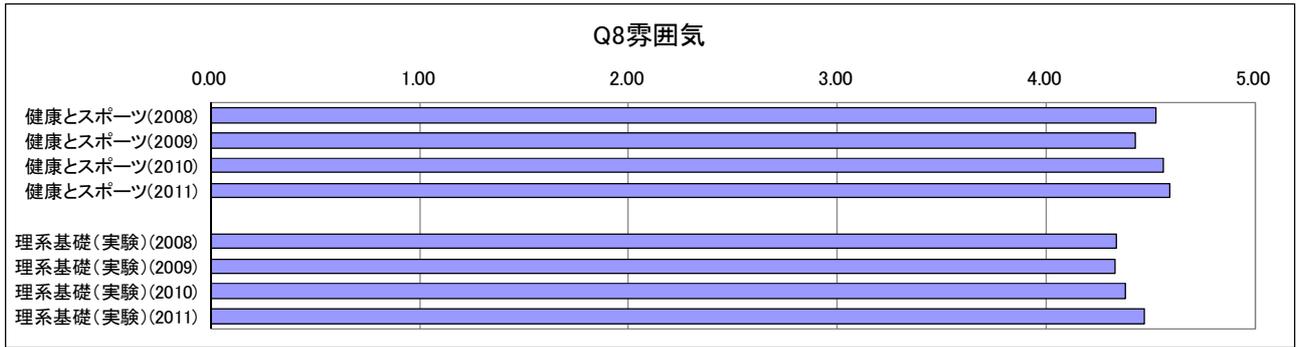
以下は「演習・実験・実習」の質問紙を用いた授業の平均値である。共通教育のうちこのタイプに当てはまるものは「健康とスポーツ」分野のスポーツ運動実習の授業、および「理系基礎(実験)」分野の実験科目である。Q2の授業外学習については健康とスポーツ分野は1.7と低く、反対に理系基礎(実験)は4.42と非常に高く、分野間で大きな差がみられる。健康とスポーツ分野は授業の性格上授業外学習を課すことが難しい面もあると考えられるが、何らかの取り組みは必要であると思われる。一方、理系基礎(実験)は多くの学生が授業1回につき2時間以上の授業外学習を行っていることが分かり、単位の実質化という点からみて望ましい状況にあるといえる。

Q3以降も4.0をすべて超えており大変良好な状況である。

系列	分野	授業区分(質問紙)	Q1出席	Q2授業外学習	Q3話し方	Q4指示の適切さ	Q5教材	Q6質問対応	Q7手本・示範	Q8雰囲気	Q9学習目標達成	Q10理解	Q11満足
一般教養教育	健康とスポーツ(2008)	演習・実験実習	4.73	1.70	4.50	4.49	4.13	4.33	4.47	4.52	4.21	4.52	4.60
一般教養教育	健康とスポーツ(2009)	演習・実験実習	4.66	1.63	4.38	4.38	4.02	4.24	4.39	4.43	4.14	4.42	3.77
一般教養教育	健康とスポーツ(2010)	演習・実験実習	4.66	1.92	4.44	4.46	4.35	4.32	4.49	4.56	4.37	4.54	4.37
一般教養教育	健康とスポーツ(2011)	演習・実験実習	4.66	1.73	4.53	4.56	4.41	4.40	4.56	4.59	4.44	4.60	4.63
専門基礎教育	理系基礎(実験)(2008)	演習・実験実習	4.95	4.25	4.15	4.12	4.29	4.30	4.22	4.33	4.12	4.16	4.24
専門基礎教育	理系基礎(実験)(2009)	演習・実験実習	4.87	4.14	4.12	4.10	4.26	4.25	4.22	4.33	4.06	4.10	3.66
専門基礎教育	理系基礎(実験)(2010)	演習・実験実習	4.92	4.37	4.23	4.25	4.40	4.37	4.36	4.38	4.18	4.18	4.30
専門基礎教育	理系基礎(実験)(2011)	演習・実験実習	4.93	4.42	4.30	4.34	4.50	4.42	4.47	4.47	4.31	4.31	4.40







附表 <各分野に含まれる授業科目および開設科目>

系列	分野	授業科目	開設科目名(H23)		
初期教育	初期教育(GP1)	フレッシュマンセミナー	フレッシュマンセミナー		
		基礎セミナー1	基礎セミナー1 基礎セミナー(経)		
		基礎セミナー2	医学入門Ⅰ 基礎セミナー2		
	情報処理基礎(GP2)	情報リテラシー演習	情報リテラシー演習		
		情報セキュリティ・モラル	情報セキュリティ・モラル		
外国語教育	英語(GP3)	TOEIC準備	TOEIC準備		
		Basic English	Basic English		
		English Speaking	English Speaking		
		TOEIC認定	TOEIC認定		
		TOEIC認定400	TOEIC認定400		
		英語リーディング	英語リーディング		
		英語ライティング	英語ライティング		
		英語特別演習	英語特別演習 英語特別演習1a 英語特別演習1b		
		Comprehensive English	Comprehensive English Fundamental Comprehensive English Pre-Intermediate		
		TOEIC認定500(TOEFL450)	TOEIC認定500(TOEFL450)		
		TOEIC認定600(TOEFL500)	TOEIC認定600(TOEFL500)		
		海外英語研修	海外英語研修		
		専門英語(GP3)	医学英語2	医学英語2	
			医療英語	医療英語	
			基礎医療英会話	基礎医療英会話	
	医療英会話		医療英会話		
	初習外国語(GP3)	初習外国語初歩		ドイツ語初歩 フランス語初歩 中国語初歩 ハングル初歩	
			初習外国語入門1	ドイツ語入門1 フランス語入門1 中国語入門1 ハングル入門1	
				初習外国語入門2	ドイツ語入門2 フランス語入門2 中国語入門2 ハングル入門2
					初習外国語初級1A
		初習外国語初級1B	ドイツ語初級1B フランス語初級1B 中国語初級1B ハングル初級1B		
			初習外国語初級2A	ドイツ語初級2A フランス語初級2A 中国語初級2A ハングル初級2A	
				初習外国語初級2B	ドイツ語初級2B フランス語初級2B 中国語初級2B ハングル初級2B
		初習外国語会話1			ドイツ語会話1 フランス語会話1 中国語会話1 ハングル会話1
			初習外国語会話2		ドイツ語会話2 フランス語会話2 中国語会話2 ハングル会話2
				海外初習外国語研修	海外中国語研修 海外ハングル研修
		初習外国語認定		ロシア語 スペイン語	
		日本語(GP3)	日本語 ※外国人留学生対象科目		日本語ⅠA 日本語ⅠB 日本語ⅡA 日本語ⅡB 日本語ⅢA 日本語ⅢB 日本語ⅣA 日本語ⅣB 日本語ⅤA 日本語ⅤB

<各分野に含まれる授業科目および開設科目(続き)>

一般 教養 教育	思想と歴史(GP4)	思想と倫理	哲学 倫理学 生命倫理学 宗教学 論理学 美学		
		歴史	日本史 東洋史 西洋史		
		主題(思想と歴史)	漱石の思想Ⅰ 漱石の思想Ⅱ 日本の思想		
		ことばと芸術(GP4)	文学と言語	日本文学 漢文 外国文学(英米文学) 言語学	
			芸術	芸術史(美術史) 芸術史(日本近代美術史) 芸術概論(音楽と歴史) 芸術概論(音楽) 芸術実践(美術) 芸術実践(音楽) 芸術実践(工芸)	
			主題(ことばと芸術)	芸術概論(イメージ論) 美術鑑賞と作品記述	
	人間と社会(GP4)		人間と社会	法学 政治学 経済学 社会学 地理学 民俗学 文化人類学 産業倫理 社会科学概論 社会福祉学	
			人間と教育	教育学	
		心理学	心理学(看護のための心理学) 心理学(適応と不適応) 心理学(臨床心理学) 心理学(自分自身を再発見する) 心理学(心のとらえ方) 心理学(行動分析の基礎と応用) 心理学(心と社会の心理学) 心理学(思考・コミュニケーション) 心理学(子どもの発達と心の世界) 心理学(学習・記憶・認知) 心理学(心理・教育測定学) 心理学(概説) 発達心理学 医療心理学		
		日本国憲法	日本国憲法		
		主題(人間と社会)		マーケティング入門 観光と交通 国際協力の現場 個人の財務設計 経済学の面白さ 地域政策評価と統計分析 意思決定と業績評価 初学者のための経済学入門 アジアの交通と文化 比較教育概論 大学論 労働と法 企業と法 比較文化心理学 国際関係・コミュニケーション論 Japanese Economy and Culture Close-up Japan--Various Aspects of Culture and Society.	
			自然科学の考え方	数学の考え方 物理学の考え方 地球科学の考え方	
			自然科学(GP5)	自然科学	数学概論 現代物理学総説 現代化学総説 現代生物学総説 現代地球科学総説
				主題(自然科学)	宇宙と人間 医学のための物理学入門 科学の中の動物 環境とバイオテクノロジー 人間とバイオテクノロジー 歴史の中の動物 火山と地震 地球と人間 生命を科学する 生命現象のいろいろ

<各分野に含まれる授業科目および開設科目(続き)>

一般 教養 教育	応用科学 (GP5)	統計学	社会科学のためのやさしい統計学 理工学のための統計学 医学のための統計学	
		環境科学	環境学 科学史	
		応用科学	技術概論 生命科学概論 生活科学 デザイン工学入門 行動科学 医学史	
		社会と医療	社会と医療(いのちと発達) 社会と医療(心とその座) 社会と医療(日本の医療) 社会と医療(性を考える)	
		主題(応用科学)	命と場 香りと人間 環境と植物 環境と人間 環境と農業 環境と気象学 現代の科学技術 暮らしの中の動物 交通と社会 知的財産の開発と権利 情報技術と社会 人間と植物	
	健康とスポーツ (GP6)	運動健康科学	運動健康科学	
		スポーツ運動実習	スポーツ運動実習(エアロビクスa)	スポーツ運動実習(エアロビクスa)
			スポーツ運動実習(エアロビクスb)	スポーツ運動実習(エアロビクスb)
			スポーツ運動実習(エアロビクスc)	スポーツ運動実習(エアロビクスc)
			スポーツ運動実習(エアロビクスd)	スポーツ運動実習(エアロビクスd)
スポーツ運動実習(エアロビクスe)			スポーツ運動実習(エアロビクスe)	
スポーツ運動実習(エアロビクスf)			スポーツ運動実習(エアロビクスf)	
スポーツ運動実習(シュートテニスa)			スポーツ運動実習(シュートテニスa)	
スポーツ運動実習(シュートテニスb)			スポーツ運動実習(シュートテニスb)	
スポーツ運動実習(ターゲットバードゴルフa)			スポーツ運動実習(ターゲットバードゴルフa)	
スポーツ運動実習(ターゲットバードゴルフb)	スポーツ運動実習(ターゲットバードゴルフb)			
スポーツ運動実習(バスケットボールa)	スポーツ運動実習(バスケットボールa)			
スポーツ運動実習(バドミントンa)	スポーツ運動実習(バドミントンa)			
スポーツ運動実習(バドミントンb)	スポーツ運動実習(バドミントンb)			
スポーツ運動実習(バドミントンc)	スポーツ運動実習(バドミントンc)			
スポーツ運動実習(バドミントンd)	スポーツ運動実習(バドミントンd)			
スポーツ運動実習(バドミントンe)	スポーツ運動実習(バドミントンe)			
スポーツ運動実習(バレーボールa)	スポーツ運動実習(バレーボールa)			
スポーツ運動実習(バレーボールb)	スポーツ運動実習(バレーボールb)			
スポーツ運動実習(バレーボールc)	スポーツ運動実習(バレーボールc)			
スポーツ運動実習(バレーボールd)	スポーツ運動実習(バレーボールd)			
スポーツ運動実習(ハンドボールa)	スポーツ運動実習(ハンドボールa)			
スポーツ運動実習(ハンドボールb)	スポーツ運動実習(ハンドボールb)			
スポーツ運動実習(ハンドボールc)	スポーツ運動実習(ハンドボールc)			
スポーツ運動実習(フィットネストレーニングa)	スポーツ運動実習(フィットネストレーニングa)			
スポーツ運動実習(フライングディスクa)	スポーツ運動実習(フライングディスクa)			
スポーツ運動実習(フライングディスクb)	スポーツ運動実習(フライングディスクb)			
スポーツ運動実習(空手a)	スポーツ運動実習(空手a)			
スポーツ運動実習(硬式テニスa)	スポーツ運動実習(硬式テニスa)			
スポーツ運動実習(硬式テニスb)	スポーツ運動実習(硬式テニスb)			
スポーツ運動実習(硬式テニスc)	スポーツ運動実習(硬式テニスc)			
スポーツ運動実習(硬式テニスd)	スポーツ運動実習(硬式テニスd)			
スポーツ運動実習(硬式テニスe)	スポーツ運動実習(硬式テニスe)			
主題(健康とスポーツ)	スポーツの医学 ライフスタイルと健康 加齢と健康 食・環境と健康			
総合教養 (GP7)	総合教養A	アクティブ・ラーニング	アクティブ・ラーニング	
		キャリアデザイン	キャリアデザイン	
		都市と農村	都市と農村	
		ベンチャービジネス論	ベンチャービジネス論	
		ボランティアと自主活動	ボランティアと自主活動	
	総合教養B	メディア情報処理	メディア情報処理	
		環境と地域共生	環境と地域共生	
		資本主義と大衆観光	資本主義と大衆観光	
		国際交流論	国際交流論	
		自然科学と現代社会A	自然科学と現代社会A	
総合教養 (GP7)	総合教養A	時間学A	時間学A	
		知の広場一人と学問	知の広場一人と学問	
		留学生のための日本企業文化理解	留学生のための日本企業文化理解	
		山口県の地域政策	山口県の地域政策	
		教職協働実践I	教職協働実践I	
	総合教養B	欧米文学の魅力	欧米文学の魅力	
		キャリアと就職	キャリアと就職	
		キャリア形成とコミュニケーション	キャリア形成とコミュニケーション	
		パソコンSOS1	パソコンSOS1	
		パソコンSOS2	パソコンSOS2	
やまぐち学	やまぐち学			
キャリア形成論とニート・フリーター問題	キャリア形成論とニート・フリーター問題			
自然科学と現代社会B	自然科学と現代社会B			
時間学B	時間学B			
生命と倫理	生命と倫理			
知的財産論	知的財産論			
大学院へのいざない	大学院へのいざない			
教職協働実践II	教職協働実践II			
教職協働実践III	教職協働実践III			
医療環境論1	医療環境論1			
医療環境論2	医療環境論2			
専門 基礎 教育	理系基礎 (GP5)	数学I	数学I	
		数学II	数学II	
		物理学I	物理学I	
		物理学II	物理学II	
		化学I	化学I	
	理系基礎(実験) (GP5)	化学II	化学II	
		生物学I	生物学I	
		生物学II	生物学II	
		地球科学I	地球科学I	
		地球科学II	地球科学II	
物理学実験A	物理学実験A			
物理学実験B	物理学実験B			
化学実験A	化学実験A			
化学実験B	化学実験B			
生物学実験	生物学実験			
地球科学実験	地球科学実験			

## <参考> 共通教育 学生授業評価 質問紙（４種類）

### 共通教育 学生授業評価（講義）

このアンケートは、よりよい授業を作るために教員が参考にする統計資料を作成することを目的に行います。統計資料の作成以外の目的でこのアンケートを利用することはありません。また、成績評価とは無関係です。個人情報と同等の安全管理措置を講じますので、安心して率直な回答を行って下さい。回答は、あてはまる数字を選んで回答用紙の指示された欄にマークして下さい。

【授業科目名】 授業科目名を記入して下さい。

【担当教員名】 担当教員名を記入して下さい。

【学 年】 1. 1年生 2. 2年生 3. 3年生 4. 4年生 5. 5年生 6. 6年生

【学 生 区 分】 1. 一般学生 2. 留学生

【学 部】 1. 人文学部 2. 教育学部 3. 経済学部 4. 理学部 5. 医学部 6. 工学部  
7. 農学部

#### 【質 問 Ⅰ】

1	あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？（括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です） 1. 90%以上（14回以上） 2. 80～90%（12～13回） 3. 60～80%（9～11回） 4. 40～60%（6～8回） 5. 40%未満（6回未満）
2	あなたはこの授業において、時間外学習（予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強）をどれくらい行いましたか？ 総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。 1. 3時間程度または以上 2. 2時間程度 3. 1時間程度 4. 30分～50分程度 5. 30分未満
3	教員の話し方が明瞭で、聞き取りやすかったと思いますか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
4	専門用語や理論的な話は、適切に説明されましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
5	テキストやプリントなどの教材が、効果的に使われましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない
6	板書やOHP、ビデオ、コンピュータなどが効果的に使われましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない
7	学生の疑問や質問への対応は、充分でしたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
8	あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう

	思わない 6. 答えられない
9	<b>あなたは、この授業の内容を理解できましたか？</b> 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
10	<b>この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？</b> 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
11~30	<この問い以下は、担当教員の設問に従って回答してください>

**【質問Ⅱ】 この授業に関する感想や要望等を率直に記述してください**

この質問の回答については別に記入用紙を配布しますので、本紙には記入しないでください

## 共通教育 学生授業評価（語学）

このアンケートは、よりよい授業を作るために教員が参考にする統計資料を作成することを目的に行います。統計資料の作成以外の目的でこのアンケートを利用することはありません。また、成績評価とは無関係です。個人情報と同等の安全管理措置を講じますので、安心して率直な回答を行って下さい。回答は、あてはまる数字を選んで回答用紙の指示された欄にマークして下さい。

**【授業科目名】** 授業科目名を記入して下さい。

**【担当教員名】** 担当教員名を記入して下さい。

**【学 年】** 1. 1年生 2. 2年生 3. 3年生 4. 4年生 5. 5年生 6. 6年生

**【学生 区分】** 1. 一般学生 2. 留学生

**【学 部】** 1. 人文学部 2. 教育学部 3. 経済学部 4. 理学部 5. 医学部 6. 工学部  
7. 農学部

**【質問Ⅰ】**

1	<b>あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？</b> （括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です） 1. 90%以上（14回以上） 2. 80~90%（12~13回） 3. 60~80%（9~11回） 4. 40~60%（6~8回） 5. 40%未満（6回未満）
2	<b>あなたはこの授業において、時間外学習（予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強）をどれくらい行いましたか？</b> 総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。 1. 3時間程度または以上 2. 2時間程度 3. 1時間程度 4. 30分~50分程度 5. 30分未満
3	<b>教員の話し方が明瞭で、聞き取りやすかったと思いますか？</b> 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
4	<b>テキストやプリントなどの教材が、効果的に使われましたか？</b> 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない

5	<p>板書やOHP、ビデオ、コンピュータなどが、効果的に使われましたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない</p>
6	<p>学生の疑問や質問への対応は、充分でしたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
7	<p>教員は、授業内容の説明以外に、あなたたちに演習や練習の時間を十分に与えましたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
8	<p>あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. 答えられない</p>
9	<p>あなたは、この授業の内容を理解できましたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
10	<p>この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
11~30	<p>&lt;この問い以下は、担当教員の設問に従って回答してください&gt;</p>

**【質問Ⅱ】 この授業に関する感想や要望等を率直に記述してください**

この質問の回答については別に記入用紙を配布しますので、本紙には記入しないでください

## 共通教育 学生授業評価 (TOEIC 準備)

このアンケートは、よりよい授業を作るために教員が参考にする統計資料を作成することを目的に行います。統計資料の作成以外の目的でこのアンケートを利用することはありません。また、成績評価とは無関係です。個人情報と同等の安全管理措置を講じますので、安心して率直な回答を行って下さい。回答は、あてはまる数字を選んで回答用紙の指示された欄にマークして下さい。

**【授業科目名】** 授業科目名を記入して下さい。

**【担当教員名】** 担当教員名を記入して下さい。

**【学 年】** 1. 1年生 2. 2年生 3. 3年生 4. 4年生 5. 5年生 6. 6年生

**【学生 区分】** 1. 一般学生 2. 留学生

**【学 部】** 1. 人文学部 2. 教育学部 3. 経済学部 4. 理学部 5. 医学部 6. 工学部  
7. 農学部

**【質問Ⅰ】**

1	<p><b>あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？</b>（括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です）</p> <p>1. 90%以上（14回以上） 2. 80~90%（12~13回） 3. 60~80%（9~11回） 4. 40~60%（6~8回） 5. 40%未満（6回未満）</p>
2	<p><b>あなたはこの授業において、時間外学習（予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強）をどれくらい行いましたか？</b> 総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。</p> <p>1. 3時間程度または以上 2. 2時間程度 3. 1時間程度 4. 30分~50分程度 5. 30分未満</p>
3	<p><b>教員の話し方が明瞭で、聞き取りやすかったと思いますか？</b></p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
4	<p><b>この授業を通して、TOEICテストの出題形式と問題内容に慣れることができましたか？</b></p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
5	<p><b>授業中に（CD等で）英語の音声を聞く機会はたくさん与えられましたか？</b></p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
6	<p><b>配布プリントやオンライン自習課題を有効に使って自習（復習を含む）を行いましたか？</b></p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
7	<p><b>学生の疑問・質問などに答える機会（オンライン自習課題の質問機能も含む）が十分に与えられていましたか？</b></p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
8	<p><b>あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？</b></p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. 答えられない</p>
9	<p><b>あなたは、この授業の内容を理解できましたか？</b></p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
10	<p><b>この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？</b></p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
11~30	<p>&lt;この問い以下は、担当教員の設問に従って回答してください&gt;</p>

**【質問Ⅱ】 この授業に関する感想や要望等を率直に記述してください**

この質問の回答については別に記入用紙を配布しますので、本紙には記入しないでください

## 共通教育 学生授業評価（演習・実習・実験）

このアンケートは、よりよい授業を作るために教員が参考にする統計資料を作成することを目的に行います。統計資料の作成以外の目的でこのアンケートを利用することはありません。また、成績評価とは無関係です。個人情報と同等の安全管理措置を講じますので、安心して率直な回答を行って下さい。回答は、あてはまる数字を選んで回答用紙の指示された欄にマークして下さい。

【授業科目名】 授業科目名を記入して下さい。

【担当教員名】 担当教員名を記入して下さい。

【学 年】 1. 1年生      2. 2年生      3. 3年生      4. 4年生      5. 5年生      6. 6年生

【学生 区分】 1. 一般学生      2. 留学生

【学 部】 1. 人文学部      2. 教育学部      3. 経済学部      4. 理学部      5. 医学部      6. 工学部  
7. 農学部

### 【質 問 Ⅰ】

1	<p><b>あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？</b>（括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です）</p> <p>1. 90%以上（14回以上）    2. 80～90%（12～13回）    3. 60～80%（9～11回）    4. 40～60%（6～8回）    5. 40%未満（6回未満）</p>
2	<p><b>あなたはこの授業において、時間外学習（予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強）をどれくらい行いましたか？</b> 総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。</p> <p>1. 3時間程度または以上    2. 2時間程度    3. 1時間程度    4. 30分～50分程度    5. 30分未満</p>
3	<p><b>教員の話し方が明瞭で、聞き取りやすかったですか？</b></p> <p>1. そう思う    2. ややそう思う    3. どちらとも言えない    4. あまりそう思わない    5. そう思わない</p>
4	<p><b>演習・実習・実験の方法に関する指示は、わかりやすく説明されましたか？</b></p> <p>1. そう思う    2. ややそう思う    3. どちらとも言えない    4. あまりそう思わない    5. そう思わない</p>
5	<p><b>教材または器材が使用された場合、それらは適切に活用されましたか？</b></p> <p>1. そう思う    2. ややそう思う    3. どちらとも言えない    4. あまりそう思わない    5. そう思わない    6. この授業は該当しない</p>
6	<p><b>学生の疑問や質問への対応は、充分でしたか？</b></p> <p>1. そう思う    2. ややそう思う    3. どちらとも言えない    4. あまりそう思わない    5. そう思わない</p>
7	<p><b>教員から手本・示範が示された場合、それらは適切でしたか？</b></p> <p>1. そう思う    2. ややそう思う    3. どちらとも言えない    4. あまりそう思わない    5. そう思わない    6. この授業は該当しない</p>
8	<p><b>授業中は、演習や実習に集中できる雰囲気でしたか？</b></p> <p>1. そう思う    2. ややそう思う    3. どちらとも言えない    4. あまりそう思わない    5. そう思わない</p>
9	<p><b>あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？</b></p> <p>1. そう思う    2. ややそう思う    3. どちらとも言えない    4. あまりそう思わない    5. そう思わない    6. 答えられない</p>

10	<p><b>あなたは、この授業の内容を理解できましたか？</b></p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
11	<p><b>この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？</b></p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
12~ 30	<p>&lt;この問い以下は、担当教員の設問に従って回答してください&gt;</p>

**【質問Ⅱ】 この授業に関する感想や要望等を率直に記述してください**

この質問の回答については別に記入用紙を配布しますので、本紙には記入しないでください

## 第2部 学部・研究科のFD活動

## 第4章 人文学部のFD活動

### 第1節 授業公開

2011年度は、当学部では授業公開（ピア・レビュー）は特に実施せず、数年来の懸案であった「基礎セミナー1」のシラバス・授業内容の統一・改善作業を集中的に行った。この作業の中で、前年度実施した「基礎セミナー1」のピア・レビューにおいて評価の高かった授業内容・項目を参照し、それを改善案の中に盛り込めるようにした。

### 第2節 学部・研究科主催FD研修会

当学部では、2011年度中に、以下の通り4回（主催3回、共催1回）のFD研修会を実施した。

第1回 7/29 場所：人文理学部大会議室

参加者：15人

テーマ：基礎セミナー1の改善に向けて

講師：人文学部藤川哲先生・真木隆行先生

主催：人文学部FD部会

＜この研修会のまとめは添付の資料1-1、アンケート結果は1-2を参照＞

第2回 9/28 場所：人文理学部大会議室

参加者：35人

テーマ：教育改善FD研修会（ポートフォリオ）

主催：大学教育センター

講師：大学教育センター岩部浩三先生・学生支援センター平尾元彦先生

共催：人文学部FD部会

＜この研修会の報告は資料2を参照＞

第3回 12/21 場所：人文理学部第1会議室

参加者：8人

テーマ：基礎セミナー1の授業内容すりあわせ

主催：人文学部FD部会

＜このすりあわせで決定した内容は資料3の通り＞

第4回 3/2 場所：人文理学部大会議室

参加者：37人

テーマ：教職実践演習勉強会

講師：教育学部和泉研二先生・人文学部宮原一成先生

主催：人文学部FD部会

＜この研修会の報告は資料4を参照＞

### 第3節 教育改善に関する活動

人文学部 FD 部会を 2 回開催し（5/18、10/5）、授業内容・成績評価などの不統一さのために学生からも不満の声が聞かれてきた「基礎セミナー1」の改善方策について協議した。また、人文学部教務・学生部会（10/12）において、問題点等をまとめた詳細な資料を提示して、基礎セミナー1 改善案を発議した。この際に提示した案は添付の資料 5。残念ながら、統一シラバス案を 11 月の拡大教授会に提出して審議することまでは認められなかった。しかしながら、2012 年度前期の「基礎セミナー1」担当教員には、上述の第 3 回 FD 研修会などを開いて、授業の基本方針や共通した行事の設定などに関して合意を得ることができた。よって、担当者が違っても、かなり統一性のとれた授業が実施される見通しが立った。

その他、「基礎セミナー1」やレポート・論文作成指導に利用できるテキストの購入並びに共用スペースへの設置を行った。書名リストは別紙資料 6。

### 第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

当学部では 2011 年度に、例年通り、学生授業評価・教員授業自己評価を実施した。同年度における学生授業評価実施率は 81%であり、前年度および前々年度と比して（微減したが）ほぼ同じ実施率であった。

学生の授業の「満足度」の数値を見ると、かなり良い結果を示している。しかしながら、個別に見ていけば、様々な要望や不満がないわけではない。教員授業自己評価はあれども、実施率も 50%台と低く、やや形式的になりがちで、「フィードバックによる教育の実質的改善」に十分役立っているとは言えない面がある。

### 第5節 FD 実施経費報告書

部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(円)	FD活動の効果（簡潔に）
人文学部 (人文科学研究科)	人文学部FD研修会	印刷経費、講師謝金	10,000	基礎セミナー1の改善・充実について知見を得た。
	FD研修会参加(広島大学)	旅費	13,940	教育評価改善システムの構築について知見を得た。
	FD研修会参加(宝塚ソリオホール)	旅費	28,260	eポートフォリオを活用した学生支援について知見を得た。
	FD研修会参加(ANAクラウンプラザホテル福岡)	旅費	11,160	大学の国際化推進に関する知見を得た。
	FD関係図書購入	図書	31,717	基礎セミナー1等で利用可能な図書を揃えることができた。
	FD部会備品購入	消耗品	4,923	FD活動に必要な備品類を揃えられた。
		計		100,000

## 第6節 来年度の課題

当学部の来年度の教育改善の課題としては、以下の4つを挙げる事ができる。

- ①学生授業評価・教員授業自己評価が、「問題の発見」や「改善の手掛かり」を与えるものになるように、その利用法等を検討していく必要がある。「成績分布共有システム」も活用が進むことが望まれる。
- ②2012年度の「基礎セミナー1」の授業内容・成績評価の統一がある程度進めば、次は、統一シラバスの作成を目指したい。
- ③当学部では、学生が専攻する学習分野のコースを再編して、平成26年度から新コースをスタートさせる計画である。このため、新コースのカリキュラム案の策定を鋭意進め、人文学部の教育がより充実したものとなるようにしなくてはならない。
- ④（2011年度中には実施しなかった）ピア・レビューをできるだけ多く行う。

平成 23 年度 第 1 回人文学部 F D 研修会  
基礎セミナー 1 の授業改善に向けて

- ・主催 ; 人文学部 F D 部会
- ・日時 ; 平成 23 年 07 月 29 日 (金) 13:00~14:30
- ・場所 ; 人文・理学部管理棟 4 F 大会議室
- ・参加者 ; 15 名  
赤羽仁志、磯部佳宏、岩部浩三、太田聡、尾崎千佳、柏木寧子、更科慎一、  
富平美波、林伸一、速水聖子、Hintereder-Emde, Franz、藤川哲、藤永康政、  
真木隆行、脇條靖弘 (五十音順、敬称略)
- ・次第 ; 13:00 開会 趣旨説明 (人文学部 F D 部会座長 太田)  
13:05 今年度基礎セミナー 1 担当教員による事例報告 (藤川、真木)  
14:00 質疑応答・意見交換  
14:35 閉会 アンケート記入依頼
- ・司会 ; 尾崎 (F D 部会部員)
- ・配付物 ; ①「基礎セミナー 1 の事例報告」(作成: 藤川、A3 片面×1 枚)  
②「基礎セミナー 1 担当教員としての事例報告」(作成: 真木、A3 両面×2 枚)  
③「基礎セミナー 1 の授業改善に向けて 資料集」(作成: F D 部会、A4 冊子、37 ページ)  
④「アンケート」(作成: F D 部会、A4 片面×1 枚)

- ・内容

[趣旨]; 人文学部 F D 部会では、今年度の課題の一つとして、基礎セミナー 1 の授業改善に取り組んでいる。統一シラバス作成の可能性を探り、年度内にその具体的提案を行うことをめざして、目下準備を進めている。第 1 回研修会は、その試みの端緒として、授業の現状を確認し、問題点の共有を図ることを目的とする。

[事例報告 I - 藤川先生]; はじめに、本年度授業担当教員のうち、藤川先生に事例報告をしていただいた。藤川先生の授業は、受講者数 33 名、全 13 回の授業のべ出席率 94.6%、課題レポート全 4 回の提出率 100%、出席状況・単位修得状況とも良好であった。授業内容は、①オリエンテーション 2 回 (うち 1 回は附属図書館司書による)、②レポート発表 4 回、③施設紹介 1 回、④レポート・論文の書き方指導 2 回、⑤論理的思考力を身につけるトレーニング (ディスカッション形式) 4 回、という構成である。

以下授業内容のそれぞれについて若干説明を加える。①初回オリエンテーションでは全員に口頭で自己紹介をさせ、その折、出身地を述べた学生が多かったことから、最初の班分けにその情報を活かした (班分けは、その後、くじ引きにより 2 回行い、学生が期間中 3 通りの班に所属して、知り合いを増やせるようはかった)。図書館オリエンテーションでは、自身の関心領域の図書の分類番号をまずおぼえ、その書架周辺を歩き来して背表紙を読む、というガイダンスが大変よかった。②レポート発表の課題は、800 字のエッセイ×2 (自己紹介、大学周辺探訪)、1200 字レポート (研究課題紹介)、1600 字レポート (人文学の可能性)、と、字数を段階的に増やし、種類もエッセイからレポートへと展開させ、無理なく書けるように誘導した。水曜の提出期限後、レポートを PDF ファイルに変換し、学生が相互にインターネット上で読めるようにした。学術的レポートにおける注の必要性を説き、具体的ワープロ・ソフトに即した注の挿入法の指導も行ったが、それでも最終レポートで注なしのエッセイを書く学生が見られたのが、反省点である。③施設紹介では YCAM レクチャーに加え、共育の丘散策を行い、班毎に写真撮影など行った。学生が環境に親しみ、周りの学生と話をするよい機会となった。④レポート・論文の書き方指導では複数の指南書の内容を紹介し

た。⑤論理的思考力を身につけるトレーニングでは、幾つかの大学入試問題を参考にワーク・シートを用意し、人文学の基礎理念について理解を深めさせた。



[事例報告Ⅱ－真木先生]；ついで、同じく本年度授業を担当された真木先生に報告をしていただいた。真木先生の授業は、受講者数 35 名（高年次生 2 名を含む）、単位修得状況については、レポート締切前であるため不明である。昨年 12 月、教務委員・FD 部会座長・担当教員により開かれた意見交換会を機として、授業目的について考えた。「何か一つを極める志向性を中核にしなが、そのための各自の学問的基盤をより豊かにすること」が肝要ととらえ、とくに 1 年次前期に達成すべき具体的目標としては、(A) 大学生としての心構えの再確認、(B) 周囲（大学、同学年学生、山口市の市街と自然）に馴染むこと、(C) 図書館（県立・市立）や文化施設の利用に慣れること、が最重要と位置づけた。一方、(D) 論述文の読み書きへの習熟、(E) PC 等必要なツールへの習熟、(F) 自らの関心の所在を知り、コース選択のイメージをいただくこと、については副次的と位置づけた。

授業内容は、①オリエンテーション 2 回（うち 1 回は附属図書館司書による）、②大学周辺紹介 1 回、③図書紹介レポートの作成 2 回、④論理的文章の作成トレーニング 2 回、⑤論文読解レジュメの作成 5 回、⑥最終レポートの作成 2 回、という構成である。

以下授業内容のそれぞれについて若干説明を加える。①オリエンテーションでは、手書き原稿による自己紹介集を冊子で作成したところ、個性的な力作原稿が集まった。附属図書館司書によるオリエンテーションでは、受講後に志望専門領域に近い研究論文を実際に見つけさせた（→⑤）。②大学周辺紹介では文化施設を紹介し、のちに県立図書館・博物館・美術館・歴史民俗資料館のうち 2 つ以上を訪れ、施設紹介と訪問成果を 800 字にまとめるレポートを課した。③図書紹介レポートでは、各自で市立中央図書館を訪れ、志望専門領域にかかわる研究書を 1 冊借りるよう指示した。目次・奥付コピーの提出、内容の口頭発表を準備的に課した上で、内容を 400 字にまとめるレポートを課した。④論理的文章の作成トレーニングでは、新聞の新刊書紹介を例題に読解・校正を課した。⑤論文読解レジュメの作成では、各自で見つけた研究論文（→①）を個別面談によってチェックした上で（エッセイ等不適なものを指摘）、書誌情報・選択経緯・内容・コメントを 400～800 字にまとめるレポートを課した。作成途上のレポートも提出させ、好例作成者には口頭発表をしてもらった。⑥最終レポートとして、②③⑤の小レポート作成経験をふまえ、1600 字程度のレポートを課した。

成果は多々あるが、問題点を挙げると、学生の資質によってはグループワークが過酷な課題になりかねないこと、高年次学生の指導の難しさ、などである。

[質疑]；事例報告を受けてなされた質疑応答は以下の通りである。①学生の資質によってはグループワークが過酷な課題になる、という話が出たが、クラス全体に向けた自己紹介・図書紹介の際は問題なかったか（回答；問題なかった）。②前年 12 月の意見交換会の内容を、授業計画上、具体的にどう活かしたか（回答；他の担当者のシラバスを参照し、「施設を知る」ことも一つの目標になり得ることを学び、取り入れた）。③過去に担当した他の科目（専門・情報処理）が基礎セミナー実施の参考になる例はあったか（回答；学生にレポートを課す場合、一挙に最終的課題を課すのではなく、

複数の段階を設定し、徐々に記述力を身につけさせる方法を、他の授業から取り入れた（藤川）／他の科目を参考にするより、むしろ学生の現実と到達すべき目標を見極め、ゼロから組み立てる方がよいと考えた（真木）。

[意見交換]；はじめに、配付資料掲載の2種類のデータ（2009-2011のシラバス、2008-2010のGPC（Grade Point Class Average）および成績分布）について、司会者の説明、大教センター長岩部先生による補足説明があった。その際、①授業構成上の問題点（授業内容の3本柱（日本語論述、PC技術、大学・人文学入門）に対する力点の置き方が、教員によりかなり異なること）、②成績評価上の問題点（「秀」取得者が一人もいない授業もあれば8割以上におよぶ授業もあり、成績評価のいわゆる厳しさ・甘さにばらつきがあること）、が指摘された。とくに①は、学生授業評価でも年々不満が寄せられている点であり、何らかの対応が急務と思われる。まずは教員それぞれ、自らの授業構成・成績評価について、全体とのかかわりにおいて捉え直す必要のあることが確認された。

参加者の意見は以下の通りである。①授業の目的（効果）・位置づけ；レポート作成過程を通じ、自身の興味・関心を発見していった例が報告されたが、後期の基礎セミナー2のみならず、前期の基礎セミナー1も、学生の進路を導く上で極めて重要な意味をもつことが再認識できた。／現行システムでは共通教育科目に組み入れられている基礎セミナー1だが、今後は人文学部による学生教育のスタートラインとして、新たに位置づけ直していく必要がある。②授業の方法；①の目的（効果）を実現するには、学生ひとりひとりの個性・個別性に目を配ることのできる授業方法が必須である。事例報告で挙げられた方法（各自に関心ある図書を選ばせる。個人面談を行い、迷いや悩みに丁寧に対応する、等）はそのために有効性が高く、参考にしたい。③とくに指導に配慮を必要とする学生について；たとえば、人付き合いが苦手、人前での発表が不安、といった悩みが、たんなる個性・資質という以上に深刻な学生も、中にはある。教員相互・学生相談所・保健管理センターなどで情報を共有し、専門教育はもとより、初年次教育の時点からサポートにつとめる必要がある。

- ・アンケート結果
- ・総括と今後の課題

## 平成 23 年度人文学部第 1 回 FD 研修会 アンケート集計結果

1. 基礎セミナー 1 にぜひ盛りこみたい内容について、ご意見をお聞かせください。
  - ▶ 類型見取図にある三つの要素のバランスのとれた内容
  - ▶ 1 年生の教育ということで共通教育に入っていますが、『きみたちをしっかりと育てたい!』その序章としての基礎セミナー」というスタンスこそ本質です。学士課程全体の序章です。統一シラバス化に向かうようですが、本日紹介されたような内容にならって自分も授業したいと思えます。
  - ▶ 私は、外国語担当のため今まで基礎セミナー 1 を担当しなかったが、噂として人気薄い授業だと聞いたことがあります。しかし、今回の F D 研修会で紹介された基礎セミナー 1 の授業は、素晴らしいもので、その噂は嘘のように感じました。ただ、資料によって示されたように、評価や内容においてかなりのばらつきがあります。今までにこの基礎セミナー 1 の内容や目的にはっきりしたガイドラインがないようで、担当される教員にとっては負担になる授業であると想像がつかます。基礎セミナー 1 と 2 の授業評価については、専門授業とは違う評価基準が必要だと思えます。紹介された授業は、基礎 1 のモデルになるように思えます。うまく基礎セミナー 2 をめぐる議論で表面化したニーズも取り入れてあります。たとえば、グループワークや発表による学生同士の交流、議論の活発化や、大学、又は市内の施設の紹介などです。つまり、学生を大学生生活の様々な面に馴染ませることです。問題は、コースや学問の紹介だと思えます。ここは、基礎セミナー 1 と基礎セミナー 2 の兼合いがポイントです。
  
2. 基礎セミナー 1 の授業改善に向けた課題とその解決策について、ご意見をお聞かせください。基礎セミナー 2 についてもご意見があれば、あわせてお聞かせ願います。
  - ▶ 個々の学生の特徴をふまえた指導が必要になりますが、学生相談窓口、大教センター、保健管理センターも独自に対応している面があり、相互の連携ができればよいと感じました。
  - ▶ オムニバス形式もよいが、テーマ別に学生の選択による方式もいいのでは。
  - ▶ 基礎セミナー 2 の一つの目標は、コースや専門の紹介にあります。しかし、後期は時期的にコース選択に遅すぎることは明らかです。私の意見では、高校にはない、新しい学問を早めに紹介することが望ましいです。しかし、今の仕組みではまるで逆です。高校以来ずっと使ってきた日本語を真っ先に勉強させます。初習外国語関連のコース紹介はありません。その原因の一つは、英語と外国語担当教員が基礎セミナー 1 に出講していないことにあります。毎年度、学期毎に 2、3 コマの共通教育授業を抱える事情がありますので、英語・外国語担当教員も基礎セミナー 1 に出講するとすれば、教員一人の担当より、オムニバス式の方がいいような気がします。あるいは、基礎セミナーの担当が一人、そして他のコースの教員がゲストスピーカーとして、1 回から 2 回程度の授業を担当します（この方法は、宮原先生が基礎セミナー 2 の準備の際に提案されたと記憶しています）。将来の入門の授業をさらに基礎セミナーに加えることよりは、日本語論述など、それ以前に学習してきた内容と、学問分野の紹介を組み合わせることがこれからの課題だと思えます。学生が、人文学部にあるすべての学問をできるだけ早い時点で体験し、把握できるような環境を作ることが大事です。

3. 本日の FD 研修会について、ご感想をお聞かせください。FD 部会で今後取り組んで欲しい事柄や、企画して欲しい研修会がありましたら、あわせてお書き願います。

➤ 人文リテラシーの内容についての検討会

➤ 有意義な研修会でした。FDによって、教員同士の勉強をもう少し盛んにやればよいと思います。勿論、皆忙しいので簡単ではありませんが、具体的な研修や授業参加 (peer review) が、役に立つような気がします。特にこれからのコース改造に向かって、基礎セミナー 1 と 2 を、将来の「入門授業」にどのように生かせればよいのかというような企画があればよいと思います。ありがとうございました。

➤ 基礎セミナーは「2」のみを担当していますが、初年次教育の実態について理解を深めるため参加させて戴きました。問題点の方に関心があったのですが、実際に出てみたら藤川、真木両先生の取り組みの紹介が素晴らしく、基礎セミナーのみならず広く授業改善のヒントを沢山いただいたと感じます。個人的にこのことがいちばんの収穫でした。

## 教育改善 FD 研修会（人文学部）

日程 平成 23 年 9 月 28 日(水)

[吉田地区] 13:00～13:30

場所 人文・理学部 大会議室

講師 岩部 浩三（大学教育センター長）、平尾 元彦（学生支援センター教授）

参加者 35 名（アンケート回収 21 人）

(内容)

研修会では、本学で導入を目指しているポートフォリオについての情報の共有と意見交換を実施した。

最初に岩部大学教育センター長から、ポートフォリオ導入の背景として、平成 23 年度 4 月に行われた大学設置基準の改正に伴って、「大学は、当該大学及び学部等の教育上の目的に応じ、学生が卒業後自らの能力を発揮し、社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を、教育課程の実施及び厚生補導を通じて培うことができるよう、大学内の組織間の有機的な連携を図り、適切な体制を整えるものとする」という項目が加わったこと、これを受ける形で山口大学の平成 23 年度計画においても「学士課程を通じてキャリア意識を高めるため、ポートフォリオを全学的に導入する」、「ポートフォリオを用いた支援を通じて学生のキャリア意識を高めながら自発的な学習を促す」という 2 項目を挙げていることが説明された。

次に、学生支援センターの平尾教授より、「山口大学におけるキャリア教育体制の拡充とポートフォリオ」と題して、ポートフォリオ位置づけや導入の背景について説明が行われた後に、就業力支援から見たポートフォリオ導入の必要性の観点から、出口の課題として、「大手・有名就職先が少ない中、早目の準備と実力アップ」、「就職先希望の集中に対して、視野を広げ、社会を知ること」、「就業力の弱い学生に対して、早期発見・重点支援」が必要であることが述べられた。

(質疑応答)

2 件の質問があった。1 件目はポートフォリオというとレポートや課題を集めておくというイメージがあるが、物理的な収納スペースはどうするのかという質問があった。これに対してセンターからは電子的に対応しようとしているという回答があった。2 件目は、以前教学委員会で示されたものより今回示されたポートフォリオの雛形は簡素なものになっているが、どのようになっているのか。この質問に対して、岩部センター長より、まず学生に自分がやってきたことを整理してまとめておくという意識付けが重要であるという回答があった。また、今のところ統一したポートフォリオの形をセンターから提示するという事は考えていないという回答もあった。具体的なポートフォリオの形は各学部・学科で今後考えてほしいという指摘もあった。



設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	2	9.5%
良かった	11	52.4%
どちらとも言えない	7	33.3%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	1	4.8%
無回答	0	0.0%
合計	21	100.0%

平成 24 年度基礎セミナー 1 の授業内容すりあわせ  
～シラバス入力に先立って～ 決定事項

2011/12/21 FD 部会

1. 基礎セミナー 1 は、新入生が大学という場に適応し、大学での学びについて各自の認識を深めることを目的とした授業であり、特定の学問分野に偏った授業を行ってはならない。
2. 授業内容に統一感を出すため、合同授業・同一内容の授業を 3 回程度設定する。
  - 合同授業（大講義室利用）→留学案内・キャリア教育  
留学案内の 1 コマは国際交流部会座長エムデ先生に依頼、キャリア教育は就職支援部会座長脇條先生を通して就職支援係に講師派遣依頼
  - 同一授業（図書館利用）→図書館オリエンテーション  
図書館利用者サービス係日高友江さんに、4 月～5 月の間にクラス毎に実施して戴くよう依頼

【授業計画案】

- 第 1 週 4/13 オリエンテーション
- 第 2 週 4/20 図書館オリエンテーション（クラス 1）／[各教員メニュー]
- 第 3 週 4/27 図書館オリエンテーション（クラス 2）／[各教員メニュー]
- 第 4 週 5/11 図書館オリエンテーション（クラス 3）／[各教員メニュー]
- 第 5 週 5/18 図書館オリエンテーション（クラス 4）／[各教員メニュー]
- 第 6 週 5/25 図書館オリエンテーション（クラス 5）／[各教員メニュー]
- 第 7 週 6/1 図書館オリエンテーション（クラス 6）／[各教員メニュー]
- 第 8 週 6/8 合同授業(1)留学案内
- 第 9 週 6/15[各教員メニュー]
- 第 10 週 6/22[各教員メニュー]
- 第 11 週 6/29[各教員メニュー]
- 第 12 週 7/6 合同授業(2) キャリア教育
- 第 13 週 7/13[各教員メニュー]
- 第 14 週 7/18[各教員メニュー]
- 第 15 週 7/20[各教員メニュー（期末テスト・レポート提出等）]

## 平成 23 年度第 4 回人文学部 FD 研修会(報告会)報告

平成 24 年 3 月 2 日 16:00～17:00 に大会議室において、平成 23 年度の 4 回目の FD 研修会・報告会を開催した。参加者は 37 名であった。

第一部では、山口大学教職課程委員会委員長の和泉研二先生に、2 年後に新たに開講しなくてはならない教職科目「教職実践演習」について、その内容や目的などを分かりやすく解説していただいた。

第二部では、人文学部教職課程部会の宮原一成先生に、教員免許取得を目指す学生との個人面談の進め方について説明をしていただいた。

第三部では、人文学部 FD 部会の林伸一先生による甲子園大学など他大学で開かれた研修会の内容報告があった。

以上のように、1 時間だけの限られた時間ではあったが、内容の充実した研修会・報告会となった。

(人文学部・人文科学研究科 FD 部会ブログより転載)

## 基礎セミナー1 授業内容の改善について (案)

2011/10/12 FD 部会

## 1. 提案の背景

基礎セミナー1は、当初、日本語論述力養成を主たる授業の目標として開設されたものであったが、2007年度以降、情報処理担当教員が授業担当者として参加し、情報処理技術基礎の修得を授業内容に含める傾向も現れるようになった。

いっぽう、近年、方法論や技術の修得に留まらず、入学間もない1年生が大学生活に適応し、大学での学びに対する意識を深めることができるような授業内容も、基礎セミナー1に期待されていると考えられる。

以上のように、現行の基礎セミナー1は複数の目標・内容を担っていると見られるが、教務委員の差配によって、当該年度の担当者間でおおよそのすり合わせをはかる程度の統一は試みられてきたものの、授業の目標・内容とも、担当者の裁量に大きく任されているのが実情である。しかしながら、授業内容の不統一に対する学生からの不満の声は多く<sup>1</sup>、具体的な対応策を講じるべき時期に来ているように思われる。また、授業担当者間で評価基準に大きな差があるが<sup>2</sup>、同授業が必修授業であることを鑑みれば、学生の不満を解消するための方策は喫緊の課題とも言えよう。

上記のような問題意識のもと、人文学部FD部会では、平成23年7月29日に「基礎セミナー1の授業改善に向けて」と題するFD研修会を実施した。席上の意見交換および事後回収アンケート結果をふまえつつ、基礎セミナー1の授業改善について、具体的な提案を行いたい。

## 2. 提案

基礎セミナー1を学士課程教育全体の導入と位置づけ、そのために、以下の3目標を掲げることとする。

- 1 大学という場に適応すること
- 2 大学での学びの動機づけを深めること
- 3 大学における学びのさまざまな方法を身につけること

<sup>1</sup> 2011年度実施の授業アンケート回答より一部を抜粋する。

- ・それぞれの先生のやりやすいように、いちばんいいように考えてのことだとは思いますが、他のところとやっていることがちがうな、と思うこともあり、すこし不安になりました。というよりも、みんなそれぞれやることがちがうな、という感想です。
- ・先生によってあまりにも内容が違いすぎるので、同じ単位を与えるのならば共通性をもたせた方が良い。(例：レポートを毎回出させる先生、班で話し合い発表させる先生、先生がただ本を読むだけなど…)
- ・他のクラスがパワーポイントでプレゼンをしたというのを聞いて、少しやってみたかったな…と思いました。
- ・先生によってすることが違いすぎるのでもう少し統一性を持たせてほしかったです。
- ・他のクラスの授業内容がどういったものだったのか気になります。

<sup>2</sup> 大学教育センターHP提供の成績分布共有システムで2008～2010年度の基礎セミナー1の成績分布を縦覧すると、GPC (Grade Point Class Average) は、1.97～3.82の偏差がある (GPC1：可、2：良、3：優、4：秀に相当)。

## 2-1 シラバスにおける「授業の概要」「一般目標」「到達目標」の統一案

## 統一「授業概要」

人文学部で過ごす4年間の入口として、大学生活に慣れ、大学を学びの場として活用することのできるようにします。あわせて、大学での学びについて、受講者各自の認識を深めることを目標とします。

## 統一「一般目標」

- 1 学生が、大学の環境に適応し、大学を自らの勉学の場として活用できる。
- 2 学生が、自らの大学生活の目的について、明確な意識をもつことができる。
- 3 学生が、図書館やインターネットの利用方法に習熟し、自らの勉学に必要な情報・文献を収集できる。
- 4 学生が、日本語論述にかかわる基礎的知識・技術を習得し、大学の授業で課されるレポートを作成できる。

## 統一「授業の到達目標」

知識・理解の観点：学生が、自らの人生の展望をもち、その中での大学生活の位置づけを理解している。

思考・判断の観点：学生が、自ら問いを発見し、よく考える習慣を体得している。

関心・意欲の観点：学生が、人文学全般に広く関心をもつとともに、とくに自身の資質に適い、自らが深く関心をもてる分野に気づいている。

態度の観点：学生が、大学生活を送る上で基本的な習慣やマナーを身につけ、主体性を確立している。

技能・表現の観点：学生が、大学の授業で課されるレポートの作成において、適切に情報を収集したり、文章を構成・表現したりする方法・技術を習得している。

## 2-2 統一一般目標案に即した授業の展開例

- 1 学生が、大学の環境に適応し、大学を自らの勉学の場として活用できる。
  - ・自己紹介文を書かせる、発表させる。
  - ・名前順・出身県などのカテゴリーでグループを作る。
  - ・山口大学ツアーを実施する。
  - ・保健管理センター医師による講話を聞かせる。
- 2 学生が、自らの大学生活の目的について、明確な意識をもつことができる。
  - ・ポートフォリオを記入させる。
  - ・ジョブ・セミナーを開く。
  - ・上級生に留学体験談や就活体験談を話してもらう。
  - ・「大学生活の目標」というタイトルでレポートを書かせる、発表させる。

- 3 学生が、図書館やインターネットの利用方法に習熟し、自らの勉学に必要な情報・文献を収集できる。
  - ・ 図書館ガイダンスに参加する。
  - ・ 県立図書館・市立図書館で本を借りてこさせる。
  - ・ NACSIS Webcat で文献検索をさせる。
  
- 4 学生が、日本語論述にかかわる基礎的知識・技術を習得し、大学の授業で課されるレポートを作成できる。
  - ・ 学びたい学問分野についてレポートを書かせる。

※必要に応じて、例えば、3クラス合同、全体合同、というような形で実施する。

### 2-3 成績評価

成績評価の基準については今後の課題とし、今回の提案では触れない。(ただし、何らかの統一基準を担当者間で確認・共有していく必要はある。)

### その他

現在、基礎セミナーの取りまとめ役は教務委員となっているが、(基礎セミナーを3回欠席した学生の面談を学生委員が担当していることなどから、)学生委員が担当してもよいのではないか。あるいは、担当者6人の中の誰かがマネージャーになるべきであろう。

## 平成 23 年度 FD 活動経費によって購入した図書

1. ことばのエクササイズ／青木三郎著，ひつじ書房，2002
2. 社会人・学生のための情報検索入門／味岡美豊子著，ひつじ書房，2009
3. ピアで学ぶ大学生の日本語表現／大島弥生ほか著，ひつじ書房，2005
4. アカデミックプレゼンテーション入門／三浦香苗ほか著，ひつじ書房，2006
5. 英文読解のプロセスと指導／津田塾大学言語文化研究所編，大修館，2002
6. 大学生のための知的勉強術／松野弘著，講談社，2010
7. 大学生のためのレポート・論文術／小笠原喜康著，講談社，2009
8. 大学生のための「社会常識講座」／松野弘著，ミネルヴァ書房，2011
9. 大学生のためのドラッカー 1／松本健太郎著，リーダーズノート，2011
10. 大学生のためのドラッカー 2／松本健太郎著，リーダーズノート，2011
11. 日本語を書くトレーニング／野田尚史ほか著，ひつじ書房，2003
12. 日本語を話すトレーニング／野田尚史ほか著，ひつじ書房，2004
13. 大学生のためのリサーチリテラシー入門／山田剛史ほか著，ミネルヴァ書房，2011
14. パラグラフから始める英文ライティング入門／津田塾大学英文科編，研究社，2001
15. アカデミック・スキルズ／佐藤望編著，慶應義塾大学出版会，2006
16. レポート・論文の書き方入門／河野哲也著，慶應義塾大学出版会，2002
17. レポート・論文の書き方上級／櫻井雅夫著，慶應義塾大学出版会，2003
18. 大学生のための日本語表現トレーニング（テキスト・ドリルセット）／橋本修ほか著，三省堂，2008
19. これから研究を書くひとのためのガイドブック／佐渡島紗織ほか著，ひつじ書房，2008
20. ことばの科学／加藤重広，ひつじ書房，2007
21. Writing for Academic Purposes／田地野彰ほか著，ひつじ書房，2010

## 第5章 教育学部のFD活動

### 第1節 授業公開

表1の通り4件の授業公開を実施した。

授業公開に参加した教員から授業担当者へフィードバックを行うため、参加者へ図1のような「授業観察カード」の記入を求めた。このカードにおいては「観察の観点」を4項目に分け、それぞれ「A. 参考になった点」と「B. 疑問や課題が残った点」について観察者が記入することとした。なお、「授業観察カード」の様式は、平成16年度FD報告書・第4章第1節に掲載のものを基とした。

授業公開を実施した結果、教育学部における授業の分野や態様が非常に多様であること、学校教育現場や様々な経験を有する教員の授業から学ぶべきことが多くあることなどを体感できた。より具体的な点として、わかりやすい板書・学生の理解の助けとなる図描画の工夫、学生を授業に積極的に参加させ・議論させる工夫、学生が学習習慣を維持できるような工夫など、参加した教員が各自の授業に取り込んでいけるような様々な工夫が随所に見られた。また、参加者からのよりよい授業のための提案や、授業後の議論などもみられた。

表1 授業公開の概要。

前期	後期
1) スポーツ健康科学教室 担当教員：丹 信介 教授 授業科目名：健康運動処方論 内容：運動処方のための運動の具体的条件 公開日時：6月27日(月)9・10時限 教室：22番教室 参加者数：8名	3) 社会科教育教室 担当教員：南浦 涼介 講師 授業科目名：教科教育法社会 内容：議論することの意味 公開日時：12月6日(火)5・6時限 教室：21番教室 参加者数：8名
2) 国語教育教室 担当教員：村上 林造 教授 授業科目名：国文学講読Ⅲ 内容：文学作品を一つ取り上げ、分析・議論する。 公開日時：6月30日(木)5・6時限 教室：演習室(国語、文芸)[C-308] 参加者数：8名	4) 表現情報処理教室 担当教員：葛 崎偉 教授 授業科目名：グラフ・ネットワーク論 内容：グラフにおける最短経路・最長経路の計算 公開日時：12月8日(木)5・6時限 教室：理系共同実験・実習室3[A-301] 参加者数：4名

授業観察カード		
授業名/開講日時： / 月 日 ( ) ・ 時限		
場所： 教育学部 棟 号室		
授業者：		
観察者氏名：		
観察の観点	A. 参考になった点	B. 疑問や課題が残った点
1. 学習内容の明確化 ・ 既習内容との関連付け ・ 課題の提示	A1	B1
2. IT機器の利用 ・ 効果的に活用されたか ・ 説明の質と量は適切か	A2	B2
3. 教材の工夫 ・ 提示の仕方 ・ 学習過程 ・ 教材の質	A3	B3
4. 授業指導 ・ 個別指導について ・ 机間巡視について ・ 質問等の受け答え	A4	B4
(スペースの都合でここに記述できない場合、裏面に記述をお願いします。)		

その他の気付き等：

参考：学生授業評価アンケート質問項目

1. あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？
2. あなたはこの授業において、時間外学習をどれくらい行いましたか？
3. 教員の話し方が明確で、聞き取りやすかったと思いませんか？
4. 専門用語や理論的な話は、適切に説明されましたか？
5. テキストやプリントなどの教材が、効果的に使われましたか？
6. 板書やOHP、ビデオ、コンピュータなどが効果的に使われましたか？
7. 学生の疑問や質問への対応は、充分でしたか？
8. あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いませんか？
9. あなたは、この授業の内容を理解できましたか？
10. この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？

(a) (b)

1. 学習内容の明確化 ・ 既習内容との関連付け ・ 課題の提示	2. IT機器の利用 ・ 効果的に活用されたか ・ 説明の質と量は適切か
3. 教材の工夫 ・ 提示の仕方 ・ 学習過程 ・ 教材の質	4. 授業指導 ・ 個別指導について ・ 机間巡視について ・ 質問等の受け答え

(c)

図1 授業公開における「授業観察カード」の(a)表面、(b)裏面、(c)観察の観点(抜粋)。

## 第2節 学部主催FD研修会

教育学部主催の研究会を1件、大学教育機構との共催を1件、山口大学主催シンポジウムの教育学部FD研修としての指定を1件、合計3件を実施した。

### 1. 学生指導についてのFD研修会

近年、授業に出席できない・学習習慣を維持できない学生や、人間関係や将来についての不安を感

じる学生が増加し、学生指導の観点からも放置できない状況にある。また、教育学部の教員全てが学生指導の専門家・経験者とは限らず、学生指導についての研修の機会を設けて欲しいという教員からの要望も寄せられていた。そこで、下記開催要項のようなFD研修会を企画・実施した。

#### 平成23年度 山口大学教育学部FD研修会 開催要項

日時：平成24年2月29日（水）13時30分～15時30分

場所：山口大学教育学部21番教室

##### 1. 講演

講師：甲南大学文学部・教授 高石恭子 先生（甲南大学 学生相談室 専任カウンセラー）

題目：現代の大学における学生の悩みと教職員に求められる学生支援の在り方

- (1) 高等教育における学生支援の変遷
- (2) 現代学生の状況と社会背景
- (3) カウンセラーから見た学生の悩みの変遷
- (4) 甲南大学における状況と取り組み
- (5) 学生の〈こころ〉を育てる学生支援とは

##### 2. 研修会のスケジュール

- (1) 講演
- (2) 山口大学教育学部での状況と取り組みの紹介
- (3) 全体議論

##### 3. 研修会の趣旨

現代の大学において、悩みを抱える学生が増加しつつあり、看過できない状況となっている。大学での人間関係に関わる悩みや社会への不安感など、様々な悩みがある。これらの悩みを抱えた学生が、授業やゼミに出席できない、教職員や友達と連絡が取れない、などの具体的な事象となって教職員が初めて気が付くこともある。このような中、教職員はどのように学生と接し、学生の成長を支援していくことができるのか、本研修会で考えを深めていきたい。まず、学生相談室専任カウンセラーとして豊富な経験をお持ちの講師による講演を聴講した後、これまでの山口大学教育学部の取り組みを振り返る。そして、全体議論を通じて、これからの学生支援の在り方について議論していきたい。

まず、講師より「現代の大学における学生の悩みと教職員に求められる学生支援の在り方」という題目により90分間の講演があった。現代の学生とその保護者、教職員が考える大学のイメージにギャップがあり、相互理解が困難なことが、まず、学生支援が困難となっている要因の一つであるとの指摘があった。そして、学生が自分の内面を「ことば」で語れないことによる「悩めない」学生の増加が、さらに困難な状況を生み出していること、長い支援の後、ことばで語れない学生が、ことばで語れるようになることがあり、そのとき問題の解決に向かうことの話があった。事例を交えてわかりやすく、そして特に「ことば」に関する内容については、参加者が思わず引き込まれていくような充実した講演であった。

講演の後、FD担当教員より、山口大学及び教育学部での学生の状況や学生支援の取り組みの紹介があり、それに引き続いて、質疑応答という形式により、教職員に求められる学生支援の在り方の議論を行った。活発な質疑応答があり、予定の時間を超過するほどであった。

研修会終了後に下記の質問項目からなるアンケートを実施した。参加者それぞれの立場からの感想が記述されていたが、全体的に、「ことば」で語ることができない学生の実態に共感したものが多い印象であった。また、今後取り上げて欲しいFD研修会のテーマとして、学生指導に関するものとして

は、保護者との連携や教員間・大学内での情報共有の方法について、それ以外のものとして、教員養成の動向や地域の学校が直面する課題や取り組みに関するもの、学生への研究指導・ゼミ運営の方法、FD 担当部門の充実の要望があった。

#### FD 研修会 アンケート・質問項目

1. 講演内容についての感想（全体のコメント）をお願いいたします。
2. 今回のFD研修会の時間及び構成はいかがでしたか？また、お気づきの点などありましたらお願いいたします。  
時間：ちょうどよい・もう少し長い方がよい・もう少し短い方がよい  
構成：適切であった・改善すべき点がある
3. 今回のFD研修会の内容について、もっと聞きたかったことや、あまり興味が持てなかったことがありましたら、お願いいたします。
4. 次年度のFD研修会で取り上げて欲しいテーマなどありましたら、お願いします。  
参考：前年度のご要望
  - ・学生指導に関するもの（保健管理センターにおける状況を含む）
  - ・情報セキュリティー・情報リテラシーに関するもの
5. その他、FD研修についてのご要望やお気づきの点などありましたら、お願いします。  
参考：前年度のご要望
  - ・1年間の計画を年度初めに示してほしい。  
また、皆で議論してFDのテーマを決めて欲しい。
  - ・FDを担当する部署を明確にして欲しい

研修会の参加者は約 20 名であった。参加者数が予想したよりも少なく、開催日や参加の働きかけについて、反省すべき点があったと考えている。参加者からも、より多くの参加者が参加できるような日程の要望があり、さらには、後日、研修会の記録についての問い合わせ（映像もしくは音声の記録があれば視聴したい旨の問い合わせ）があった。次年度の課題としたい。

## 2. 教育改善FD研修会

以下のような教育改善FD研修会を教育学部と大学教育機構との共催により実施した。

日時： 平成 23 年 7 月 20 日(水) 17:00～17:30

場所： 教育学部 21 番教室

参加者： 79 名

内訳： 教育学部教学委員、FD担当教員、教育学部教員など 76 名

大学教育センター：3 名

糸長雅弘大学教育センター主事（教育学部）

中田充大学教育センター主事（教育学部）

木下真（大学教育センター）

概要：

教育学部拡大教授会終了後、教育学部全教員を対象に、ポートフォリオ導入の意義と期待される効果・導入方法などについて、糸長大学教育センター主事から説明を受けた。さらに、それらについての質疑応答・意見交換を行った。

内容：

1) 「ポートフォリオ導入の背景と課題」についての説明

はじめに、ポートフォリオに関する一般的な説明と山口大学における導入の背景と課題について、大学設置基準の一部が「社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を教育課程の実施及び厚生補導を通じて培うことができる」ように改訂されたことと、これを受けて本学では平成23年度計画において、学士課程教育を通してキャリア意識を高めるために、ポートフォリオを全学的に導入する予定である事などの説明があった。

## 2) 「就業力支援から見たポートフォリオ導入の必要性」について

続いて、就業力支援の立場からポートフォリオ導入の意義が説明された。特に、企業をはじめ、社会からは、「大学生活を有意義にする力を持った学生」の育成が求められていることが、企業のエントリーシート具体例を用いて説明された。これに応えるためには、「大学生活を充実できているか」、「世の中への興味・関心を持ち、未来をソウゾウ（想像・創造）できるか」、「表現する力・伝える力があるか」について、学生自らが自主的にチェックするとともに、教員がそれを支援する働きかけを行うことが不可欠であること、そのためポートフォリオの導入が大学教育にとって欠かせないものであるという考えが述べられた。

## 3) 質疑応答・意見交換など

糸長大学教育センター主事からの説明終了後、意見交換が行われ、「ポートフォリオをどのように具体的に運用するのか。その方針は決定されているのか。」という質問があった。これに対して、現状では大学教育機構としての原案を策定中であること、さらに、先行事例紹介として、8月10日（水）に全学講演会を開催し、その中で佐賀大学のポートフォリオ全学導入の経緯とポートフォリオの実態について講演いただく予定であるのでぜひ参加して欲しい旨の回答があった。

また、ポートフォリオの保存に関して、「是非、電子化を検討して頂きたい。その際には教員免許に関わる履修カルテの電子化も込みで検討して頂きたい。」とのコメントがあった。これに対して、大学教育機構としても電子化は必須のものと考えており、その際には履修カルテも含めて検討する予定であるとの回答があった。

教育学部においては、既に履修カルテが導入されていることもあり、導入の是非よりも具体的な運用方法に関する興味関心が高かった。

## 3. 山口大学主催シンポジウムへのFD研修としての参加

以下の開催要項のような山口大学主催のシンポジウムを教育学部FD研修として指定し、教育学部教職員に参加を促した。その結果、教育学部教職員の参加者は約40名であった。

これからの教職課程の在り方を問う

～教職課程の課題と展望～

開催要項

### 1. 趣旨

平成18年に教育基本法が、平成20年に教育関連三法が改正された。教職実践演習や教員免許状更新講習の導入など、教員の養成や研修に関する大学の責任と役割は、これまで以上に大きなものとなった。本シンポジウムでは、今日の我が国の教員養成や研修制度をめぐる現状や課題について、教職課程を担う教員の共通理解を図るとともに、質の高い教員をどのようにして養成するか、様々な立場からの議論を通して、今後の教職課程の方向性を探る。

### 2. 主催：山口大学

### 3. 後援：山口県教育委員会

4. 開催日時	平成 23 年 11 月 30 日 (水) 13:30～17:30		
5. 開催場所	山口大学 大学会館大ホール (山口市吉田 1 6 7 7-1)		
6. 参加者	大学教員、教育機関関係者など		
7. 参加費	無料		
8. 内容等	<p>1) 開会行事 (13:30～13:45)</p> <p style="text-align: center;">主催者あいさつ <span style="float: right;">山口大学副学長 吉田 一成</span></p> <p>2) 講演</p> <p>(1) 基調講演 1 (13:45～14:45)</p> <p style="text-align: center;">「教員養成の現状と課題～教職実践演習を巡って～」</p> <p style="text-align: center;">文部科学省初等中等教育局教職員課教員免許企画室</p> <p style="text-align: right;">室長 新田 正樹</p> <p>(2) 基調講演 2 (14:45～15:45)</p> <p style="text-align: center;">「教職課程の改革をどのように考えるか」</p> <p style="text-align: center;">独立行政法人 教員研修センター 理事 高岡 信也</p> <p style="text-align: center;">中央教育審議会「教員の資質能力向上特別部会」委員</p> <p style="text-align: center;">同部会「基本制度ワーキンググループ」委員</p> <p style="text-align: center;">前島根大学教育学部長</p> <p>3) シンポジウム (16:00～17:30)</p> <p style="text-align: center;">「教職課程の課題と展望」</p> <p style="text-align: center;">(独) 教員研修センター 理事 高岡 信也</p> <p style="text-align: center;">文部科学省初等中等教育局教職員課教員免許企画室</p> <p style="text-align: right;">室長 新田 正樹</p> <p style="text-align: center;">下関市教育委員会 理事 中馬 好行</p> <p style="text-align: center;">山口学芸大学教育学部子ども教育学科 主任 河北 邦子</p> <p style="text-align: center;">山口大学教育学部附属教育実践総合センター</p> <p style="text-align: right;">センター長 吉川 幸男</p> <p style="text-align: center;">司会 山口大学教職課程委員会 委員長 和泉 研二</p>		

### 第 3 節 教育改善に関する活動

大学教育センターの企画による「授業改善ヒント集」の作成において、表 2 の通り教育学部教員が分担執筆を行った。

表 2 「授業改善ヒント集」における分担執筆者と分担章・節及びタイトル。

担当者	章	節	タイトル
池田 恵子 准教授	2	(1)-2	疑似ディスタンス・ラーニングを組み合わせた DVD 視覚教材の開発
熊谷 武洋 准教授	2	(2)-3	受講意識向上のための講義支援システムの利用事例
佐野 之人 教授	2	(4)-3	多人数を考えさせ対話に巻き込むための工夫
霜川 正幸 准教授	2	(2)-4	外部人材を活用した授業づくりの工夫
曾根 涼子 教授	2	(1)-1	基礎セミナーの実践例

鷹岡 亮	准教授	2	(3)-1	PowerPoint をノート代わりに利用する工夫
			(4)-4	多人数授業で学生が意見を交換し共有する工夫
中野 良寿	准教授	2	(3)-2	芸術系の授業で写真を使って細密描写の描写力を効果的に養う方法
西 敦子	准教授	2	(2)-5	模擬授業で学習指導力を身につける方法
西村 正登	教授	2	(4)-5	道徳授業にロールプレイングを取り入れる試み
野村 厚志	准教授	2	(5)-2	学生の理解状況を確認しながら進める試み

## 第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

学生授業評価及び教員授業自己評価を学期ごとに実施した。表3は学生授業評価の実施率を、表4は教員授業自己評価実施率を示す。また、最近3年間におけるこれらの実施率の変化を表5に示す。学生授業評価については、8割以上の高い実施率で推移しているが、教員授業自己評価については、平成21・22年度は5割程度、平成23年度は3割となっている。実施率調査の時期の違いもあるが(平成21・22年度は最終的な実施率であるのに対して、平成23年度は4月19日時点での実施率)、いずれにしても、教員授業自己評価実施率は低調である。

学生授業評価の5項目の評価値の過去3年間にわたる年変化を表6に示す。授業外学習時間の評価値が年を経るごとに徐々に高くなってきていることは良い傾向として指摘できる。

表3 平成23年度における学生授業評価実施状況。前期・後期を含めた科目数と実施数から実施率を算出した(平成24年4月19日時点のデータに基づく)。

全数(A)		開設科目(B)			対象科目(C)			履修登録あり科目(D)		
科目数	実施数	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率
758	609	758	609	80.3%	703	609	86.6%	719	609	84.7%
B&C			B&D			C&D				
科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率		
703	609	86.6%	719	609	84.7%	700	609	87.0%		
B&C&D			実施率							
科目数	実施数	実施率	最大							
700	609	87.0%	87.0%							

表4 平成23年度における教員授業自己評価実施状況。前期・後期を含めた科目数と実施数から実施率を算出した(平成24年4月19日時点のデータに基づく)。

全数(A)		開設科目(B)			対象科目(C)			履修登録あり科目(D)		
科目数	実施数	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率
758	250	758	250	33.0%	703	250	35.6%	719	250	34.8%
B&C			B&D			C&D				
科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率		
703	250	35.6%	719	250	34.8%	700	250	35.7%		
B&C&D			実施率							
科目数	実施数	実施率	最大							
700	250	35.7%	35.7%							

表5 最近3年間における学生授業評価及び教員授業自己評価の実施率変化(平成24年4月19日時点のデータに基づく)。

	平成21年度	平成22年度	平成23年度
学生授業評価実施率	84.1%	84.4%	87.0%
教員授業自己評価実施率	51.3%	54.2%	35.7%

表6 最近3年間における学生授業評価の評価値の変化(平成24年4月19日時点のデータに基づく)。  
具体的な質問項目・回答選択肢及びその評価値は表後の「参考」を参照。

質問項目	平成21年度	平成22年度	平成23年度
(回収枚数)	14,248枚	13,475枚	14,341枚
1. 授業外学習時間	2.51	2.68	2.71
2. 学習目標達成	3.92	4.11	4.10
3. 学生理解	4.03	4.18	4.18
4. 学生満足	4.16	4.33	4.31
5. 出席	4.68	4.71	4.69

参考：教育学部学生授業評価における質問文(一部を抜粋)と回答選択肢。質問文の番号：1～5は表6中の質問項目の番号に対応している。回答選択肢における各回答文後の括弧内に記された番号(5)～(1)が評価値を表し、アンケート回答の評価値を平均したものが、表6中の評価値となる。全ての質問項目は平成22年度FD報告書第5章第4節を参照。

- |  |
|--|
| <p>1. あなたはこの授業において、時間外学習(予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強)をどれくらい行いましたか?総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。<br/>回答選択肢：1.3時間程度または以上(5) 2.2時間程度(4) 3.1時間程度(3)<br/>4.30分～50分程度(2) 5.30分未満(1)</p> <p>2. あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか?<br/>回答選択肢：1.そう思う(5) 2.ややそう思う(4) 3.どちらとも言えない(3)<br/>4.あまりそう思わない(2) 5.そう思わない(1) 6.答えられない</p> <p>3. あなたは、この授業の内容を理解できましたか?<br/>回答選択肢：1.そう思う(5) 2.ややそう思う(4) 3.どちらとも言えない(3)<br/>4.あまりそう思わない(2) 5.そう思わない(1)</p> <p>4. この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか?<br/>回答選択肢：1.そう思う(5) 2.ややそう思う(4) 3.どちらとも言えない(3)<br/>4.あまりそう思わない(2) 5.そう思わない(1)</p> <p>5. あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか?<br/>回答選択肢：1.90%以上(5) 2.80～90%(4) 3.60～80%(3)<br/>4.40～60%(2) 5.40%未満(1)</p> |
|--|

## 第5節 FD実施経費報告書

年度当初に配分された予算は、FD 研修会における講師謝金・旅費のためであった。当初予定したように学生指導に関するFD 研修会を実施し、その中で、学生相談に関する専門家の講演会を実施した。その結果、大学教育センターより配分された予算は、表7のように全額を講師謝金・旅費として支出した。

表7 FD 実施経費使途概要。

内容	経費の用途	執行額(千円)	FD 活動の効果
FD 研修会	講師謝金・旅費	61	学生指導に関する知見を得ることができた。 詳細は、本章第2節1.を参照。

## 第6節 来年度の課題

教育学部FD 活動における課題として、教職員がFD 活動に積極的に関わっていけるような環境の整備が挙げられる。以下に、現在実施しているFD 活動のそれぞれについて、具体的課題とそのための今後の取り組みを述べる。

本年度の授業公開については、それぞれ概ね10名弱の参加者であった。参加者数には大学教育センターからの者を含む。当然、授業期間中に行うものであり、教員の多くが並行して授業や他の用務を行っていることから、参加可能な人数が少ないことはやむを得ない。そのような中でも、できるだけ多くの教職員に参加を促すような働きかけを検討したい。

FD 研修会については、これまで、研修会後のアンケートにより、教員からの要望を伺ってきた。その結果、以下のような要望があった。

- (1) FD の計画及び実施について、組織的な対応を求める。教職員の希望を聞いて計画して欲しい。
- (2) 学生指導に関する話題を引き続き、研修会等で取り上げて欲しい。学生相談所以外に、保健管理センターの状況や、連携・情報共有などについても聞きたい。
- (3) 情報関係の話題を研修会で取り上げて欲しい。特に、情報リテラシーや情報セキュリティー・モラルに関するものが必要。
- (4) 「教職実践演習」及び「履修カルテ」の導入に関連した研修会を要望。例えば、履修カルテに基づく具体的な面談の方法について意見交換等。

上記(1)については、教育学部で実施すべきFD 活動とはどのようなものか、そのための体制を構築すること、そして教職員全員が関心を持って取り組めるようなものにして欲しいということの要望であると推察している。(2)については、平成22・23年度に学生指導についての話題でFD 研修会を実施したこと、指導が困難な学生を抱えている教員が少なからずおり、教員自身も負担に感じることを反映していると考えている。(3)については、情報技術が業務に取り入れられている背景や、個人情報の取り扱いについて一層の注意が求められる現状によるものと考えている。(4)については、今後、履修カルテを活用した学生の面談等が始まり、そのための教員向けの研修会が必要となるためと考えている。これらの希望を取り入れながら、次年度のFD 計画を立案していくことが必要である。なお、教員は1年に1回は何らかのFD 研修会等に参加することが求められており、このことも再度周知する必要がある。

これまで継続的に実施してきた学生授業評価及び教員授業自己評価について、前者についてはこれ

まで通り実施すること、後者については入力率を高めるための方策が必要である。例えば、教員授業自己評価の問 30 を除いた項目を、学生授業評価と同時にマークシートを用いて行う工夫を検討したい。学生授業評価の経年変化から、授業外学習時間の確保については、未だ少ないながらも増加傾向にあることが分かった。

以上まとめると、学生授業評価及び教員授業自己評価を継続することの意義を確認しつつ、その一方で、実際的な入力方法の説明や大学教育機構作成の「授業改善ヒント集」を活用した他の教員の様々な工夫の紹介、FD 活動に関する情報システムの活用法、学生指導に関する話題などを盛り込んだ研修会を実施することが必要と考えている。平成 24 年度の FD 活動の計画を立案する際に、これらの点を考慮して検討したい。

## 第6章 経済学部のFD活動

### 第1節 授業公開

#### 1. 経済学科

- (1) 科目名：医療福祉経済論
- (2) 講義内容：医療の特殊性と政策介入の意味
- (3) 担当教員：角田由佳（経済学科准教授）
- (4) 実施日時：平成23年12月5日（月）5・6時限（12:50～14:20）
- (5) 場 所：経済学部C201教室
- (6) 参加者：6名（担当教員を除く）

#### ○要 望

- ・ 昨年度始まったばかりの講義なので、どこをどう改善していけばよいのか、参加される先生方にご指導いただく場としたい。

#### ○授業（通常）の進め方

- ・ はじめに、授業の資料（スクリーンに映し出す画面とほぼ同じであるが、キーワード等重要事項は空欄。なお参考程度にしたい資料については画面のみ）を配布する。
- ・ 出席票は毎回配布。授業中に質問等挙手があればよいが、なかなか難しいため、出席票の備考欄に質問・意見等を記入してもらおう（記入者には評価の際にポイントを付与）。次の授業で、質問等に対応する。
- ・ 授業は毎回パワーポイントを使用して進行する。授業中にあらたに出た（画面上にない）重要事項については、板書する。

#### ○助言・コメント

##### <良かった点>

- ・ 配布資料やスライドに記載する内容および分量を厳選し、またその配布資料もスライドの画面をそのまま配るのではなく穴埋め形式にしており、学生が解説を聞きながら、自分で重要なポイントを判断し、自分の手でノートを取るような工夫がなされている。
- ・ 話し方（スピード、声の大きさ等）や間の取り方がうまくできており、重要な箇所は繰り返すなど、とても分かりやすく授業を進めている。板書の字もきれいである。完成度は極めて高いといえるのではないかと（「マイクの音量をもう少し大きくしてもよいのではないかと」という意見も有）。
- ・ 専門用語等の解説において現実味のある具体例（例え話）を用い、それを多用することで、学生に分かりやすく、イメージしやすいように進められている。また、重要な点を繰り返すなど、話法にも意が用いられている。
- ・ 学生の質問へのフィードバックのシステムが構築されており、その対応も非常に丁寧である。
- ・ 教室が適温で保たれている。

#### <気になった点>

- ・ 機材の準備により、講義が実際にスタートするのに少し時間がかかっていたので、改善できないだろうか。
- ・ 授業の時間帯（昼休み直後の授業）であり、特に電気を消しながらスクリーンを使うと、睡魔が襲いやすいため、学生に何か作業させるとか、意見を言わせるとか、中休みを入れる等の変化がもう少しあるとよいのではないか。
- ・ 授業のはじめ、質問に答える場面で、専門用語や統計数字を口頭のみで紹介するのは、伝わりにくいのではないか。
- ・ 途中、一度だけ（前回の質問の内容から本題に入った直後）、私語がどっと増え、その後また静かになっていたが、いつものことなのか、あるいは何かあったのか、気になる点であった。
- ・ 授業内容についてノートを取る学生が少ない。この授業に限ったことではないだろうが、授業内容のメモの取り方を初年次教育で取り入れる必要性を感じた。
- ・ 授業中、配布資料の穴埋め作業をしない学生やほかの事をしている学生もいたので、穴埋め作業をしないと評価にかかわるような工夫ができないだろうか。学生に考えさせる時間帯も必要ではないだろうか。
- ・ 学生の集中力を高めるために、例えば20分おきなど、チェンジ・オブ・ペースを考えたらいいのではないか。

#### ○助言・コメントに対する返答（<気になった点>について）

- ・ 講義開始までの準備時間は、今回（機材等の配置がすべて変わっていたため準備に時間がよりかかってしまった）に限らない課題になっている。普段の授業においても、PCを準備し資料を配布、出欠をとって・・・となると、どうしても時間がかかっている。TAを依頼することも検討しているが、昨年度はじめて開講された授業のため、まだ受講者数の見当がつけられず、悩んでいる最中である。
- ・ 昼休み直後の授業の進め方は、特に難しいと考えている。資料も、はじめはすべて用語等が記載されているものを配布していたが、そうすると、まさに睡眠タイムになってしまうので、現在は、空欄の多い、画面を見ながら自分で記入するような資料を作成している。それでも、やはり眠ってしまう人がいるため、授業の進め方をより検討しなくてはならないだろう。
- ・ 普段の授業では、質問に答えている時間帯に私語が多くなってしまふ。おそらく学生は、自分の質問ではないから・・・という考えなのだろう。学生全員にとって重要な回答内容を話しているが、なかなか伝わっていないようである。この質問への回答の仕方が、一つの課題になっている。
- ・ この授業を開講して2年目であるが、依然として授業内容で頭がいっぱいになり、学生の取り組み方に気持ちが行き届いていないところがあることを再確認することができた。試験では、自分でメモを入れた配布資料と直筆ノートのみ持ち込み可としているが、それだけでなく、ノート等とらせる工夫、口頭説明だけでなく黒板をもっと上手く利用する必要性を感じた。
- ・ 集中力を持続させるためにも、質問をすることが当初はあったが、なかなか返答を得られず、「～と考える人は？」などと、挙手をさせる方法をとるようになった。しかし、それも機会が多いとはいえ、集中力を高める方法、睡眠防止策等を再検討する必要性を感じた。

- 講義配布資料
- ・ 書き込み前の状態

2012/1/31

医療の特殊性と政策介入の意味

1. サービスの特性とは

①在庫の不可能性

・  
・  
・

。そのため、  
もできない。

②無形性

、あるいは  
そのものであり、 はできない。

1

2012/1/31

③(生産と消費の)時間と空間の一致性

いないと、取引が成立しない。 に

④一過性

ものであるため、  
はできない。

2. 医療サービスの特性とは

①情報の非対称性

サービスの提供者は、 に比べて、  
を多く持っている。

2

②不確実性

消費者にとって、  
は予測しにくく、  
その利益は完全に予測できない。

にとって、

③外部性

が、本人だけでなく、他者にも  
わたる。

④価値財

に関わらず、  
という、社会的な価値  
判断が働くモノ・サービス。

3. 政策介入の必要性

3

医療サービスの需要と供給に  
対する政策介入

①  
②  
③  
④  
⑤  
⑥

医療保険を市場メカニズムに  
まかせるとどうなるか？

で保険料を決定  
(例えば年齢、性別)

⇒ 保険に加入  
保険の市場は

「公的医療保険」を設ける

ではなく  
⇒ も加入させる  
に応じた保険料  
⇒ で加入  
(窓口負担)  
⇒ をめざす

公的医療保険の問題点

消費者側が  
+  
を持つ  
が行われる可能性  
⇒  
(病床数、平均在院日数の規制等)

4

- 書き込んだ後の状態

2012/1/31

医療の特殊性と政策介入の意味

1. サービスの特性とは

①在庫の不可能性  
 貯蔵できない。そのため、  
 ・計画生産  
 ・見込み生産  
 ・輸送 もできない。

②無形性  
 無形の生産物、あるいは人間の労働  
 そのものであり、目で見ることができない。

1

2012/1/31

③(生産と消費の)時間と空間の一致性  
 生産者と消費者が同じ時刻、同じ場所に  
 いないと、取引が成立しない。

④一過性  
 一定の時間にのみ成立するものであるため、  
 ・返品  
 ・転売 はできない。

2. 医療サービスの特殊性とは

①情報の非対称性  
 サービスの提供者は、消費者に比べて、消費者が消費すべきサービスに関する情報を多く持っている。

2

**②不確実性**

消費者にとって、サービスの消費時期・消費量は予測しにくく、サービスの提供者にとって、その利益は完全に予測できない。

**③外部性**

サービスの消費(未消費)による利益(不利益)が、本人だけでなく、他者にもわたる。

**④価値財**

購買力の多寡に関わらず、消費が保障されるべきであるという、社会的な価値判断が働くモノ・サービス。

3. 政策介入の必要性

医療サービスの需要と供給に対する政策介入

- ①免許制度の制定
- ②サービス価格(点数等)の規制
- ③民間企業の参入禁止
- ④広告規制
- ⑤公的な医療保険制度
- ⑥サービスの供給量規制(地域医療計画等)

医療保険を市場メカニズムにまかせるとどうなるか？

各人異なる不確実性 分からない！

分かる指標で保険料を決定  
(例えば年齢、性別)

不確実性(リスク)の高い人

保険料が安いと考える人ほど保険に加入  
⇒逆選択 保険の市場は成立しない

「公的医療保険」を設ける

任意加入ではなく強制加入  
⇒不確実性の低い人も加入させる

所得に応じた保険料  
⇒所得の低い人も低い保険料で加入

低い自己負担(窓口負担)  
⇒早期治療・完全治癒をめざす

公的医療保険の問題点

消費者側が医療サービスの購買力を持つ

+ 情報の非対称性

過剰な、あるいは不必要なサービスの取引が行われる可能性

⇒ 供給量の規制で対応  
(病床数、平均在院日数の規制等)

## 2. 国際経済学科

- (1) 実施者：正宗 聡（国際経済学科）
- (2) 実施期日：平成 24 年 1 月 31 日
- (3) 実施科目：「時事英語」
- (4) 参加者：1 名
- (5) 後期の授業では、英語で書かれた時事問題を扱ったテキストを用いた。テキストは受講者各自に好きなものを新聞や放送局のホームページから探してくるという仕方で賄った。毎回の授業では 2 名ずつ、自分の選んだテキスト（分量としては A4 サイズで 2 枚程度）を基に、1) その要旨；2) 重要な語彙や構文；3) その他、を自分で書いたレジメを用意し、授業にて発表してもらう（1 名につき 15 分程度）。そして、その後で講師、また他の受講生からの質疑応答という形式で進めて半期に渡り行った。テキストのトピックとしては、I-Phone 4 の発売、スズキとフォルクスワーゲンとの提携解消問題、COP17、火星探査機打ち上げ、アメリカ大統領選など多岐に渡った。

ピアレビューの行われた日の授業は後期の最終授業であったため、言わば「総集編」として受講者全員にひとりずつ、1) 改めて担当したテキストの要旨（10 月、11 月に扱った内容はこの時点になると誰もよく覚えていないものである）：2) テキストそしてこの授業を通じて総合的に学んだこと、の 2 点を言ってもらった。人によっては 15 分ぐらい要する発表もあり、結果的にほぼ 1 コマ分の時間を要した。

### 1. ピアレビューの内容

後期最後の日（翌日から試験期間開始）だったので、来て下さった先生は同じ英語担当の鴨川 啓信先生で一人であった。以下、いただいた貴重なご意見・ご感想を記す。

1) 市販のテキストを使うと、内容が決まりきったものになったり（中には受講生の関心を呼ばない類のもの）、内容が幾分、古かったりしがちである。この授業のように、学生にテキストを好きに選ばせて使用するというのは、そうした問題をクリアするとともに、学生の主体性を高める点でも効果的ではないか。

2) 適切な人数で授業が行われており、アットホームな感じで進められているのが良かった（このくらいの人数だと、受講生全員の顔と名前は覚えられる）。

### 2. その他

以下はこの授業を担当してみた担当講師自身の反省である。

1) 「時事英語」における「時事」の部分は、講師自身が日ごろからよく見聞きしておかないと、わからないだろうことがたくさんあった。仮に同じ内容が日本語で書かれていたとしても、把握しにくいところが多くあった。

2) 「時事英語」独特の英語については、講師の力が不足していて、授業では展開できなかった。今後の課題としたい。

### 3. 経済法学科

実施日時 : 平成 23 年 6 月 13 日 (月) 10:20~11:50  
講義科目 : 憲法 I  
担当教員 : 梶原健佑 (経済法学科准教授)  
講義教室 : 経済学部 C201 教室  
参加教員数 : 4 名 (担当教員除く)  
講義内容 : 二院制について  
(配付・投影資料は別紙)

#### I. 講義の概要

二院制につき、パワーポイントを用いながら講義した。講義の展開は次のようである。①我が国の二院制の理解を深めるべく、諸外国の二院制を概観。②我が国の参議院が (他国と比較したとき) 強い権能を持っていることを、衆議院の優越に関する憲法規定に照らし合わせながら確認し、その理由が議員選出方法にあることも説明。③議院の権能として、とりわけ議院規則制定権の論点を詳しく解説した。

#### II. 担当教員が講義の実施に当たって工夫していること

##### ①学生がただ聴くだけにならない講義

学生には毎回、レジュメを配布しているほか、教科書と六法の携行を指示している。

パワー・ポイントのスライドをそのままコピーして配布すると、学生が「ただ聴くだけ」になってしまうため、配布のレジュメは講義の進捗計画を示すとともに、資料集の役割を兼ねたシンプルなものとしている (原則として、A3 で 1 枚)。

学生には適宜、六法、教科書、レジュメ、スライドへの注意を促しつつ、自ら手を動かしながら学習させるようにしている。

##### ②学生にとって見通しのある講義

学生の集中力を途切れさせる要因は、教員が扱っている話題が何のために話されているか理解できない点や、途中で講義の筋を見失ってしまう点等にあるようである。これに対応するため、毎回、講義冒頭に「本講の見通し」というスライドを見せて、講義の粗筋 (着地点) を示すようにしている。また、レジュメにも「本講のポイント」欄を設け、講義の肝がどこにあるかを意識させるようにしている。

講義の最後には「本講のまとめ」というスライドを設けて、教員が 90 分間で何を習得して欲しかったのかを示すようにしている。

##### ③視聴覚教材を用いた講義

文字だけを追わせる講義では学生が興味・集中を持続させることができないように見えるため、パワー・ポイントのスライドには、必要に応じて画像 (写真・イラスト) や動画を用い、学生が視聴覚から得られるイメージを基礎にして講義内容を理解できるよう工夫している。

##### ④教科書を読むだけでは不足する知識を伝える講義

教科書には執筆時点までの情報をコンパクトにまとめなければならないという限界がある。これを補うことができる点に、「講義」のメリットのひとつがあると考えられる。そのため、教科書出版後の最新判例の動向や新しい法制度の紹介、時事問題の憲法学的解説等を、時間と教員の能力が許す範囲で盛り込むようにしたいと考えている。

#### III. ピア・レビュー参加教員のコメント (要旨、順不同)

- ①簡潔なレジュメ、映像資料等を利用して、学生が目と耳から内容を理解しやすい講義だった。
- ②「講義のまとめ」というスライドは効果的だと思う。

③時事ネタを盛り込んでいて良かった。

④学説の細かな分岐に時間を割くよりも、学説相互の大きな対立軸がみえる方が学生の理解に資する。

⑤遅刻学生、寝ている学生、ノートを取らない学生が、しばしば見られる。また、履修登録者数からすると欠席者が多い。

#### IV. 講義を終えての反省点等

(講義担当者として)

①動画の利用に好意的なコメントをいただいた。これまで新聞やニュースをあまり見てこなかった学生にとっては、国会や内閣などのイメージは沸きにくいと考え、視聴覚教材の利用を進めている。今後も効果的な利用を検討していきたい。

②「講義のまとめ」と題したスライドに好意的コメントを寄せていただく一方で、「学生がそのスライドだけに集中している」との指摘もいただいた。この点は講義担当者も気にしているところであり、学生が「とりあえず、そこだけ覚えればいい」という雰囲気になってしまっているような感想を持っている。工夫が必要と考える。さらなる

③憲法学における時事ネタの多くは「政治」に関係しているところ、受講学生（多くが2年生）は新聞報道やテレビ・ニュースにあまり触れていない（関心がない）ようであり、その点が気掛かりである。

④法学教育においては、学説の対立と判例の謂いをいかに効率的かつバランス良く教授するかが課題となる。時間的制約もあるなかで、山口大学の学生に伝える情報量は、ある程度制限した方が良いとの経験に基づくご指摘はたいへん示唆に富んでいる。講義するテーマの取捨選択を含め、今後さらに工夫していきたい。

⑤イヤイヤ出席することで結果として講義の規律を乱す学生を減らすために出席を取らない方針にしているが、確かに、履修登録者数からすると2分の1乃至3分の2程度の出席にとどまっている。居眠りしている等、意欲の乏しい学生に注意したり、起こしたりすると授業のペースが崩れることもあり、とりあえず、周りに迷惑がかからない程度であれば放っている。双方向の講義を試みたり、教場を歩き回ったりといった改善策を、今後試みたいと思う。

(FD 評価委員として)

学科の会議において、公開授業の選定方法について意見が出た。すなわち、現在はFD 評価委員になった人や若手教員など学科内で断り切れなかった人が、やむなく公開しているように見えるが、今後は「この先生の授業が見たい」といった希望を募って、希望が多かった人に（半強制的に）引き受けてもらうのが望ましいのではないかと考えている。

FD 活動の本来の趣旨が、講義担当者のスキルアップであるとともに、ベテラン教員の培ってきた有効な講義をする上での工夫を共有し学科の講義レベルを全体として向上させていく点にもあるとすれば、上述の意見も尤もである。次年度以降の学科内での検討事項として次年度の委員に引き継ぐほか、学部の委員会にも問題提起したいと考えている。

## 4. 観光政策学科

テーマ：授業に視覚教材をより多く使う工夫

授業科目名：異文化コミュニケーション

担当教員：武本 Timothy

経済学部：経済学部 2 年生

受講者数：約 40 人（学生）

授業形式：講義とセミナーの中間

教材・メディアなど：パワーポイント

工夫のポイント：多くの視覚教材をパワーポイントに取り入れること

キーワード：視覚教材，映像的思考

「百聞は一見しかず」とは、英語圏でも「A picture is worth a thousand words」と言われますが、日本の学生の思考様式が特に視覚的、あるいは少なくとも非言語的という研究 (Kim, 2004; 武本 2005) もあります。

Kim (2004) は授業でアジア人が欧米人ほど発言をしないことの原因を考察するために、言語と思考の関係を調べる比較文化心理学の実験を行った。①課題について自分と話す**言語活性条件**、②「あ、い、う、え、お」(ABCD) を繰り返させられる**言語抑制条件**と、③**統制条件**で、映像的な知能テストを課せられた米人は、統制条件と比べると、話しながらの条件①においては課題解決能力が上手になり、言語抑制条件②では、課題解決能力が極端に下手になります。しかし、東アジアの被験者となると、言語抑圧条件の方では課題解決能力はあまり変わらないが、自分と話しながらの条件では、課題が解決できなくなります。Kim は東アジア人は、非言語的な思考様式があるから、課題についての言語を喋らせることも、2重に課題を与えることになるかと論じます。

その研究を受けて、著者は肯定的な形容詞をできるだけ多く思い浮かべるという課題を、①多くのイメージを想起させる**イメージ活性条件**、②白い壁を想像する**イメージ抑制条件**と、③**統制条件**で調べた結果、アメリカ人が言語的思考を操作させられると似ているようなパターンを得ました。日本人の学生は、統制条件と比べて、イメージを想起しながらの問題解決能力が上手になり、イメージを抑制させられた条件においては極端に下手になるという結果が得られました。

そういった実験をさせておき、授業では、居眠りしそうになっていた学生がスライドを見て、試験でも映像を答案用紙に利用すると正解率が倍増するという経験から、できるだけ多くの視覚教材を授業で使っています。1 コマの授業に、映像のあるスライドを 100 枚以上使うことがあり、授業が面白いと好評ですので、今回の「ヒント」では、映像の入手の仕方についての説明をします。

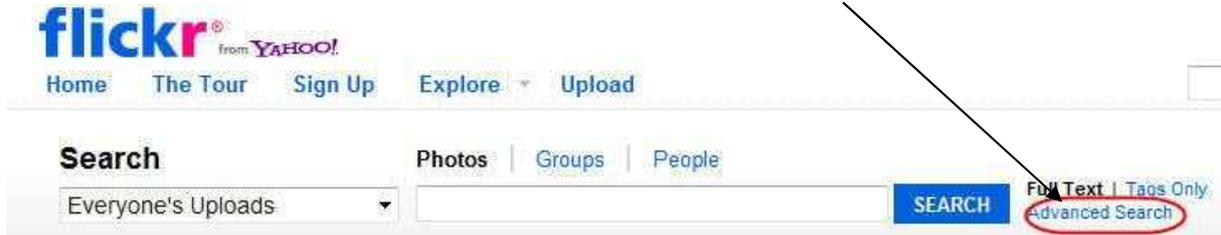
教室では著作権のある映像を使うことは合法という理解でいますが、資料を学生に配布したりしたいから、著作権問題のない映像を使うようにしています。自分で写真を撮影することがありますが、著作権問題のない映像を入手することが望ましいです。そこで、最近では、「写真家の名前を明記すれば」や「非営業目的であれば」などという条件で「クリエイティブ・コモンズ・ライセンス」付きの写真のネット掲載が多くあります。このような映像を使うことが無難です。

クリエイティブ・コモンズのサイトからも映像を検索することが可能ですが、著者は flickr という写真家のための、英語版 Mixi (SNS) というサイトを利用しています。その方法を説明します。

1.1) flickr.com のトップページから「Search」をクリック



1.2) <http://www.flickr.com/search/> 検索画面では「Advanced Search」をクリック

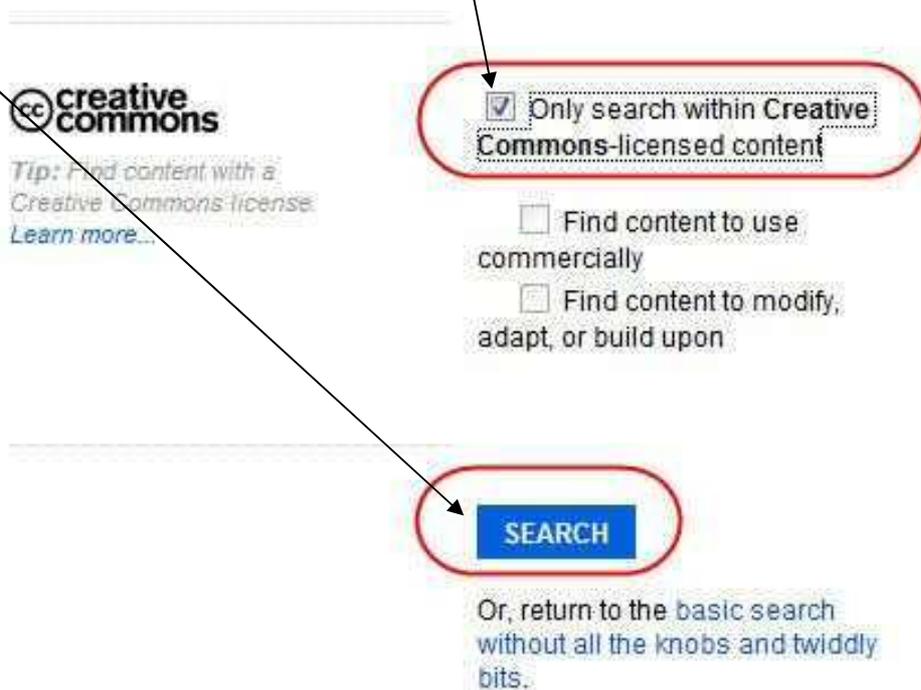


1.3) <http://www.flickr.com/search/advanced/> アドバンスド・サーチ（高度検索画面）では検索語（この場合では「縁側」です。多くの日本語のついた写真もあります）を入力してから、

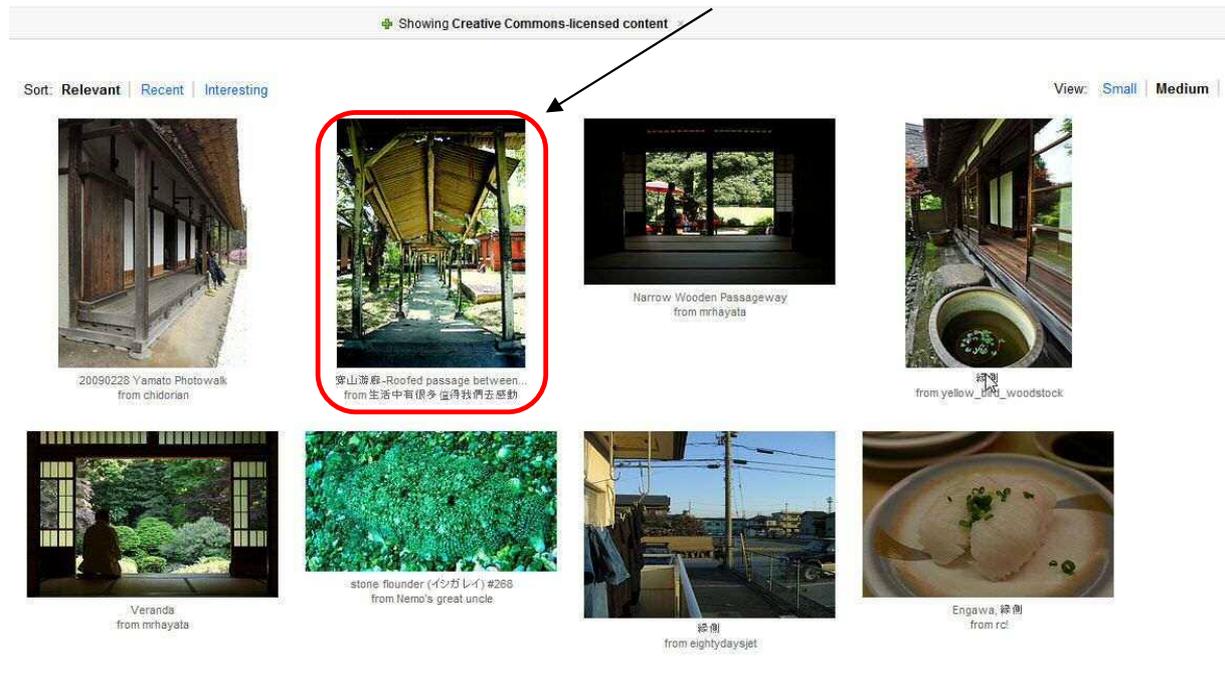
## Advanced Search



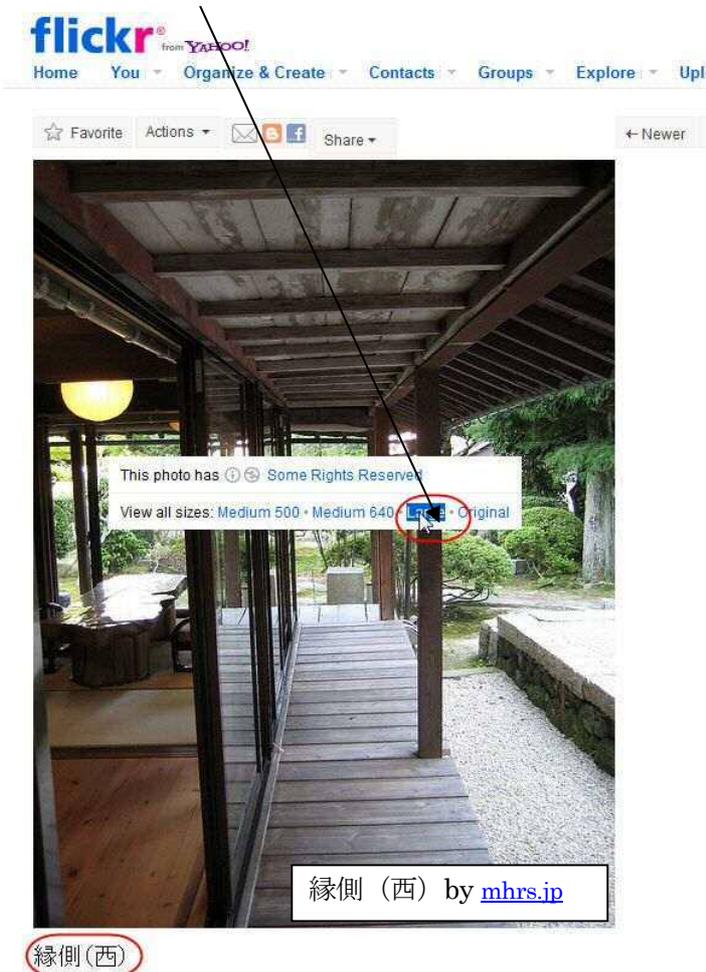
1.4) クリエイティブ・コモンズ・ライセンスのチェックボックスをクリックします。そして Search 検索をクリックします。



1.5) 検索結果画面で適切な映像がありましたら、その映像をクリックし



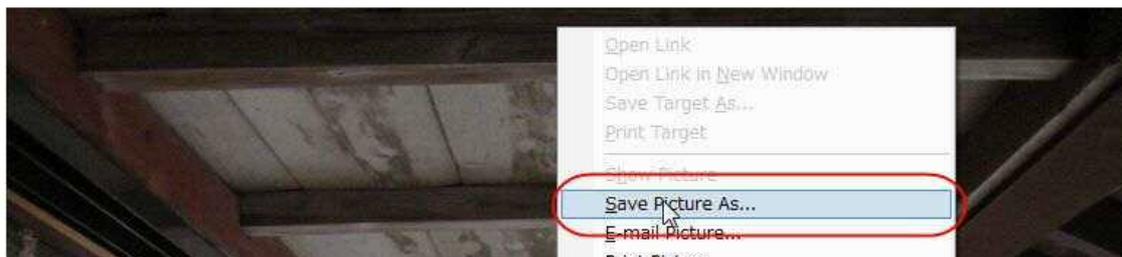
1.6) 映像画面では、まず画像の題名をコピーしておいて、映像をマウスの右ボタンでクリックして、Large（大画像）をクリックします。



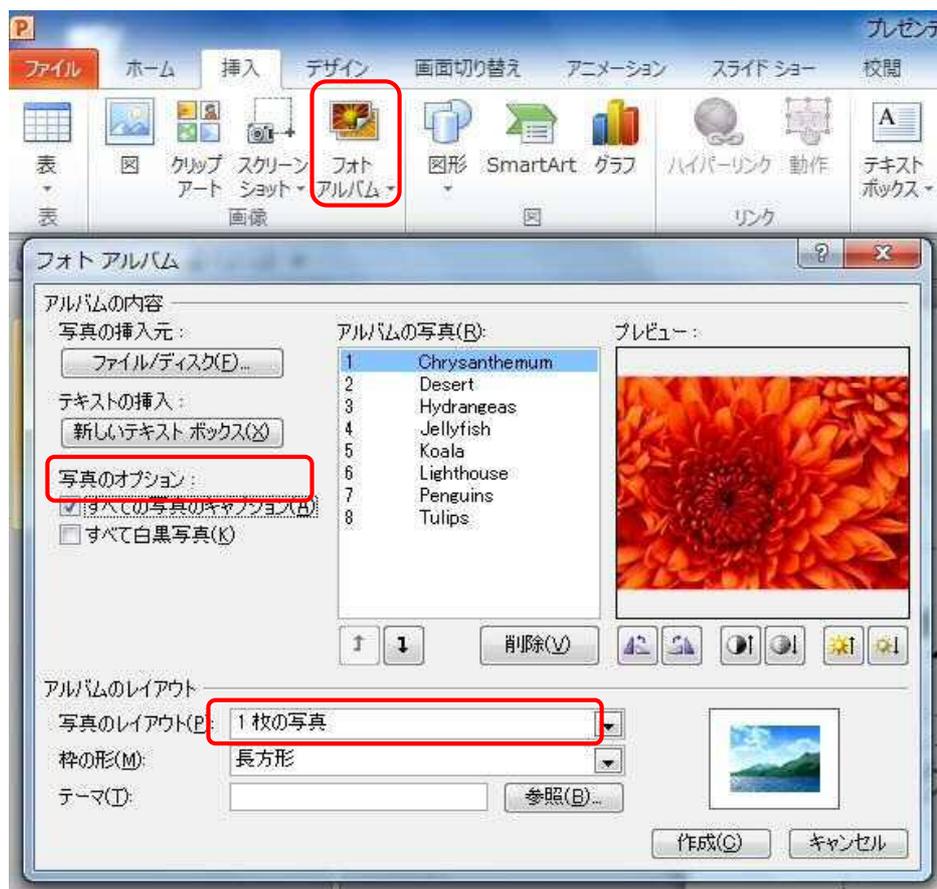
1.7) 画像ダウンロード画面ではまた画像を、マウスの右ボタンでクリックして「ファイルとして保存を選択し」ファイル名にコピーされた「画像の題名\_写真家の名前」と名づけることにしています。写真家の名前はダウンロードページにあります。

## Photo / All sizes

License	Some rights reserved by mhrrs.jp					
Download	Download the Large size of this photo (All sizes of this photo are available for download under a Creative Commons license)					
Sizes	Square (75 x 75)	Thumbnail (75 x 100)	Small (180 x 240)	Medium 500 (375 x 500)	Medium 640 (480 x 640)	Large (768 x 1024)



1.8) 保存された画像をパワーポイントに取り込むときに「フォトアルバム」の挿入機能の中の、「写真のレイアウト:1枚の写真」と「全ての写真のキャプション」オプションを使いますとクリエイティブ・コモンズ・ライセンスの条件である出典の明記は自動的にスライドに挿入されます。



成果・効果

学生がより注意深く講義に参加し、内容をより多く覚え、思考が活性化されると思われます。

## 第2節 学部・研究科主催FD研修会

### 1. 学部・研究科主催FD研修会

日程：平成23年11月16日(水)

[吉田地区] 16:00~16:40

場所：経済学部 会議室

講師：岩部 浩三（大学教育センター長）、吉村誠（学生支援センター長）

参加者：42名（アンケート回収 18人）

（内容）

研修会では、本学で次年度以降に導入を目指しているポートフォリオについての情報の共有と意見交換を実施した。

最初に岩部大学教育センター長から、ポートフォリオ導入の背景として、平成23年度4月に行われた大学設置基準の改正に伴って、「大学は、当該大学及び学部等の教育上の目的に応じ、学生が卒業後自らの能力を発揮し、社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を、教育課程の実施及び厚生補導を通じて培うことができるよう、大学内の組織間の有機的な連携を図り、適切な体制を整えるものとする」という項目が加わったこと、これを受ける形で山口大学の平成23年度計画においても「学士課程を通じてキャリア意識を高めるため、ポートフォリオを全学的に導入する」、「ポートフォリオを用いた支援を通じて学生のキャリア意識を高めながら自発的な学習を促す」という2項目を挙げて現在なぜポートフォリオを導入しなければならないのかについて背景説明が行われた。

次に、学生支援センターの吉村センター長より、「山口大学におけるキャリア教育体制の拡充とポートフォリオ」と題して、就業力支援から見たポートフォリオ導入の必要性の観点から、出口の課題として、「大手・有名就職先が少ない中、早目の準備と実力アップ」、「就職先希望の集中に対して、視野を広げ、社会を知ること」、「就業力の弱い学生に対して、早期発見・重点支援」が必要であることを実際に利用されている企業（オムロン社）のエントリーシートを事例に挙げて説明が行われた。

（質疑応答）

研修会では以下のような質問があった。

1件目は2年前に教学委員会で議論された内容と今回のポートフォリオの説明でどのように変わってきたのかという質問であった。これに対して、当初はポートフォリオの捉え方は委員の中でも様々であったが、ポートフォリオ導入は「学生生活を充実させる」ための手段の一つとして教員との面談など通じて学生自らが今後の学生生活を充実させるきっかけとする必要があり、さらに就業力の育成に結び付けばよいと考えている。したがって2年前とポートフォリオの捉え方は大きく変わっていないという見解が示された。

2件目の質問は今回の説明でキャリア教育に関連して「内省」が重要であるということを示されたが、今回のシステムの中でそれをどのように反映させていくのかという質問があった。これに



設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	1	5.6%
良かった	4	22.2%
どちらとも言えない	9	50.0%
あまり良くなかった	3	16.7%
良くなかった	0	0.0%
無回答	1	5.6%
合計	18	100.0%

対して入学してから現在までに学生が取り組んできたことを考えるきっかけにするとともに、今後の目標を持たせることが重要であり、システムとしては Excel シートに内省した内容を学生に記入させ、教務システムにアップロードする機能を追加することによってそのファイルをサーバーに保存・管理すること考えていることが明らかにされた。

3 件目の質問は、教員のサジェッション（指示）の仕方が難しいと思うが、専門家と教員との役割分担が必要ではないかという質問があった。これに対して、就職支援室には確かに進路カウンセラーなどの専門家が配置されているので活用して欲しいが、先生方をお願いしたいことは日常の学習や研究に対する指導や指示を中心的に実施して欲しい。したがって、ポートフォリオ導入に際して今までと異なる、何らかの新たな指導法を試みて欲しいとは考えていない。また、学生がどれだけ真剣にポートフォリオを記入するかわからないが、ポートフォリオの記入を通じて普段十分話ができなかった内容について学生と時間をかけて話し合うきっかけになればよいと考えているという見解が示された。

4 件目の質問は、この仕事は誰が担当するのかという質問があった。これに対して、全学で対応するために、一義的には教務や学生指導などを一体的に取り扱っている全学組織である「教学委員会」を通じて各学部をお願いすることになる。ポートフォリオ導入は教育指導、学生指導、就職指導などの多岐の分野におよぶ事項を含んでいるためそれぞれの学部が全体で取り組むことになるという見解が示された。

## 2. 山口大学における国際活動へのヒント～事例紹介を含めて～ (アラカルト方式による研修会)

日程：平成 23 年 12 月 21 日(水) [吉田地区] 16:00～17:30

場所：経済学部 A 棟 2F 第 1 会議室

講師：今津 武 (経済学部教授[特命])

参加者：46 名

### (1) 内容

グローバル化社会の中で、大学間の競争は教育・研究両面において厳しさを増しつつある。こうした状況において、日本の大学の国際化が不十分であるとの指摘も多く、文部科学省も大学の国際化を迅速に行う必要があると考えている。本学においても、『国際社会への貢献』、『国際社会の要請に応えた人材育成』、『国際的な共同研究と研究者交流』等の目標を掲げて積極的に国際化を図る方針を打ち出している。しかしながら、「大学の国際化は必要なのか?」、「大学にとっての国際化とは何か?」という疑問を持つ教職員も少なくはなく、これらについての共通認識が十分とはいえない。そのため具体的に何をすべきか、人材と資金を誰がどのように準備するのか等の議論が進んでいない。本研修では、これまでの山口大学における国際化関係の活動の紹介をするとともに、大学の国際化とは何か、国際化に向けての活動にはどのようなものが含まれるかについて以下の視点から説明が行われた。

### (2) 研究活動の国際化について

研究活動の国際化においては、国際的な場で自らの研究を遂行するための能力の習得を支援するという意味で、教員の外国語能力の向上や外国語による授業方法の改善等に関して大学として体系的な方策が必要である。

### (3) 教育の国際化

大学教育における国際化というと「留学生の受け入れ」に偏りがちであるが、日本人学生の語学力や国際的な場で自分の意見や考えを述べる力(ディベート力)、自分とは異なる文化や論理に柔軟な対応ができる能力を涵養するために、日本人学生に海外経験をさせる機会を増やす必要がある。例えば、

モンゴルに設立された「新モンゴル高校」においては、日本や海外への留学を視野に入れたカリキュラムを設け、留学によってこれらの能力を涵養しようとしている。このような取り組みが日本の大学においても必要ではないか。

#### (4) 国際化推進支援体制の在り方

教員や職員の国際化に対する共通認識が十分でない状態において、大学にどのような組織や体制が必要なのかに関する議論が不足していると思われる。教員と事務の互いに全く別の組織が重なり合うような新たな組織を構築しても国際化を進める原動力を得にくい構造であるのかもしれない。教員と事務の組織を統合して「国際化センター」といった形で組織の一元化が必要かもしれない。また、大学外に幅広いネットワークを有する外部人材の登用も有効ではないだろうか。

#### (5) 国際貢献に対する評価と周知に関する問題点

山口大学憲章や「明日の山口大学ビジョン」では、国際貢献に関する積極的な姿勢を謳っており、各学部・研究科においては個々の教員の努力によって JICA や ODA、JENESYS 等への積極的な協力が既に行われている。しかしながら、このような活動に参加する教職員の努力が十分に評価されず、学内におけるこれらの活動の周知も十分に行われていない点を改善すべきである。

また、これらの説明に加えて本学の国際活動を推進する組織である国際協力活動推進プラットフォームの紹介および山口大学大学院経済学研究科「公共管理コース」における国際化に関する取り組みに関して説明がなされた。

研修会後のアンケートでは、表1のように「非常に良かった」、「良かった」と回答した参加者が全体の半分を上回っている。具体的な感想としては、「教育面で日本人学生を海外に派遣することの重要性については同感する」、「留学の機会拡大に賛成である」、「学生を海外に連れてゆくための資金援助などの支援が欲しい」、「具体的な国際活動についてよく分かった」、「商品資料館の国際情報室についてももう少し聞きたい」、「英語で授業することはかなり難しい」といった回答が寄せられた。

(6) 今後取り上げてほしいテーマについては、「日本の国際化について」「大学の国際化」、「学生のメンタルに関するテーマ」、「英語で講義を行うための研修」等の回答が寄せられた。

**表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？**

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	8	17.4%
良かった	18	39.1%
どちらとも言えない	10	21.7%
あまり良くなかった	3	6.5%
良くなかった	2	4.3%
無回答	5	10.9%
合計	46	100.0%

### 3. 経済学部 FD 研修会「大学生のメンタルヘルス入門」(学科による研修会)

日程：平成 23 年 11 月 30 日(水)  
 [吉田地区] 13:00～14:30  
 場所：経済学部 B 棟 2 階 B201 講義室  
 講師：今井佳子 カウンセラー  
 山口大学学生相談所 臨床心理士  
 参加者：7 名



#### 内容

本研修会では、本学における学生相談所の状況を中心に、大学生のかかえる心の問題について講演が行われた。学生相談所には、いろいろな悩みを抱えた学生が相談に来るが、その悩みはゼロにはできないので、少しでも軽減できるよう活動されている事を述べられた後、ここ数年は毎年 150 名前後の新規相談者が学生相談所に訪れており、延べ面接回数は年間 1200 回前後に上ることが紹介された。講演の中でポイントとなりそうに思えた内容のいくつかを以下に列挙する。

- 精神的な病気は目に見えない。五体満足でも悩んでいてそれが辛い。目に見えないから理解してもらえない。本人も分かっておらず自分は単に怠けているだけじゃないかと悩んでいる。
- ゴールデンウィーク明けや、夏休み明け(10 月)に相談件数が増える傾向にあり、男女比に差はほとんどない。冬休み前には、後期の単位が取れるか等の悩みも多い。
- いろいろな方向から話を聞いている。相談内容を他の人に聞かれない空間が大切。まず、主訴を聞き、その心当たりを聞いている。1 つ目では分からないが 2～3 聞くと、そこに(原因に)近い内容が含まれていることが多い。
- 何もかもがうまく行ってないと悩んでいる学生も、必ず出来ているところがある。自信を持ってもらうためにそれを探してあげる。
- 8 割方の学生は死にたいと口にする。ドキッとするが、言わせないと云えない苦しみがある。深刻そうな学生には死にたいと思った事あるのかと聞いて、死んでほしくないことを伝える。
- 友達とワイワイやっているグループに入りたいが、悩むという少数派にいる劣等感を感じている。過呼吸やリストカット等、頭でなく体で反応する、行動化する学生が多い。
- 相談があると言って来る学生は第一段階をクリアしている。黙って立っている学生が多い。
- 日本は自殺大国(年間 3 万人、1 日 80 数人)。社会的環境にも左右される。今年は福島のことがあったので自殺率が上がっていると思う。自殺の原因はわからない事が多いが、去年は就職失敗を理由とした自殺が増えた。就職失敗による大学生の自殺が全国で 40 数名。
- 不登校は先生も保護者も困る。カウンセラーも困る。相談に来た子には来なくなったら連絡して良いかメールと電話のどちらが良いかあらかじめ聞いている。連絡しても返事はないが、連絡がないと見捨てられたと思うらしい。先生方も負担にならないように 1 ヶ月に 1 回等決めてメールすると良いと思う。
- 大学に来てないねとか、テストが近いとか、単位がマズイとか言われるとどうしようもなくなっ

#### 設問 1

#### 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合 (%)
非常に良かった	3	50.0%
良かった	3	50.0%
どちらとも言えない	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	6	100.0%

ちやうので、眠れているか？食べられているか？等の基礎的な事を聞くのが良い。健康な子でも1日1食の子はいるので、1食でも食べていけば良いと思う。

- 大学生の1%は不登校。1万人なら100人(うち30人は長期ひきこもり状態)。院生は学部生より比率高い。契機は学業の躓き(33%)、精神保健上の問題(26%)、対立・対人関係(14%)。

8月31日に行った理学部FD研修会の内容とも共通する内容があるので参照されたい。

質疑では実体験に基づく質問が多く出た。アンケートの今後参加したい研修には、「学生指導の手法・技能」、「学生への対応」、「今回のような、学生への対応に関する研修」が挙げられていた。

### 第3節 教育改善に関する活動

経済学部では「経済学入門」という小冊子を作成し、学生に配布している。その内容は、教員ごとの授業科目、研究領域などについてわかりやすく紹介したものである。教員によっては、前期試験および後期試験の内容を公開している。

### 第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

#### ①平成23年度の状況

学生授業評価は下記の数字で確定しているが、教員授業自己評価は平成24年3月14日現在の数字である。

学部学生授業評価	82.5%	卒業論文演習、演習Ⅰ・Ⅱを除く
大学院学生授業評価	47.4%	演習、セミナーを除く
学部教員授業自己評価	27.8%	卒業論文演習、演習Ⅰ・Ⅱを除く
大学院教員授業自己評価	31.7%	演習、セミナーを除く

#### ②経年変化についての分析・記載

	2005	2006	2007	2008	2009	2009	2010
学部学生授業評価	89.6%	90.45%	89.15%	92.1%	87.9%	88.0%	82.25%
大学院学生授業評価	—	—	—	54.3%	48.7%	39.1%	47.4%
学部教員授業自己評価	—	—	38.9%	47.5%	31.3%	43.2%	27.8%
大学院教員授業自己評価	—	—	36.5%	58.1%	49.2%	47.8%	31.7%

## 第5節 FD実施経費報告

### 平成23年度 各学部・研究科FD実施経費報告票

部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費 謝金等)	執行額 (千円)	FD活動の効果 (簡潔に)
経済学部	学部学生に対する 授業	書籍	83	ピアレビュー後, 授業方法に関する図書を資料 とした授業研究会を開催し, 授業方法に関する 理解を深めた。
		消耗品	5	
経済学研究科	学生に対する授業	書籍	22	
計			110	

## 第6節 来年度の課題

山口大学では少なくとも2007年度以降教員が自分の授業の自己評価をし、そして、学生が教員の実施した授業に対する学生評価を実施してきた。しかし、新年度の授業を実施するときに、前年度以前の上記実績を利用している教員はどのくらい存在するのであるだろうか。

一般に利用されているPDCAサイクルは、新たなサイクルにおけるA(活動)のために前サイクルのC(分析・改善)が利用されることが前提である。これに対して、大学の授業についてはこのサイクルが必ずしも十分に機能していないと思われる。したがって、授業評価については、その考え方を再検討する時期にきているのではないかと考える。

これに対して、FD研修会についての事後評価(アンケートを通じて得られたもの)は、多くは良い評価が得られていると思われる。教員個々人の領域とは異なった領域の研修を受けること、また研究とは異次元の研修を受けることは、教員の視野を広くする効果があると考えられる。したがって、いろいろな種類のFD研修会は今後とも継続していただきたいし、経済学部としても積極的に参加したいと考えている。

# 第7章 理学部のFD活動

## 第1節 授業公開

### 1. 数理科学科のピア・レビュー

#### (1) 実施科目「数理科学基礎セミナー」

##### 1) 概要

- ①日時：平成23年11月16日（月）3・4時限
- ②対象学生：数理科学科2年生（50名）
- ③授業概要：90分間のテストを行い、次の週に約10人ずつの6つのグループに分かれてセミナー形式でテストの内容について担当教員から更なる質問を受け、それに答えることによって理解を深めていく。
- ④授業担当教員：久田見 守、村井 聡、鍛冶 静雄、川上 裕、幡谷 泰史  
レビューアール：吉村 浩、増本 誠、中内 伸光、郷間 知巳、菊政 勲
- ⑤レビューの方法：レビューアールには予め準備したレビューシートを渡し、それに記入してもらった形をとった。

##### 2) レビュー結果

いずれのグループに対しても各レビューアールより「4」および「5」の評価があり、概ね効果的なセミナーが行われていたと判断できる。

レビューシートの自由記述欄には下記のような報告があった。

##### (優れた点)

- ・合間に、数学のエピソードなどの雑談を交えて、学生の興味を持続する工夫がなされていた。
- ・宿題を出すことにより、学生の理解を深める工夫がなされていた。
- ・学生のプリント問題の解答状況を確認した上で発表者の指名を行うなど理解力に応じた指導がなされていた。
- ・時間配分は適切で90分間滞ることなく授業が進められた。
- ・プリント問題の解説だけでなく、関連する基本事項を確認したり、別解があるかを問うなど、学生の理解を深める指導がなされていた。
- ・学生と時折談笑を交えるなど、発表しやすい和やかな雰囲気づくりがなされていた。
- ・学生の自主性を尊重しつつできるだけ満遍なく発表できるよう学生に問題を割り当てていた。
- ・学生は自分の答案を黒板の前で発表するが、その際、得てして教員とのやり取りになって他の学生が置き去りにされやすい。担当教員はそれを避ける配慮をしていた。
- ・学生が誤った部分を的確に修正したり他の学生による別解を紹介したりして、学生にとって十分意義ある授業になっていた。
- ・学生が黒板に答案を書いている間、黙って待っているのではなく、他の学生に積極的に話しかけて学生が質問するように促していた。学生との意思疎通は十分に図られているように見受けられた。
- ・説明が丁寧で、問題の意図や必要とされている知識をきちんと伝えていた。
- ・学生の気付きを促すような発問の仕方をしていた。
- ・その場で説明できない発表者に対し、単に説明して済ませるのではなく、後で答させるように時間を与えていた。

- ・学生が板書中に、残っている学生と積極的にコミュニケーションをはかっていた。また、発言の際も、コミュニケーションしやすいような雰囲気づくりを心がけているように感じた。
- ・最後に質問を受け付けて回答を行っていた。
- ・分量があるにもかかわらず、きちんと時間内に終わった。
- ・問題に関連した、重要な数学の定理や定義について丁寧な説明がおこなわれている。
- ・理解が不十分な学生への指導が適切におこなわれている。
- ・具体的な問題への一般的な数学の定理の適用、応用方法の解説がわかりやすくなされている。
- ・複雑な式に対して、いろいろな角度からのとらえ方、考え方を示すことにより学生の理解を深めるように工夫されている。
- ・全体として微分積分学、線形代数学の基本的な概念を理解習得し、問題解決力を養うという本科目の趣旨に沿う授業がされていた。

#### (改善点)

- ・発表していない学生への指導にもう少し時間をかけてはという場面もあったが時間と学生数の制約上やむを得ないのかもしれない。これは当該クラスの運営の問題ではなく、この授業科目自体の改善点かもしれない。
- ・前回の授業で提出した答案をTAが採点し、授業の冒頭で学生に返却するのであるが、授業の途中で採点ミスがあることが発覚した。担当教員は事前にTAの採点をチェックしておくことが望まれる。
- ・発表者と教授者とだけのやり取りになっているので、それ以外の学生を巻き込む工夫があるといいように思う。
- ・解説や別解を教示した際、言葉だけで済ませるのではなく、実際に発表者（もしくは他の学生）にその解答を板書させるといいように思う。（時間の制約があるので省略されたのかもしれないが。）

以上のレビュー結果を担当教員およびレビューアのみならず、数理科学科の全教員が共有し、今後の授業改善に参考にすることとした。

## 2. 物理・情報科学科のピア・レビュー

### (1) 実施科目「物理学実験 I」

#### 1) 概要

- ①日時：平成24年1月24日（火）5・6・7・8時限
- ②対象学生：物理・情報科学科物理学コース2年生（約30名）
- ③授業概要：あらかじめ設定された基礎的な8つの実験テーマの中から、各学生は5テーマを2週ずつ実験する。最後の実験についての発表準備と練習・指導を1週ずつ行った後の発表会をピア・レビューの対象とした。  
授業の到達目標：実験を通して、基礎的な実験技術を習得するとともに物理現象を理解する。また、データの解析と考察を行って、きちんとした報告書を書けるようになる。
- ④授業担当教員：朝日 孝尚、藤原 哲也  
レビューア： 輪島 清明、石黒 勝也
- ⑤レビューの方法：発表会を聴講し、学生の発表に対して質問やコメントをしてもらった。

#### 2) レビュー結果

- レビューアより以下の意見が出された。
- ・学生の発表はよく準備がなされているが、有効数字の取り方や実験結果の解釈などでまだ詰めが甘い部分がある。また、質疑応答の際に出された質問の意図を正しく理解し、的確な回答をすることが

十分にできていない。これらについては、今後の訓練で改善できるという印象を持った。

・授業の進め方、発表会の位置づけ、他の物理学実験との関係について質問があった。

## (2) 実施科目「物理学実験 II」

### 1) 概要

①日時：(1回目)平成23年6月14日(火)(2回目)8月14日(火)5・6・7・8時限

③対象学生：物理・情報科学科物理学コース3年生(約30名)

④授業概要：物理学実験 I (2年次後期開講)に続き、比較的平易な物理的概念を実験によって学習する。

授業の到達目標：物理学実験の方法といくつかの基礎的な物理概念を理解する。

④授業担当教員：藤澤 健太、輪島 清昭

レビュアー：(1回目)廣澤 史彦、繁岡 透、野崎 浩二、内野 英治、西井 淳、川村 正樹、石黒 勝也

(2回目)朝日 孝尚、野崎 浩二、内野 英治、石黒 勝也

⑤レビューの方法：受講学生の約半数による実験課題の発表会を開催し、以下の3点を中心にレビュアーの意見を文書(無記名)で仰いだ。

- ・学生の発表を聴いての率直な感想
- ・実験課題の設定や実験内容の難易についての意見
- ・本実験を通じて学生に身につけて欲しいスキル

### 2) レビュー結果

レビュアーより以下のような意見が出された。これを基に今後の講義内容の更なる充実を図りたい。

- ・非常に参考になる取り組みで、特に学生が課題にしっかり取り組んでいることに驚かされた。
- ・議論に積極的に参加している学生が一部のみになっていたため、全員が参加するようなしくみが必要である。
- ・情報科学コースの学生にも受講させたい実験テーマがあった。今後、物理学コースと情報科学コースが真に融合した形で講義・実験等を行うようなカリキュラムを考える際の参考にしたい。
- ・発表時間が足りなくなっている学生が多かったため、発表技術を向上させる取り組みが必要である。
- ・学生の発表はよく準備がなされているが、有効数字の取り方や実験結果の解釈などでまだ詰めが甘い部分がある。また、質疑応答の際に出された質問の意図を正しく理解し、的確な回答をすることが十分にできていない。これらについては、今後の訓練で改善できるという印象を持った。
- ・各学生の発表はよくできていた。
- ・実験の背景となる原理が講義や教科書で扱われている内容の課題はよく理解できている。それ以外の実験課題については学生には少し難しく感じられているようである。
- ・物理学実験 II を通じて学生には実験の計画を立てる能力と、得られた結果に基づいて仮説を立てる能力を身に付けて欲しい。

その他、授業の進め方、発表会の位置づけ、他の物理学実験との関係について質問があった。

## (3) 実施科目「物理学実験 III」

### 1) 概要

①日時：平成24年1月23日(月)5・6・7・8時限

②対象学生：物理・情報科学科物理学コース3年生(約30名)

③授業概要：あらかじめ設定された実験テーマから、半期で2テーマの実験を行う。2テーマの実験

終了後に、実験結果のプレゼンテーションを行う。テーマごとに実験レポートを作成し、数回の添削を経て、実験レポートとして完成させる。

授業の到達目標：物性物理学分野の基本的な物理現象やそれを観測する実験手法、原理・概念を説明できるようになる。決められた実験目的に対して、具体的な実験方法や手順を計画し、それに従って実験を行い、得られた結果をグラフや表にまとめ、考察し、結論を導き、報告するという一連の作業を行うことができるようになる。

④授業担当教員：野崎 浩二、藤原 哲也

レビュアー： 輪島 清昭

⑤レビューの方法：実験の結果発表会の参観し、教育効果を検証する。

## 2) レビュー結果

学生の発表は例年にも増してよく準備されており、「物理学実験 III」のより難しい課題を通じて学生が急速に成長したのを見て取ることができる。学生同士による質疑応答が例年になく活発に行われていたのは、学生が主体的に実験に取り組み、自身が行った課題（およびその他の課題）を相当程度理解していたことの現れだと考える。質疑応答の際、出された質問の意図を正しく理解し的確な回答をするということにはまだ慣れておらず、今後更なる指導が必要である。実験ノートの取り方について今後指導を強化する必要がある。

# 3. 生物・化学科のピア・レビュー

## 3. 1 生物学コースのピア・レビュー

### (1) 実施科目「生物学演習 I」

#### 1) 概要

①日時：平成24年1月19日（木）1・2時限

②対象学生：生物・化学科生物学コース2年生（約10名）

③授業概要：毎回、受講生1名が英語の教科書（発生生物学）の内容の一部を紹介し、その内容について質疑に答える。発表する内容は受講生ごとに異なり、この演習を通して教科書に記載された内容をまとめた資料（パワーポイント）の作成、理解しやすい説明、質疑に対する応答などを習得する。

授業の到達目標： 知識・理解の観点：英語の教科書の内容を理解できる。

思考・判断の観点：英文の内容について批判的評価もできる。

関心・意欲の観点：関連する文献を探して読む。

態度の観点：活発な質疑応答に参加し議論を深める。

技能・表現の観点：プレゼンテーション（パワーポイントの作成、口頭発表、質疑応答）、に必要な技術を総合的に習得する。

④授業担当教員：三角 修己、上野 秀一

レビュアー： 岩尾 康宏

⑤レビューの方法：授業を参観し、学生の様子も見ながら評価した。

## 2) レビュー結果

・演習形式の授業における学生の発表だったが、2年生としては発表内容が非常に良くまとまっていた。そのプレゼンテーションの様子から、事前の資料作成に十分な時間が費やされていること、また、そのような指導・意識づけが十分に為されている事がうかがえた。

- ・質疑応答も活発であった。質疑に対する発表者の回答が不十分である場合には、教員が補足の解説をおこない、また、発展的な関連事項に言及するなど、学習内容の理解に配慮がなされていた。
- ・学生は発表原稿を読むのに一生懸命で、若干余裕が無かった。ポイントをもっと活用して図を指し示しながら発表できれば尚良かった。
- ・発表準備のために前日までに事前の質問時間が確保されており、教科書（英語）の理解不足や読み間違いの無いよう考慮されていた。
- ・学生が教科書に従って説明しているため、発表の導入部分が（教科書の内容そのままの）過去の事例のみであった。発表の主題を分かりやすくするような導入部分を（図や写真を探して用いて）自分で作成する指導があれば尚良かった。
- ・質問の内容があいまいな場合や意図が分かりにくい場合に、質問者（学生）に対してその意義を質すことで、質問する場合に必要な考え方の指導も行われていた。

## 3. 2 化学コースのピア・レビュー

### （1）実施科目「有機構造化学及び演習」

#### 1) 概要

- ①日時：平成23年5月26日（木）9・10時限
- ②対象学生：生物・化学科化学コース3年生（38名）
- ③授業概要：有機分子の電子構造・立体構造について総合的に理解・判断する能力を養うとともに、有機化合物の構造決定に必要な各種スペクトルについて、原理及び解析方法を習得する。  
授業の到達目標：分子構造に関する様々な電子的・立体的要因について、具体的な演習を通して身につける。1H-NMR, 13C-NMR, MS, IR, UV の各種スペクトルを解析できるようになる。
- ④授業担当教員：石黒 勝也、村藤 俊宏、藤井寛之  
レビュアー：川俣 純、右田 耕人、村藤 俊宏、藤井 寛之
- ⑤レビューの方法：意見・改善点の指摘などについて、用紙またはメールにて回答。

#### 2) レビュー結果

- ①講義の内容について
  - ・立体化学の良問である。
  - ・講義内容については、重要な内容が盛り込まれていて、適切であった。ただし、内容が多すぎたと思う。
- ②講義の進め方について
  - ・時間配分を、解答ごとの質疑に重くおいた方がよいと思う。
  - ・グループ学習の利点（対話型）が活かされていて良い。
  - ・昨年度はグループごとに解答をパワーポイントにまとめて発表する形式であったために、グループリーダーの負担が重すぎた。これを改善するために、乱数でグループ分けし、グループ内の討論の前に各自の解答作業の時間を設け、その後でグループ討論を行って黒板に書く解答を話し合いで決めるという方式に変更したということであった。プロジェクターで映し出されたメンバー表が判読しづらくグループ分けに少し手間取った。グループに分かれてからの各自の解答作業の時間には、全員が熱心に問題に取り組んでいた。
  - ・問題数が多すぎた上に難しい問題も含まれていて、グループ内の討論によって正解を導くことが大変であったようであった。難しい問題はインストラクターの指示で解決できた。心配していたけれど

も、グループ内の話し合いは順調に進んでいた。しかし、中には議論の輪に入れない学生もいた。話し合いに入れない学生への対策が今後の課題として残されている。

- ・正解を導く手順は、グループによって異なっていたようである。グループ内の討論を深めるためにはどのように指導したらよいかという課題がある。このようなグループ討論を演習に取り入れることによって学生たちの debate 実施能力を育成するために有効であると思った。

- ・グループ内で合意された解答を、リーダーが一斉に黒板に解答を書いた。黒板のスペースが心配であった。何とか解答を書いていたけれども、一斉に書かせるということが技術的に難しかった。黒板に書く作業に時間的ずれが生じた。解答の書き方もバラバラになった。

### ③その他改善を要する点など

- ・議論の輪から外れてしまった学生への対策が問題である。乱数で決定されたグループリーダーの議論を進行させ能力の優劣が、グループ内の議論の深まりに関係するようだ。議論の輪に入れないタイプの学生の能力を高める（引き出す）ためには、個人のレポートを作成させるという方法もあるのではないか。

- ・グループによっては考える学生が決まってしまう、何もしない学生もいる（結論が出るのを待っている受け身の学生）。

- ・グループ内の議論の輪に入れない学生への対策をどのようにしたらよいかという点が気になった。このタイプの学生はレポート提出で救っていくしかないと思う。

- ・結合の長さ、角度をノートするときに適当に書く学生が増えている。適切な長さ・角度で構造を書く習慣がつくようにしてほしい。

## （２）実施科目「化学数学及び演習」

### 1) 概要

①日時：平成24年1月30日（月）7・8時限

②対象学生：生物・化学科化学コース2年生

③授業概要：自然界で起こるいろいろな現象を理解する上で、数学は非常にすばらしい道具である。

この授業では、化学で使用される数学のうち、偏微分、常微分方程式、偏微分方程式、フーリエ級数、群論、行列と行列式等の基本的数学について具体的応用例をあげながら解説する。講義と演習形式の授業をとおして、基本的数学を修得する。

授業の到達目標：分子構造に関する様々な電子的・立体的要因について、具体的な演習を通して身につける。1H-NMR, 13C-NMR, MS, IR, UV の各種スペクトルを解析できるようになる。

補足：化学で使用される基本的数学に慣れ、自分の力で演習問題を解けるようになること。

④授業担当教員：本多 謙介、谷 誠治

レビュアー：石黒 勝也、川俣 純、村上 良子、藤井 寛之

⑤レビュアーの方法：実施後のアンケート調査により、授業内容、授業の進め方、その他改善を要する点についての意見を用紙またはメールにて回答。

### 2) レビュー結果

①授業内容に対する意見

- ・レビュアーには難しい内容と感じたが、学生は課題を解けるので、教育されてると関心した。
- ・有機化学ではなじみのある分子ではあるが、別の角度から分子を知る事ができ、とてもよかったと思う。

- ・教案に基づく対称性の理解には十分だと思う。この内容と、化学の他の現象との間を関係を定性的に理解させるとなると良いと思う。

②授業の進め方

- ・質問や課題などをおりませている点で良い。

・演習形式では、できるだけ学生に説明を求める事になるが、学生から十分な解答が得られず、その分だけ時間がかかってしまう。進行が遅れる点（学生の基礎学力と表現力の向上）が改善されるとより良くなると思う。

・最近の学生は空間を理解するのが難しいので、平面の紙や板書だけでなく、三次元を考えるモデル（模型）の利用を検討されてはいかがか。

③その他改善を要する点

・理解できていない学生に対してどのように対応するのか。

・講義時間中に発表する学生に限られてしまうので、発表者以外は緊張感が少ないようである。多くの学生を当てるなどして良い緊張感を持続させると良いのではないか。

## 4. 地球圏科学科のピア・レビュー

### (1) 実施科目「野外実習」

#### 1) 概要

①日時：平成23年11月16日（水）7・8時限

②対象学生：地球圏科学科3年生（24名）

③授業概要：実際に野外調査を行い、地質調査の方法、地層や岩石の観察法、データの解析法、地質図の作成、調査成果の発表、論文の書き方、等について基本的な能力を養う。特定地域を4-5名程度の班に分けて分担し、共同作業を通じてグループ調査のやり方や協調性を身につける。本年度の実習地は、山口県萩市須佐町周辺である。

授業の到達目標：講義や実験で学んだ知識や技術を実際に野外で適用し地質や地質構造などをグループに分かれて明らかとする。これらの作業を通じて、学習教育目標E, F, G, Hの「調査計画の立案、調査、成果の取りまとめ、プレゼンテーション、論文作成までを計画的に進め、まとめる能力」「与えられた時間や条件の下で合理的に作業を実施し、問題解決を図ろうとする能力」「調査成果の発表やコミュニケーション能力」などを修得する。

④授業担当教員：金折 裕司、今岡 照喜

レビュアー： 田中 和広、宮田 雄一郎、阿部 利弥、永尾 隆志

⑤レビューの方法：実習を参観し、アンケートおよび授業研究会において意見・改善点を指摘する。

#### 2) レビュー結果

[アンケート]

##### ①授業技術に関して

- ・凡例などが統一されており良かった。
- ・岩石の薄片スケッチは、教育的にも良い。
- ・声が小さい学生が見受けられた。マイクを使うと良い。
- ・判読がむずかしい写真が多い。スケールがないスケッチ、写真がある。
- ・図面の説明が中心となっているものが多い。

##### ②授業運営・構成に関して（難易度・過不足など）

- ・発表の流れが良い。
- ・自覚を促す意味で学生が運営（司会）をしたのが良かった。

##### ③授業の目標、達成度、理解度、満足度、内容に関して

- ・考察があると良い。
- ・時間を守って発表した点は、準備ができていることを示している。

##### ④学習活動、学生の参加に関して

- ・発表要旨を作成させたのは効果的。次年度の以降も作ると良いだろう。
- ・質問が少ない。

⑤野外教育における注意点（講義との関係、安全教育など）

- ・地形観察（空中写真など）も盛り込むと良い。
- ・安全最優先

⑥その他

- ・露頭の観察が未熟。スケッチの重要性が認識されていない。
- ・用語の定義を明確に。
- ・地質図作成の基本的作業を確認する必要がある。

[授業研究会]

露頭の観察やスケッチができていないこと、専門用語をきちんと理解していない、調査結果をもとにその地域の地史を復元するなどの考察が行われていないなどから学生の基礎的な学力、地質調査能力が不十分であることが指摘された。今後、野外実習を継続するにあたり、「安全に野外に調査を行う」ことの重要性を確認し、教員が学生の実態を把握に努め、教室全体で学生を指導する体制が必要であるとの結論を得た。

## 第2節 学部・研究科主催FD研修会

### 1. 大学教育センター・理学部共催FD研修会

#### （1）理学部教育改善FD研修会

主催： 大学教育センター・理学部共催

日時： 平成23年7月13日（水） 15:00～15:40

場所： 人文・理学部大会議室

講師： 岩部 浩三 大学教育センター長、吉村 誠 学生支援センター長

参加者： 理学部教員 56名

内容： 理学部の拡大教授会の場で全教員を対象に、ポートフォリオの導入の意義と期待される効果、導入方法などについて、岩部大学教育センター長および吉村学生支援センター長から、それぞれの立場から話があった。岩部大学センター長からは大学設置基準の一部が「社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を教育課程の実施及び厚生補導を通じて培うことができる」ように改訂された（平成22年2月25日施行）。これを受けて本学では平成23年度計画で「学士課程教育を通してキャリア意識を高めるために、ポートフォリオを全学的に導入する。」計画を立てていることが明らかにされた。また、



図1 理学部教育改善FD研修会の様子

吉村学生支援センター長からは、ポートフォリオとは何か、そのしくみはどのようなになっているか説明があった。その後、本学ではどのようなポートフォリオの導入を考えているか具体的に説明があった。また、就業力支援の立場からポートフォリオ導入の意義が説明された。特に企業はじめ社会からは、「大学生活を有意義にする力を持った学生」の育成が求められており、そのためには学生自らが「大学生活を充実できているか」、「世の中への興味・関心を持ち、未来を創造できるか」「表現する力・伝える力があるか」について、自主的にチェックするするとともに、教員との面談を通して自らの年度ごとの目標の達成度や課題の確認を経年的に実施する必要がある。そのためにはポートフォリオの導入は大学教育にとって欠かせないものであるという考えが示された。

その後、意見交換が行われ、プレゼンで示されたポートフォリオの雛形は確定的なものか。また、まず紙ベースで各学部・学科がポートフォリオに取り組み、その結果を受けて各学部で最も適したポートフォリオのフォーマットを考え、さらにそれを電子化していくという手順を踏むべきでないかという意見があった。これに対して、両センター長とも、同様な考えを持っており、最初にシステム化ありきという考えではないと回答があった。また、先進大学の事例を示して欲しいという要望があったので、岩部センター長および大学教育センターの小川教授から8月10日(水)13:30から全学講演会を開催し、その中で佐賀大学のポートフォリオ全学導入の経緯とポートフォリオの実態について佐賀大学の先生に講演していただく予定なのでぜひ講演会に参加して研修を積んでほしいとのお願いがあった。本年度、最初の教育改善研修会であったが、ポートフォリオ導入の意義やポートフォリオの実態については理学部の教員にかなり理解してもらえたと感じている。研修後のアンケート結果からも研修内容に関しては概ね好意的な意見が多かった。

## (2) 講師派遣型アラカルト研修会「成績評価方法入門」

主催： 大学教育センター・理学部共催

日時： 平成23年8月22日(月) 15:00~16:30

場所： 人文・理学部大会議室

講師： 小川 勤 教授(大学教育センター)

参加者：理学部教員17名

内容： 本テーマについての初めての講師派遣型アラカルトFD研修会が理学部で開催された。研修会は5部構成で実施された。第1部は、認証評価への対応と客観的な成績評価というテーマで大学の認証評価制度のしくみと認証評価と成績評価との関係について、本学の事例も交えて説明があった。第2部では、観点別到達目標とシラバスおよび成績評価との関係について説明があった。第3部では観点別到達目標と到達度の測定について、本学のGPを事例に、GPで示された資質・能力の到達度の測定をどのように考えたらよいかという内容で説明があった。

第4部は、当該研修会において主要なテーマであるルーブリック評価について、その評価方法の概要と特徴についてまず説明があった。その後、授業への具体的な導入例の紹介があり、どのようにしてルーブリック評価を展開するのかについて説明があった。

第5部では、本年2月に公開された「成績分布共有システム」について、まず最初に、当該システムを開発した背景説明があった。その後、このシステムの使用方法や当該システムを組織的なFD活



図2 講師派遣型アラカルト研修会「成績評価方法入門」の様子

動に活用してほしいという説明があった。

研修会終了後、参加者からは、「ルーブリック評価」が理系の授業のどのような場面で活用できるのかについて質問があった。また、理学部の場合、「知識・理解領域」や「思考・判断領域」に関する授業内容が多く、あまりこの成績評価方法が活用される場面はないかもしれないが、「卒業研究」や「課題研究」などの成績評価には部分的に活用できそうだという意見や感想が多くあった。

さらに、研修会中に「成績分布共有システム」を使用したことがあるかどうか聞いたところ、ほとんどの教員が利用したことがあると答えたのには少し驚いた。かなり当該システムに対する認知度は意外に高いことがわかった。また、自分の成績評価と他人の評価を比較するだけでなく、学科やコース単位でのFD活動にこのデータを利用した方がFD活動が活発化するのではないかといった意見も寄せられ参考になった。

表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	0	0.0%
良かった	10	71.4%
どちらとも言えない	3	21.4%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	1	7.1%
合計	14	100.0%

### (3) 講師派遣型アラカルト研修会「メンタルヘルス入門」

主催： 大学教育センター・理学部共催

日時： 平成23年8月31日（水） 15:00～16:00

場所： 人文・理学部大会議室

講師： 今井 佳子 先生（山口大学学生相談所 臨床心理士）

参加者：理学部教員 18名

内容： 本研修会では、大学生の不登校を理解するために、このところ話題にのぼる新型うつ病と社交不安障害（以下、SAD<sup>1</sup>）の特徴と対処の方法について講演がなされた。新型うつ病の症状には従来型のうつ病とは顕著に異なるところ（気晴らしができる、自分に対する罪責感が乏しいなど）があり、他人からは単なる怠慢と捉えられがちである。一方、SADは他人からどのように見られているのかを常時かつ極度に気にする症状を有するが、外目には誰でも経験する不安を感じているだけにしか見えず、本人だけで苦しみ続けるケースが少なくない。いずれの病気もはっきりと目に見える病態を伴わないために周囲の理解が得られない状況におかれることがある。また、罹患している本人でさえ病気という認識がない場合もある。そのため病気が進行して不登校に陥るケースも少なくない。したがって教員はこのような学生に対しては、十分なコミュニケーションをとりながら、これらの疾患の早期発見につながるよう努める必要がある。



図3 講師派遣型アラカルト研修会「メンタルヘルス入門」の様子

次に、これらの問題を抱えている学生への対処方法が説明された。教員は学生の話丁寧聞く必要があるが、メンタルヘルスや学生相談所の話題にはネガティブな印象を持つ学生が少なくないので、話の入り口としては修学相談とした方がスムーズな場合が多い。また、学生の抱える問題へのアプローチには保護者がキーパーソンであるが、保護者に連絡をする際には教員が直接連絡するのではなく、修学支援状況など客観的な観点から学務係等の事務を通じて連絡する方が学生に不信感を与えにくいと思われる。学生相談所では教員からの相談も随時受け付けているので是非利用してほしいとの話があった。

講演終了後の質疑応答では、「SADの可能性のある学生がいるが、自分の過去を引き合いに共感を示すのは良くないのか」、「急に休学したいと言い出した学生への対処をどうすればよいのか」、「突然連絡できなくなる学生に対して保護者を介して連絡するのは良いか」、「プライドが高く傷つきやすい学生にカウンセリングを勧めるにはどうしたらよいか」、「問題のある学生がいる場合、教員の職務として何をすべきなのか」等の具体的なケースに関する数多くの質問があった。これに対して講師からはそれぞれのケースに関する対処案が示された。

表2 研修会に参加した感想

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	10	56
良かった	6	33
どちらとも言えない	0	0
あまり良くなかった	0	0
良くなかった	0	0
無回答	0	0
合計	2	11

研修会後のアンケートでは、ほとんどすべての参加者から今回の研修会が有意義であったとの回答を得た(表1)。具体的な感想としては「事例に基づくメンタルヘルスケアの話は役立つ」、「思い出すこと、反省することがたくさんあった」、「今の学生に対することだったので、学生への対応について勉強になった」といったコメントが寄せられた。

今後取り上げてほしいテーマについては、「メンタルヘルスについて更に具体的な学生への対応方法」、「生活習慣とメンタルヘルスについての詳しい話」、「自宅学習、自己学習をどうやってさせるかについて」等のコメントが寄せられた。

<sup>1</sup> Social Anxiety Disorder

#### (4) 講師派遣型アラカルト研修会「キャリア教育入門」

主催： 大学教育センター・理学部共催

日時： 平成23年9月7日(水) 15:00~16:30

場所： 人文・理学部大会議室

講師： 平尾 元彦 教授(学生支援センター)

参加者： 理学部教員14名

内容： 学生支援センターの平尾教授より、約1時間にわたってキャリア教育の現状および大学生の就職活動の状況について詳しい説明が行われた。

キャリア教育とは「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」であり、本年4月1日には大学設置基準の改正が行われ、社会的・職業的自立を図るために必要な能力を培うための体制の整備が義務づけられたところである(第42条の2)。これを契機として、本学ではさらなるキャリア教育の体制強化に取り組んでいる。

大学生の就職活動の現状で最も注目されるのは日本経団連が 2013 年以降の採用選考にあたり「選考に関する企業の倫理憲章」を大幅に改訂した点である。大きく変わったのはインターネットを通じた不特定多数向けの情報発信以外の採用広報活動(いわゆるプレントリー)を 12 月 1 日以降の開始と設定し、また選考活動の開始を 4 月 1 日以降とした点である。これまではプレントリーは 10 月開始であったので、従来よりも広報活動が 2 ヶ月短縮され採用選考は短期集中型となったことを意味する。1~2 月の土日は企業説明会が集中することが予想されている。現在、山口大学就職支援室では「働くことをもっとリアルに」をスローガンに様々な学内業界・企業研究会やインターンシップ・シゴト体験学習等を行っている。山大学生は下手な就活をしている学生が多い。今後は①就職状況の適切な把握、②一人ひとりの充実した学生生活を→ポートフォリオ、③特別な支援が必要な学生への早期かつ重点的な支援、が必要であると考えられる。

次に約 30 分間にわたって質疑応答が行われた。まず「働くことをもっとリアルに」の中身は何か? という質問については「本物と会うこと。例えば営業職の人とあって話を聞くことである」との回答があった。また、「特別な支援が必要な学生はどのようにして見つけるのか?」という質問に対しては「非常に難しい。就職支援室や学内業界・研究会にはまず出席していない。各先生から声をかけていただければ」という回答があった。「理学部の学生は具体的な就職のイメージを持たない 1 年生が多い。スイッチが入るのは就活が始まる時期であり遅すぎる。いい手だては?」との質問については「日頃から学生の耳に就職の情報を入れることが大切である。ポートフォリオを低学年から作成して早期にスイッチを入れる工夫も必要である」との回答があった。「卒業後 3 年間は新卒扱いになるように変わったが、学生へのアドバイスはどうしたらよいか?」という質問に対しては「政府からの要請で企業がそのように対応しているが、実際には受けるチャンスがあるだけで採用されるかどうかは難しい」との回答があった。「大学設置基準の改正はカリキュラムにキャリア教育科目を入れなければならないということか?」との質問に対しては「そうではない。キャリア関連の授業を開設すればよいということではない。大切なのは大学内の組織間の有機的連携による体制づくりである」との回答があった。最後に「就職支援に関する学内外での優れた取り組みを紹介してほしい」との質問については「例えば人文学部ではキャリアカウンセラーを投入して徐々に成果を挙げている。また私学では例えば金沢工大は担任制による学習・生活指導を行っている」との紹介があった。

研修会終了後のアンケート結果は表のとおり好評であった。自由記述には「今年度のキャリア・就職について新たな情報をお聞きできて大変参考になりました」「キャリア教育の具体的な取り組みの情報を得ることができた」といったコメントが寄せられた。



図 4 講師派遣型アラカルト研修会「キャリア教育入門」の様子

表3研修会に参加した感想はいかがでしたか?

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	5	38.5%
良かった	8	61.5%
どちらとも言えない	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	13	100.0%

## 2. 理学部 e-ラーニング Moodle 講習会

主催： 理学部教務委員会・理学教育企画センター

日時： 平成23年8月8日（月）15:00-16:30

場所： 人文学部・理学部大会議室

講師： 西井 淳 教授（理学部）

参加者：理学部教員 20 名

理学部では、平成 20 年度から授業への e-ラーニングの導入を取り組んでおり、毎年、e-ラーニングに関する FD 研修会を開催している。講師の西井教授は、1 年生の専門授業科目において、e-ラーニングを積極的に活用している。今回の講習会では山口大学メディア基盤センターが導入している e-ラーニングシステム Moodle の基本的な使い方とその教育効果に関する紹介があった。Moodle は世界的に広く使われている e-ラーニングシステムであり、フリーソフトウェアであること、e-ラーニングを教材として利用できるのみならず、レポート提出、小テスト、授業資料の配信、学生との連絡等々の多目的で利用できることが紹介された。次に簡単な問題作成方法等の講習があった。最後に、その授業での利用例と教育効果について報告され、学生には e-ラーニングが好評であるというアンケート結果が披露された。

理学部ではすでに各学科で複数の教員が Moodle を導入している。教員の e-ラーニング導入を積極的に支援するために、e-ラーニング入力支援員（技術補佐員）を配置し、大学院生による教材入力支援体制を整えている。今後、e-ラーニングのさらなる導入が期待される。

## 3. 理学部高大連携 F D 研修会

理学部では、低年次教育の充実を目指し、高等学校との連携活動を行っている。今年度は、スーパーサイエンスハイスクール(SSH)指定校に依頼し、高等学校教育現場におけるさまざまな課題や現在の高校生の学力状況等について情報提供していただいた。さらに、予備校から講師を招き、他大学の初年次教育改革の調査とその必要性に関する講演会を開催した。得られた情報を、理学部の低年次教育に活用する。

### （1）高大連携 F D 講演会「現在の高校生の実態」

主催： 理学部教務委員会・理学教育企画センター

日時： 平成23年8月25日（木）10:30-12:00

場所： 人文学部・理学部大会議室

講師： 二町 弘志 先生（山口県立徳山高等学校教諭：SSH 主任）

参加者：理学部教員 18 名

内容：ベネッセが行った徳山高等学校の生徒の学習実態調査に基づいて、現在の高校生の特徴と進学実態について説明された。指導要領の改訂と高校生の実態の相関についてのデータは興味あるものであった。現行の指導要領では、学習内容の削減、学校5日制の導入による公立高校と私立高校の格差、ゆとり教育の浸透等々の状況に至った。その結果、支持待ち生徒の増加、素直な扱いやすい生徒の増加、討論・発表経験の不足、学習意欲・目的の不足、優秀な生徒は小中学校で勉強不要という問題を招いた。これらが高等学校の教育現場だけでなく、最終的には大学院生の学力低下につながっているという興味深い調査結果も紹介された。平成24年4月より導入される新学習指導要領についての解説もあった。

講演を通して、現在の高校生の実態をよく知ることができた。大学側は、入学前の学生の状況を細かに把握し、大学での初年次、低年次教育に積極的に反映させる必要がある。

## (2) 高大連携FD講演会「高校生の基礎学力」

主催：理学部教務委員会・理学教育企画センター

日時：平成23年10月14日（金）10:30-12:00

場所：人文学部・理学部大会議室

講師：福満 晋 先生（島根県立益田高等学校教諭：SSH 主任）

参加者：理学部教員19名

内容：講演は、①大学入試について、②新教育課程について、③国語力・計算テストについて、④60マス計算について、⑤センター試験問題についての5つの内容であった。「①大学入試について」では、最初に理学部教員に対する「大学入試について正確にご存知ですか？」という「テスト」から始まった。結果から、本学理学部の教員が、全国的な大学入試状況や他大学の大学入試状況をいかに知らないかが明らかになった。「②新教育課程について」では、各大学が入試に適用しようとしている新課程の理科の範囲が、高等学校の授業スケジュールを極めてハードにするという実態が示された。「③国語力・計算テストについて」では、現在の高校生の文章読解能力や計算能力の低さを示す例が紹介された。「④60マス計算について」では、益田高校で取り入れられた60マス計算の取り組み成果が示された。60マス計算は、現在の高校生の計算力向上にも有効であることが紹介された。「⑤センター試験問題について」では、化学の問題を中心に高等学校教諭から見た出題内容の問題点が指摘された。

どの内容も大学教員にとっては驚くことばかりであり、大学側が入学試験をいかに外からの客観的な視点で眺めていないか、さらに、入学前の学生（高校生）の学力をいかに知っていないかがわかった。大学側は入学前の学生の状況を正確に知り、大学での初年次、低年次教育に積極的に反映させる必要があることをあらためて実感できた。

## (3) FD講演会「大学の初年次教育改革の実態をその必要性」

主催：理学部教務委員会・理学教育企画センター

日時：平成23年11月16日（水）15:00-16:30

場所：人文学部・理学部大会議室

講師：谷口 哲也 氏（学校法人河合塾 教育研究部 統括チーフ）

参加者：理学部教員18名

内容：講演では河合塾が実施した「大学の初年次教育調査・評価」の結果の紹介とそこから見えてくる初年次教育の必要性が示された。各大学で行っているさまざまな取り組みが紹介されたが、各大学が抱えている教育的課題や取り組みには共通点が見られた。それらは、高等学校教育現場の課題とも共通点がある。その中で特に、能動的な自己学習習慣・能力の欠如は、大学入学後の学習活動においては致命的な問題であり、入学後の学生に対して早い時期に自己学習習慣・能力を身に付けさせる取り組みをすることが急務であることがわかった。

河合塾の調査・評価結果は「初年次教育でなぜ学生が成長するのか」（2011年河合塾）によくまとめられている。理学部ではFD経費で同書籍を購入した。

## 第3節 教育改善に関する活動

### 1. 第5回理学系大学教育に関する研究フォーラム

期日：平成24年12月17日（土）

会場：島根大学総合理工学部

出席者：島根大学、広島大学、山口大学、愛媛大学、高知大学、岡山大学から各2,3名

山口大学理学部からは廣澤准教授（数理科学）が出席し、『山口大学「理学部サイエンスワールド」の取り組み』というタイトルで、サイエンスワールドへの取り組みを通じた学生教育の成果について講演するとともに、同フォーラムに参加した他大学の教員たちと意見交換を行った。

### 2. 「サイエンス実習」における学士力育成の取り組み

理学部では平成20年度から、学生の問題発掘解決能力、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力の育成のため、サイエンス実習I,II（各1単位）を、さらに理工学研究科（理系専攻）では、サイエンス特別実習I,II（各1単位）を実施している。

履修学生は、科学理解増進活動事業（例えば、山口大学理学部サイエンスワールド）に向け、自らが企画立案し、計画をたて、準備を行い、効果的な展示・説明を考案し、一般市民対してプレゼンテーションを行う。それらを通して上記能力を身に付けさせることがサイエンス実習の目的である。毎年、20名から30名の学部生、大学院生が履修しており、教員からは明らかな教育効果が見られると評価されている。ここでは、その取り組みの一例を報告する。

#### 理学部 物理・情報科学科 情報科学コースのサイエンス実習例「論理回路の作成体験」

【概要】理学部サイエンスワールドにおいて、物理・情報科学科で「論理回路ってなんだろう～コンピュータが計算できる仕組み～」を企画し、展示した。この企画では、小学生から高校生、一般の方に論理回路の働きがわかるように、実際に動作する装置を作ることにした。スイッチを切り替えると、LEDで作成した顔が変化する論理回路を作成し、展示した。論理回路の論理設計から、設計図の作成、LEDやスイッチ、抵抗の半田付けまでを学生自身が行った。

#### 【実施内容】

##### ○企画の参加者

本企画は、3年生が1名グループリーダーとなり、1年生（2名）がメンバーとなった。

##### ○サイエンス実習担当教員：川村 正樹 准教授

##### ○役割分担

3年生が論理回路の論理設計と設計図の作成を行った。1年生が実際に半田付けを行い作成した。企画展示は全員で準備し、当日も展示の説明を行った。

##### ○準備状況

8月上旬企画案の作成

9月下旬論理設計と設計図の作成

10月中旬論理回路の作成

10月29日前日の会場準備

10月30日サイエンスワールド開催（企画の展示、解説等を行う）

#### 【目標】

既に論理回路を学んだ学生に対しては、論理回路を設計し、それを装置として組み立てるところまでを実践することを目標とした。未学習の学生（1年生）に対しては、上級生の作成した論理回路を

できるだけ理解し、それを作成する体験を積むことによって、今後、講義で学ぶ論理回路に興味を持つことを目標とした。

#### 【成果】

体験した1年生は、論理回路の仕組みは難しく、十分にはわからなかったが、自分で装置を組み立て、それが思ったとおりに動いたことはとても楽しかったと述べている。これより、論理回路に興味を向けることができたと言える。また、展示を見にきてくれたお客さんに説明することの難しさを体験した。



図5 作製した LED 論理回路



図6 論理回路作製時のようす

### 3. 理学部における低年次教育改革

理学部では、「理学教育企画センター」が中心となり、さまざまな教育改革の取り組みを実施している。平成23年度は、学長裁量経費を申請し、低年次教育改革を実施した。その骨子は、(1) e-ラーニングを積極的に利用した教育の取り組み、(2) 補習授業の実施、(3) 低年次の実習・実験教育の充実、(4) 学力別クラス編成の試行である。ここでは、理学部全体および各学科におけるそれぞれの取り組み例の一部を報告する。

#### (1) e-ラーニングを積極的に利用した教育の取り組み

##### 1) 理学部における e-ラーニング導入・利用支援体制

理学部では理学教育企画センターが中心となり、平成21年度から教員が e-ラーニングを専門教育の授業に積極的に導入・活用する支援の取り組みを行ってきた。具体的には、メディア基盤センターが提供する e-ラーニングシステム Moodle における教材作成講習会、大学院生を中心とした教材入力補助体制の構築と予算確保等である。今年度も1回の Moodle 研修会を開催した(第2節ですでに報告)。さらに、教員の e-ラーニング導入・活用を促進するために、e-ラーニング支援員(技術補佐員)を1名配置し、Moodle 利用時の技術的な支援体制を整備した。

##### 2) 物理・情報科学科における e-ラーニングの活用事例

本年度、物理・情報科学科では以下のように e-ラーニングを活用した。  
・1年次の数学科目では小テスト型の宿題を e-ラーニングで毎週課している。また、宿題の量は特に基礎学力が低いと判断される学生に多く設定することで、学力の向上を図るようにしている。e-ラーニングの問題を解けない学生のために補習授業も行い、問題についての解説や質問の受付を行った。その結果、学生の約7割から「e-ラーニングが理解度の確認や勉強のきっかけとするのに有効、もしくはやや有効であった。」との好評を得た。

・3年次の演習科目ではレポートの相互採点に Moodle を利用した。具体的には、自分以外のレポート 20 人分について Moodle システム上で採点を行うように、相互採点による評価および、各自が他人につけた得点も成績に考慮するようにした。採点するレポートは誰が書いたものかわからないようにした。これについて受講生全員から、「自分がレポートを書く上で勉強になった。」との好評を得た。実際に 2 回めに提出させたレポートの出来映えは 1 回めに比べほとんどの学生についてより良いものになっていた。

・3年次の専門科目では、e-ラーニングによるテストを自習で活用するように説明した。その結果ほぼ 8 割の学生が自主的に e-ラーニング教材を活用し、小テストの成績は昨年度までが平均が約 55 点 (100 点満点) だったのに対し、今年度は 78 点と大幅に向上した。

・プログラミング演習では、演習で用いたプログラミング課題を Moodle システムに登録し、今後の演習で学生の自習が可能な体制を作っている。

一方、物理・情報科学科では授業以外にも、WEB 面談予約システム、学生アンケート、授業補助資料配信等に Moodle システムを活用している。

### 3) 生物・化学科学科における e-ラーニングの積極活用事例

生物・化学科では、以下の授業科目において e-ラーニングを活用した。他の科目でも e-ラーニング導入の準備中である。

授業科目名： 有機化学I

対象学生： 生物・化学科 1 年生 (必修科目) 受講者数: 82

授業担当教員： 石黒勝也

Eラーニング： 7 回 (各 10~15 題)

- 1 第 1 章演習 受験件数: 151
- 2 命名法演習 (1) 受験件数: 125
- 3 第 2 章演習 受験件数: 117
- 4 第 3 章演習 受験件数: 113
- 5 命名法演習 (2) 受験件数: 94
- 6 第 4 章演習 受験件数: 78
- 7 第 5 章演習 受験件数: 56

化学分野での e-ラーニングの導入は、現状の Moodle システムの有機化学における化学構造式や分子図等の表示・記述の技術的な問題が導入の障害になっている。その点、e-ラーニング支援員による調査やメディア基盤センターとの連絡によって教員支援を行った。

### 4) メディア基盤センターと理学部の Moodle 懇談会の開催

e-ラーニングシステム Moodle の利用環境改善と情報交換のため、メディア基盤センターとの懇談会を開催した。

日時： 平成 24 年 3 月 9 日 19:00-18:00

場所： 理学部 310 室

参加者： 理学部 朝日、西井、石黒、村上、野崎、中村、  
メディア基盤センター 小河原、王、小柏、赤井

平成 24 年度からの Moodle のコース新設方法についての説明、新バージョンの試用状況等々に関する説明と情報交換が行われた。

## (2) 補習授業の実施

物理・情報科学科の 1 年生の必修科目と生物・化学科においての 1 年生の必修授業科目において補

習授業を行った。

### (3) 低年次の実習・実験教育の充実

#### 生物・化学科生物学コースの事例

近年の学生事情から、生物・化学科に入学し、生物学コースに所属する学生といえども、大学入学後あるいは、大学入学以前に生き物に触れる機会は年々少なくなっている。生物学の教育では、なにより生き物に触れる、あるいは生き物をつぶさに観察し、生き物の仕組みの複雑さ、精巧さを目の当たりにするという体験が不可欠である。そのため、生物分野では、共通教育の生物学実験、あるいは、学部2、3年生の生物学実験という学生実習に力を入れている。その中で、細胞から生物個体に至るまでの様々な階層の生命現象を、一人ひとりの学生が、十分に観察できる環境を作り、それを維持、拡充し、学生の知的好奇心をかきたてようと努力している。これまで細胞レベルの現象としても動植物細胞様々な観察をしてきた。しかし、学生1人1台の顕微鏡セットが無く、顕微鏡セットを学生間で使い回すため、どうしても十分な教育を施す時間が確保できなかった。今回、学生実験室の拡充として不足していた対物レンズを補充し、学生1人が1台の顕微鏡を利用できる環境に近づき、細胞レベルの観察を拡充させることができた。例えば、細胞の原形質流動の観察では、単に観察するのみならず、試薬の添加で流動を止めるような高度な操作を施す時間が確保できるようになり、細胞レベルの生命現象の理解を深める事につながった。こうした努力は、学生の高学年になるに連れての学生の質の底上げとして効果を発揮している。

### (4) 学力別クラス編成の試行

#### 物理・情報科学科の低年次必修専門科目への学力別クラス編成導入の試行

理学部物理・情報科学科では、「低年次導入教育の改革」の取り組みとして、平成23年度の4つの授業で学力別クラス編成授業を試行した。ここ数年の入学者の学力分布が広いと、定員60名のクラス全体に従来の授業を行うと授業期間半ばで受講者の理解度が2極化する。基礎からの積み上げによって着実に専門知識を習得していく必要のある物理学や情報科学の教育体系では、低年次の導入教育科目でつまづいてしまうと、その先にある専門科目の学習に大きく支障をきたす。そこで、学生それぞれの理解度に応じた教育を提供するために、低年次の基礎科目において、学力別クラス編成授業の導入を目指す。

物理・情報科学科では、2年次後期から物理学コースと情報科学コースに分かれて学習する。2年次前期までは、主に、両方の学問分野に必要な数学や物理学の基礎、情報科学の基礎を学ぶ。学力別クラス編成授業の導入試行は、1年次前期の「情報数学Ⅰ」、1年次後期の「情報数学Ⅱ」と「力学Ⅰ」、2年次前期の「電磁気学Ⅰ」の合計4科目で行った。これら4科目は、学科共通の必修科目であり、その内容は2年次以降の専門教育学習には必ず身に付けておかななくてはならない。試行は、以下のようによりそれぞれの科目で異なる方式で実施した。2つのクラス（「発展クラス」と「入門クラス」）への学生の振り分けは、試験（あるいは、それまでの成績）をもとに行なった。それ以外の授業のやり方等については、すべて授業担当教員に一任した。

試行の結果、以下のような検証結果が得られた。

- 1) 学生は学力別クラス編成に対して肯定的である者が70%以上、否定的な者が20%程度であった。
- 2) 学生で否定的な意見の具体的な理由として、特に講義を2クラスに分けた授業科目では、講義の内容が異なることが不安のようである。
- 3) 1年生用開講科目の入門クラスで、再履修者の授業態度が悪いことに不満が生じていた。（本学科の2年生の抱えた特別な事情か？教員が意識的に授業をコントロールする必要がある。）

- 4) 学力別クラス編成は、「真面目に学習しようとはしているが理解不足」という学生に対しては、学習効果がある。個々の学生に対する指導時間が増加することがその理由にある。
- 5) 学力別クラス編成は極めて優秀な学生をさらに伸ばす効果はある。
- 6) 発展クラスでも数名は授業についていけない学生が生じる。
- 7) 優秀ではあるが、大学での学習法に転換できない学生にとっては、発展クラスに入ると従来どおり、学習内容の理解困難に陥る。対策が必要である。何らかの対策が必要か。
- 8) 学力別クラス編成では、学習意欲が低く、もともと学力レベルの低い学生には、効果が現れない。根本的な変革を促す必要がある。
- 9) 数名の学生には個人指導が必要であると思われるが、「サークルがある」「バイトがある」などを理由に、学習相談室の利用率は低調であったと見受けられる。
- 10) 教員にとっては、学力別クラス編成は、授業計画が立てやすい、指導しやすい、授業がしやすいといったメリットがある。さらに、学生の顔が見える授業ができる。

検証結果をもとに検討した結果、平成24年度から学力別クラス編成を1年生、2年生の4つの必修科目で本格導入する。それぞれの具体的な方法は以下の通りである。

#### ○「物理と情報のための基礎数学 I, II, III」

・この3つの授業科目は、物理学と情報科学の両方の基礎となる内容を学習させるため、将来、物理学コースおよび情報科学コースのどちらに進む学生に対しても同じ内容の学習をさせる必要がある。したがって、講義は1クラスで行う。

・学習意欲はあるが、理解度不足の学生に対しては、時間をかけて学習させる対策と個々の学生への指導時間の確保が必要である。演習は発展クラスと入門クラスに分け、さらに、入門クラスの演習時間は2コマに増やす。発展クラスは演習1コマ+自宅学習。



#### ○「力学 I」と「電磁気学 I」

・この2つの授業科目については、将来、物理学を本格的に学習する学生と情報科学コースに進む学生でその到達度は異なってもよい。したがって、講義、演習ともに学力別クラス編成で実施する。しかしながら、成績が平均付近の境界領域の学生には、どちらのクラスに入るかを自分で選ばせる等の配慮が必要である。



## 第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

理学部で開設している専門科目223のうち、学生授業評価対象科目は171科目である。その内、実際に学生の授業評価を実施したのは166科目で実施率は97.1%であった。以下に授業評価結果の年度推移を理学部全体、学科・コースごとに検証する。

図7は学生の授業外学習時間（正規化した指標）の自己評価の年度推移である。全ての学科において、授業外学習時間が年々増加している。学生の自己学習能力強化が目標であるが、その目標に向かってさまざまな対策を講じてきたが、その効果が着実に現れ始めていると思われる。

図8は、学生の授業への出席に関する自己評価結果である。各学科・コースで違いがあるものの、自己評価結果は概ね良好である。一部のコースにおいて2年連続低下しているところがある。原因については不明であるが、今後の対策の必要性も含め、詳細な分析・調査が必要であろう。

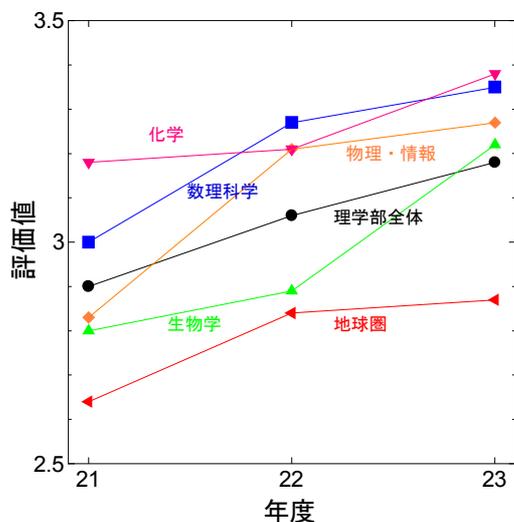


図7 学生の**授業外学習時間** (正規化した指標) の年度推移

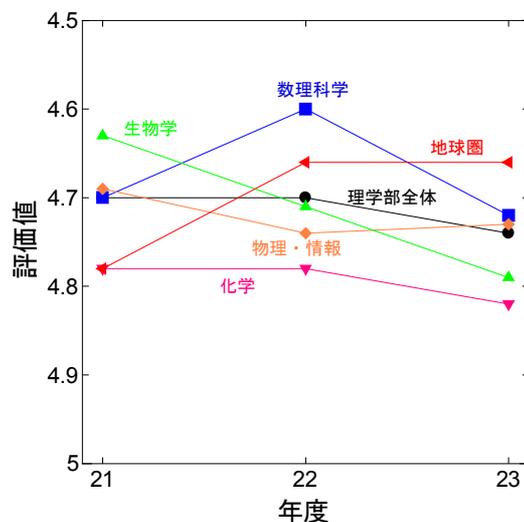


図8 学生の**授業出席**についての自己評価結果の年度推移

図9は学生の授業目標達成度に関する自己評価結果である。1学科を除き各学科・コースとも、ほぼ上昇傾向にある。図10は教員側から見た学生の授業目標達成度についての評価結果の年度推移である。教員の評価に対して学生の評価が低い。物理・情報科学科と化学コースにおいては、学生と教員の評価結果の年次推移の傾向はおおよそ一致している。他の学科・コースでは、年度推移の傾向も異なっている。(この結果が何を意味しているかは不明である。)

図11は学生の授業理解度についての自己評価結果の年度推移である。一方、図12は教員側から見た学生の授業理解度の評価結果である。授業目標の達成度同様、学生と教員側で評価に開きがある。年次推移の傾向は、3つの学科・コースでは学生の自己評価と教員側の評価で一致しているが、残りの2つの学科・コースについては、逆の傾向を示した。

図13は学生の授業に対する満足度の自己評価結果の年度推移である。図14は教員が自分の実施した授業について学生が満足しているかどうかを評価した結果の年度推移である。学生と教員の間に満足度のギャップがあることがわかる。年度推移を見ると、全体的には学生の自己評価、教員側の推測の双方で増加傾向にはあるが、学科・コースによっては低下しているところもある。

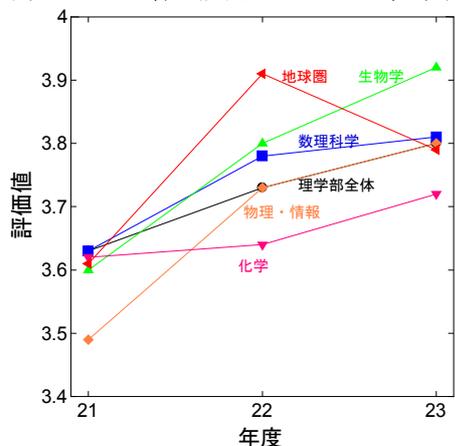


図9 学生の**授業目標達成**についての自己評価結果の年度推移

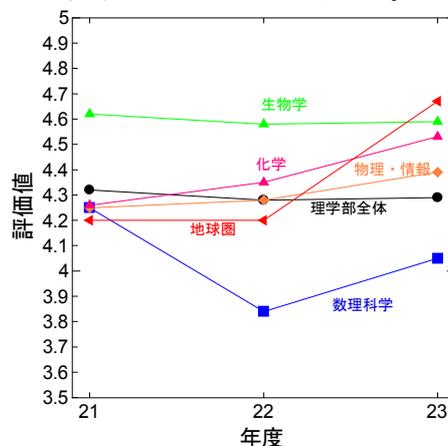


図10 教員側から見た学生の**授業目標達成**についての評価結果の年度推移

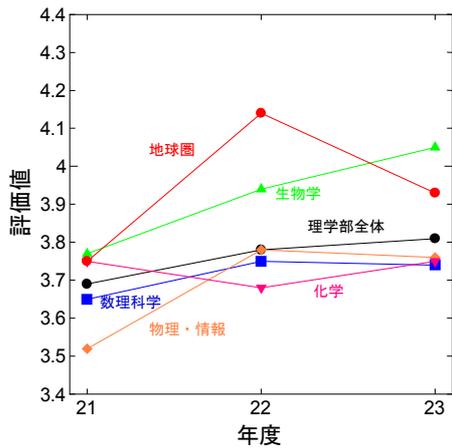


図1-1 学生の授業理解度についての自己評価結果の年度推移

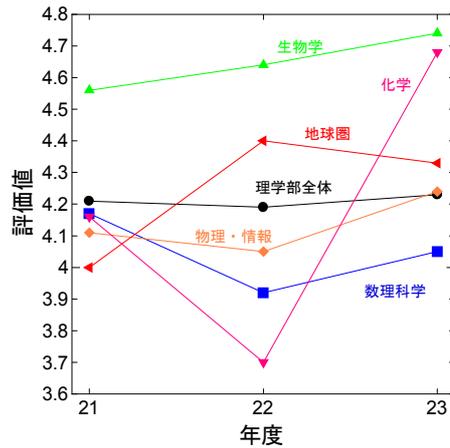


図1-2 教員側から見た学生の授業理解度についての評価結果の年度推移

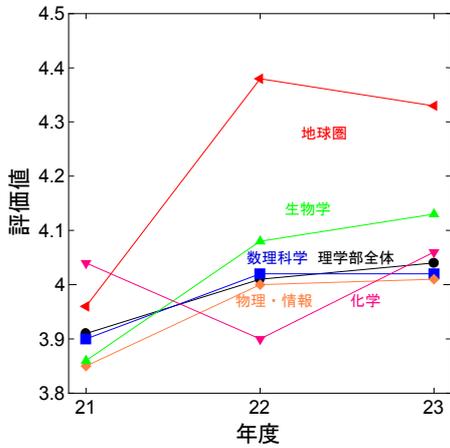


図1-3 学生の授業満足度についての自己評価結果の年度推移

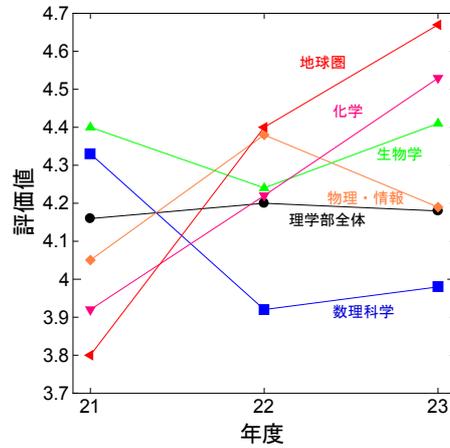


図1-4 教員側から見た学生の授業満足度についての評価結果の年度推移

図9-1-4の目標達成度、理解度、満足度の評価を見ると、教員が思っているほど学生の自己評価は高くない。授業を提供する側と受ける側の評価であることを考慮すれば当然の結果であるという見方があるが、一方で、その事実を教員で共有しておく必要はあると思われる。

## 第5節 FD実施経費報告書

平成23年度 各学部・研究科FD実施経費報告書				
部局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果(簡潔に)
理学部	高大連携FD	新高等学校学習指導要領とその解説書の購入	15,153	新学習指導要領によって平成27年度入学者の既修得内容を把握し、初年次教育内容を検討することにより、授業計画を早期に開始できる。
	低年次教育改革	書籍購入「初年次教育でなぜ学生が成長するのか」	13,815	他大学の初年次教育改革の取り組みについて知り、理学部の低年次教育改革の参考にできる。
	低年次教育改革	理学部FD講演会「大学の初年次教育改革の実態とその必要性」講師謝金	57,770	他大学の初年次教育改革の取り組みについて知り、理学部の低年次教育改革の参考にできる。
計			86,738	

## 第6節 来年度の課題

理学部では、理学教育企画センターが中心となり、教育改善に努めている。その中で表面化した課題は、学生の自己学習習慣と能力の不足である。この課題に対するなんらかの対応が必要となる。平成23年度に進めてきた低年次教育の充実についても継続して取り組む必要がある。それに加え、サイエンス実習を核とした学士力を総合的に育成するなんらかの取り組みも平成24年度の課題となる。

平成23年度理学部は、4年に進級できなかった学生が著しく増加した。来年度は留年する学生を低減する取り組みも必要となる。各学生個々の学力に対応した決めの細かい指導が必要となる。その他、各学科から出された平成24年度の課題として、関連した授業科目間での講義内容の調整を可能な限り行うこと、学生参加型授業のさらなる実現に向け、教員が授業参加態度に関するアドバイスを適宜行うことがある。

## 第8章 医学部のFD活動

各部局のFD活動報告は、本来、学部単位で取りまとめるべきであるが、医学科と保健学科では、医療人を養成するという教育目的は一致するものの、職種の違いに起因してカリキュラムと授業形態が根本的に異なり、必然的に教員に要求される教育技能も異なっている。さらに、FD活動に関する歴史的経緯も異なることから、活動は医学科と保健学科で、それぞれ独立して行われてきた状況があった。しかし、平成22年度からは、こうした従来の慣例にかかわらず、例えば、保健学科主催として企画されたFD研修会に医学科、さらには医学系研究科、附属病院の教員が相乗りする形で参加するなど、医学部のFD活動として合同のFD活動が推進されてきた。今後も、この流れをさらに推進することが期待される。一方で、学科の状況にあわせたFD活動の実施もあるため、本報告では従来通りそれぞれの活動を別個に記述する。

### 1. 医学科

#### (1) 活動概要

医学科では、社会からの医学教育への強い期待に応えるとともに、全国的に急ピッチで進行する医学教育改革の動きの中で主導的な役割を果たすため、全学規模でのFD活動が本格的に開始される以前の平成9(1997)年度から、年1,2回の1泊2日のワークショップを中心として独自のFD活動を展開してきた。

継続的に展開してきたFD活動は、平成13(2001)年度以降、毎年、着実かつ具体的な教育改善に結実してきた(例:コース・ユニット制へのカリキュラムの根本的改変、展開医学系テュートリアルの実施、多肢選択型客観問題による統一試験の実施等)。

他方で、平成15年度以降は、ワークショップの必要回数が増大する一方、予算的制約もあり、1泊2日型から1日で完結するワークショップに活動の中心が移行しつつある。

平成23年度も、基本的にはこの流れの延長線上において、教育改善上の具体的な個別テーマに基づいた1日完結型のワークショップおよび数時間の講習会を中心に活動を展開した。

#### (2) 具体的活動

##### 1) ワークショップ

###### a. 「新入生指導法ワークショップ」

2011年10月1日(土) 場所: 山口大学吉田キャンパス

※ フレッシュマンセミナーに合わせて、1年生の指導法についてワークショップ形式で研修を行った。

###### c. 「多肢選択型客観問題作成ワークショップ」

2011年4月15日(金) 場所: 実習等Aテュートリアル室

2012年3月23日(金) 場所: 第一講義室

※ 全国の共用試験 CBT 他、統一試験(基盤系統一試験&卒業試験)で使用される、多

- 肢選択型客観問題の作成技法を習得するためのワークショップ。
- ※ 問題作成についての基本事項の説明と参加者が作成した問題を持ち寄ってのブラッシュアップを主体に実施した。

## 2) 講習会・講演会

- a. 「チューター講習会」(計2回)(2回とも同一内容)
  - 2011年12月20日(火) 場所: 第2講義室
  - 2011年12月26日(月) 場所: 第2講義室
  - ※ 4年生対象「展開医学系テュートリアル」チューター(指導教員)に対する指導法の講習会を行った。
- b. 「シラバス作成講習会」
  - 2011年12月5日(月) 場所: 第1講義室
  - ※ 医学科独自のコース・ユニット制カリキュラムおよびそれと一体化したeYUMEのコンテンツ更新方法に関する講習会を行った。
- c. 「海外FD研修報告会: 中国・四国広域がんプロ養成コンソーシアム」
  - 2011年6月10日(金) 場所: 霜仁会館多目的室
  - ※ 世界先進医療施設研修に参加した医師, 薬剤師, 看護師3名による研修報告会を行った。その中で, 医療システムや制度など, 日本との違いはあるが, 円滑な医療を提供するためにも「チーム医療」の充実が重要であるとの報告があった。
- d. 「コミュニケーションスキル: 中国・四国広域がんプロ養成コンソーシアム」
  - 2011年7月7日(木) 場所: 霜仁会館多目的室
  - ※ 「コミュニケーションスキル」と題した講演を行い, 講師から患者の疑問や思いを聞き出すのがコミュニケーション技能であり, 急がないことが大切であり, 「なぜ・どうして」の言葉を使わず, 批判・非難をしないことの重要性が示された。
- e. 「文科省医学教育課長講演会/医学教育の現状と課題」
  - 2011年11月18日(金) 場所: 第3講義室
  - ※ 医学教育モデル・コア・カリキュラムの改訂により, 学生の臨床実習における卒業時の到達目標が示され, 今後, 診療参加型臨床実習や地域基盤型医学教育実習などの充実を図る必要があることから, 今後の医学教育のあり方をテーマに, 文部科学省高等教育局医学教育課長による講演会を開催し, 意見交換を行った。
- f. 「医学教育・初期臨床研修の改善に向けて」
  - 2012年2月28日(火) 場所: 第3講義室
  - ※ 山口大学医学部附属病院における初期臨床研修を受ける医師の減少傾向が続くことから, 卒業生の臨床研修の環境整備だけでなく, 医学教育及び臨床研修の全体の改善が必要と考えられる。特に地方における医師確保は, 全国的な医学部の重要課題となっている。そこで, 准講会の実施した「医師確保アクションプラン募集」に応募の中から4件の優秀アイデアの発表を准講会・附属病院医療人育成センターとの共催で開催した。学生を含めた演題発表、シンポジウム形式での討論を行い, いろいろな立場からの意見を聞く機会として非常に有意義であった。

### 3) 教育評価活動

平成 13 (2001) 年度から実施している「振り返り評価」(ユニット終了後、マークシートで実施)と平成 13 (2002) 年度から実施している「進行評価」(1 回 1 回の講義終了後、オンラインで実施)を 23 年度も引き続き実施した。

## 2. 保健学科

### (1) 活動概要

「教育の質の改善」を目標として、ピアレビューを実施し、また、高等教育の原点である主体的学習、適切な教育評価と教育実践への還元、国際的視野における教育の観点から、大学教育センター「派遣型」研修の「PBL 型授業の進め方～医学部モデルの反省から」、「成績評価方法入門-ルーブリック評価を用いた成績評価の推進」、「山口大学における国際活動へのヒント-事例紹介を含めて-」の三研修を保健学科主導の研修として医学科教員も参加して実施した。また、大学が目指すポートフォリオ導入についての「教育改善 FD 研修会」(大学教育センター)を実施した。「大学における授業改善ヒント集」(改訂版)山口大学 FD ハンドブック第 4 部には 2 名の教員が執筆し、平成 22 年度から検討してきた CFC を公表した。

### (2) 具体的活動

#### 1) 授業公開 (ピアレビュー)

1. 日 時：平成 23 年：5 月 9 日 (月) 10：20～11：50 S1 講義室
2. 科目名：「高度先進医療看護学」臓器移植と患者家族への心のケア
3. 対 象：看護学専攻 4 年生 (選択) 講義形式
4. 担当教員：看護学専攻 山勢博彰教授
5. 参加者：25 名

##### 【講義の目的】

本科目は、以下の知識と理解を得られるように設定されたものである。

1. 高度先進医療の概要について説明できる。
2. 主に集中治療、循環器領域の場面で行われる高度医療に関する事項について説明できる。
3. 高度先進医療にまつわる問題について説明できる。
4. 高度医療にかかわる看護の役割を説明できる。

これらの知識を理解することによって、高度医療がもたらす倫理的問題について考察でき、最先端の医療に関心が持てるようにしている。講義では、高度先進医療の具体例を紹介し、それにかかわる看護の役割を教授する。

日進月歩の医療は、今日は最新の医療であっても、数ヶ月後は過去の医療になっていることもある。したがって、今の高度医療の知識を詰め込むのではなく、新しい医療が出現した時にそれに見合った看護を創造し、実践できるような思考を養っていくことが重要である。また、最新の (未知の) 医療を受ける患者や家族の立場になった時に、その不安を軽減し、高度医療だからこそ生じる倫理的問題にも対応できる姿勢も必要である。

本日の講義は、高度先進医療の 1 つである臓器移植を取り上げ、具体的なケースを基に医療を受け

る側の不安や倫理的問題への対応について、看護の役割に焦点を当てて教授するものである（講義目的）。

#### 【講義スケジュール】

- 10：20～：講義目的の確認と前回までの振り返り
- 10：30～：脳死患者家族の心理的特徴
- 10：50～：基本的な看護師の役割
- 11：00～：事例（動画視聴）
- 11：15～：事例についての演習と考察
- 11：40～：確認テストと授業評価

#### 【ピアレビュー】

実践に生かせる具体的な内容であったこと、根拠を明確にして視覚で学習を深め自分の考えを言葉にすること、主題に対する背景、説明がわかりやすかったこと、スライドがクリアで説明が明瞭であったこと、演習は理解度チェックを入れていたこと、ビデオを効果的に用いたこと、話す速度が適切であったこと、などの学びがあり、今後の参加者自身の講義の改善に役立てたいという意見が多くあった。

## 2) 保健学科主導FD研修会

### (1) 「PBL型授業の進め方～医学部モデルの反省から」

講師：川崎 勝 先生（医学部医学教育センター副センター長・准教授）

開催学部：医学部（保健学科主導）

開催日時：平成23年8月1日（水）17:00～18:30

場所：医学部総合研究棟 S3

研修対象者：医学部保健学科・医学系研究科の教職員

研修スケジュール（約90分）

参加者：33名

17:00～17:02 開催挨拶（保健学専攻長）、スケジュール説明（FD担当）

17:02～18:00 講演

18:00～18:28 質疑応答

18:28～18:30 閉会挨拶（保健学科教学委員会委員）

報告：PBL(Problem/Project-Based Learning)とは、学生が主体となって能動的に学ぶアクティブ・ラーニングの一形態であり、実社会で問題となる課題をグループに与え、他者と協働しながら解決策を検討することにより問題解決力やコミュニケーション力などを身につけていく学習方法である。山口大学では医学部医学科が2002年度より「展開医学系テュートリアル」においてPBL型授業を実施しており、シナリオに表現された患者(paper patient)の事例をもとにグループ討論を行い、自学自習とディスカッションを



繰り返しながら仮説検証を進め、最後にグループ発表を行っている。そこで、本研修では、PBL 型授業の設計方法、シナリオの作成方法、グループ討論による問題抽出の方法、チューター教員の役割などについて学び、保健学科の授業への導入可能性について検討する一助とすることとした。参加者は33名(アンケート提出者32名)であった。

研修は「1. PBL の理論的背景」「2. PBL-tutorial-医学科モデル」「3. 医学科モデルの問題点」「4. PBL-tutorial-新たな展開へ」の4点について詳しい説明が行われた。まず、理論的背景については、医学教育学における pedagogy から andragogy へのパラダイムシフト、成人学習理論(Adult Learning Theory)とは何かについて説明があった。続いて、医学科で行われている PBL-tutorial の発祥と普及、具体的内容・方法、その利点・注意点についてハワイ大学及び山口大学の事例をあげながら詳しい解説が行われた。なお、日本では現在数多くの医学部で PBL 型授業が導入されているが、すべてが順調であるとは必ずしも言えない状況にあり、例えば学生側の問題(動機付けの面、グループ学習に不慣れ、前提となる知識が不十分など)、教員側の問題(人的・時間的・精神的なリソースが不足)が指摘されている。しかし、従来の Medical School Model (医学科モデル)ではなく、例えば Floating Facilitator Model (促進者巡回モデル)、Peer Tutor Model (学生チューターモデル)、Large Class Model (大教室モデル)などの柔軟な方法を導入すれば解決できることが紹介された。また、実例として三重大学看護学科の一教員が1授業(15コマ)で PBL を実践する例も紹介された。

なお、フロアーからは「PBL-tutorial のアウトカムは何か」という質問が寄せられた。これに対しては知識の獲得のみならず、グループ学習を通して対人コミュニケーションスキルやチームワーク、問題解決能力を向上させ、能動的な学習態度や情報を共有する姿勢、互いの意見を尊重する姿勢を培うことにある、という回答があった。また、フロアーからは「専門的な知識のまだない1年生の段階で PBL を入れることも検討すべきである」という意見が寄せられた。

最後に事後アンケートでは「PBL が広く応用できる可能性がわかった」「学生が自ら学ぼうとする姿勢を動機づけていく所が難しそうだと感じたが、上手くいけば学生が主体的に学ぶようになり、効果の高い教育方法だということが分かった」等の意見が寄せられた。一方、「シナリオをもとにして、どのような仮説、問題、学習項目、学習行動計画が抽出され解決したのかについて具体的な説明が欲しかった」という意見もあった。

研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	5	15.6%
良かった	16	50.0%
どちらとも言えない	4	12.5%
あまり良くなかった	6	18.8%
良くなかった	0	0.0%
無回答	1	3.1%
合計	32	100.0%

## (2) 成績評価方法入門 —ルーブリック評価を用いた成績評価の推進—

日程：平成24年3月23日(金) 16:00～17:40

場所：医学部総合研究棟 S3

講師：小川 勤 (大学教育センター教授)

参加者：28名 (アンケート回収数 23 枚)

内容

本テーマについて2回目の講師派遣型アラカルトFD研修会が医学部保健学科で開催された。研修会は5部構成で実施された。まず、第4部のルーブリック評価の部分を除いた、4つの領域についてまず話が以下のようにあった。

第1部は、認証評価への対応と客観的な成績評価というテーマで大学の認証評価制度のしくみと認証評価と成績評価との関係について、本学の事例も交えて説明があった。第2部では、観点別到達目標とシラバスおよび成績評価との関係について説明があった。

第3部では観点別到達目標と到達度の測定について、本学のGPを事例に、GPで示された資質・能力の到達度の測定をどのように考えたらよいかという内容で説明があった。第5部では、本年2月に公開された「成績分布共有システム」について、最初に、当該システムを開発した背景説明があった。その後、このシステムの使用方法や当該システムを組織的なFD活動に活用してほしいという説明があった。

第4部では、当該研修会において主要なテーマであるルーブリック評価について、その評価方法のしくみと特徴について説明があった。特にシラバスから、どのようにルーブリック評価を行っていくのかについて具体的な事例を用いて紹介があった。

研修会終了後、参加者からは、「ルーブリック評価」のしくみを、シラバスから成績評価に至る流れを大変わかりやすく説明していただいていたという意見が多かった。また、研修会後の質問では、就職のことを考えると、ついつい成績評価が甘くなりがちになるが、必ず正規分布のような評価結果にしなければならないのかという質問があった。これに対して講師からは、そもそも評価規準や評価基準という概念に基づくルーブリック評価は絶対評価を厳格に実施していくために考えられた成績評価手法である。このため、評価手段や評価基準、採点基準が明確であり、これに基づいて厳格に評価された結果であれば、必ずしも正規分布にならなくてもよいと考えているという回答があった。それよりも、受講生(学生)に採点基準や観点別の評価規準や評価基準を事前にして提示することにより、評価の方法や基準に関する学習者への説明責任を果たし、学習者の意欲付けに活用することの方が大切である。また、学習者が自らの学習過程を振り返り、新たな自分の目標や課題をもって学習を進めていけるような評価を行うことこそが重要であるという見解が示された。



### 設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	4	17.4%
良かった	17	73.9%
どちらとも言えない	2	8.7%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	23	100.0%

### (3) 山口大学における国際活動へのヒント～事例紹介を含めて～

日程 平成24年3月5日(月) 16:00～17:30

場所 医学部総合研究棟S3

講師 今津 武 (経済学部教授[特命])

参加者31名

#### 内容

本研修会では、山口大学における国際化関係の諸活動を紹介するとともに、大学の国際化とは何か、その具体化に向けてどのような取り組みが必要であるかについて説明がなされた。

現在のグローバル化した社会においては大学間の競争も厳しさを増し、日本の大学の国際化が課題になっている。本学においても、『国際社会への貢献』、『国際社会の要請に応えた人材育成』、『国際的な共同研究と研究者交流』を目標として積極的に国際化を図る方針を打ち出している。しかしながら、そもそも具体的に国際化とは何かを言及した文書がないため、教職員の所属する組織や立場によってその捉え方は様々でコンセンサスを得難く、具体化についての議論は歩みが遅い状況にある。国際化について多様な視点があることは良いことだが、視点の違いによって組織間の摩擦が生じて動き難くなるような組織の在り方は今後再検討する必要があると思われる。また、国際化を進めるにあたって、個別の教員に過大な負担が掛からないような配慮も重要である。

大学に求められる国際化とは何かについて考えてみると「大学が得たものを世界に広めてゆくこと」、「国際的に活躍できる人材の育成」等があげられる。大学教員の場合は研究中心の視点から国際化を捉える方は多いが、教育の視点からみた国際化にも期待が集まっていることにも注目していただきたい。例えば途上国の医療現場においては「患者のために」という意識に乏しい医療従事者が少なくない現状にあり、知識や技術の側面だけでなく患者に対する倫理観を涵養する教育も必要とされている。また、大学においては「国際化＝留学生を増やす」という見方に偏る傾向があるが、日本人学生に海外経験を積ませるといった視点も重視する必要がある。国際的な場で活躍する人材を育成するためには語学力(英語)だけでは不十分であり、海外経験を積ませることによって英語でコミュニケーションをとることに気後れすることのない「国際力」を涵養することも非常に重要である。そのためには、大学が設けるプログラムに加えて海外青年協力隊等の海外経験を積む機会を設けるべきである。これについては、日本人学生は一般に内向きで積極性に欠けると思われるので、海外経験を積むことで一定の単位を認める等のインセンティブを与えるといった策も併せて検討すべきである。また、学内においては、日本人学生と留学生が交流する場をもっと増やすべきであると思う。現状では日本人は日本人のグループ、留学生は留学生同士のグループを形成して授業やゼミ以外の場を除いて交流が生まれにくい状況にある。今後は教職員がもっと積極的に留学生の日本語をサポートしながら、日本人学生と交流しやすい新たな場を作る配慮も必要である。また、留学生の募集については、留学生の経済的な負担を減らすために入試を現地でを行う等の策をもっと検討すべきであろう。

これらの説明に加えて、本学の国際活動を推進する組織である国際協力活動推進プラットフォーム(以下、プラットフォーム)の紹介および山口大学大学院経済学研究科「公共管理コー



**表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？**

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	5	19.2%
良かった	19	73.1%
どちらとも言えない	1	3.8%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	1	3.8%
合計	26	100.0%

ス」における取り組み等について紹介がなされた。

質疑応答においては、「学生のクラブで『国際協力クラブ』があるが、学生は何をやればよいのか迷っている。学生の活動にも協力してもらえないか」、「短期的あるいはスポット的に海外から教員を招き、学生たちを含めて英語で交流する機会が必要であるが予算的に余裕のない状況にある。このような場合、プラットフォームは予算の面も含めてバックアップをしてもらえるのか」、「公共管理コースの留学生は自国で修士号を既にとっているケースが多いと聞かすが、学費の援助はどのようになっているのか。日本はどのような援助をしているのか」との質問があった。これに対して、「学生サークルの件についてもできるだけ協力してゆきたい」、「海外の教員を招くことは教育上有意義だと思う。予算的なバックアップは現状では困難であるが、できるだけ協力したい」との回答がなされ、各国における大学院への就学援助の概要が説明された。また、保健学科の教員から「保健学科では入試に際して国際化を宣伝しているが、本質的には国家ライセンスを国際化する必要もあると思う」という見解も示された。

研修会後のアンケートでは、表1のように「非常に良かった」「良かった」と回答した参加者が多かった。本研修会の感想等については、「各国の医療水準に差異が大きく、日本の看護学はJICA等からの協力を求められることは多いと思う。その一方で、日本の学生や教員も高度な医療を実現した国で更に学ぶ機会が欲しい。海外から受け入れるばかりで、日本から海外に留学する機会がなくては国際化には程遠いのではないか」、「違った考えの国際化論が聞けて興味深かった」、「若いうちに海外で経験することは重要だと思う」、「同じ大学にしながら国際的なプロジェクトや英語での講義が行われていることを知らなかったので、大変有意義だった」、「国際化とは何か。日本の長所を提供することだけなのか」、「今何が求められているか理解できた」、「一般論が多かった。海外、特に欧米人との『協働』の経験について聞きたかった」、「アジアへの支援では、目線が高いのでは……。また、文化や、日本人が西洋化を目指してきた歴史の違いは大きな問題である」、「保健学科においても数名は個人的に欧米人と対等に協働し、若い人の交流もさせている。しかし、委員会は『文化交流のみの企画』が主であるため、業績とならない点が問題である」、「本学における具体的な活動が聞けて、大変興味深かった。国際活動については興味があるものの、なかなか敷居が高く見えないところがあるので、その方向性を聞けて良かった」、「大いに共感できた」、「他学部における国際化の取り組みがよくわかった」とのコメントが寄せられた。

今後取り上げてほしいテーマについては、「世界からみた日本の医療の現状」、「日本における山口の特徴」、「大学教員、研究者としての素養」、「研究手法について」、「教育方法および教育理論について」、「教員の質の向上（FDの幹）について。各教員組織における自主・自己革新・自助努力の促進を目指す方策」、「研究費や留学について」等の回答が寄せられた。

### 3) 教育改善に関する活動

#### (1) 保健学科 CFC の公開

平成22年度から検討してきた保健学科専攻のCFC案へのコメントが大学教育センターからあった。GPを明示するだけでなくカリキュラム編成上のポリシーをキーワードで欄外に示してありこの分野の教育に詳しくないステークホルダーにも学問体系を概観的に理解するのに役立つこと、教養教育と専門教育のつながりがわかりやすいことなどで、改善すべき点はほとんどないというコメントの内容であった。FD委員会では、提出したCFCを最終版として公開することとした。今後、GPを継続的に見直し、カリキュラム改訂などが行われた際には、その度ごとにCFCの改訂も併せて実施し、広く活用できるようにしてほしいとコメントがあった。次回、カリキュラム改正時に変更する際に、コメント等を含めて検討し、さらによいものに発展させたい。

(2) 「大学における授業改善ヒント集」(改訂版)への執筆

「大学における授業改善ヒント集」(改訂版) 山口大学 FD ハンドブック第4部に、2名の教員が執筆した。

- ・看護学専攻 教授 山勢博彰  
テーマ：動画教材を用いた考えさせる授業
- ・検査技術科学専攻 教授 野島順三  
テーマ：授業における学生のモチベーションを上げる工夫

(3) 平成23年度教育改善FD研修会

日程 平成23年10月5日(水)17:00～17:45

場所 医学部総合研究棟 S1

講師 岩部 浩三(大学教育センター長)、平尾 元彦(学生支援センター教授)

参加者 48名(アンケート回収38人)

(内容)

研修会では、まず、本学が導入を目指しているポートフォリオについて、岩部大学教育センター長から、導入の背景として平成23年度4月に行われた大学設置基準の改正に伴って、「大学は、当該大学及び学部等の教育上の目的に応じ、学生が卒業後自らの能力を発揮し、社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を、教育課程の実施及び厚生補導を通じて培うことができるよう、大学内の組織間の有機的な連携を図り、適切な体制を整えるものとする」という項目が加わったこと、これを受ける形で山口大学の平成23年度計画においても「学士課程を通じてキャリア意識を高めるため、ポートフォリオを全学的に導入する」、「ポートフォリオを用いた支援を通じて学生のキャリア意識を高めながら自発的な学習を促す」という2項目を挙げていることが説明された。そして、引き続いて学生支援センターの平尾教授より、「山口大学におけるキャリア教育体制の拡充とポートフォリオ」というテーマで、ポートフォリオ位置づけや導入の背景について就職支援の立場から説明が行われた。就業力支援から見たポートフォリオ導入の必要性からは、出口の課題として、「大手・有名就職先が少ない中、早目の準備と実力アップ」、「就職先希望の集中に対して、視野を広げ、社会を知ること」、「就業力の弱い学生に対して、早期発見・重点支援」が指摘された。さらに、実際に就職活動で使われているエントリーシートも例示され、「大学生活を充実できているか」、「世の中への興味・関心を持ち、未来をソウゾウ(想像・創造)できるか」といったポイントを示され、これらに対して大学生活を通じて考えていくためにはポートフォリオは有効であるという見解が示された。



(質疑応答)

次のような質問があった。「1年生にポートフォリオを実施された時に教員が宇部地区にいる場合、どのように対応したらよいか」これに対して、吉田地区の各種相談センターや大学教育センターができるだけお手伝いをするを考えているという回答があった。また、教員だけでなく、外部の人間もポートフォリオに関する面談に関わらせるということも考えられるという回答があった。2つ目の質問としては「医学部の学生は他学部と異なり進路はある程度

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	4	10.5%
良かった	16	42.1%
どちらとも言えない	13	34.2%
あまり良くなかった	2	5.3%
良くなかった	3	7.9%
無回答	0	0.0%
合計	38	100.0%

決まっているが、大学生活を充実させるという観点からは同様に思うがどのように考えたらよいか、この質問に対しては「社会人になるということはどういうことなのか」という点は共通であり、社会人になるための心がけや社会に貢献するということを考えるきっかけにしていきたいという回答があった。3つ目の質問としては「大学としてポートフォリオを学生に書かせて、その後どのように流れでこれを扱っていくのかが明確でないが、どのように考えているのか」。この質問に対しては「現状としては誰がどのように対応していくのかを決めていない。今回の研修内容を踏まえて今後各学部で導入に向けてどのような流れで対応していくのかを検討してほしい」という見解が示された。今回は医学部保健学科の先生方を中心に医学科先生方も交えてポートフォリオ導入を巡って活発な議論が展開され、充実した研修会となった。

## 4) 学生授業評価・教員授業自己評価

平成 23 年度の学生授業評価においては、85.5%の実施率へと約 13%改善したが、授業評価の必要な教科目でも 15%の教科目については実施されておらず、学生授業評価の重要性を周知する必要がある。さらに、評価結果は次年度の講義計画に反映させ、教育の質の向上に役立てるよう主体的な取り組みを促すことが重要である。なお、教員自己授業評価については、学生授業評価の結果が教員自己授業評価をしなければ閲覧できないため、学生授業評価とほぼ同率と考えられる。また、平成 23 年度は、授業毎の評価を検査技術科学専攻において試行の段階である。

		H. 17	H. 18	H. 19	H. 20	H. 21	H. 22	H. 23	備考
独自	医学部（保健学科）	48.6%	52.9%	55.2%	52.6%	66.7%	72.1%	85.0%	授業評価の必要なものに限定

## 5) 来年度の課題

今後への提言：

平成 23 年度に保健学科が行った FD 研修会の内容は、評価方法も含め一般的な視点での教育方法が中心であった。教育学を学んでいない専門教員による学科としては教育の基本を学ぶという点では効果的であったが、今後は、保健学科特有の専門教育についての FD も加えていくことが必要と考える。

## 第9章 工学部のFD活動

### 第1節 授業公開

工学部では、これまで毎年度前期と後期に、開講科目を公開授業として期間を定めて一般教員の授業参観を実施してきた。従来から教員の参観率が低いという問題があったので、今年度は各学科ごと参観率向上の施策を昨年後期からは、参加率の向上を期待して、一定期間を定め、学部全開講科目を対象として授業科目を実施した。

#### 平成23年度(前期)公開授業一覧

後期公開授業実施期間 7月1日(金)～7月21日(木)

学科	授業科目名	授業実施者		実施日時	備考
		職	氏名	月 日	
全学科	全開講科目	全職	全教員	7月1日～ 7月21日	非常勤講師担当の科目は除く。

#### 平成23年度(後期)公開授業一覧

後期公開授業実施期間 12月1日(木)～12月22日(木)

学科	授業科目名	授業実施者		実施日時	備考
		職	氏名	月 日	
全学科	全開講科目	全職	全教員	12月1日 ～12月22日	非常勤講師担当の科目は除く。

参加者は前期30名、後期27名、合計57名であり、この人数は工学部の教員数の46%に当たるが工学部として、教員には年1度の授業参観を目標に掲げており、目標達成までには今後更なる改善と普及が望まれる。そのため、多忙な教員のニーズに合わせた工夫・改善が必要と考えられる。授業参観した教員から提出された感想や指摘などを、原文通り以下に列記する。

# 1. 前期公開授業感想まとめ

## (1) 優れていると思われる点

### 1) 説明

- ・物理学の数式の説明で、中学の数学に立ち返って説明していたことは、学生の基礎学力の点から、理解するのに非常にいいと思う。
- ・原理の解説だけにとどまらず、実際の分析例を紹介する点
- ・マイクを使うことで、聞き取りやすい。
- ・回路図（キー入力）の説明が丁寧で分かりやすかった。
- ・図やグラフを指し示しながらの説明なので、良く分かった。
- ・パワーポイントの資料に加え、適度にホワイトボードも使用することで、説明にメリハリがあった。
- ・ていねいに説明している。
- ・説明も板書した図を用いて丁寧である。
- ・説明が丁寧であること。よくわかるように教えていることが理解できた。
- ・応用化学科の学生向けに、数式などをあまり用いず感覚的に理解可能な内容で構成されている点が有り難く感じました。
- ・パワーポイントを利用し、視覚的にも学生の理解向上に努力している点。
- ・大勢の授業ですが話はよく聞こえます。
- ・補講らしいが、受講している学生の学力のあまりの無さに、愕然とした。そのなかで一人ひとりに、理解してもらおうと懇切丁寧に説明していたのには感心した。
- ・なぜ破壊に至ったのかなどの理解しやすい説明がなされていた点。
- ・優れている点として、学生の参加意欲が極めて高く、主体的にチャレンジ点を設定し、チームで力を合わせて取り組んでいる点です。そのためか、発表会の質疑応答も積極的に行われました。具体的には、各チームの発表後に行われる質疑では、教員を除く学生同士のディスカッションにおいて、平均5～6件の学生からの質問があり、デザインコンセプトの達成度や、発射試験で発生した問題点の解決方法など広く議論されていました。

### 2) 板書

- ・板書は字の大きさもよく丁寧に書かれていた。
- ・板書は要点をきちんと簡潔にされている。字の大きさ、字体も遠くからも認識できるように丁寧に板書されている。
- ・幅広い教室なので、実験をスクリーンに表示して教室全体から見えるように工夫している点。

### 3) 資料

- ・配布プリントの中に空欄をつくり、キーワードなどを学生各個人に書き込ませる点。
- ・資料が穴埋め形式になっており、適度に手を動かす作業を交えている点。

### 4) 進め方と工夫

- ・前回の内容について、毎回小テストを行っているのは、講義内容の確認とともに受講へのモチベーションアップにも繋がり、有効な手法であると思う。
- ・講義の雰囲気も、程よい緊張感が流れており、学生も真剣に取り組んでいるように感じた。
- ・作図や音読など、学生の積極的な授業参加を促していた。
- ・授業の最初に前回までの内容を概説し、今回の目的と目標を明確にしている所。

- ・配布プリントに書き込みをさせている。
- ・比較的静粛に講義が行われている。
- ・学生の自由な創造力を発揮させて、様々な橋梁モデルを製作させている点。
- ・評価条件としてモデルの重量と載荷荷重であることを受講生に理解させ、その上でもっとも合理的なモデルを考えさせている点。
- ・前回の復習を行う点。
- ・実践的な内容を含んだ演習を実施しており、学生が講義内容に興味を持てるように工夫している。
- ・座学での解説時間および演習時間のバランスがよい。
- ・比較的頻繁に学生に質問をすることで理解力を上げている。
- ・質問受け付けの方法を提示しており、学生の理解を深めるために良いと思った。
- ・英語でのディベートの実習は海外で建設技術者が活動する際には大変役立つと考えられる。授業ではグループ毎に丁寧な指導が行われていた。授業が要求する目標は非常に高く、やる気のある学生にとっては効果が高いと考えられる。
- ・途中で、復習まであり、さらに、態度の悪い学生への指摘もあった。学生が根気よくわかろうと努力していることをみることができた。
- ・質問と引き換えに出席チケットを配布することは学生が他のG rの発表への参加を促すという意味で大変よいことだと思う。
- ・全員がマイクを持ち、少しでも発表する機会を持たせたことは評価できる。
- ・今後、必ず必要となってくるプレゼンテーションとその質疑・応答方法について、実践的な形式に沿って実習を行っている。
- ・コンテストの状況を全員に分かりやすいようにプロジェクターなどを利用して表示させている点。
- ・理解度を計るために、語句に関するキーワードリストを配布し、その理解度についてアンケート調査を実施している点が優れている。
- ・練習問題を数多く取り入れ、学生の理解の定着を計っている点が優れている。
- ・授業進行の全場面において、学生に簡単な質問を与えて、その反応によりレベルを適応させているため、全体的な学生の理解度を最大限に高めることができている。
- ・PBL に基づいて学生が自発的にテーマを考えていることにより、モチベーションの向上が図られている。

#### 5) その他

- ・試験にノートPC禁止は賛成です。今時は、出題を知恵袋に投稿されるかもしれない。ノートPCが無くても、脳内デバックはできますし。
- ・レポートが手書きなのは、コピー防止でしょうか？
- ・参考になることと、学ぶことは楽しいと感じました。
- ・学生も熱心にノートを取っている。
- ・学生全員に一人ずつPowerPointを使用して発表させていた。
- ・一人ずつ異なる課題で、制限時間を守らせて発表させていた。
- ・1年生の情報リテラシー演習では、PowerPointの指導ができていないが、それにもかかわらず、ほとんどの学生はスライドをきちんと作成していた。
- ・13の班の発表があった。中には、回路の内容に優れた班、作成パワーポイントに優れている班がみられた。これらの評価が高い班は、最後にもう一度発表してもらうのもよいのでは思う。さらに、後期の「デジタル回路」の最初の講義でこの優秀作品だけでも実演とパワーポイントの映像をみせると学生も講義に興味を持つと思う。

- ・「応用化学科にはどのような内容を話せばよいか」と以前ご質問があったので、今回の機会に拝聴させていただきました。半導体の基礎と応用は新応用化学科での多くの研究室での研究と関連が深く、この内容でお話しいただければ助かります。
- ・学生の私語は必ずしも講義に関係の無いものではなく、学生同士が講義内容について話っているケースがあることが、後ろの席で聴講させて貰っていて分かった。
- ・本講義のような、実際のものづくりに、チームで取り組み、問題解決を実行する力を醸成する講義は、学生を大きく成長させるものであらうと感じます。

## (2) 改善を検討すべきと思われる点とその理由

### 1) 説明

- ・問題と実務との関連を加えたらどうか。河積一定条件での計算があったが、現実問題では川幅一定とかの制約がある方が現実的な場面もあると思う。河積一定の意味まで伝えた方がよいと感じた。

### 2) 板書

- ・公開授業の時は、実験データも板書していたが、より正確な情報を伝えるためには、実験データの図表は板書よりはプリントがいいのでは？

### 3) 資料

- ・全てのスライドを印刷して配布されていますが、適当に空欄等を設け学生が集中しやすい教材とされても良いかもしれません。

### 4) 進め方等

- ・1回の講義を聴いただけなのでわからないが、プリント配付のみだけでなくOHPも併用したほうが良いかもしれない。
- ・学生が用意してきたプレゼンは事実関係を述べたものが多く、途中で自身意見はほぼ無く、最後にネガティブな意見で終わるものが多かった。はじめに、ブレインストーミングの約束事を身に付けさせる必要もあるのではないだろうか。少人数（17人）であることを活かし、座学の他、ブレインストーミングやプレゼンなどを取り入れており、学生参加の授業になっている。授業のための準備が必要(課題を出す)であることで、上記のことがいっそう深まる。
- ・演習の時間が少なかったかもしれない。
- ・極めて工夫されており、さらなる改善は困難かと思うが、問題点を敢えて挙げるなら学生の質問が出にくいことであろうか。発表課題指定時に質問課題も指定しておくことで質問のために予習してくる学生もいるかも知れない。
- ・全部の班で、実演をカメラにとったものを発表会で披露していたが、折角の映像が不鮮明で、発表効果が半減した班がかなりあった。この点はどうにか工夫できないかと思う。
- ・学生の質問が遠いところでは聞きとりにくい場面もあったように思う。質問者は椅子から立ち、大きな声で質問するよう指導したら、礼儀作法の面も含め、さらによい発表会となると思う。
- ・講義中にスクリーンを向いている時間が長いのではないのでしょうか。
- ・適宜、学生に質問して理解を確認・促す等のアクションがあっても良いように感じました。
- ・ブリッジコンテストは一回きりであるため、良かった点、悪かった点を考え、次へ活

かす場が提供されていない点が改善の余地があると思われる。7週と短い講義日数の中では難しいかもしれないが、チャンスが2回でもあると、次はどうしようかなど、自分で考えることが出来るので、良いのではないかと思う。

- ・ソイルタワーにくらべ、試行の機会がないので、難しいという学生の意見があった。

#### 5) その他

- ・講義開始から20～30分たってから入ってくる学生がかなりいた。途中から入ってきて、十分に理解できるのか疑問に感じた。
- ・グループごとの演習のため、演習が終わった学生が雑談や自習していることが気になった。授業が行われている教室(E31)がディベートに向いていないため、D講義棟2Fのような、自由にレイアウトできる教室で授業を行うほうが良い。さらにマイクなどを活用して、他グループのディベートを皆で聞いて感想を求めるようなシステムであれば私語も生じにくいのではないだろうか。
- ・ノートPCを持ち込むので仕方がないが、講義中にゲームやWeb閲覧をしている人が1割ぐらい居た。見回りを強化するか、講義中はPC使用禁止をした方が良いかも。
- ・予習を行わない学生が目立ち、そのような学生は全く学習効果を得ることはできない。本学科の関係各教員も協力して、各グループの予習状況をチェックするような取り組みが必要と考えられる。
- ・D31は広いのでマイクが使用すると良いかもしれない。
- ・TAと教員2名でも、この実習全体をコントロールするには苦勞をしている。
- ・全体が若干騒々しく、教員が何度も「静かにしなさい」と注意している。いま教員が説明していることをリアル感をもって伝える方法はないかを考えてほしい。
- ・必修かつ80名を超える講義であり、演習も含んでいるため、学生の質問に対応できるTAの数を増やした方がよい。
- ・Power Pointの使用が学生に理解しやすいかを確認してみる必要があるように思われた。
- ・ひどく遅刻する学生には多少注意する方が良いと思われた。
- ・講義開始から30分以上経っても入室してくる学生、あるいは講義途中で退出してしばらくしてから入室(トイレ?タバコ?)してくる学生が2, 3人見うけられた。
- ・帽子をかぶったままの学生1名、熟睡中の学生2名いたが注意はなされなかった。
- ・学生はなるべく前の方に座らせた方がよいように思う。後部に座っている学生が多いように見受けられる。
- ・自分の授業にも共通する問題だと思いますが、携帯を使う学生、勝手に出ていく学生、いねむりする学生など、本当にいららせられます。大学全体として毅然とした態度で臨むなどの対策が必要だと思います。
- ・最初の座学で数人が雑談、4人が睡眠、ガムをかんでいる学生が2人、帽子をかぶっている学生が1人、など、がっかりする部分もあった。
- ・自分の授業にも共通するが、学生の反応のなさ、ノートをとらない学生、いねむりする学生には本当にいららせられる。大学全体としての工夫が必要だと思う。

### (3) その他

- ・2年生らしいが基礎学力にかなり問題があるように感じた。高校から大学への橋渡しの教育をきちんとなしなさいといけない。これはこの講義だけの問題ではなく、学部全体での課題と感じた。

- ・補講らしいが、受講している学生の学力のあまりの無さに、愕然とした。中学生レベル？逆にいうと、この程度で入れる大学のレベル？
- ・D12教室はD棟の中でもスクリーンの配置が良く、スクリーンを見ながらホワイトボードに記載できる。他の部屋（特に大人数が入れる教室）も同様に（スクリーンでホワイトボードを遮らない様に）対処して欲しい。
- ・受講者数と教室の広さのバランスが悪いように感じます。特に選択科目では、受講者数が確定してから教室が変更できるような制度設計が望ましいと考えます。

## 2. 後期公開授業感想まとめ

### (1) 優れていると思われる点

#### 1) 説明

- ・C11教室で授業が行われていたため、マイクを使用したのは適切に思われた。
  - ・明瞭で元気のある話し方が大変よい。
  - ・コンクリート構造物を例に、維持管理対策フローという実際的な事例を取り上げ、実務に用いられる語句を詳細に説明されており、聴講者が将来、同様の業務に従事する際に有用なものと思われる。
  - ・各教員の研究紹介を目的が本演習科目の趣旨ですが、ご専門の「触媒とエネルギー」について、基礎から筋道を立てて説明されており、理解が深まる内容になっていました。
  - ・板書するには複雑なグラフはプロジェクタでホワイトボードに投影して、その上に追記しつつ説明をしている。プロジェクタの面白い使い方だと思いました。
- また、学生のノートへの書き込み具合を見ながら説明を進めていたので、ノートを書くのに手いっぱい、話を聞けないということがあまりないと思われまます。
- ・ホワイトボードが各実験テーマに配備されており、言葉だけでなく図や数式を使って実験内容を分かりやすく解説されており、参考にしたいと考えました。
  - ・パワーポイントを利用した講義であるが、1ページに記載されている情報量が抑えられており、かつ、1ページ当りの説明に十分な時間を割いている。
  - ・内容の説明が丁寧にされていた。
  - ・測定データの処理法の指導までのきめ細やかな配慮がなされている。
  - ・ケータイの最先端技術の進歩を配付プリント、OHPで簡潔に説明していた。
  - ・ウラン1Kgと石炭、石油の等価量など具体例をだして講義を進めているのは、興味を持たせる意味でもよい。
  - ・声、説明、板書が明瞭で聞き取りやすい。
  - ・白板も使い補足説明をしている。

#### 2) 板書

- ・板書は字の大きさもよく丁寧に書かれていた。
- ・板書は大きな字で書かれており、後ろで聞いていても見やすかった。
- ・板書の字が大きくて大変よい。
- ・スライドは字が大きく書かれており、後ろからも鮮明に見えたこと。

#### 3) 資料

- ・解りやすいPPTを準備し活用している。
- ・PPTの内容をプリントアウトし学生に配布している。

- ・一部空欄にしたスライドコピーを配布しており、多くの学生が空欄の内容を書き写していたこと。
- ・パワーポイント資料をプリントとして配布しているので、学生はそのプリントにプラスアルファの必要事項を書き込みながら説明を聞くことができる。
- ・専門用語の表記については、別枠を設けて、略号だけでなく正式な英語名と和訳が併記しており、学生が用語の意味を理解する上で有益と思った。

#### 4) 進め方と工夫

- ・参観した時間帯には教職員4名が指導していた。電気化学特性を測定する実験ではティーチングアシスタントがホワイトボードを利用して測定原理や測定方法、注意点を説明していた。またガラス細工では教員、TA2名が個別に手ほどきしていた。
- ・化学系実験では危険を伴うことが多いので、TAもしっかりしていないと事故の原因となるため、事前にTAをしっかり教育している印象を受けた。TAが実験や事前の実験概要の説明に積極的に関与しており、受講している学生も集中して取り組んでいるように見える。
- ・実験を行う服装（白衣・保護眼鏡等の着用）が徹底されており、安全性を確保しているように思われる。
- ・学生3人に対して実験装置1セットを割り当てた少人数の実験を実施されていました。参観者のテーマでは6人に対して実験装置1セットであり、少人数での実験の方が望ましいと感じました。
- ・実験の中で、2テーマは発表と討論が行われている。
- ・どのように議論等を用いて考えること、また、発表を通じて人に説明し、理解を深めることを教えればよいのかが問題である。発表や討論の時間があるのは優れている。
- ・TAの学生により指導の仕方はさまざまです。あまりしゃべらず、横からじっと見ているTAもいます。説明が多ければ、良いというわけでもなく、学生が考える前に指示をして、受講生は言われるままに動いているだけの場合もあります。どのようにTAを指導するかも難しいところです。TA本人には良い経験だと思いますが。
- ・見たところTAの学生は総じて良くやっていると思います。
- ・演習時間に学生が静かにまじめに問題に取り組んでいる。
- ・Moodleを有効活用されている。
- ・実験の準備がよくできている。またTAが熱心に指導している。
- ・定期的にレポート(課題)を提出させていること。
- ・私語をする学生がいないこと。
- ・教員が常に学生の中に入って指導にあたっており、学生から質問しやすく受け身ではなく積極的に学びやすい環境になっていると感じられました。
- ・レポートを紙で提出するだけでなく、プレゼンテーションを行って報告する機会も設けられており、実験だけでなく学生のプレゼン技術の習得にも役立っているのではないかと思います。

- ・説明しながら講義室内を回り、個々の学生に順番に質問を投げ掛けているので、学生側はそれなりの緊張感を持って聞いている。
- ・最初の5分程度は前回の復習なので、授業にスムーズに入れたと感じた。
- ・全員が白衣・保護メガネの着用しており、安全教育が徹底されており、こちらも参考にしていきたいと思いました。
- ・学生たちを4名程度の小グループに分けて課題（ロボットアームの作製）の実現を目指している。メンバー同士で技術的問題点に関してディスカッションをしたり、課外での追加作業を実施する際にスケジュール調整を自主的に行っていたりする。このような環境を構築できている点が、特に素晴らしいと感じた。
- ・原子力問題、エネルギー問題と時節柄タイムリーであること、取つきやすいテーマであることも関係しているとは思われるが、出席率がよいこと、私語がすくないこと、講義途中での教室出入りが殆どないことは、大変よかったと思われる。ただ、どうしてこのような授業ができているか、この1回だけの授業参観では判らない。教官の適切な指導があったとは考えられるが。
- ・中電プラントの見学も実施しているようで、単なる座学だけ終わらせていない点は、非常によいのでは。
- ・資料が充実しており、パワーポイントで図を使いながらわかりやすく説明されていた。特に、資料中に記入欄を設けることで学生の集中力を持続させるとともにポイントとなる点をクリアにされているところが参考になった。
- ・点呼をとることにより学生の注意を喚起する。また、質問を当てる際に出席名簿を利用することで、緊張感を引き出していること。
- ・なるべく多く学生に質問を当てるように心がけていること。
- ・課題プリントを配布して、課題に取り組みながら授業の説明を行うことで集中力を引き出す。
- ・スライドと配布プリントをふんだんに使った視覚重視の講義進行
- ・座学による理論の教授だけでなく、個人毎に実際の評価ツールを使用した授業を行うことで、内容をより深く理解できるように工夫されている。
- ・パワーポイントを用いた講義だが、あわせてプリントも配布されており、詳しい説明が載っている。
- ・学生への指示は具体的で明確である。
- ・少人数で理論や議論を踏まえた指導が行き届いている。

#### 5) その他

- ・出席の管理が厳密に行われており、これは必修の演習科目では重要な項目となります。採られていた方法は非常に参考になります。
- ・参観者が担当している実験テーマの中で、PWM方式について簡単に触れますが、学生の話からテーマKでも扱っていると聞き、参観させていただきました。

## (2) 改善を検討すべきと思われる点とその理由

### 1) 説明

- FDMA, TDMA, CDMA, LTE, IMT-Advancedなどを、その特徴なども含めて、かなりの時間、1枚のOHPで説明していた。前の講義で教科書などを用いてその用語およびその特徴などは説明しているのであろうが、もしそうでないなら、あまりにも情報が多すぎてわからないのではと感じた。
- 参観したときがたまたまなのかわからないが、自由な教室の出入り、私語が多すぎていて、先生の講義のじゃまになっていると感じた。
- 特に改善というほどのことではないが、1の項目とも関連するが、原子力爆弾と原子力発電の違いを議論するとき、 $^{235}\text{U}$ の量に違いがある？として話をしていたが、定量的にどれくらいの違い？があるかも示してほしい。ごく僅かな違いの制御の重要性を示してほしい。

### 2) 板書

- 公開授業の時は、実験データも板書していたが、より正確な情報を伝えるためには、実験データの図表は板書よりはプリントがいいのでは？

### 3) 資料

- 全てのスライドを印刷して配布されていますが、適当に空欄等を設け学生が集中しやすい教材とされても良いかもしれません。

### 4) 進め方等

- 1回の講義を聴いただけなのでわからないが、プリント配付のみだけでなくOHPも併用したほうが良いかもしれない。
- マウスを使ってプロジェクタ画像(PPT)にコメントを残すのに苦労されているようでした。Ipad等？の新しいツールを使われると良いかと思いました。
- 化学系実験では薬品やガラスを多く使用するため、実験室では保護メガネを常時、着用を1年生より指導している。電気化学測定では不要な場合もあるが、別の実験から薬品等が飛散することも考えられるので、注意が必要と感じた。
- 実験スペースが狭く、異なるテーマを同一実験室で行うには難があると感じた。
- PowerPointを使用された講義形態であるが、後方座席の受講生達は下を向いたままじっとしており（居眠りしているわけではない）、ノート等をとるような様子がみられない。
- 必修科目であり受講人数が多く、関心の薄い学生も受講しているため、興味喚起が難しい科目だと思います。お話だけでなく、全員の関心をつなぐような仕組みがあるとよいと感じました。
- 学生が理解しているか確認がされていない。
- PCを利用する演習はどんなに簡単と考えられるものでも、必ずできない学生が一定程度いるため、TAを付けてできない学生のケアをしつつ授業の進度を確保するのが良いのではないかと考えられる。

### 5) その他

- 遅れて堂々と入室してくる学生数名が目立った。
- 出席者は30名強であり、比較的少人数に対する講義であるが、それでも講義室の後方

では寝ている学生、おしゃべりをしている学生がいる。

- 他の講義もですが、講義中の飲食や携帯電話の操作などをどのようにして止めさせるかが問題と思いました。最低机の上に置かない注意をしたらいいのかも知れません。

### (3) その他

- 必修の授業の運営は難しいと、改めて思いました。
- 講義開始してしばらくたっても私語がなくなる。また、教室を自由に出入りしており、3年生は講義をなめきっているとしか思えないような態度であった。これに比べて、後期に聴いた2年生の講義では私語は殆ど無く、教室の自由な出入りはなく、雲泥の差であった。2年生にはまだ素直さがあるように感じた。
- 私語は殆ど無かった。また、3年生になるとよくみられるのだが、講義開始あとも自由に教室を出入りする学生も殆どいなかった。このようなことは当たり前のことではあるが、同時期に聴いた3年生の講義では私語、自由に出入りしており、雲泥の差で、3年生は講義をなめきっているとしか思えないような態度であった。これに比べて2年生はまだ素直さがあるように感じた。如何に継続させるかが重要である。
- TAの学生が一生懸命に指導していました。受けている学生がその横で大きな欠伸をしていました。TAに限らず、教員が説明していても眠たくなる学生はいます。TAの学生には気の毒でした。
- 実験の準備がよく、TAが熱心に指導している優れた点は、裏を返すと学生の主体的参加が十分ではないことになる。また、教員とTAの負担が大きすぎる。妙案はないが、検討していくべきであろう。

## 第2節 学部・研究科主催FD研修会

平成23年度も山口大学FD研修会への参加を積極的に行った。また工学部、理工学研究科工学系、及び医学系研究科工学系として以下のFD研修を実施した。

### 1. 教育改善FD研修会

開催日時：平成23年9月7日（水）13:10～14:15

開催場所：工学部D講義棟 31教室

研修対象：工学部教員

研修目的：教育改善に向けた組織的なFD活動を継続的に実施する。

研修内容

#### (1) 教育改善FD研修会

##### 1) 講師

大学教育センター教員，学生支援センター教員

##### 2) 内容

大学教育の質保証の一環としてキャリア教育を含むポートフォリオの策定に向けて意見交換を実施する。また，昨年度各学部・学科から提出されたカリキュラム・フローチャートの点検結果とカリキュラム改善についても併せて意見交換を行う。

##### 3) 研修スケジュール

13:10～13:12 開催挨拶とスケジュール説明（工学部点検・評価委員長）

13:12～13:25 就業力支援から見たポートフォリオ導入の必要性

13:25～13:35 ポートフォリオ導入の背景と課題

13:35～13:40 質疑応答

#### (2) FD講演会：ステップアップノートの活用法について

##### 1) 講師

工学教育研究センター元教員 溝田 忠人

##### 2) 内容

ステップアップノートの企画編集に携わった工学教育研究センター元教員からステップアップノートの企画目的、内容、活用法について講演していただき，教員への理解を図る。

##### 3) 研修スケジュール

13:45～13:46 講師の紹介（工学部点検・評価委員長）

13:46～14:11 テップアップノートの企画目的、内容、活用法について

14:11～14:15 質疑応答

### 2. 発達障害に関する研修会

開催日時：平成23年12月14日（水）15時40～16時40分

開催場所：工学部第1会議室

研修対象：工学部教職員

ただし、学科長専攻長会議構成員及び学生委員会構成員は、必須の参加者とする。  
研修目的：指導が難しく不登校・中途退学につながる学生が年々増加しており、対応する教職員は日々苦心されている。実はこのような学生の中にはコミュニケーションや認知に問題を抱える「発達障害」の学生の割合が高いと思われる。発達障害は、なかなか理解しづらく、対応を誤ると深刻化してしまうケースが多い。問題を抱えた学生を直接指導される機会の多い先生方に、発達障害の特徴と効果的な対応について周知し、学生相談所との連携をより深め、今後の学生への指導に役立てていくことを目的とする。

研修内容等

## (1) 発達障害に関する研修会

### 1) 講師

比嘉 小夜 カウンセラー（宇部地区（常盤）学生相談所）

### 2) 内容

発達障害（アスペルガー障害・ADHD・LD）の特徴と効果的なサポートについて

## (2) 研修会アンケート結果（参加者 39 名，回答者 17 名）

### 1) 講習会に参加して、良かったと思いますか？

- ・とても良かった：14名
- ・良かった：2名
- ・普通：1名
- ・あまり良くなかった：0名
- ・良くなかった：0名

### 2) 講習会の内容は理解できましたか？

- ・理解できた：16名
- ・どちらかといえば理解できた：1名
- ・どちらかといえば理解できなかった：0名
- ・理解できなかった：0名

### 3) 今後、取り上げてほしいテーマがありましたら、お書き下さい。

- ・発達障害の学生さんに対するさらに具体的な支援方法
- ・学外の支援システムならびにその利用方法
- ・今回の続編：発達障害の学生への対応をより詳しく指導していただければ幸いです。
- ・該当学生がおり、(これまでも、いたと思われませんが、こちらの知識が十分ではなかった)、指導の方法に非常に参考になりました
- ・発達障害について、より詳しく知りたいので、同じテーマでもっと掘り下げた、例えば事例など差し障りの無い範囲で紹介して下さると有難いです。
- ・年齢の高い教員と学生とは、世代の断絶が深く相互理解はかなり困難に思える。価値観も習慣も異なる大学生の世代の心理に詳しい専門家に、相互理解を深めるための実践的なアドバイスをいただけると嬉しい。(具体的には、卒業研究や修士の特別研究に熱心に取り組まない学生に対処する方法があるかどうか、など)
- ・今回の講習会では、発達障害の一般的な特徴を知ることができたので、発達障害を抱えた大学生が大学生活で陥りやすい問題の中で具体的にどういったかわりができるのかを、個人として、また組織として知りたい。先生のお話の中で他大学で、より積極的に発達障害のある学生への支援に力を入れている所があると聞きましたので、大学として

どういう支援をしているのか、ということを取り上げて欲しいと思います。

- ・学生のやる気を喚起する教育手法、昨今の学生とのコミュニケーション手法

4) 今後もこのような講習会に参加したいと思いますか？

- ・是非参加したい：10名
- ・参加したい：5名
- ・どちらともいえない：1名
- ・あまり参加したくない：0名
- ・参加したくない：0名

5) ご意見・ご感想・ご質問等がありましたら、ご自由にお書き下さい

- ・この問題の深刻さについては理解しているつもりですが、納得できない部分もあります。私がかつてより、空気が読めないとの指摘を受けてきました。講習会で挙げられていた他の特徴もよく一致します。そうした学生とまだ向き合っていないせいか、まだ、発達障害であると判定することにいささかの抵抗を感じます。世間の荒波にもまれていない、教育されていないということと本質的に違わないのではないかという疑問が残っています。
- ・発達障害の概念・特徴、初期対応やスクリーニングに関する大枠が理解できました。どうもありがとうございます。学生支援課等の事務部門の方々に対する同様な研修会も必要ではないかと思います。さらに、学生さん達への啓発活動も今後実施できればと思います。
- ・大人数での講義だと、殆ど分かりませんが、少人数の講義を行うと最近とみに精神的に不安定な学生が増えているように感じます。発達障害という枠にとらわれず、そのような学生と接するときの心構えなど取り上げて頂くと幸いです。
- ・「発達障害」という言葉は一般教員にはまだなじみがないが、当日の説明であったような例を列挙されると多くの教員は思い当たることが多いと思う。研修会の内容説明を、素人の教員にわかりやすくした方が人が集まると思う。
- ・私は発達障害と思われる学生の指導で困難に直面しており、具体的なことは直接カウンセラーに質問することとする。
- ・他大学の取り組み、大学としてどこまでやるべきなのか、専門の教育課程は必要か、就職への考え方が異なるので支援も異なるがどうすべきか、など質問、議論すべきことが多いと考えられた。
- ・先生のお話をうかがって、これから大学生の中にも発達障害を疑われるような学生が増えてくるのがわかりました。周囲の理解や適切な支援によって、大学生活からドロップアウトすることなく、能力を活かし、社会人としてのスキルを身につけていくことができると思うので、今後もいろいろな方法で学んでいきたいと思います。
- ・この問題はとても重要で、多くの先生も頭を抱えている。もしくは今後、問題を抱える立場になると思いますので、教員等会議の前後に行うなど、より多くの教職員を対象に講習会を行い、情報の共有化と、助け合いのネットワーク形成を行ってほしいと強く要望致します。
- ・FDには、知識的事柄と技能的な事柄を学ぶ必要があると思います。
- ・発達障害に関する研修は、今後も是非続けて頂きたいと思います。

### 3. 工学教育研究講演会

日時：平成23年11月30日（水）13:20～17:30

場所：山口大学工学部 D11 教室

目的：山口大学工学部では、工学教育に関する研究講演会を毎年開催し、学生教育の改善に努めている。本年も学外から講師を招き、下記の内容により開催します。日頃の教育改善の参考にしていただくための情報提供を行うことを目的とする。

内容等

1) 基調講演 13:30～14:30

「工学系数学教育におけるコアカリキュラムと到達度評価」

渡邊敏正先生（広島大学大学院工学研究科情報工学専攻教授）

2) 各学科の取り組み 14:30～17:10（各40分）

①「機械工学科における取り組み：～ディスカッション能力の向上を目指して～」

三上真人氏（山口大学大学院理工学研究科教授）

②「応用化学科における取り組み：入学から卒業まで実験・実習を核とした主体的学習カリキュラム」 山本修一氏（山口大学大学院医学系研究科教授）

③「電気電子工学科における取り組み：～電気・電子技術者としてのコア学力の形成～」

浅田裕法氏（山口大学大学院理工学研究科准教授）

④「感性デザイン工学科における取り組み：学部、大学院の一貫教育を見据えた建築技術者の育成」 嶋心治氏（山口大学大学院理工学研究科教授）

3) 意見交流会 17:10～17:30

質疑応答及び意見交流

参加者数：19名

### 4. FD推進者のための研修会

日時：平成23年5月11日（水）17:40～18:40

場所：常盤地区

	所属部局	職名	氏名
1	工学部	点検評価委員長・教授	田中 幹也

### 5. 「大学における授業改善ヒント集」改訂に関わる研修会

日時：平成23年5月11日（水）17:40～18:40

場所：常盤地区

	所属部局	職名	氏名
1	工学部	点検評価委員長・教授	田中 幹也
2	工学部	教授	柳 研二郎
3	工学部	准教授	佐伯 隆
4	工学部	准教授	平林 晃
5	工学部	教授	中山 雅晴
6	工学部	教授(特命)	久井 守

### 第3節 教育改善に関する活動

工学部では、教育改善に関する活動の一環としてすべての専門授業は、学生による授業評価を受けている。そして、授業改善のため平成15年度より「学生授業評価アンケート」中の「総合評価」にもとづき、前期・後期の優れた授業に表彰を行って来た。しかし、平成17年度から評価項目が変更され、「総合評価」がなくなったので、選考基準を以下のように変更している。すなわち、

評価項目の内、次の3項目

項目 2・・・理論や考え方、専門用語などがわかりやすく説明されましたか？

項目 9・・・あなたは授業の内容を理解しましたか(実験演習の場合は、内容理解や技能のレベルは向上しましたか？)

項目 10・・・この授業はあなたにとって満足のいくものでしたか？

を選び、各平均点の和(15点満点)に受講者数の重みを加算した点数が、全開講科目の上位10%に入っている科目を「優秀授業」として表彰する。表彰されるのは、その科目を担当した全教員、及び全職員である。また、各学科の最高得点獲得授業を「最優秀授業」として表彰する。ただし、原則として受講生10名以上の授業を対象とする。

本年度優秀授業表彰を受けた科目とその担当教職員を以下の表にまとめた。

平成22年度優秀授業一覧表					
番号	開設科目名	担当教員名	学科	学年	工学部 表彰種類
1	ものづくり創成実習Ⅱ	新銀 秀徳	機械工学科	2	最優秀授業
2	ものづくり創成実習Ⅰ	望月 信介	機械工学科	2	優秀授業
3	流体工学Ⅰ	望月 信介	機械工学科	1	優秀授業
4	建設情報基礎工学	鈴木 素之	社会建設工学科	1	最優秀授業
5	無機化学	中山 雅晴	応用化学科	2	最優秀授業
6	配位化学	中山 雅晴	応用化学科	3	優秀授業
7	応用化学工学実験Ⅱ	堤 宏守	応用化学科	3	優秀授業
8	電気化学	森田 昌行	応用化学科	3	優秀授業
9	応用化学工学演習Ⅰ	鬼村 謙二郎	応用化学科	1	優秀授業
10	生物化学Ⅱ	赤田 倫治	応用化学科	2	優秀授業
11	半導体工学Ⅰ	山田 陽一	電気電子工学科	3	最優秀授業
12	情報理論	平林 晃	知能情報工学科	2	最優秀授業
13	応用線形代数	平林 晃	知能情報工学科	2	優秀授業
14	プログラミングⅠ	瀧本 浩一	知能情報工学科	1	優秀授業
15	論理設計	松元 隆博	知能情報工学科	3	優秀授業
16	マルチメディア工学(実習を含む。)	長 篤志	知能情報工学科	3	優秀授業
17	プログラミング演習Ⅰ(実習を含む。)	瀧本 浩一	知能情報工学科	1	優秀授業
18	デザイン心理学	松田 憲	感性デザイン工学科	2	最優秀授業

19	設計製図Ⅰ	小林 剛士	感性デザイン工学科	2	優秀授業
20	空気調和計画法	小金井 真	感性デザイン工学科	3	優秀授業
21	ものづくり創成実習Ⅰ（CAD/CG演習Ⅰ）	小林 剛士	感性デザイン工学科	2	優秀授業
22	空間デザイン論	内田 文雄	感性デザイン工学科	2	優秀授業
23	感性心理学	松田 憲	感性デザイン工学科	3	優秀授業
24	基礎デザイン実習Ⅱ	木下 武志	感性デザイン工学科	2	優秀授業
25	建築設備工学	小金井 真	感性デザイン工学科	3	優秀授業
26	空間心理学	松田 憲	感性デザイン工学科	3	優秀授業
27	環境プロセス論及び演習	佐伯 隆	循環環境工学科	3	最優秀授業
28	環境倫理・法規	樋口 隆哉	循環環境工学科	3	優秀授業
29	移動現象論	佐伯 隆	循環環境工学科	2	優秀授業
30	地球環境論	樋口 隆哉	循環環境工学科	3	優秀授業
31	廃棄物処理工学	今井 剛	循環環境工学科	3	優秀授業
32	界面物理化学	比嘉 充	循環環境工学科	3	優秀授業
33	循環環境工学実験Ⅱ	三浦 房紀	循環環境工学科	2	優秀授業
34	単位操作Ⅱ	中倉 英雄	循環環境工学科	3	優秀授業
35	環境低負荷物質論	山本 豪紀	循環環境工学科	3	優秀授業
36	常微分方程式及び演習	柳 研二郎	工学基礎	2	最優秀授業
37	応用物理学	真田 篤志	工学基礎	2	優秀授業
38	常微分方程式及び演習	柳 研二郎	工学基礎	2	優秀授業

## 第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

前節でも述べたように、工学部では、教育改善に関する活動の一環としてすべての専門授業は、学生による授業評価を受けている。そして、授業改善のため平成15年度より「学生授業評価アンケート」中の「総合評価」にもとづき、前期・後期の優れた授業に表彰を行っている。来た。しかし、平成17年度から評価項目が変更され、「総合評価」がなくなったので、選考基準を以下のように変更している。すなわち、

評価項目の内、次の3項目

項目 2・・・理論や考え方、専門用語などがわかりやすく説明されましたか？

項目 9・・・あなたは授業の内容を理解しましたか(実験演習の場合は、内容理解や技能のレベルは向上しましたか？)

項目 10・・・この授業はあなたにとって満足のいくものでしたか？

を選び、各平均点の和(15点満点)に受講者数の重みを加算した点数が、全開講科目の上位10%に入っている科目を「優秀授業」として表彰している。この制度により教員も学生の講義の理解度や解りにくい点などを把握でき、講義方法の改善等に有用でありFD活動として重要である。しかし、学生も授業評価に関心が薄れており、アンケートに回答する学生数は激減しているのが現状であるのでそれらの改善を図ることが今後の課題である。

## 第5節 FD実施経費報告書

平成23年度 各学部・研究科FD実施経費報告票				
部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果 (簡潔に)
工学部・	FD講演会:ステップアップノートの活用法について		0	工学部ステップアップノートの企画目的、内容、活用法に関する理解を深めた。
理工学研究科	工学教育研究講演会	講師謝金・旅費 1名	48	工学系数学教育におけるコアカリキュラムと到達度評価の知見を得た。
	発達障害に関する研修会		0	発達障害(アスペルガー障害・ADHD・LD)の特徴と効果的なサポートについて知見を得た。
	優秀授業表彰	賞状	10	わかりやすく、ためになる授業(講義・演習・実習)を実践している教職員を表彰することによる教育改善
<b>計</b>			<b>58</b>	

## 第6節 来年度の課題

工学部は、FD活動の中核に、授業参観を考えているが、工学部の目標である教員には年1度の授業参観にはいま一步の改善と普及が望まれる。そのため、多忙な教員のニーズに合わせた工夫・改善が必要と考えられる。また、今年度は学部主催で「FD講演会:ステップアップノートの活用法について」と「発達障害に関する研修会」を実施した。いずれも極めて重要な課題であり、参加した教員からも継続実施の要望が強かったので今後も継続して実施することが望まれる。

以上

# 第10章 農学部のFD活動

## 第1節 授業公開

### 1 授業公開（ピアレビュー）

実施学科：生物資源環境科学科

授業科目	遺伝学とバイオテクノロジー	実施日	平成23年6月15日
授業担当教員	小林 淳	評価担当教員	高橋 肇
本授業の実施に際して高く評価できる点			
<ul style="list-style-type: none"><li>・本授業は、その日の授業内容を宿題に課すことで、授業後にノート・教科書等を読んで確実に復習するシステムとなっていた。また、翌週の授業開始前に宿題を返却することで、受講者自身が授業内容を正しく理解できていたかを確認できるシステムとなっていた。</li><li>・授業の章ごとにその概要の説明があり、よりわかりやすく教科書を読めるよう工夫されていた。また、パワーポイントの図は教科書とほぼ同じものを掲示してあったが、要所要所に補助説明の書き込みがあり、受講生個々人が教科書に書き込んで理解を深められるよう工夫されていた。</li><li>・授業開始前には、8割程度の受講者が教室の前方から着席しており、授業に臨む受講学生の学習意欲の高さを感じた。</li></ul>			

本授業をより良いものにするための提案			
<ul style="list-style-type: none"><li>・パワーポイントで示された図のなかには、教科書に掲載されていないものもあった。できれば、こういう図は教科書への挟み込み資料としてA5サイズくらいで印刷、配布してあげてはいかがだろうか？</li><li>・ウェスタンブロット法を解説するなかで、「抗体」についての説明があった。受講者の2年生は、「免疫」については生物学I（高橋担当）の授業で昨年、1年生後期でも学習している。生物学Iでの学習をふりかえるように説明していただくと授業相互の関連性が深まり、学生たちの学習意欲も高まるかもしれない。私たち教員は、もっと互いの授業内容を知って相互に補い合うように活用できれば、さらに良い授業を学生に提供できるのかもしれないと感じた。</li></ul>			
評価を担当するなかで、自らの授業にもとり入れてみたいと思った点			
<ul style="list-style-type: none"><li>・宿題を課して、学生たちに放課後での学習習慣をつけてあげている点に見習うべき工夫を感じた。宿題を採点し、返却してあげることで、間違った知識を習得した学生に対しても、その間違いを修正する機会を与えているものとして高く評価した。私も小テストを実施し、採点・返却しているが、本授業のように学生に課外時間に継続して学習できるように促してあげられるような授業のあり方を常に検討していきたいと感じた。</li><li>・教科書を教材としてその内容に忠実に使用していた。授業は、教科書の章立てに従ってきちんと進めていくことで、受講する学生たちに体系的に学習が進んでいるという安心感を与えているのではないだろうか？私は現在、教科書を使わずに自作のプリントを配っているが、良い教科書があれば教科書の活用も検討してみたいと感じた</li></ul>			

授業科目	環境物理学	実施日	2011年7月5日
授業担当教員	鈴木賢士	評価担当教員	伊藤真一
本授業の実施に際して高く評価できる点			
<p>よくプランニングされた授業であった。とくに、導入において前回までの授業の復習と今回の授業の位置づけについて、学生の視点に立って丁寧に説明していた点は高く評価できる。</p> <p>1コマ目の授業にもかかわらず遅刻者はなく、授業中の居眠りや私語もまったくなかった。学生は熱心にノートをとっており、本授業科目に対する学生の関心の高さがうかがえた。</p>			

本授業をより良いものにするための提案			
<p>板書をノートさせるのは大変効果的な授業手法のひとつではありますが、ともすると学生はノートをとるだけのマシーンになってしまう可能性があります（実際にはマシーンになることを好む学生の方が多いようですが）。時には、学生に質問して、ノートとり作業では使っていない脳領域を活性化するような時間を設ければ、さらに魅力的な授業になると思います（ただし、授業のペースが狂いすぎてしまい、予定通りに進まないというおそれがあります）。</p>			
評価を担当するなかで、自らの授業にもとり入れてみたいと思った点			
<p>板書。私もかつては板書のみでの授業を行っていましたが、パワーポイントの登場以来、ほとんど板書をしていません。この授業を参観させていただき、板書の良さを再認識致しました。パワーポイント主体の授業であっても、要所要所で板書を行えば、平坦な授業にアクセントがつくのではないかと感じました。授業にもとり入れてみたいと思います。</p>			

授業科目	生物学I	実施日	H24年1月11日、19日
授業担当教員	高橋肇	評価担当教員	竹松葉子
本授業の実施に際して高く評価できる点			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 授業開始時間よりも前に前回の答案返却を一人一人行っていた。</li> <li>・ 授業開始時間丁度より小テストを開始し、その前に不正についての説明がなされた。 →これらのことから、学生が遅刻することが少なく、また他の教室に比べて学生の集合が格段に早い。また、一人一人に答案を手渡すので、学生の顔や理解程度が分かる。期末試験だけでなく平日頃から不正に対する心構えをインプットすることが出来る。</li> <li>・ 授業の最初に、全体の流れを説明して、その日の授業の位置づけを示していた。</li> <li>・ 授業で説明される内容が全てプリントとして配られるので、学生は知らなければならない範囲を明確にできる。</li> </ul>			

<p>本授業をより良いものにするための提案</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・一連の授業の流れのなかで学生が質問等をする時間的余裕がないので、小テストの用紙の最後に、前回の質問等が書ける自由記述欄を入れてはどうでしょうか（書く学生があるかはわかりませんが）。</li> <li>・新たな提案は考えつかないが、全てプリントに授業内容が書いてありさらに小テストの範囲を教えるので、プリントにテスト範囲だけを書いてあとは授業に参加していない学生が目立ったのは気になった。</li> <li>・どうしても生物学Ⅰは広く浅くなりますし、1年生で学科の概要も分かっていないでしょうから、それぞれの内容のところでどの先生がこの内容は専門で詳しく説明してくれるかを入れてもいいと思いました。実際に全部入れると大変なのでせめて、授業の中で他の教員の授業範囲に該当する箇所について「他の先生の授業のことは言ってもいいかわかりませんが、」とおっしゃっていましたが、どちらかと言うと反対に「この部分は〇〇先生の××という授業で詳しくするでしょうから、ぜひ聞いてください。」と言った方がいいと思いました。</li> </ul>
<p>評価を担当するなかで、自らの授業にもとり入れてみたいと思った点</p>
<p>最初に小テストをするというのは、理解度確認、遅刻防止のためにも取り入れてみたいと思う。</p>

授業科目	園芸学	実施日	2011年12月2日
授業担当教員	山内	評価担当教員	藤間
<p>本授業の実施に際して高く評価できる点</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・小テストの解説を行う。</li> <li>・配布資料と教科書を併用している。</li> <li>・分類を身近な品種を用いて解説している。</li> <li>・日常生活で見かけるものを例にして説明している（菓子の脱酸素剤、果物の品種）。</li> </ul>			

<p>本授業をより良いものにするための提案</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・農場実習で行っている作業と関連付けると、より理解が深まると感じる（ブドウの品種、ホルモン処理、花芽形成と剪定作業など）。</li> </ul>
<p>評価を担当するなかで、自らの授業にもとり入れてみたいと思った点</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・小テストは授業の最後に行っているために、解説は特にせず重要な内容の復習をしているが、テストの内容についても解説する方が良いと感じた。</li> <li>・身近な事柄や興味を持ちそうな事柄を例にあげると、より理解が深まると感じたので、今後取り入れて行きたい。</li> </ul>

授業科目	植物栄養・肥料学	実施日	平成 24 年 1 月 12 日
授業担当教員	藤間充	評価担当教員	執行正義
本授業の実施に際して高く評価できる点			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・資料は文字が大きくシンプルで話の内容が良く伝わるように構成されている。</li> <li>・講義中は静粛が保たれており、学生は良い雰囲気の中で集中して話が聞けているようである。</li> <li>・トピック毎に資料を配布する機会が設けられており、話の内容が変わることが良く学生に伝わっていたようである。</li> <li>・講義資料中にブランクが設けられており、前方のスライドを見ながら学生が書き込みをしており、緊張感を持続される効果がみられた。</li> <li>・スライドを使った説明時にアニメーションの効果を上手く利用して、スライドの説明箇所がリアルタイムに把握できる工夫が施されていた。</li> <li>・講義の最後の 10 分間の小テストは講義内容の復習が授業内にできるので効果的であると推察される。</li> </ul>			

本授業をより良いものにするための提案	
・遅刻者が多いようですので、対策をお考えになられたら如何でしょうか？	
評価を担当するなかで、自らの授業にもとり入れてみたいと思った点	
高く評価できる点に挙げた全ての事柄を自分も取り入れてみたいと思いました。	

## 2 授業公開 (学術セミナー)

実施学科：生物機能科学科

### 1) 「ゲノム情報を基にしたメタン発酵プロピオン酸酸化共生系の研究」

講演者：高坂 智之

日時：5月20日(金) 17:00～18:00

場所：農学部(連獣)大講義室

要旨：添付ファイルをご覧ください。

### 2) 「脱窒菌による畑土壌からの亜酸化窒素放出の削減：野外での利用を目指して」

講演者：横山 和平

日時：6月23日(木) 17:00～18:00

場所：農学部(連獣)大講義室

### 3) 「老化抑制と寿命延長をめざして ～活性酸素の傷害性と有効性～」

講演者：井内 良仁 先生

日時：7月21日(木) 17:00～18:00

場所：農学部(連獣)大講義室

### 4) 「植物による熱発生：亜熱帯性花序ミトコンドリアに発現する代替末端酸化酵素(AOX)の金属活性中心の解明をめざして」

講演者：右田たい子 先生

日時：10月28日(金) 17:00～18:00

場所：農学部(連獣)大講義室

5) 「脂質修飾タンパク質の網羅的同定に基づく疾患関連タンパク質の探索」

講演者：内海俊彦 先生

日時：11月25日(金) 17:00~18:00

場所：農学部(連獣)大講義室

6) 「香りを化学する」

講演者：赤壁善彦 先生

日時：1月27日(金) 16:00~17:00

場所：農学部(連獣)大講義室

### 3 授業公開(学術セミナー)

実施学科：獣医学科

1) 「ウシの流産とネオスポラ症 Bovine abortion and Neosporosis」

ウイホンキエン 黄鴻堅 先生(獣医寄生虫学研究室)

2012年2月22日(水) 17:00-18:00 連合獣医棟4F大講義室

2) 「急性期蛋白の「糖鎖科学の新展開」 - 基礎から応用・臨床へ向けて」

講演者：岩田祐之 先生

日時：2012年1月18日(水) 17:00-18:00(獣医衛生学研究室)

場所：農学部6番教室

3) 「新興感染症の発生の予測に向けて」

前田健 先生(獣医微生物学研究室)

2011年11月16日(水) 17:00-18:00 連合獣医棟4F大講義室

4) 「意外な日本のウシの話」

講演者：角川博哉 先生(獣医繁殖学研究室)

日時：2011年10月26日(水) 17:00-18:00

場所：連合獣医棟4F大講義室

5) 「自家細胞を用いた再生獣医療」

講演者：谷健二 先生(獣医外科学研究室)

日時：2011年9月30日(金) 17:00-18:00

場所：連合獣医棟4F大講義室

6) 「ツシマヤマネコの保護活動についての取り組み」

講演者：西垣一男 先生(感染免疫学研究室)

日時：2011年7月20日(水) 17:00-18:00

場所：連合獣医棟4F大講義室

7) 「歩行の脳研究」

講演者：森大志 先生(生体システム研究室)

日時：2011年6月15日(水) 17:00-18:00

場所：連合獣医棟4F大講義室

8) 「黒毛和種牛の手根骨関節軟骨病変に関する研究」

講演者：田浦保穂 先生(獣医外科学研究室)

日時：2011年5月25日(水) 17:00-18:00

場所：連合獣医棟4F大講義室

9) 「マダニ媒介性病原体と薬剤耐性マダニの疫学」

講演者：馬場健司 先生(獣医寄生虫病学研究室)

日時：2011年4月20日(水) 17:00-18:00

場所：連合獣医棟4F大講義室

## 第2節 学部・研究科主催FD研修会

1 実施学科：生物資源環境科学科、生物機能科学科、獣医学科

1) 大学教育センターから講師を派遣して実施する研修会

研修名：「キャリア教育入門～大学教育とキャリア教育・ポートフォリオ～」

日程：平成23年9月21日(水)14:30～15:10、

講師：平尾 元彦 先生(学生支援センター教授)

場所：農学部2F大会議室

報告：学生支援センターの平尾教授より、約20分間にわたってキャリア教育の現状および大学生の就職活動の状況について説明が行われた。参加者は教職員30名であった。以下に要点をまとめる。

キャリア教育とは「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」であり、本年4月1日には大学設置基準の改正が行われ、社会的・職業的自立を図るために必要な能力を培うための体制の整備が義務づけられたところである(第42条の2)。これを契機として、本学ではさらなるキャリア教育の体制強化に取り組んでいる。大学生の就職活動の現状で最も注目されるのは日本経団連が2013年以降の採用選考にあたり「選考に関する企業の倫理憲章」を大幅に改訂した点である。大きく変わったのはインターネットを通じた不特定多数向けの情報発信以外の採用広報活動(いわゆるプレエントリー)を12月1日以降の開始と設定し、また選考活動の開始を4月1日以降とした点である。これまではプレエントリーは10月開始であったので、従来よりも広報活動が2ヵ月短縮され採用選考は短期集中型となったことを意味する。1～2月の土日は企業説明会が集中することが予想されている。現在、山口大学就職支援室では「働くことをもっとリアルに」をスローガンに様々な学内業界・企業研究会やインターンシップ・シゴト体験学習等を行っている。山大生は下手な就活をしている学生が多い。今後は①就職状況の適切な把握、②一人ひとりの充実した学生生活を→ポートフォリオ、③特別な支援が必要な学生への早期かつ重点的な支援、が必要であると考えられる。

続いて、約15分間にわたって質疑応答が行われた。まず、「リクナビやマイナビに掲載していない企業を学生は知らないし行きたがらない。就職支援室ではどのように説明しているのか？」という質問があった。これについては「学内業界・企業研究会等で直接話を聞く機会を設けている。またリクナビやマイナビ以外の就職関連サイトに掲載している企業もあるので様々なサイトをみるよう指導している。しかしなかにはサイトに掲載しない企業もあるので、地方主催の企業説明会やハローワークを訪ねることも有効であると説明している」という回答があった。次に「通常3年から始める進路指導を1～2年から始めることによりニート、フリーターの率が下がるといった実例はあるか？」という質問があった。これに対しては「難しい質問である。実際のデータはおそらくないのでは」との回答があった。最後に「全国の企業からみて山口大学の学生はどのような特徴があると見られているのか？」という質問があった。これについては「素朴で真面目と見られている。企業からみると大学によってカラーが違うという話をよく聞く。山大生と相性がよいと思ってくれている企業は学内での説明会に毎年来てくれている。毎年400社くらいが企業の資金で



研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	4	19.0%
良かった	12	57.1%
どちらとも言えない	4	19.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	1	4.8%
合計	21	100.0%

本学に来てくれているので、学生にはできるだけ出会いを作って欲しいと思っている」との回答があった。

事後アンケートは約8割の教員から肯定的な評価が寄せられた。自由記述には「就職に関する情報が得られた」「大学が学生の就職支援についてどのように教えているか理解できた。また自分が学生にどのようにアドバイスすべきか考えがまとまった」「普段知る機会・考える機会がないことを説明していただけるのは役に立つ」という感想が寄せられた。また「もう少し時間をとって、より具体的な話が進められればよかった」という意見もあった。

今後参加したい研修内容としては「キャリア教育」「学生の就職活動で身につける事柄、企業が求める学生像」「理想論と現状の問題解決が結びついたものが有難いです。どちらかだけでは消化不良になりがちです」「今回はキャリア教育のノウハウの細かいところまで聞けなかったので第二弾を希望します」「学生に対して我々教員ができることを具体的に示して頂けるような内容を希望します」という意見が寄せられた。(大学教育センターFD研修会報告書から転記)

## 2) 平成23年度 教育改善FD研修会

日程：平成23年10月19日(水)14:30～15:00

講師：小川 勤 (大学教育センター教授)、  
吉村 誠 (学生支援センター長)

場所：農学部2F大会議室

参加者 42名(アンケート回収 22名)

内容

本研修会では、本学で導入を検討しているポートフォリオについて、その意義と期待される効果について情報の共有や意見交換が行われた。

最初に大学教育センターの小川教授からポートフォリオ導入の背景が示された。平成23年度4月に行われた大学設置基準の改正では「社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を培うための体制」が加わり、これに対応するために本学の平成23年度計画では学士課程を通じてキャリア意識を高め、自発的な学習を促すためにポートフォリオの全学的な導入を予定していることが説明された。

次に学生支援センター長の吉村教授より、「山口大学におけるキャリア教育体制の拡充とポートフォリオ」と題して、ポートフォリオ導入の背景と課題および就業力支援から見た必要性についての説明が行われた。ポートフォリオの目的は「学生一人ひとりの大学生活の充実」であり、具体的には学生自身の自己管理能力の育成と学習意欲の向上、教職員による学生の実態把握、問題のある学生の早期発見と重点的な支援、進路への準備を促すこと、外部支援機能(カウンセラー等)の学内導入による支援の拡充等がある。課題としては、ポートフォリオへの記入項目や実施方法、記入の強制の有無等がある。就業力支援からみると、ポートフォリオは社会に積極的に関心を持たせ、早い段階からの進路への準備を促すとともに、就業力の弱い学生の早期発見と重点的な支援のために有用であるとの見解が示された。これらの説明においては、企業が実際に用いているエントリーシートを例示しながら、企業側の学生採用の視点には「大学生活を充実できているか」、「世の中への興味・関心を持ち、未来をソウゾウ(想像・創造)できるか」、「表現する力・伝える力があるか」といったポイントがあり、ポ



表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	3	13.6%
良かった	7	31.8%
どちらとも言えない	10	45.5%
あまり良くなかった	1	4.5%
良くなかった	0	0.0%
無回答	1	4.5%
合計	22	100.0%

ートフォリオを書かせることによってこれらを涵養することができるとの説明がなされた。

質疑応答では、「学生が記入したシートに目を通すために必要な作業量はどの程度か。また、どのくらいの頻度で確認すべきなのか」、「教員のみ閲覧であるとしても、信頼関係がないと学生は本音を書かないのではないか。また教員が第三者（他の教員、カウンセラー等）に相談した場合、かえって教員と学生との信頼関係を失ってしまうのではないか」との質問がなされた。これに対して、学生支援センターは「ポートフォリオのチェックは1年に1回、理想的には半期に1回程度が必要ではないかと思われる。教員と学生の信頼関係などについては、他大学の事例を参考にしながら運用に向けて検討を進めてゆきたい。他大学の全学的なポートフォリオ導入の先行事例のひとつとして佐賀大学の事例がある。今後資料を提供するので、参考にさせていただきたい」との回答がなされた。（大学教育センターFD研修会報告書から転記）

以上の、1) 大学教育センターから講師を派遣して実施する研修会ならびに、2) 教育改善FD研修会は、拡大教授会の前に開催したため、公務以外の教員がほぼ参加し、以前のような出席率の低さを改善することができたため、今後のFD研修会も、このような日程調整を行って、実施したい。

## 2 実施学科：獣医学科

来年度、共同獣医学部として、山口大学-鹿児島大学間での遠隔地授業システムを開始するため、その使用説明会を開催した。

講師：NTT 西日本 松永 圭一郎氏

日時：平成24年2月23日(木)13時から15時

場所：農学部4番教室

## 第3節 教育改善に関する活動

2008年4月1日に、農学部グラジュエーションポリシー(Graduation Policy: 以下GP)を定めている。

- 1) 人々が自然と共存して幸せに生きていけるよう、生命と環境、およびそれら相互関係を把握するとともに、それらの将来有るべき姿を考える能力を身につけている。
- 2) 農学の基礎知識、研究技術に加え、さらに理解力、創造力、解決力、総括力を身につけている。
- 3) 学問・研究の他に、人間性および社会性を身につけている。

農学部のGPを基礎として、各学科（生物資源環境科学科、生物機能科学科、獣医学科）でのGPは、2008年4月1日に定めており、2011年度も本GPに基づいて活動を実施している。

以下、各学科のGPを示す。

Graduation Policy (GP)	
記入者氏名	
記入年月日	2008年4月1日
学部・研究科名	農学部
学科・専攻等名	生物資源環境科学科
コース等名	
細分名	
農学部の教育目的（具体的に記述・箇条書き）	
農学部のGraduation Policy（具体的に記述・箇条書き）	
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 人々が自然と共存して幸せに生きていけるよう、生命と環境、およびそれらの相互関係を把握するとともに、それらの将来あるべき姿を考える能力を身につけている。</li> <li>2. 農学の基礎知識、研究技術に加え、さらに理解力、創造力、解決力、総括力を身につけている。</li> <li>3. 学問・研究の他に、人間性および社会性を身につけている。</li> </ol>	
生物資源環境科学科のGraduation Policy（具体的に記述・箇条書き）	
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 修学計画能力：生物資源環境科学科において何を学ぶか、生物資源環境科学とは何かの概念を得る。また、生物資源環境科学科教育プログラムの学習・教育プログラムを把握し、自ら修学プランを立案できる。</li> <li>2. 一般的基礎能力：語学、人文、社会系科目を含む幅広い教養科目および生命倫理を学び、社会に対する責任感を養う。</li> <li>3. 農学基礎能力：自然科学的および社会科学的農学系基礎に関する知識と応用力を身につける。</li> <li>4. 専門応用能力：生物資源環境科学に関する総合的専門知識及び技術の取得とそれらを用いて諸問題の解決方法を自ら考え実践する能力を身につける。</li> <li>5. コンピュータ応用能力：生物統計等に関するソフトウェアの理論と使用法を理解し、生物生産、環境計測、農業経営などの様々な過程で現実的な複雑さを持つ農学的諸問題を迅速に解決できる。</li> <li>6. 農学研究能力：農学的諸問題に対して、農学的かつ論理的な考察を行い、自ら解決方法を発想し成果を得ることができる。また、発想から成果に至る研究経過を明解にレポートにまとめ、わかりやすくプレゼンテーションするとともに、討議できる能力を身につける。さらに、得られた成果を客観的に評価し、改善することができる。</li> <li>7. 農業・農村地域の環境の課題における指導能力：生物多様性をはじめ、農業・農村地域の環境課題を解決するための能力を発揮し、指導者となる素養を涵養する。</li> <li>8. 自己研鑽能力：多様化・複雑化する生物生産システム、生命、環境、自然に関する諸問題に関心を持ち、それらの問題を理解あるいは解決するために自己の能力を継続して向上させることができる。</li> <li>9. 進路計画能力：農業ならびに関連産業界の動向、求められる人材、就職環境などを把握して、将来の進路を展望し、自ら進むべき方向を決定できる</li> </ol>	

Graduation Policy (GP)	
記入者氏名	
記入年月日	2008年4月1日
学部・研究科名	農学部
学科・専攻等名	生物機能科学科
コース等名	
細分名	
農学部の教育目的（具体的に記述・箇条書き）	
農学部のGraduation Policy（具体的に記述・箇条書き）	
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 人々が自然と共存して幸せに生きていけるよう、生命と環境、およびそれらの相互関係を把握するとともに、それらの将来あるべき姿を考える能力を身につけている。</li> <li>2. 農学の基礎知識、研究技術に加え、さらに理解力、創造力、解決力、総括力を身につけている。</li> <li>3. 学問・研究の他に、人間性および社会性を身につけている。</li> </ol>	
生物機能科学科のGraduation Policy（具体的に記述・箇条書き）	
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 生化学の基本的な知識とバイオテクノロジー等の技法を修得し、生物科学分野で社会貢献できる。</li> <li>2. 生物と環境の相互作用の科学的な理解に基づき、環境問題に対処できる。</li> <li>3. 科学技術の発展に関連した社会全体の問題について、自ら課題を見出し解決しようとする姿勢を持つ。</li> </ol>	

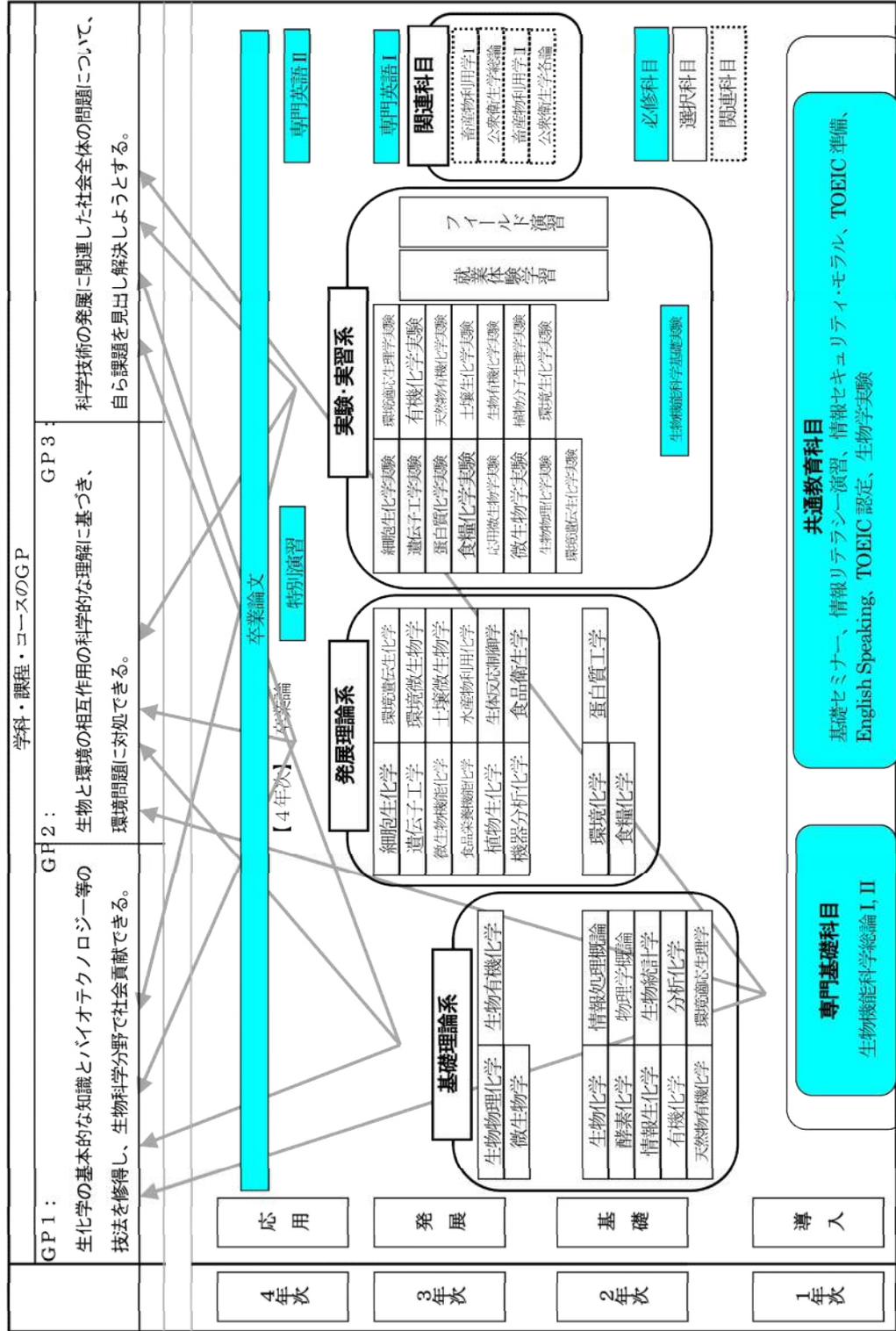
Graduation Policy (GP)	
記入者氏名	
記入年月日	2008年4月1日
学部・研究科名	農学部
学科・専攻等名	獣医学科
コース等名	
細分名	
農学部の教育目的（具体的に記述・箇条書き）	
農学部のGraduation Policy（具体的に記述・箇条書き）	
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 人々が自然と共存して幸せに生きていけるよう、生命と環境、およびそれらの相互関係を把握するとともに、それらの将来あるべき姿を考える能力を身につけている。</li> <li>2. 農学の基礎知識、研究技術に加え、さらに理解力、創造力、解決力、総括力を身につけている。</li> <li>3. 学問・研究の他に、人間性および社会性を身につけている。</li> </ol>	
獣医学科のGraduation Policy（具体的に記述・箇条書き）	
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 人と動物との関係を理解し、知識を得る方法と考え方を習得する。</li> <li>2. 食資源とその安全性の確保に関して理解し、知識を得る方法と考え方を習得する。</li> <li>3. 高度獣医療ならびに最新の生命科学を理解し、知識を得る方法と考え方を習得する。</li> <li>4. 英語をはじめとする外国語に通じる能力を養う。</li> <li>5. 正確に理解し、それを明解に発表できる能力を養う。</li> <li>6. 明晰かつ批判的に思考する能力を養う。</li> </ol>	

カリキュラムフローチャート(Curriculum Flow Chart: 以下CFC)は、全学組織の教学委員会より農学部各学科への作成の依頼があり、平成23年7月に完成版を提出した。本CFCに基づいて、オリエンテーションの履修の説明などでの利用を検討している。以下、各学科のCFCを示す。



# 農学部 生物機能科学科 カリキュラム・フローチャート

2011年7月1日版



# 農学部獣医学科

## カリキュラム・フローチャート

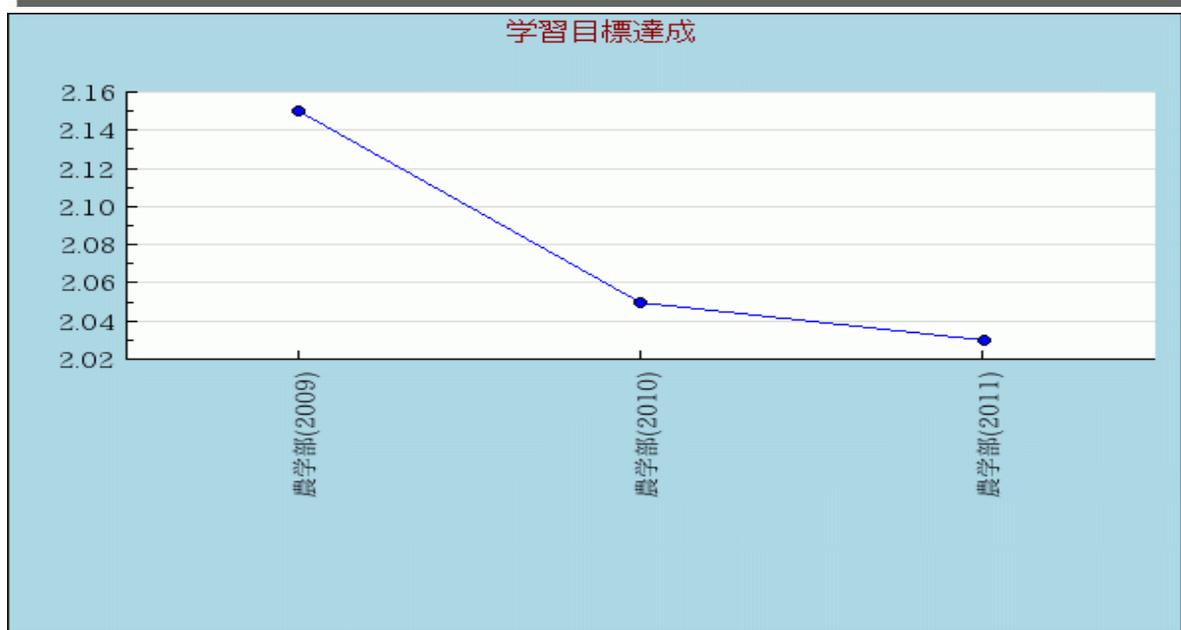
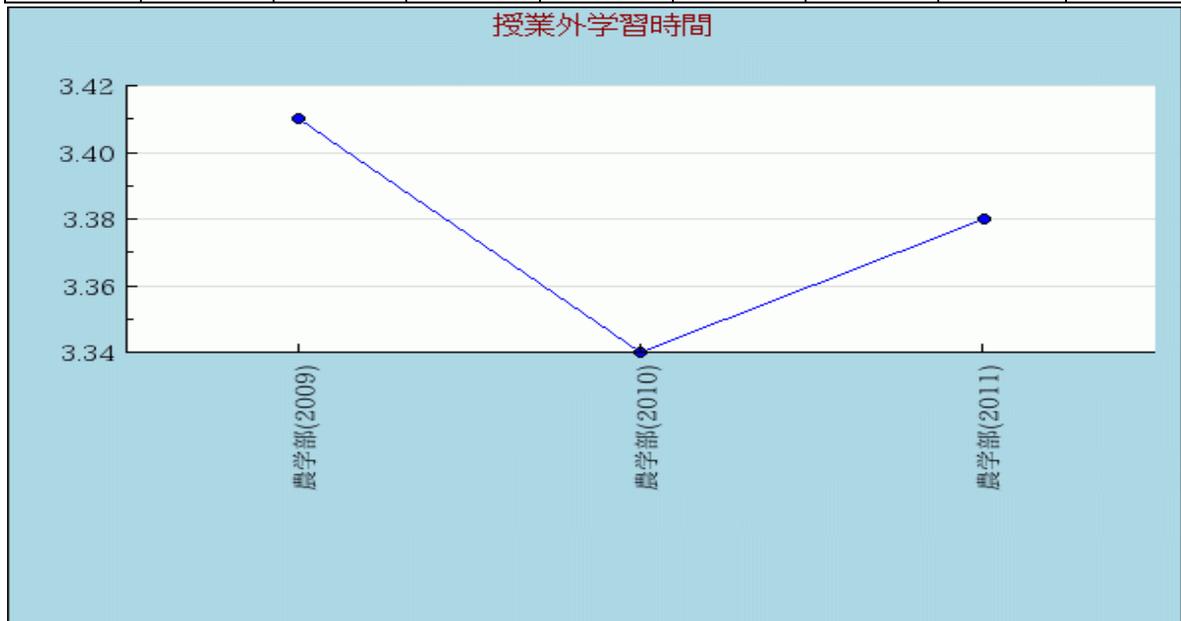
2011年 5月 18日版

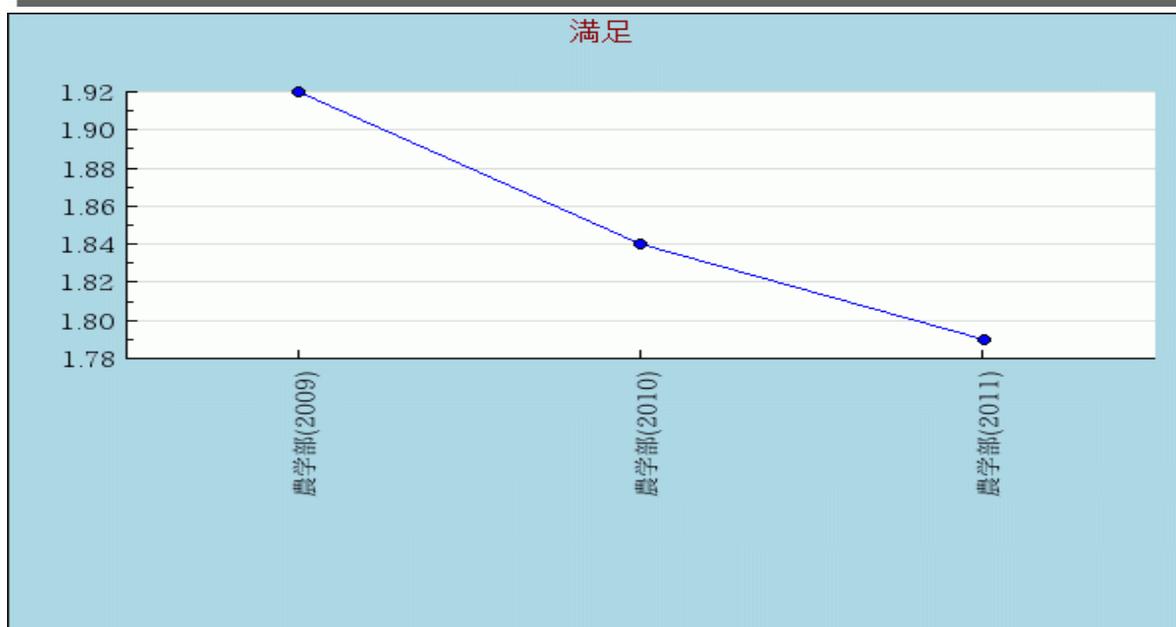
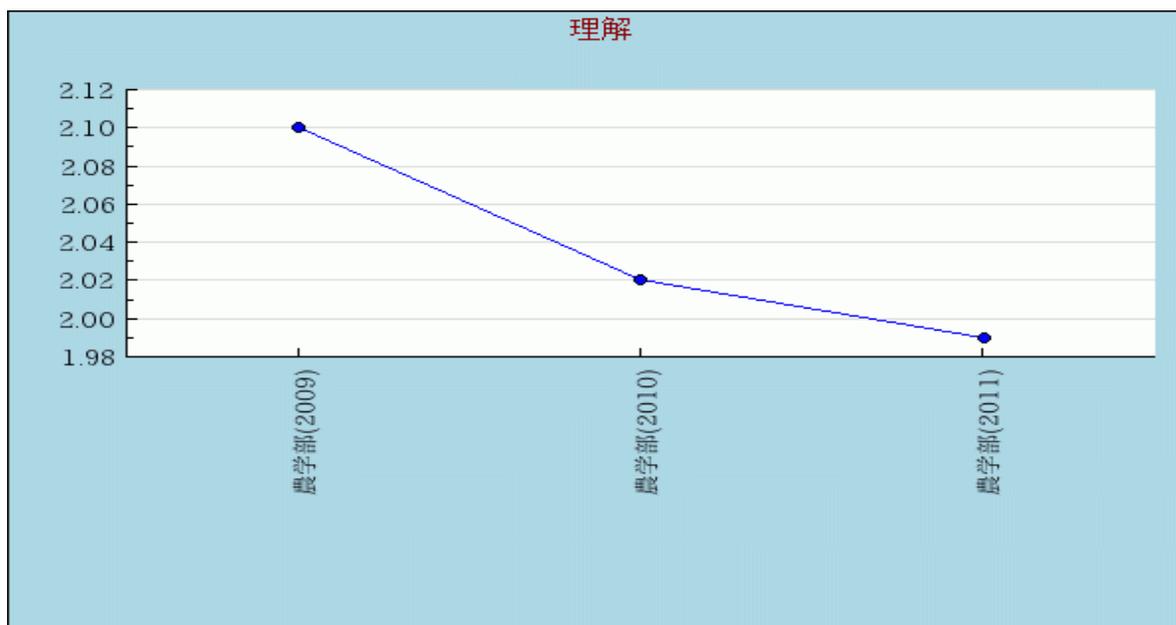
		学科・課程・コースのGP		
	<p><b>GP1:</b>人と動物との関係を理解し、知識を得る方法と考え方を習得する。</p> <p><b>GP2:</b>食資源とその安全性の確保に関して理解し、知識を得る方法と考え方を習得する。</p> <p><b>GP3:</b>高度獣医療ならびに最新の生命科学を理解し、知識を得る方法と考え方を習得する。</p> <p><b>GP4:</b>英語をはじめとする外国語に通じる能力を養う。</p> <p><b>GP5:</b>正確に理解し、それを明解に発表できる能力を養う。</p> <p><b>GP6:</b>明晰かつ批判的に思考する能力を養う。</p>			
6年次	<p><b>卒業・獣医師免許取得</b></p> <p><b>臨床・応用獣医学関連科目 (GP1, GP2, GP3, GP4, GP5, GP6)</b>            獣医寄生虫病学・獣医衛生学・獣医公衆衛生学・獣医伝染病学            実験動物学・獣医内科学・獣医外科学・獣医繁殖学・獣医放射線学            獣医公衆衛生学実習・獣医内科学実習・獣医外科学実習            獣医繁殖学実習・獣医放射線学実習・臨床実習など</p> <p><b>基礎獣医学関連科目 (GP1, GP2, GP4, GP5, GP6)</b>            獣医解剖学・獣医組織学・獣医生理学・獣医生化学            毒性学・獣医薬理学・獣医微生物学・獣医病理学            獣医解剖学実習・獣医生理学実習・獣医微生物学実習            獣医病理学実習など</p> <p><b>獣医学関連科目 (GP2, GP4, GP5, GP6)</b>            家畜飼養学            家畜遺伝学            専門科学英語            生物統計学            牧場実習など</p> <p>スペシャリストの養成</p>			
2年次	<p><b>導入・基礎獣医学関連科目</b>            一般教養・体育・健康・初等教育・外国語・専門基礎教育・獣医学概論など</p>			
1年次	<p>準課程専門教育</p>			

## 第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

### 1) 学生授業評価

2009年度			2010年度			2011年度		
科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率
151	117	77.5	124	113	91.1	113	107	94.7





学生授業評価実施率は、2010年度より9割以上と非常に高い値を示し、今後もこの入力率を維持していきたい。学生の授業評価から、授業外学習時間は、2010年度に比べ改善された。しかし、学習の目標達成度、理解度、満足度が年々下降傾向にあり、学力低下や学習指導の改善など、いくつかの要因を検証する必要があると認められた。

## 2) 教員授業自己評価

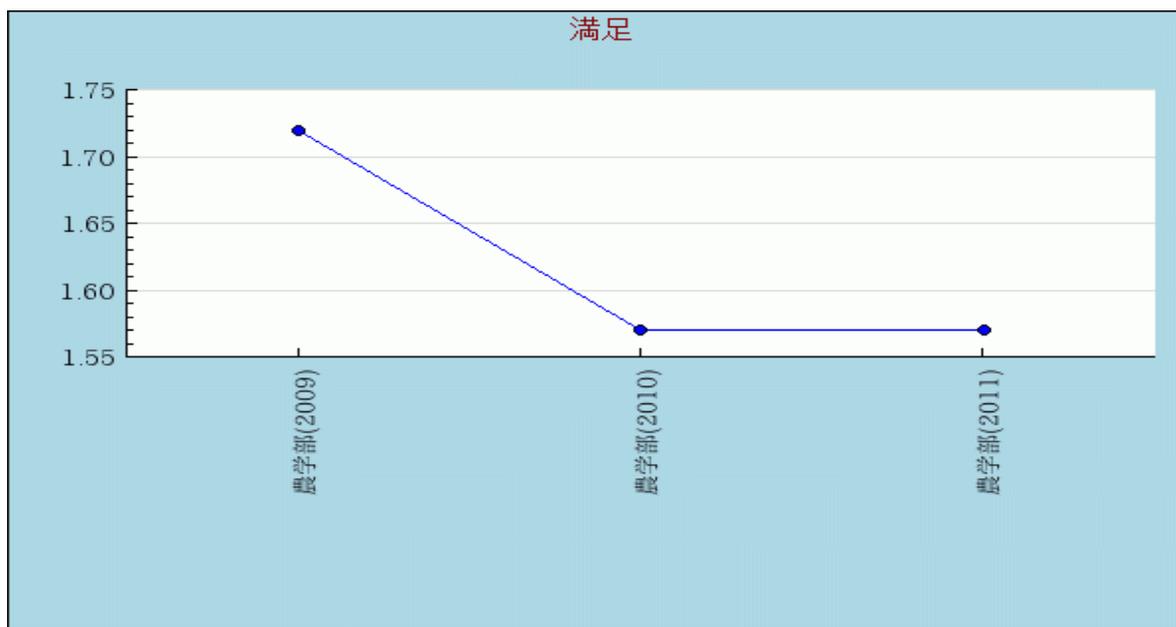
2009年度			2010年度			2011年度		
科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率
153	85	55.6	124	81	65.3	113	60	53.1

### 学習目標達成



### 理解





教員授業自己評価は、毎年6割前後と、改善されていないように思われ、組織的な取り組みが必要である。また、学習の目標達成度、理解度、満足度に関して、学生の授業評価と相関が見られ、これら項目の評価が低下し、各教員自身も認識していることが伺える。

### 3) 今後の課題

学習の目標達成度、理解度、満足度の低下傾向を改善する必要があるとあり、学力低下や学習指導の改善など、いくつかの要因を検証し、具体的な対策を行うことが急務と考える。また、教員授業自己評価の入力率は、毎年6割程度にとどまっており、入力率の向上が必要である。これは、関連の入力依頼が半期ごとに各教員に対して複数あるため、入力済みと勘違いするケースが多い。そこで、組織的な取り組みとして、大学教育センターから、直接、未入力者に対して連絡、入力の要請を行うことが、入力率9割以上を達成できる方法と考える。

## 第5節 FD実施経費報告書

部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果 (簡潔に)
農学部	学術セミナー	展示ボード(FD用)	142,900	ポスター展示に使用し、学生・院生への研究紹介を行い、意見交換等により各教育研究分野の活性化と分野間の相互理解の促進を図った。
農学研究科	学術セミナー			
<b>計</b>			<b>142,900</b>	

## 第6節 来年度の課題

学生の学習の目標達成度、理解度、満足度の低下傾向を改善する必要があり、学力低下や学習指導の改善など、いくつかの要因を検証し、具体的な対策を行うことが急務と考える。教員授業自己評価の入力率は、毎年6割程度にとどまっており、入力率の向上が必要である。これは、関連の入力依頼が半期ごとに各教員に対して複数あるため、入力済みと勘違いするが多い。そこで、組織的な取り組みとして、大学教育センターから、直接、未入力者に対して連絡、入力の要請を行うことが、入力率9割以上を達成できる方法と考える。

## 第11章 人文科学研究科のFD活動

大学院人文学科学研究科（修士課程）のFD活動については、当研究科の担当教員が人文学部教員と重なることから、FD研修会等は、人文学部のそれと合同実施ということになる。よって、2011年度の人文科学研究科のFD研修会等の報告は省略することにする。

ただし、学生による授業評価アンケートに関しては、人文学部で実施しているようなマークシート方式のものを採用せず、研究科独自の記述方式のものによって実施した。教員授業自己評価については、全学的に実施している方式に準拠して実施した。

なお、人文科学研究科の大学院生用研究室は、プレハブの別棟に共同研究室が1室設けられているのみで、使い勝手が悪いことが以前から指摘されてきた。また、人文学部教務・学生部会においても、ある教員から以下のような大学院生の体験談や感想が紹介され、人文学部施設環境整備委員会に改善を要望すべきとの意見が出された。

- ・ 別棟にある大学院生の研究室は人の出入りが少なく、女性にとっては比較的物騒。
- ・ 万が一、何かあった場合のことを考えると怖く、利用することに躊躇する。
- ・ 別棟で個室であるため、異性と一緒にいづらい（男子院生が気を遣って退室することもあった）。
- ・ 院生の中には図書館を利用している者もいるようで、交流機会が少なく、相互の研究分野について情報交換ができない。

そこで、FD部会としては、大学院生向けのアンケート用紙に、授業評価のみならず、施設面に関する項目を新たに加えて、大学院生の意見・希望を自由記述の形で広く聞くこととした。その結果、20名の在籍者中12名から回答があった（回答率60%）。授業内容に関しては、概ね満足とする回答が多かったが、施設面に関しては、以下の記述があった（要望を述べているもののみを原文通り再掲）。

- ・ 大学院生用研究室の机・椅子は古すぎると思う。また、本棚などもないから、ちょっと不便な感じがする。
- ・ プリンターも用意できれば、便利になると思います。
- ・ 4年生がグループ研究などで活用しているため、（グループ研究がなく、静かに本を読みたい）院生は、図書館を専ら利用しています。授業で使う部屋も鍵がかかっている、先生しかお持ちでないの、「開けてほしいときは言って」とは言われていますが、お手をわずらわす気持ちになれません。専門書のある部屋の近くで静かに学習したいです。
- ・ 院生用の研究室を各院生専用の個室にしてほしいです。
- ・ 大学院生用の研究室の設置を切望します。学部生と共用の研究室がありますが、いつも学部生で混雑しているので、図書館を利用しています。（毎日重い荷物を持って移動するのはとても不便です。）他大学や他研究科には院生用研究室はほとんど設置されていると思いますので、人文科学研究科にも早急に設置していただくことを希望します。
- ・ 院生用の研究室が別棟にありますが、人の気がなく物騒なので、人文棟の中に研究室を設置してほしい。院生間の相互の研究について情報交換がしやすい場がほしい。例えば、教育学部の中に設置されているような院生室がのぞましい。
- ・ 研究室にプリンターを配置してくださればとても便利です。いつも図書館でプリントアウトしなくてはならなくて、枚数が多い時はとても困ります。

人文学部・人文科学研究科棟は、もともと研究室・教室数が少ないので、他学部・他研究科のように、大学院生たちに研究室を与えることができずにきた。しかしながら、教員の定員削減などによって、空き研究室がいくつか生じており、また、今後予定されている人文学部のコース改編や耐震工事などによって、教員研究室や学部学生用研究室の移動・再配分が必要となる。そこで、それらに合わせて、大学院生の研究用スペースを増やすことを考えていくべきであろう。この点に関しては、FD部会の課題としてのみならず、人文学部施設環境整備委員会などへの要望としても申し送ってきたい。

## 第12章 教育学研究科のFD活動

### 第1節 授業公開

実施していない。

### 第2節 研究科主催FD研修会

実施していない。

### 第3節 教育改善に関する活動

特に実施していない。

### 第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

これまで同様に、学生授業評価及び教員授業自己評価を実施した。表1は学生授業評価の実施状況を、表2は教員授業自己評価の実施状況を表す。学生授業評価については、実施率が71.5%と、教育学部における実施率を下回るものの、高い実施率となっている。それに対して、教員授業自己評価は36.4%となっており、教育学部における実施率と同程度である。なお、参考のため、平成21年度・平成22年度の実施率も示した。過去3年間で実施率に大きな変化は見られなかった。

次に、最近3年間における学生授業評価の結果の変化を表3に示す。いずれの質問項目についても、評価結果に大きな変化は見られなかったものの、質問番号1の「専門用語や理論的な話は、適切に説明されましたか？」については、評価値がわずかながら毎年向上している。また、いずれの評価値も4を超えた高い値となっているものの、質問番号4については、過去3年間でいずれも4.5を下回っており（すなわち回答の評価値は5よりも4の方が多い）、注意したい。

表1 平成23年度における学生授業評価実施状況。前期・後期を含めた科目数と実施数から実施率を算出した（平成24年4月21日時点のデータに基づく）。

全数(A)		開設科目(B)			対象科目(C)			履修登録あり科目(D)		
科目数	実施数	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率
346	108	346	108	31.2%	151	108	71.5%	270	108	40.0%
B&C		B&D			C&D					
科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率		
151	108	71.5%	270	108	40.0%	151	108	71.5%		
B&C&D			実施率	参考：過去の実施率 平成21年度：70.6%，平成22年度：76.2%						
科目数	実施数	実施率	最大							
151	108	71.5	71.5%							

表2 平成23年度における教員授業自己評価実施状況。前期・後期を含めた科目数と実施数から実施率を算出した（平成24年4月21日時点のデータに基づく）。

全数(A)		開設科目(B)			対象科目(C)			履修登録あり科目(D)		
科目数	実施数	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率
346	55	346	55	15.9%	151	55	36.4%	270	55	20.4%
B&C		B&D			C&D					
科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率		
151	55	36.4%	270	55	20.4%	151	55	36.4%		
B&C&D			実施率	参考：過去の実施率 平成21年度：38.2%，平成22年度：31.8%						
科目数	実施数	実施率	最大							
151	55	36.4%	36.4%							

表3 最近3年間における学生授業評価の質問番号・質問文と回答数・評価結果。回答選択肢は、全て共通で「1. そう思う(5)」、「2. ややそう思う(4)」、「3. どちらとも言えない(3)」、「4. あまりそう思わない(2)」、「5. そう思わない(1)」と設定してある。但し質問番号6のみ「6. この授業は当てはまらない」という選択肢が追加されている。Nはアンケート回答数、Eは評価値を示す。ここで評価値Eは、回答選択肢の括弧内の評価値を用いて計算された平均値。評価値Eの値が4.5を下回るものを太字で表示した。

質問番号	質問文	平成23年度	平成22年度	平成21年度
1	専門用語や理論的な話は、適切に説明されましたか？	N=357 E=4.76	N=437 E=4.74	N=503 E=4.71
2	参考資料や文献の提示・紹介は適切に行われましたか？	N=357 E=4.68	N=440 E=4.64	N=502 E=4.64
3	学生の疑問・質問への対応や議論は、充分でしたか？	N=357 E=4.73	N=439 E=4.75	N=504 E=4.64
4	あなたの研究テーマにとって、参考になる知識が得られましたか？	N=357 E= <b>4.47</b>	N=440 E= <b>4.49</b>	N=502 E= <b>4.49</b>
5	この授業は、あなたの期待した内容を含んでいましたか？	N=353 E=4.62	N=440 E=4.59	N=502 E=4.59
6	ゼミナールの運営は適切でしたか？	N=267 E=4.68	N=428 E=4.64	N=449 E=4.66
7	この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？	N=348 E=4.69	N=435 E=4.69	N=493 E=4.64

## 第5節 FD実施経費報告書

報告すべき事項なし。

## 第6節 来年度の課題

学生授業評価及び教員授業自己評価についての課題は次の通りである。学生授業評価は7割以上の比率で実施されているが、その半数で教員授業自己評価が実施されていない。学生授業評価を実施し、その結果を振り返ることで、次年度の授業改善につながるような考察ができると良いと考える。まずは、その考察を教員授業自己評価の自由記述欄に記入することを促していきたい。さらには、各学期の始めに、前年度の教員授業自己評価を閲覧することにより、前年度の授業を再度思いおこすことにより、授業改善につながると期待できる。このような一連の授業の振り返りのための作業を教員に促すようなことを検討していきたい。

教員からの要望として、ゼミの運営についてFD研修のテーマとして取り上げて欲しい旨の要望があった。以前より、教育学研究科では、多様な学生：ストレートマスター・社会人学生（主に現職教員）・留学生がおり、ゼミ運営の困難さが指摘されていた。この点について、他の教員のゼミの運営方法を参考にしたいという要望であると理解している。大学院教育学研究科における授業公開として、ゼミの公開が可能であるか検討することも課題であると考えている。

# 第13章 経済学研究科のFD活動

## 第1節 授業公開

担当者：武居 奈緒子（経営学科教授）

授業科目：現代マーケティングの基礎研究

授業時間：月曜日 10:20～11:50（後期）

参加者：なし

授業概要

テキストを用いた授業を行っているが、このテキストを用いることによってマーケティングの内容を体系的に把握・理解できるようになっている。

授業では、このテキストの章ごとに、毎回、報告者を決め、レジュメに沿って発表してもらっている。担当の章は、学生の専門性に配慮している。そして、報告者には、あらかじめディスカッションポイントを提示させ、それに関して、皆で議論するという形式を採用している。マーケティングに限定されたことではないと思うが、理論をいかに具体的に考えるかが理解のポイントになっていて、なるべく企業の事例を織り込んで実践的な理解を深めるよう考慮している。また、授業では、専門知識の伝授のみならず、疑問形を用いるよう心掛け、双方向のコミュニケーションを図った。

その結果、学生は、興味を持って授業に参加し、活発な議論を展開してくれている。その他、授業外のレポートも提出してもらい、授業内容の理解の定着を図った。

## 第2節 FD実施経費報告書

経済学部では、大学院の授業公開を実施した学科は1つであった。学部のもと同様な資料を提示する。

### 平成23年度 各学部・研究科FD実施経費報告票

部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額 (千円)	FD活動の効果（簡潔に）
経済学部	学部学生に対する授業	書籍	83	ピアレビュー後、授業方法に関する図書を資料とした授業研究会を開催し、授業方法に関する理解を深めた。
		消耗品	5	
経済学研究科	学生に対する授業	書籍	22	
計			110	

### 第3節 来年度の課題

経済学部修士課程の定員は26名である。2つの専攻科に分かれていて、経済学専攻16名、そして企業経営専攻10名の定員である。経済学専攻のうち「公共管理コース」が10名の定員である。また、企業経営専攻のうち「医療・福祉経営コース」が定員5名である。このように、修士課程の大学院はその中が実質的にいくつかに分かれている。そのために、そこで行われている授業に出席する学生数は非常に少なく、1名というケースも珍しくない。

したがって、現在でも授業の内容については、学生の希望を聞いて提供しているのが実状である。

## 第14章 医学系研究科のFD活動

平成21年度より、医学部と医学系研究科において「学部と研究科のFD企画をできるだけ相乗りの形で実施する」という方針が定められた。この方針に基づき、医学系研究科所属教員は、それぞれが関連深い（実際に兼担で教育を担当している）各学部（あるいはその上部の研究科）のFD活動に参加する形でFD活動を行った。具体的には医学部の学部教育を兼担している教員は医学部（第8章）のFD活動に、理学部・工学部の学部教育を兼担している教員は理学部（第7章）・工学部（第9章）ないしは理工学系研究科（第15章）のFD活動に、農学部の学部教育を兼担している教員は農学部（第10章）ないしは農学系研究科（第16章）のFD活動に参加した。具体的活動内容に関しては、それぞれの該当の章を参照されたい。

## 第 15 章 理工学研究科の F D 活動

### 理学系

#### 第 1 節 授業公開

今年度は、理工学研究科（理学系）として単独では授業公開を実施していない。理学系教員は、理学部のピアレビューに参加した。詳細は第 7 章の理学部の FD 活動を参照されたい。

#### 第 2 節 学部・研究科主催 F D 研修会

今年度は、理工学研究科（理学系）として単独では FD 研修会を実施していない。理学系教員は、理学部で開催された以下の FD 研修会に参加した。詳細は第 7 章の理学部の FD 活動を参照されたい。

理学部教育改善 FD 研修会  
講師派遣型アラカルト研修会「成績評価方法入門」  
講師派遣型アラカルト研修会「メンタルヘルス入門」  
講師派遣型アラカルト研修会「キャリア教育入門」  
理学部 e-ラーニング Moodle 講習会  
高大連携 FD 講演会「現在の高校生の実態」  
高大連携 FD 講演会「高校生の基礎学力」  
FD 講演会「大学の初年次教育改革の実態をその必要性」

#### 第 3 節 教育改善に関する活動

理工学研究科単独での教育改善に関する活動は行っていない。理学部と共通で活動している。詳細は第 7 章の理学部の FD 活動を参照されたい。

#### 第 4 節 学生授業評価・教員授業自己評価

理工学研究科理学系で開講している授業科目の学生授業評価結果について分析した。尚、学生の回答数は延べ 2 2 5 名、教員の回答数は 5 名であった。

図 1 は学生の授業外学習時間（正規化した指標）の自己評価の年度推移である。年度ごとに増加しているものの、授業外学習時間としては少し少ない傾向にある。図 2 は、学生の授業への出席の自己評価結果の年度推移である。多くの学生は出席状況が良好である。

図 3 は学生の授業目標達成度に関する自己評価結果である。図 4 は教員側から見た学生の授業目標達成度についての評価結果の年度推移である。教員の評価に対して学生の評価が低い。この傾向は学部と同じ傾向である。

図 5 は学生の授業理解度についての自己評価結果の年度推移である。一方、図 6 は教員側から見た学生の授業理解度の評価結果である。平成 2 1、2 2 年度は、学生と教員側で評価がほぼ同じである

が、平成23年度には両者には大きな開きがある。この原因については現時点では不明であるが、今後、継続的なデータの分析は必要であろう。

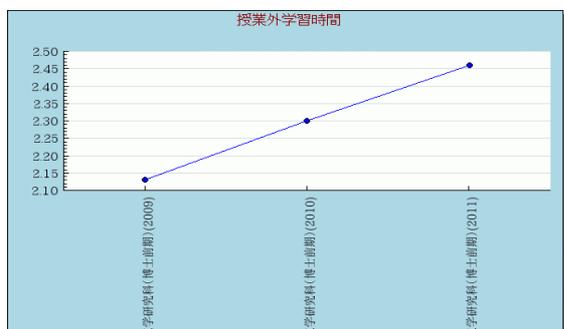


図1 学生の**授業外学習時間** (正規化した指標) の年度推移

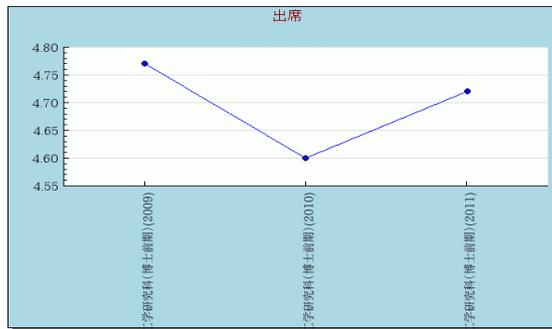


図2 学生の**授業出席**についての自己評価結果の年度推移

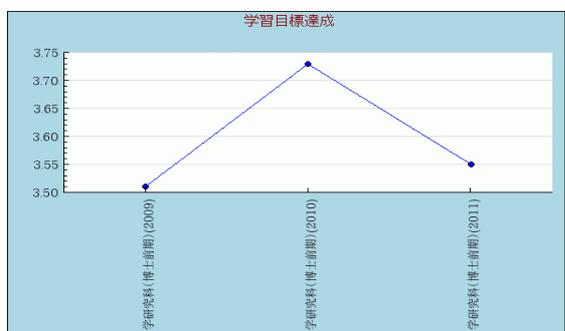


図3 学生の**授業目標達成**についての自己評価結果の年度推移

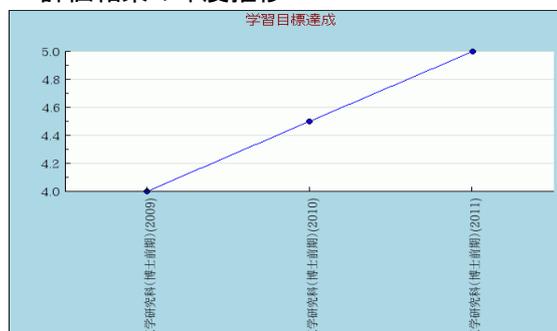


図4 教員側から見た学生の**授業目標達成**についての評価結果の年度推移

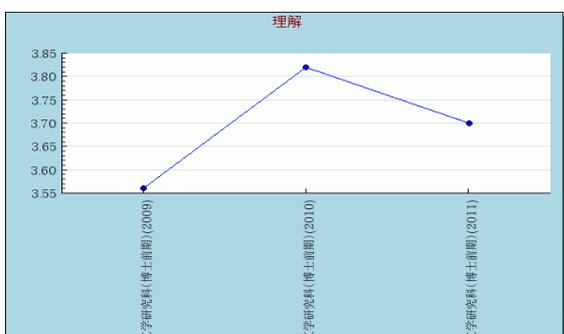


図5 学生の**授業理解度**についての自己評価結果の年度推移

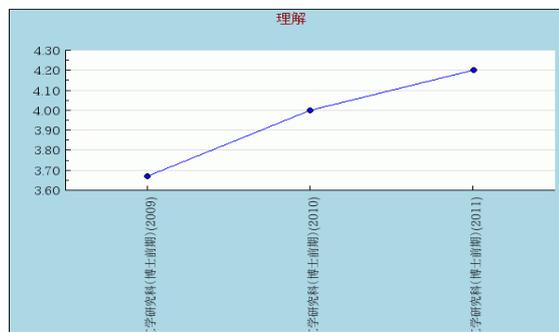


図6 教員側から見た学生の**授業理解度**についての評価結果の年度推移

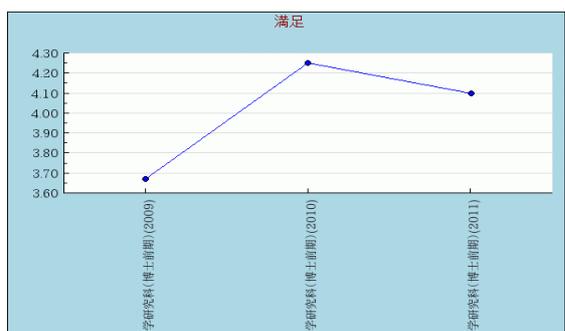


図7 学生の**授業満足度**についての自己評価結果の年度推移

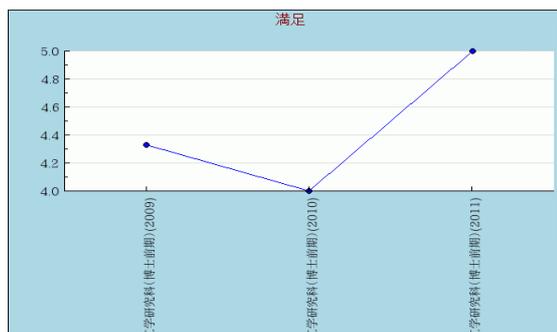


図8 教員側から見た学生の**授業満足度**についての評価結果の年度推移

図7は学生の授業に対する満足度の自己評価結果の年度推移である。図8は教員が自分の実施した授業について学生が満足しているかどうかを評価した結果の年度推移である。学生の自己評価と教員側の推測に大きい差が生じている。

図3-8の目標達成度、理解度、満足度の評価を見ると、教員が思っているほど学生の自己評価は高くない。授業を提供する側と受ける側の評価であることを考慮すれば当然の結果であるという見方があるが、一方で、その事実を教員で共有しておく必要はあると思われる。

## 第5節 FD実施経費報告書

理工学研究科（理学系）単独では、FD 実施経費を使用していない。理学部と共通で使用した。したがって、実施経費報告は第7章の理学部のFD活動を参照されたい。

## 第6節 来年度の課題

教員の授業自己評価の回答数が今年度減少した。評価を分析するにはあまりにもデータが少なすぎる。来年度は、教員の回答数を増やすことが必要である。

## 工学系

第2節FD研修会、第4節以降については、工学部の部分と重複するので、ここでは、第1節授業公開および第3節教育改善に関する活動について述べる。

## 第1節 授業公開

理工学研究科も、昨年後期から参加率の向上を期待して、一定期間を定め、学部全開講科目を対象として授業科目を実施した。

### 平成23年度（前期）公開授業一覧

後期公開授業実施期間 7月1日（金）～7月21日（木）

学科	授業科目名	授業実施者		実施日時	備考
		職	氏名	月 日	
全専攻	全開講科目	全職	全教員	7月1日～ 7月21日	非常勤講師担当の科目は除く。

## 平成23年度（後期）公開授業一覧

後期公開授業実施期間 12月1日（水）～12月22日（木）

学科	授業科目名	授業実施者		実施日時 月 日	備考
		職	氏名		
全専攻	全開講科目	全職	全教員	12月1日 ～12月22日	非常勤講師担当の科目は除く。

詳細に関しては、第9章を参照されたい。

## 第2節 教育改善に関する活動

理工学研究科工学系、医学系研究科工学系の優秀授業表彰一覧を示す。

平成22年度優秀授業表彰一覧表				
理工学研究科（工学系）、医学系研究科（工学系）				
番号	開設科目名	担当教員名	専攻名	表彰種類
1	構造力学特論	麻生 稔彦	機械工学専攻	最優秀授業
2	化学分析特論	吉本 信子	物質化学専攻	最優秀授業
3	反応制御化学特論	中山 雅晴	物質化学専攻	優秀授業
4	表面材料化学特論	酒多 喜久	物質化学専攻	優秀授業
5	半導体物性特論Ⅱ	山田 陽一	電子デバイス工学専攻	最優秀授業
6	特別講義	山本 節夫	電子デバイス工学専攻	優秀授業
7	テクノロジーマーケティング論	原田 直幸	電子デバイス工学専攻	優秀授業
8	固体物性論特論	嶋村 修二	電子デバイス工学専攻	優秀授業
9	超伝導工学特論Ⅱ	原田 直幸	電子デバイス工学専攻	優秀授業
10	プラズマ理工学特論Ⅰ	大原 渡	電子デバイス工学専攻	優秀授業
11	磁性工学特論Ⅰ	浅田 裕法	電子デバイス工学専攻	優秀授業
12	ITプロジェクト開発Ⅱ	山口 真悟	電子情報システム工学専攻	最優秀授業
13	制御情報特論Ⅰ	若佐 裕治	電子情報システム工学専攻	優秀授業

14	電力変換工学特論 I	田中 俊彦	電子情報システム工学専攻	優秀授業
15	地域計画学特論	鷗 心治	感性デザイン工学専攻	最優秀授業
16	空間・都市計画学演習	中園 真人	感性デザイン工学専攻	優秀授業
17	空間造形学特論 I	内田 文雄	感性デザイン工学専攻	優秀授業
18	感性心理工学特論	松田 憲	感性デザイン工学専攻	優秀授業
19	都市防災システム特論	瀧本 浩一	環境共生系専攻	最優秀授業
20	環境物理化学特論	田中 一宏	環境共生系専攻	優秀授業
21	リサイクル工学特論	今井 剛	環境共生系専攻	優秀授業
22	環境分子化学特論	喜多 英敏	環境共生系専攻	優秀授業
23	都市環境工学特論	今井 剛	環境共生系専攻	優秀授業
24	環境化学プロセス設計特論	佐伯 隆	環境共生系専攻	優秀授業
25	企業経営と財務	山本 豪紀	環境共生系専攻	優秀授業
26	流体数理解析学特論	西山 高弘	自然科学系	最優秀授業

表彰の方法は第 9 章の工学部と同じであるが、対象が全開講科目の上位 20%となっている。

# 第16章 農学研究科・医学系研究科（農学）の FD活動

## 第1節 授業公開

### 1 授業公開（学術セミナー）

農学研究科および医学系研究科（農学）の各教員が、農学部全教員と学生および農学研究科と医学系研究科（農学）の大学院生に対して研究紹介を行い、意見交換等により、各教育研究分野の活性化と分野間の総理解の促進を図った。

#### 1) 「ゲノム情報を基にしたメタン発酵プロピオン酸酸化共生系の研究」

講演者：高坂 智之

日時：5月20日（金）17:00～18:00

場所：農学部（連獣）大講義室

要旨：添付ファイルをご覧ください。

#### 2) 「脱窒菌による畑土壌からの亜酸化窒素放出の削減：野外での利用を目指して」

講演者：横山 和平

日時：6月23日（木）17:00～18:00

場所：農学部（連獣）大講義室

#### 3) 「老化抑制と寿命延長をめざして ～活性酸素の傷害性と有効性～」

講演者：井内 良仁 先生

日時：7月21日（木）17:00～18:00

場所：農学部（連獣）大講義室

#### 4) 「植物による熱発生：亜熱帯性花序ミトコンドリアに発現する代替末端酸化酵素（AOX）の金属活性中心の解明をめざして」

講演者：右田たい子 先生

日時：10月28日（金）17:00～18:00

場所：農学部（連獣）大講義室

#### 5) 「脂質修飾タンパク質の網羅的同定に基づく疾患関連タンパク質の探索」

講演者：内海俊彦 先生

日時：11月25日（金）17:00～18:00

場所：農学部（連獣）大講義室

#### 6) 「香りを化学する」

講演者：赤壁善彦 先生

日時：1月27日（金）16:00～17:00

場所：農学部（連獣）大講義室

## 第2節 学部・研究科主催FD研修会

1) 大学教育センターから講師を派遣して実施する研修会ならびに、2) 教育改善FD研修会を、以下の日程で開催した。

1) 大学教育センターから講師を派遣して実施する研修会

研修名：「キャリア教育入門～大学教育とキャリア教育・ポートフォリオ～」

日程：平成23年9月21日(水)14:30～15:10、

講師：平尾 元彦 先生 (学生支援センター教授)

場所：農学部2F大会議室

2) 教育改善FD研修会

日程：平成23年10月19日(水)14:30～15:00

講師：小川 勤 (大学教育センター教授)、

吉村 誠 (学生支援センター長)

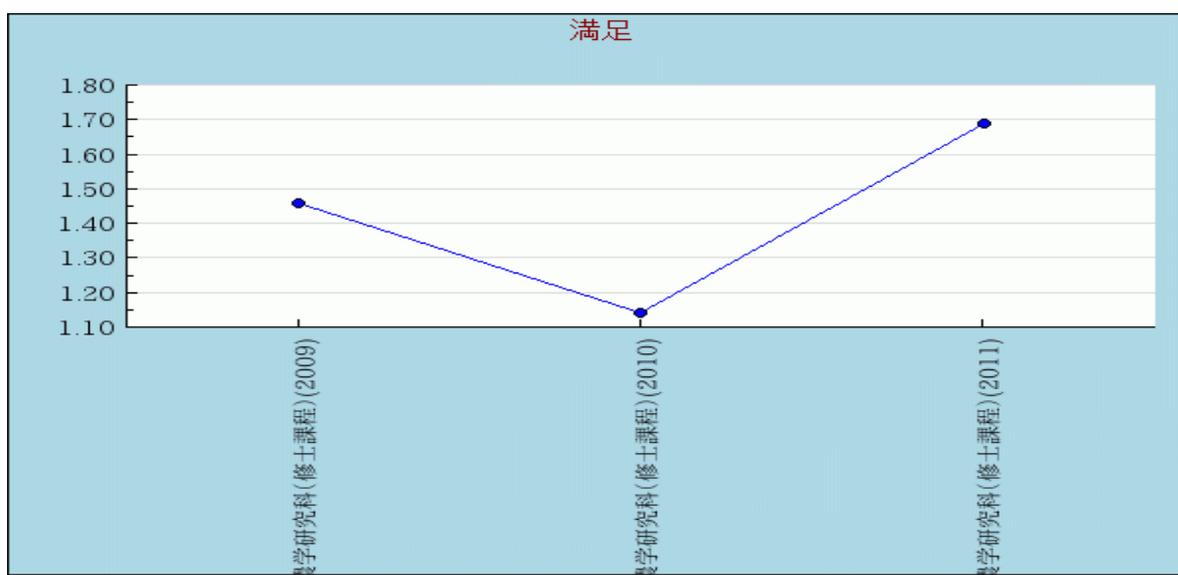
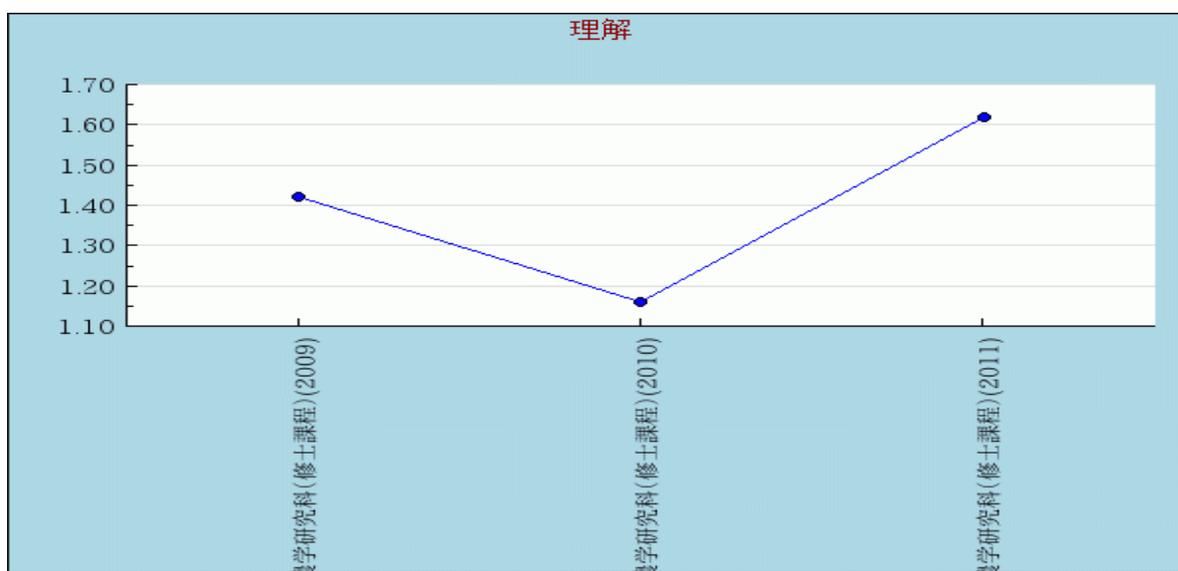
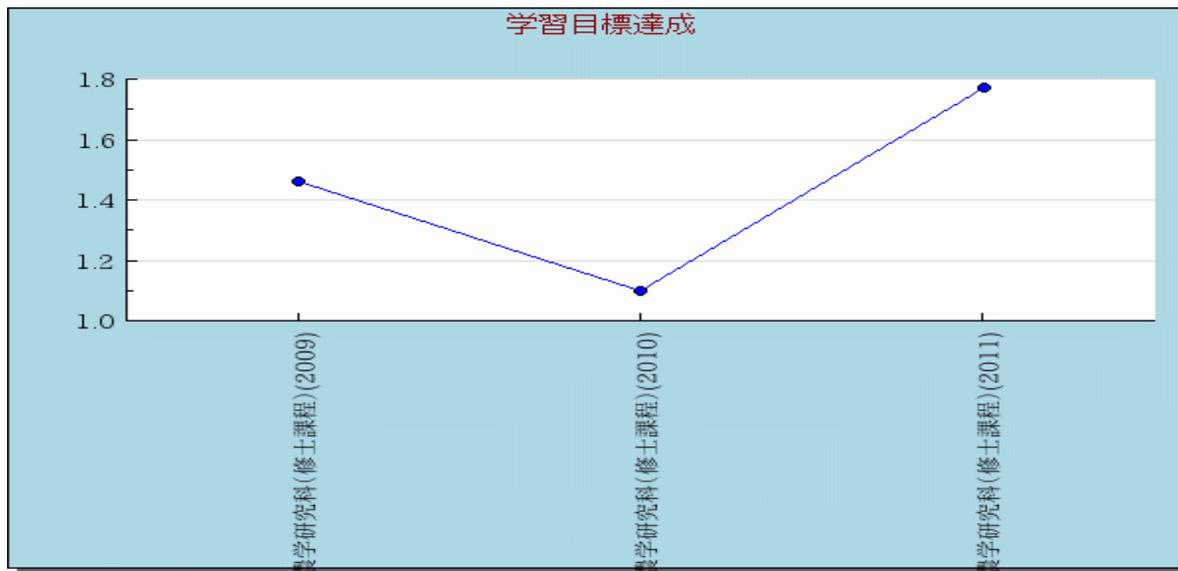
場所：農学部2F大会議室

## 第3節 教育改善に関する活動

農学研究科および医学系研究科（農学）は、人類の生存に必要な食料を始めとして、生物機能の開発・応用に関する技術を発展させつつ、各種資源と自然環境との保全・再生との調和を図り、豊かな人間性を醸成する分野といえる。このような広範囲な科学と技術を深化させるために、広範な基礎学力に基づいて高度な専門知識と能力を備えた、豊かな人間性のある科学者、技術者を養成することを目的とし、活動を実施している。

## 第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

2009年度			2010年度			2011年度		
科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率
106	42	39.6	90	36	40	21	11	52.4



学生授業評価は、農学研究科・医学系研究科（農学）独自で実施しており、学生による自由記述欄の内容をもとに、授業に対する評価を確認し、改善努力を行っている。少人数の授業は、学部のような授業評価の実施が困難で、両研究科独自の形式を取っているが、これが実効性を持つものかは、今後の検討課題である。一方、教員授業自己評価は、年々、入力率は増加しているが、まだ5割程度であり、組織的な取り組みが必要と考える。また、学習の目標達成度、理解度、満足度に関しては、2010年度の結果を踏まえ、各教員が認識し、改善努力が認められた。

## 第5節 FD実施経費報告書

部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果(簡潔に)
農学部	学術セミナー	展示ボード(FD用)	142,900	ポスター展示に使用し、学生・院生への研究紹介を行い、意見交換等により各教育研究分野の活性化と分野間の相互理解の促進を図った。
農学研究科	学術セミナー			
<b>計</b>			<b>142,900</b>	

## 第6節 来年度の課題

農学研究科ならびに医学系研究科（農学）のFD活動は、授業評価以外は全て学部と重複した内容であり、今後、両研究科の独自の取り組みが必要と考える。また、両研究科における授業公開（ピアレビュー）の実施の必要性も検討されている。さらに、教員授業自己評価の入力率向上のため、入力依頼を徹底したい。

## 第17章 東アジア研究科のFD活動

### 第1節 平成23年度東アジア研究科FD計画

東アジア研究科FD委員会は、大学院設置基準の一部改正によって大学院におけるFD研修が義務化されたことをうけ、平成19年度より発足したものである。東アジア研究科は、博士課程のみの独立した大学院であり、主たる教育活動は学生に対する研究指導となっている。こういった現状を鑑み、FD委員会としては昨年度に引き続き「研究指導法についての検討会」を企画するに至った。

東アジア研究科の教員組織は、「比較文化講座」「社会動態講座」「社会システム分析講座」の3講座に分かれており、FD研修会もこの講座単位で行うこととした。但し、事前の開催告知は研究科に所属する全教員に対して行い、また、いずれのFD研修会に参加することも可能とした。平成23年度の東アジア研究科FD研修会として計画したのは以下の3回となる。

1) 「第1回山口大学大学院東アジア研究科FD研修会～研究指導法の検討～」

日時：平成23年10月14日（金）

東アジア研究科（経済・経営・法律コース）博士学位準備論文報告会終了後

場所：東アジア研究科・経済学研究科棟307演習室

2) 「第2回山口大学大学院東アジア研究科FD研修会～研究指導法の検討～」

日時：平成23年10月17日（月）

東アジア研究科（比較文化コース）博士学位準備論文報告会終了後

場所：東アジア研究科・経済学研究科棟307演習室

3) 「第3回山口大学大学院東アジア研究科FD研修会～研究指導法の検討～」

日時：平成23年10月20日（木）

東アジア研究科（教育開発コース）博士学位準備論文報告会終了後

場所：東アジア研究科・経済学研究科棟307演習室

### 第2節 東アジア研究科FD研修会

平成23年度の東アジア研究科FD研修会は、計画に則って3回実施した。いずれも、東アジア研究科が毎年10月に行っている「博士学位準備論文報告会」を参加契機として利用し、当該の報告会終了後に開催することとした。この研修会は、博士学位準備論文報告会で発表をした学生の主指導教員に、その学生に対する研究指導法についての実践報告をしてもらおうという形式をとっている。

事前の準備として、主指導教員には「FD研修会資料」をFD委員会に提出してもらった。FD委員会は、その「FD研修会資料」を東アジア研究科全教員に対して開示。研修会当日、参加者は「FD研修会資料」を念頭に置きつつ、学生の博士学位準備論文報告を聴くことになる。そして、博士学位準備論文報告会の終了後、FD研修会を開催。主指導教員があらためて「FD研修会資料」について補足説明を施し、博士学位準備論文報告会での学生の報告を実践事例として参照しつつ、意見交換を行なうこととした。

なお、「FD研修会資料」については以下のような観点を想定している。

### 1. 学生指導の経過

学生の研究課題遂行に対して主指導教員が1年次、2年次、3年次にどのようなサポート体制を敷いてきたかを報告する。報告内容は、「ロードマップ」「研究課題に対するカウンセリングの履歴」「研究遂行のための指導状況」「調査研究の実施状況」「学会活動状況」「論文作成の指導状況」「研究成果の公表状況」などである。

### 2. 指導上の留意点

学生の研究課題遂行のために主指導教員が1年次、2年次、3年次にどのような環境の整備を心がけてきたかを報告する。報告内容は、「整備したハード、及びソフト」、「調査のための海外渡航の機会をどのように与えたか」、「東アジアプロジェクト研究への参加をどのように促したか」などである。

### 3. 指導上の感想

学生の研究課題遂行に向けて主指導教員が1年次、2年次、3年次にどのような困難を感じてきたかを報告する。報告内容は、「本学生は、□□□□であり、△△△△という点で、より細かい指導が必要である」「××××に関して、より良い方法がないか、検討中である」「○○○○については、現在までのところ、問題なく経過している」などである。

## 1. 第1回東アジア研究科FD研修会

第1回東アジア研究科FD研修会は以下の通りに実施された。

題目：「第1回東アジア研究科FD研修会～社会動態講座・研究指導法の検討～」

日時：平成23年10月14日（金）

東アジア研究科（経済・経営・法律コース）博士学位準備論文報告会終了後

場所：東アジア研究科・経済学研究科棟307演習室

参加者：塚田広人、植村高久、成富敬、野村淳一、中田範夫、有村貞則、朝水宗彦、森野正弘、仲間瑞樹（以上9名）

### （1）研修会の概要

本FD研修会は、これに先立って開催された東アジア研究科（経済・経営・法律コース）博士学位準備論文報告会での学生の発表を踏まえ、当該学生の主指導教員がこれまでに行ってきた研究指導の方法や方針、あるいは抱えている問題点などを個別に実践事例として報告。その報告に対する様々な意見を参加者から募り、検討を加えるという形式で催された。

研修会の手順は、まず、博士学位準備論文報告会開始前にアンケート用紙を配布。次いで、各報告を聞いた後、報告者の指導教員に対する「指導上のアドバイス・コメント」を記入するように参加教員へ依頼した。その際、以下の三つの観点を参考例として掲げた。

- ① 既存研究涉猟が確実に行われているか？
- ② 既存研究の成果を正確に整理分類し、総括できているか？
- ③ その上でオリジナル性が明確であるか？

報告会終了後、ディスカッション形式で教員相互に意見を交換。具体的には、まず報告者の指導教員が、「FD研修会資料」に基づきつつ、現在指導している際の工夫、直面している問題について実践報告をした。続いて他の参加教員が、それに関する質問や問題解決につながるアドバイスを行った。また、同時に参加教員から、先に記入したアンケート等をもとに、指導教員に対して指導に関するコ

メント・アドバイス（改善点など）を行った。

## （２）提起された問題とその解決法について

研修会では教員による実践事例報告があり、それに対する様々な意見が交わされた。当日は、研究指導に対する具体的なところまでかなり詳細に報告があり、また、それに対する質疑応答が交わされたが、それをそのままここに掲載すると、指導を受けている学生が特定されるおそれがあるので、以下の文中では抽象化したり、任意の記号に置き換えたりの操作を行っている。

### 【実践事例報告】

#### 1. 学生指導の経過

- 1年次 ・研究課題は〇〇〇制度への市場原理の導入の評価である。  
・研究課題に即した調査研究  
・文献調査と検討

- 2年次 ・文献調査と検討  
・学会誌への論文投稿（10月、予定）  
・第1回目の準備論文報告会（10月）  
・その他の学会報告、学会誌への投稿予定…未定

- 3年次 ・調査を実施する可能性あり(市町村等)  
・第2回準備論文報告会(5月)  
・学位論文執筆予定

#### 2. 指導上の留意点

##### ① 研究環境の整備

- ・研究に必要な文献…研究科の予算から購入、貸与

##### ② 東アジアプロジェクト研究への参加

##### ③ 関連学会への入会

日本〇〇〇学会 日本△△△学会

#### 3. 指導上の感想

①本学生は、研究対象とする領域の現場に所属しているという強みがある。問題の選択も含め。ただし、論文作成時の論理的展開と正確な表現の点で少し不足なところがあり、この点の指導を続けてきた。

### 【実践事例報告に対するコメント】

- ・社会人や専門家を指導する際、どの程度教員の意見を受け入れてもらえるか、どのようなコミュニケーションを取られているのか聞きたい。
- ・既にアカデミズムの職についている人を学生として迎え、研究指導する場合の留意点を教えてもらいたい。
- ・現場で働いているのが強みだが、文献研究との整合性が今後の課題であろう。

- ・社会人の指導は難しいと感じました。
- ・研究対象の一つである〇〇〇制度を無批判に良いものであると前提にして議論する傾向が見られるので、客観的視点を持たせることが困難であるように感じました。
- ・テーマ設定が難しそう。
- ・適切に指導されていると感じた。

### 【補足】

今回のFD研修会では主に社会人学生を対象とした実践事例報告を行ったが、東アジア研究科における大学院生は多様化が進んでいる。そのため、今後の課題として、非英語圏出身で、英語による受験を行った大学院生に対する英語による論文指導やネイティブ・チェックの体制について若干の議論が行われた。

## 2. 第2回東アジア研究科FD研修会

第2回東アジア研究科FD研修会は以下の通りに実施された。

題目：「第2回東アジア研究科FD研修会～比較文化講座・研究指導法の検討～」

日時：平成23年10月17日（月）

東アジア研究科（比較文化コース）博士学位準備論文報告会終了後

場所：東アジア研究科・経済学研究科棟307演習室

参加者：朝水宗彦、阿部泰記、辻正二、高木智見、田中誠二、坪郷英彦、根ヶ山徹、平野芳信、福田隆眞、森野正弘、湯川洋司、横田尚俊、（以上12名）

### （1）研修会の概要

本FD研修会は、これに先立って開催された東アジア研究科（比較文化コース）博士学位準備論文報告会での学生の発表を踏まえ、当該学生の主指導教員がこれまでに行ってきた研究指導の方法や方針、あるいは抱えている問題点などを個別に実践事例として報告。その報告に対する様々な意見を参加者から募り、検討を加えるという形式で催された。

研修会の手順は、まず、博士学位準備論文報告会開始前にアンケート用紙を配布。次いで、各報告を聞いた後、報告者の指導教員に対する「指導上のアドバイス・コメント」を記入するように参加教員へ依頼した。

報告会終了後、ディスカッション形式で教員相互に意見を交換。具体的には、まず報告者の指導教員が、「FD研修会資料」に基づきつつ、現在指導している際の工夫、直面している問題について実践報告をした。続いて他の参加教員が、それに関する質問や問題解決につながるアドバイスを行った。また、同時に参加教員から、先に記入したアンケート等をもとに、指導教員に対して指導に関するコメント・アドバイス（改善点など）を行った。

### （2）提起された問題とその解決法について

研修会では1名の教員から実践事例の報告があり、それぞれに対する様々な意見が交わされた。当日は、研究指導に対する具体的なところまでかなり詳細に報告があり、また、それに対する質疑応答が交わされたが、それをそのままここに掲載すると、指導を受けている学生が特定されるおそれがあるので、以下の文中では抽象化したり、任意の記号に置き換えたりを行っている。

## 【実践事例報告】

### 1. 学生指導の経過

- 1年次
- ・研究課題は「〇〇」である。
  - ・研究を遂行するために、現地調査全体の方法を指導する。
  - ・研究課題に即した調査研究は以下の通りである。  
8月…〇〇〇の調査（於：中国〇〇省〇〇市）  
10月…東亜経済研究所文献調査
- 2年次
- ・前年度調査結果のとりまとめをする。
  - ・学会報告（5月）：△△学会
  - ・学会誌への論文投稿（10月）：△△学会
  - ・第1回目の準備論文報告会（10月）
  - ・学会報告、学会誌への投稿予定：□□学会
- 3年次
- ・学会報告（5月）：△△学会
  - ・追加調査（7月）
  - ・第2回目の準備論文報告会
  - ・学位論文執筆予定

### 2. 指導上の留意点

- ① 研究環境の整備
- ・〇〇〇現地調査のための海外渡航に随伴する。
  - ・日本での文献情報の提供
- ② 東アジアプロジェクト研究への参加
- ・△△△（中国〇〇省〇〇市）における祭礼調査の実施
- ③ 関連学会への入会
- ・△△学会
  - ・□□学会

### 3. 指導上の感想

- ①本学生は、留学生であり、日本語による論文作成のための細かい指導が必要である。
- ②個別聞き取り調査に関して、より良い方法がないか、検討中である。
- ③文献、図版資料の収集については、現在までのところ、問題無く経過しているが、インタビューや観察による調査が進まず、質的データがまとめられるかが今後の課題である。

## 【実践事例報告を受けてのコメント】

- ・適切に指導していると思われた。
- ・適切に行なわれていると思う。
- ・よく指導されていると思う。
- ・ご苦労が多いと推察されます。
- ・フィールドに対する取り組み方が不十分な態度であるようですが、これは本論文の内容からして大きな問題と思われます。調査もご一緒になされているのに、学生がそれに伴った努力をしていないようで、この点の改善を図らないと進めるのがむずかしいと思われます。良い方法（具体案）は分かりませんが。

- ・ご苦労様です。
- ・〇〇〇を対象とした研究に、現代の質的調査データ（祭礼調査データなど）をどのように利用するか（利用しうるのか）が、重要な問題だと思います。
- ・〇〇〇の成立・歴史については、文献、先行研究等に依拠して明らかにし、それらの崩壊過程（開発）が現代の△△△△関係にどのような影響を及ぼしているのかを、質的調査データを中心に明らかにするという戦略もありうるのではないのでしょうか。
- ・本研究は〇〇学だけでなく、△△学や□□学からのアプローチを行う研究者の調査も参考になると思われる。他学会に入会する必要はないのか。他分野の資料に目を通す必要はあるだろう。
- ・学生の研究の方向性を定められ、研究の進展に尽力された功労に敬意を払いたい。
- ・指導云々以前に、言語運用能力の習得が必要なのではないのでしょうか。
- ・大変な心配りをされていることが分かり、コメントだけをしている自分の無責任さを感じた。
- ・指導上の感想として、聴き取り調査（インタビュー）の進捗状況に懸念を抱いているとあるが、発表資料2頁「5結果」に記された内容について、事例（証言）を集めて補強していけば問題ないように思える。

### 3. 第3回東アジア研究科FD研修会

第3回東アジア研究科FD研修会は以下の通りに実施された。

題目：「第3回東アジア研究科FD研修会～社会システム分析講座・研究指導法の検討～」

日時：平成23年10月20日（木）

東アジア研究科（教育開発コース）博士学位準備論文報告会終了後

場所：東アジア研究科・経済学研究科棟307演習室

参加者：朝水宗彦、有元光彦、石井由理、名島潤慈、福田隆眞、藤原マリ子、松岡勝彦、村上林造、森下徹、森野正弘（以上10名）

#### （1）研修会の概要

本FD研修会は、これに先立って開催された東アジア研究科（教育開発コース）博士学位準備論文報告会での学生の発表を踏まえ、当該学生の主指導教員がこれまでに行ってきた研究指導の方法や方針、あるいは抱えている問題点などを個別に実践事例として報告。その報告に対する様々な意見を参加者から募り、検討を加えるという形式で催された。

研修会の手順は、まず、博士学位準備論文報告会開始前にアンケート用紙を配布。次いで、各報告を聞いた後、報告者の指導教員に対する「指導上のアドバイス・コメント」を記入するように参加教員へ依頼した。

報告会終了後、ディスカッション形式で教員相互に意見を交換。具体的には、まず報告者の指導教員が、「FD研修会資料」に基づきつつ、現在指導している際の工夫、直面している問題について実践報告をした。続いて他の参加教員が、それに関する質問や問題解決につながるアドバイスを行った。また、同時に参加教員から、先に記入したアンケート等をもとに、指導教員に対して指導に関するコメント・アドバイス（改善点など）を行った。

#### （2）提起された問題とその解決法について

研修会では教員による実践事例報告があり、それに対する様々な意見が交わされた。当日は、研究

指導に対する具体的なところまでかなり詳細に報告があり、また、それに対する質疑応答が交わされたが、それをそのままここに掲載すると、指導を受けている学生が特定されるおそれがあるので、以下の文中では抽象化したり、任意の記号に置き換えたりを行っている。

### 【実践事例報告 A】

#### 1. 学生指導の経過

##### 1 年次

- ・研究課題： ○○○における□□性の研究  
→○○○研究に関する先行文献の精査，データ収集（実験）
- ・学会報告： △△△学会（2010 年 8 月）

##### 2 年次

- ・研究課題： ○○○における□□性の研究  
→データの収集（実験）
- ・準備論文報告会（第 1 回：2011 年 10 月）

##### 3 年次

- ・準備論文報告会（第 2 回：2012 年 5 月）
- ・学位論文執筆予定

#### 2. 指導上の留意点

- ①研究環境の整備：関連文献の充実
- ②東アジアプロジェクト研究への参加(RA)
- ③関連学会・研究会への参加

#### 3. 指導上の感想

- ①日本語能力に関しては、全く問題ない。
- ②着実な研究態度を持ってはいるが、集中力に欠ける点がある。
- ③研究内容の新規性・独創性をどこに求めるかについて検討中である。

### 【実践事例報告 A に対するコメント】

- ・なかなかよくやっておられると思います。
- ・発表者の研究内容が先生のコメントにより、よく分かりました。大変だと思いますが、今後の進展を祈っております。
- ・本研究の場合、20 代の日本人を対象とした実験に限られているようだが、領域を「若年層」に限定しても面白いかもしれない。
- ・学生の個性に合わせて指導をしていると思いました。
- ・当該学生については 1 年生の時から演習で見えてきましたが、今回の発表で論文の方向が随分はっきりしてきたように思いました。
- ・学問的な話の意思疎通の難しさというのは、やはり大変なことと思いました。
- ・授業時の発表より論旨明快になっていました。ご指導の成果だと拝聴しました。
- ・○○学にとって、文献確保が確かに大変だと思います。財政上の裏付けが必要かと感じました。

### 【実践事例報告 B】

#### 1. 学生指導の経過

##### 1 年次

- ・学生が母国で教員職にある関係で、来日が遅れた。遅れた分については集中授業等によって補った。
- ・研究課題の決定に時間を要した。本人は海外での調査を主張し、論文の内容も当該国での実践に固執したが、実地調査のための経費がないということで、調査に取り掛かることがなく、一年次を修了した。
- ・文献による考察の比重を増やし、その報告をした。

## 2年次

- ・研究課題の決定に問題があるので、研究対象をよく吟味するよう指導した。この指導にはかなりの時間と労力を費やした。
- ・7月の時点で、論文作成に現実性のある問題とその解決に変更した。
- ・変更した研究テーマに即して文献研究と実態調査を指示し、研究を再開した。
- ・10月の時点で、〇〇〇に関する理論と実態調査を継続している。
- ・海外の学会誌に現段階での実態調査を基に投稿予定。

## 3年次

- ・4月までに学会誌に投稿予定。
- ・第2回準備論文報告会。
- ・学位論文執筆予定。

## 2. 指導上の留意点

特になし

## 3. 指導上の感想

- ・本人が実現可能と判断していることと指導上可能なことにずれが生じている場合がある。

### 【実践事例報告 B に対するコメント】

- ・なかなか苦勞されておられると思います。
- ・学生指導の経過についてはとても大変だったと思います。日本での実態調査をきちんとされ、それを本国に戻られ、参考になる部分があれば利用していただきたいです。
- ・文献調査は十分行なわれていると思うので、今後現場での実証調査とうまく結びつけていくことを望みたい。
- ・留学生の発表原稿・論文等を、どの程度チェックされているのでしょうか。
- ・研究にかかる労力と時間の計算ができない学生の方向性を修正する指導は大変そうだと思います。
- ・やはり、全体として表層的な印象があるので、どう深めるか、難しい課題がある感じがするのですが、お話をお聞きして、先生のご苦勞を感じました。
- ・タイトルが研究目的に合致していない点がみられますので、ご指導に苦勞される面があるのではないかと拝察致しました。でも、よく勉強していると思いました。
- ・海外の状況を報告のなかに組み込んでいただいていたら、意図がわかりやすかったと思います。
- ・研究課題をコーディネートしてあげなくてはならないというのは大変だと感じた。
- ・「本人が実現可能と判断していることと、指導上可能なこととの間にズレがある」というのは、誰もが直面する問題を的確に言い当てていて、印象に残る指摘だと感じた。

## 【実践事例報告 C】

### 1. 学生指導の経過

#### 1年次

- ・研究課題は、1名の学生は、〇〇〇に関する実証研究、もう1名の学生は、△△△に関する研究である。
- ・研究を遂行するために、実際に存在する問題の抽出、それを分析するための理論的ベースの確立、同分野の先行研究の調査を指導する。
- ・研究課題に即した調査研究は以下の通りである。
  - 4－8月…先行研究の調査、修士課程で行った面接調査データの整理。
  - 8－3月…分析に必要な理論の確立とそれに基づいたデータ分析、分析結果の論証のための文献調査、先行研究の調査。

#### 2年次

- ・上記理論に基づいた〇〇〇ラーニングのコースデザイン。
- ・研究課題に即した調査研究
  - 8－9月…面接調査のための質問項目つくりとパイロット調査。  
海外における本調査。  
デザインしたコースの有効性の実証研究と受け入れ大学の確定。
- ・第1回目の準備論文報告会（10月）
- ・『東アジア研究』への投稿を予定（10月）

### 2. 指導上の留意点

#### ① 研究環境の整備

- ・研究に必要な文献を用意する。

### 3. 指導上の感想

- ①学生の研究課題はいくつかの学術分野にまたがるものであり、研究の目的を達成するために必要な理論を探す過程で多くの文献をともに読み、討議をする必要があった。
- ②実証研究をするための受け入れ大学があるかどうか危惧されたが、本人の努力により、当初の計画通りの研究が進められる見込みである。
- ③複数の学術分野にまたがっているため、主指導教員の専門を超えることがあり、副指導教員等からのサポートが不可欠である。

## 【実践事例報告 C に対するコメント】

- ・相手に合わせた指導法はむずかしいテーマですね。
- ・プログラム内容、効果について、今後の進展を期待しています。面白い研究ですし、得られるデータが楽しみです。
- ・〇〇〇の研究に関しては、△△学や□□論以外にも、◎◎学の研究も参考になるかもしれない。
- ・留学生指導がうまくいっているように感じます。どのようにモチベーションをあげていくか、教えていただきたいと思います。
- ・着実に指導をされていると思います。
- ・学生の意欲の高さ、姿勢の一貫性、というお話で、やはりそこがしっかりしていれば大丈夫かという感じがしました。
- ・学生が志望する専門領域と指導教員の専門領域との間にズレが生じるというのは、東アジア研究科のような学際的な研究科においては避けて通れない問題だと思った。

#### 4. 参考資料

##### (1) 第1回東アジア研究科FD研修会のアンケート用紙

平成23年度 第1回 東アジア研究科FD研修会 アンケート

社会動態講座

お名前\_\_\_\_\_

※本コメント票は、FD 研修会終了時に回収いたします。なお、こちらのコメント票

により出欠を確認いたしますので、必ずご提出してください。

①報告者（指導教員名）     〇〇 〇〇 先生    

コメント
------

②報告者（指導教員名）     〇〇 〇〇 先生    

コメント
------

##### (2) 第2回東アジア研究科FD研修会のアンケート用紙

平成23年度 第2回 東アジア研究科FD研修会 アンケート

比較文化講座

お名前\_\_\_\_\_

※本コメント票は、FD 研修会終了時に回収いたします。なお、こちらのコメント票



コメント

③報告者名（主指導教員名）     〇〇 〇〇 先生    

コメント

\* \* \* \* \*

平成 23 年度 山口大学大学院東アジア研究科 F D 委員会  
森野 正弘  
朝水 宗彦  
松岡 勝彦

# 第 18 章 大学院技術経営研究科の F D 活動

## 第 1 節 授業公開

技術経営研究科は社会人大学院生を対象とした大学院であるので、平日は勤務しながら大学院課程を修学できるように授業を週末の二日間に開講している。そして、宇部・福岡・広島の 3 教室体制で授業を行っていることにより、全教員が週末に授業を担当している。本研究科の授業の基本方針として、宇部教室（常盤地区）、福岡教室ならびに広島教室の 3 カ所の教室において、全カリキュラムを対面式授業で行うことを基本としている。

平成 23 年度に赴任した教員を対象にして、平成 23 年度前期必須科目 6 科目の授業を公開し、新任教員によるピュアレビューならびに MOT 教育カリキュラムの研修を行った。

### ◆ 優れていると感じた点について

#### 【説明】

- ・声をはっきりとして聞き取りやすいですか。
- ・丁寧に講義内容を説明していますか。
- ・学生の職務内容を念頭に置いた説明をしていますか。
- ・学生が各自の業種に応じて演習課題を展開できるように意図されていますか。
- ・専門分野が違う受講者にも理解し易いように説明が工夫されていますか。
- ・パワーポイントの使い方は適切ですか（文字の大きさ、スライドの送り方など）。
- ・動画を使った説明など、学生の興味を引き出す工夫がされていますか。
- ・学生が授業内容を理解するペースを考慮して、説明のテンポを調整していますか。

#### 【資料】

- ・パワーポイント スライドのフォントサイズは適切ですか。
- ・パワーポイント スライド 1 枚当たりの時間を十分に設定しますか。
- ・講義説明を書き込むのに必要な時間が十分確保されていますか。
- ・講義で専用ソフトウェアを利用する際には、操作マニュアルが用意されていますか。
- ・ニュース・報道・Web 情報を引用している場合、引用元を明記していますか。

#### 【教授法】

- ・スクール形式による説明と、グループ学習や討議などの実践形式による学習がバランス良く取り入れていますか。
- ・事前課題を用意していますか。
- ・授業の進め方や教材について、創意工夫を取り入れていますか。
- ・学生のモチベーションを引き出すような工夫をしていますか。
- ・講義の進行に応じて、グループワークやグループ討議が適切に行われていますか。
- ・学生から発言を引き出すように授業をリードしていますか。
- ・特定の学生の発言回数が増えないように、注意していますか。

◆授業を参観し、参考になる感じた点について

【事例】

- ・授業の内容を補完するための学習
  - eラーニングを利用して授業の一部を個人学習に割り当てる。
  - 調査に時間を要する内容について、課題レポートとして割り当てる。
- ・教材の作成方法
  - パワーポイント教材に図表や写真などを配置し、テキストだけ教材と比較してビジュアル的にアピールする。
  - 参考資料を活用する。
  - ビデオ教材やドキュメンタリー映像などの動画を用いる。

## 第2節 学部・研究科主催FD研修会

平成23年度のFD研修活動として、下記の2つを実施した。

(1) ICIM 国際会議

日時：平成23年11月30日（水）、12月1日（木）

会場：リーガロイヤルホテル小倉 国際会議場

（福岡県北九州市小倉北区浅野2丁目14-2）

21世紀の社会では技術と経営が相互に関連するダイナミックな革新が不可避であり、あらゆる分野の国際競争力は革新的技術の創出と活用、先進的な経営を基盤として成り立っています。イノベーション創出や組織力向上による競争優位確保のために、プロジェクトマネジメントやMOT（Management of Technology）の果たす役割はますます重要になっている。

今回は、山口大学が中心となり、プロジェクトマネジメント学会、MOT協議会の後援を受けて2011年11月30日～12月1日に福岡県北九州市のリーガロイヤルホテル小倉で第8回イノベーション&マネジメント国際会議を開催します。日中欧米の研究者を始め、行政担当者、企業関係者の参画を得て、下記テーマの基調講演と学術講演を行った。

- (1) 技術、製造、製品開発におけるイノベーション
- (2) 企業経営、地域経済、財務管理、マーケティング、ロジスティクス&サプライチェーン・マネジメント、人的資源などにおけるイノベーション
- (3) 知的財産およびナレッジ・マネジメント
- (4) 電子商取引、電子政府、情報通信技術（ICT）マネジメント
- (5) 技術の経済学的分析、科学技術政策
- (6) ホット 이슈：オープンイノベーション、地域イノベーション、デジタル・エンジニアリング

## プログラム概要

9:00 ~ 10:00	イノベーション&マネジメント国際会議 オープニングセレモニー
10:00 ~ 10:30	休憩
10:30 ~ 11:00	<b>【基調講演 1】 久村 春芳氏</b> 『自動車産業におけるイノベーション ～日産自動車の事例～』
11:00 ~ 11:30	<b>【基調講演 2】 大津留 榮佐久氏</b> 『次世代のマーケットを見据えた地域イノベーションクラスターの推進 ～シリコン・シーベルト福岡プロジェクト～』
11:30 ~ 12:00	<b>【基調講演 3】 神庭 弘年氏</b> 『PMこそイノベーションを実現するツールだ!』
12:00 ~ 12:30	<b>【基調講演 4】 ウェン・パン・チュエン氏</b> 『生産デザイン手法の研究開発』
12:30 ~ 13:30	休憩
13:30 ~ 14:30	<b>【基調講演 5】 まつもと ゆきひろ氏</b> 『ルビー : オープンソースによるブレイクスルー』
14:30 ~ 15:00	休憩
15:00 ~ 18:00	イノベーション&マネジメント国際会議 テーマ別セッション
18:30 ~ 20:00	バンケット(ガラディナー) ロイヤルホール



# ICIM 2011

The 8th International Conference on  
**Innovation & Management**

**November 30 - December 2, 2011**

**RIHGA Royal Hotel Kokura  
(Kitakyushu City, Fukuoka Prefecture, JAPAN)**

Organized by

Graduate School of Innovation & Technology Management, Yamaguchi University

Please click here to download the guidelines and template for paper submission: [Paper Submission Guidelines & Paper Template](#).

**Call for Papers**

Introduction Video of ICIM 2011 Venue (Kitakyushu City)



Sponsored by

[West Japan Industry and Trade Convention Association](#)

[CITY OF KITAKYUSHU](#)

[Kitakyushu Chamber of Commerce and Industry](#)

[JAPAN MOT COUNCIL](#)

[Japan MOT Society](#)

[The Japan Society for Science Policy and Research Management](#)

[NISHI NIPPON MOT CONSORTIUM](#)

[THE SOCIETY OF PROJECT MANAGEMENT](#)

[Project Management Institute Japan](#)

The 8th International Conference on Innovation & Management (ICIM) 2011  
E-mail: [icim2011@yamaguchi-u.ac.jp](mailto:icim2011@yamaguchi-u.ac.jp)



**第8回 イノベーション&マネジメント国際会議 基調講演**  
*International Conference of Innovation and Management 2011*  
 平成 23 年 11 月 30 日(水) 於 リーガロイヤルホテル小倉

**第 8 回 イノベーション&マネジメント国際会議 基調講演**  
**基調講演のみ聴講されたいという方へ 公開基調講演申込み**

平成 23 年 11 月 30 日(水) 10:30 ~ 14:30 (受付開始 10:00) リーガロイヤルホテル小倉

21 世紀の社会では技術と経営が相互に関連するダイナミックな革新が不可避です。イノベーション創出や組織力向上による競争優位確保のために、MOT(Management of Technology)の果たす役割はますます重要になっています。第 8 回イノベーション&マネジメント国際会議の基調講演の聴講をご希望される方を対象に、基調講演を公開します。聴講料のみで基調講演を聴講して頂きますので、是非ご参加ください。

| **イノベーション&マネジメント国際会議 基調講演 概要** (<http://icim2011.mot.yamaguchi-u.ac.jp>)

日時 : 平成 23 年 11 月 30 日(水) 10:30~15:00 (10:00 開場)  
 会場 : リーガロイヤルホテル小倉 ロイヤルホール (<http://www.rihga-kokura.co.jp/>)  
 参加申し込み : 下記申し込み欄に必要事項を記入し、FAX でお申し込みください。  
 聴講料 : 3,000 円 (当日、会場受付にて現金でお支払いください)  
 懇親会 : 7,000 円 (バンケット, 18:30~20:00)  
 定員 : 100 名(先着順)

| **基調講演 プログラム** (講師プロフィールは裏面をご覧ください)

9:00 ~ 10:00	イノベーション&マネジメント国際会議 オープニングセレモニー
10:00 ~ 10:30	休憩
10:30 ~ 11:00	【基調講演 1】久村 春芳氏 『自動車産業におけるイノベーション ~日産自動車の事例~』
11:00 ~ 11:30	【基調講演 2】大津留 榮佐久氏 『次世代のマーケットを見据えた地域イノベーションクラスターの推進 ~シリコン・シーベルト福岡プロジェクト~』
11:30 ~ 12:00	【基調講演 3】神庭 弘年氏 『PM コイノベーションを実現するツールだ!』
12:00 ~ 12:30	【基調講演 4】ウエン・バン・チュエン氏 『生産デザイン手法の研究開発』
12:30 ~ 13:30	休憩
13:30 ~ 14:30	【基調講演 5】まつもと ゆきひろ氏 『ルビー : オープンソースによるブレイクスルー』
14:30 ~ 15:00	休憩
15:00 ~ 18:00	イノベーション&マネジメント国際会議 テーマ別セッション (国際会議テーマ別セッションの聴講は、ICIM2011 への参加登録(有料)が必要です)
18:30 ~ 20:00	バンケット(ガラディナー) ロイヤルホール 参加費 7,000 円

**参加申し込み FAX 0836-85-9877**

ご氏名	(ふりがな )
ご所属	
連絡先	住所 電話/FAX
電子メール	@
参加希望 (チェック)	( ) 基調講演の聴講のみ (3,000 円) ( ) 基調講演の聴講およびバンケットへの参加を希望する (3,000+7,000 円)

第8回 イノベーション&マネジメント国際会議 基調講演  
 International Conference of Innovation and Management 2011  
 平成 23 年 11 月 30 日(水) 於 リーガロイヤルホテル小倉

講師プロフィール



**【基調講演 1】自動車産業におけるイノベーション ～日産自動車の事例～**  
**久村 春芳(くむら はるよし)氏 日産自動車株式会社 執行役員**

1981 年、東京工業大学大学院修士課程機械工学専攻修了。同年、日産自動車株式会社入社。同社総合研究所動力環境研究所主任研究員、主管研究員、動力環境研究所所長を経て、2005 年同社総合研究所所長となる。2006 年に同社総合研究所担当執行役員となり、2009 年 4 月より同社フェローとしてテクノロジーインテリジェンスを担当。同社入社以来約 20 年にわたりベルト CVT 及びトroidal CVT の研究開発に従事。2000 年、「ダブルキャピティ方式トroidal CVT の開発」により第 50 回自動車技術会賞技術開発賞、同年「トroidal CVT の研究開発」により第 32 回市村産業賞賞状、2001 年「ベルト CVT 無断変速機の変速制御技術」により関東地方発明表彰発明奨励賞受賞。



**【基調講演 2】次世代のマーケットを見据えた地域イノベーションクラスターの推進 シリコン・シールド福岡プロジェクト**  
**大津留 榮佐久(おおつる えいさく)氏**

福岡県産業・科学技術振興財団(ふくおか IST)システム LSI 推進プロデューサー兼研究開発事業総括  
 半導体大手テキサス・インスツルメンツ日本に入社、約 22 年間に在籍し、技術マーケティング、システム/カスタムビジネス開発等のマネージャー歴任。2001 年よりソニーセミコンダクタ九州(株)実装部門長、SIP 事業部長、大分テクノロジーセンター代表、国際資材調達部門長を歴任。2005 年、九州大学大学院工学研究院ユーザサイエンス機構(USI)特任教授に就任。2007 年 シリコンシールド福岡構想の総指揮を務めるシステム LSI 推進プロデューサーに就任すると共に、知的クラスター創成事業(第 II 期)の開始に伴い、福岡先端システム LSI 開発クラスター戦略本部の事業総括を務め、現在に至る。



**【基調講演 3】PMこそイノベーションを実現するツールだ！**  
**神庭 弘年(かんば ひろとし)氏 PMI 日本支部 会長**

1973 年、日本 IBM・大阪入社。製造、金融、保険、流通など多岐に渡る多数のシステム開発プロジェクトに関与し、2003 年、日本 IBM 理事に就任。2006 年 5 月 定年(理事退任)、2008 年に PMI 日本支部 会長に就任。慶応義塾大学院や産業技術大学院大学の非常勤講師も勤め、日本のプロジェクトマネジメントの発展に寄与。日本 IBM 理事退任後、PM プロフェッション最高位者として職務継続、現在に至る。



**【基調講演 4】生産デザイン手法の研究開発**  
**ウェン・バン・チュエン氏 東北大学(中華人民共和国)**

ウェン・バン・チュエン教授は 1957 年に Northeastern Polytechnic Institute (中国、東北大学)を卒業し、研究者生活を始めました。ウェン教授は中国科学アカデミーのメンバーです。中国機械学会の名譽会長であり、中華人民共和国における最も著名な振動分野の研究者の一人として知られています。振動工学、非線形振動会解析、動的設計に関する研究に従事しました。さらに、彼は、同期ならびに非同期振動に関する理論を展開し、機械回転子の非線形振動理論を探索しました。本講演では、生産品質に関する包括的な設計理論を紹介します。



**【基調講演 5】ルビー：オープンソースによるブレイクスルー**  
**まつもと ゆきひろ氏 株式会社ネットワーク応用通信研究所 特別研究員**

日本発のオープンソースプログラミング言語「Ruby」の生みの親。英語圏では「Matz」の愛称で呼ばれている。1993 年、静岡県浜松市に居住していた頃、効率的に記述できるプログラム言語の実現を目指し、Ruby の開発を始めた。1997 年より、鳥根県松江市の株式会社ネットワーク応用通信研究所 (NaCI) に勤務。現在はフェロー。現在株式会社楽天の楽天技術研究所フェロー、Ruby 普及を目的とする財団法人「Ruby アソシエーション」の理事長も兼務し、近年ではアメリカの Ruby ベースのクラウド企業 Heroku の Ruby チーフアーキテクトとしても活動している。2009 年には Ruby の開発に関する功績を認められ、松江市の名譽市民に選ばれた。

- 主 催 : 国立大学法人山口大学 大学院技術経営研究科  
 共 催 : ティルバーグ大学(オランダ)、ボンティフィシア大学サンパウロ (ブラジル)、武漢理工大学(中華人民共和国)  
 後 援 : 西日本 MOT コンソーシアム、研究・技術計画学会、MOT 協議会、PMI 日本支部、プロジェクトマネジメント学会、北九州商工会議所、北九州市  
 協 賛 : 財団法人西日本産業貿易コンベンション協会  
 ホームページ : [icim2011.mot.yamaguchi-u.ac.jp](http://icim2011.mot.yamaguchi-u.ac.jp)  
 お問い合わせ 〒755-8611 山口県宇部市常盤台 2-16-1  
 山口大学大学院技術経営研究科 事務局内 イノベーション&マネジメント国際会議 実行委員会  
 電話 0836-85-9876 電子メール [icim2011@yamaguchi-u.ac.jp](mailto:icim2011@yamaguchi-u.ac.jp)

## (2) FD 特別講演

三菱商事株式会社元エネルギー本部長の佐山安弘氏を講師として迎え、「エネルギー資源と日本の外交」と題して日本のエネルギー資源に関する課題について解説して頂いた。

日時 平成 24 年 3 月 21 日 (水)

場所 山口グランドホテル

講師 佐山安弘氏 (三菱商事株式会社元エネルギー本部長)

題目 「エネルギー資源と日本の外交」

### 講師略歴

●1941 年 8 月 26 日生まれ

●山口県出身

山口大経済学部卒、64 年三菱商事入社。73 年中東監督付 (バイルート・クウェート)、89 年バグダッド支店長代行、91 年電力燃料部長、94 年石油貿易本部長、参与昇役。95 年石油貿易本部長兼原油部長、98 年役員待遇昇役。99 年燃料グループ SVP、01 年 6 月執行 役員九州支社長。



### 第3節 教育改善に関する活動

#### (1) コア・カリキュラムに基づく平成25年度カリキュラムの編成

本研究科ではFD活動の取り組みの一環として、平成20年度ならびに21年度にMOT教育コア／カリキュラムを策定した。

平成20, 21年度文部科学省

「専門職大学院等における高度専門職業人養成教育推進プログラム」事業  
MOT教育コア・カリキュラム開発

本事業は、文部科学省の「専門職大学院等における高度専門職業人養成教育推進プログラム」の1つとして採択されたものであり、平成20年度から21年度において技術経営系専門職大学院協議会(MOT協議会)を構成する全国の10大学でMOT教育のコアとなる内容を定めることを目的とし、MOT協議会・会長校である山口大学大学院擬宇術経営研究科が中心となって取りまとめを行った。

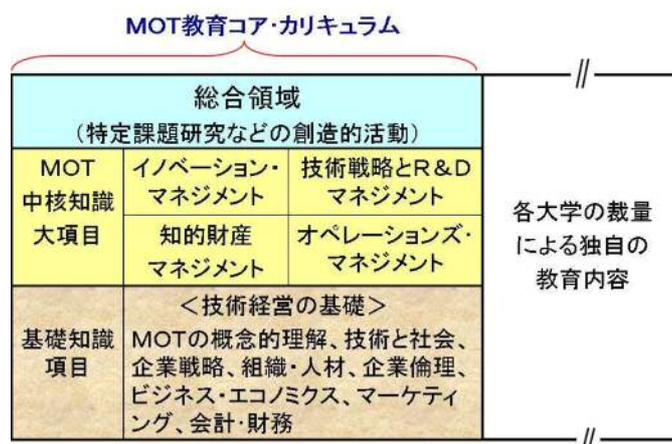


図1 MOT教育コア・カリキュラムの構成

MOT教育コア・カリキュラムは、日本におけるMOT教育展開の基盤であり、MOT教育の質向上を図るために技術経営教育の内容を整備する。全てのMOT専門職大学院の学生が習得すべき内容を体系化したものであり、今後、大学における技術経営教育はMOT教育コア・カリキュラムをベースにして大学院教育カリキュラムを編成し、「MOT専門職大学院修了生の到達度の保証」の基盤となることを目指す。図1に、教育コア・カリキュラムの構成を示す。

当研究科では、平成22年度からFD活動における教育改善の取り組みとして、MOT教育コア・カリキュラムに基づいた教育カリキュラムの見直しを継続的に計ってきた。

基盤科目においては、平成22年度における『新産業創出論』と『プロジェクトマネジメント特論』の2科目を廃し、平成24年度から新たに『イノベーション・マネジメント』と『オペレーションズ・マネジメント特論』を開講する予定である。また、応用・演習系科目では、『商品開発演習』と『ビジネスプラン演習』を統合し、新たに『商品開発・ビジネスプラン演習』を開講する(図2, 図3)。

平成22年度 カリキュラム構成		
<b>基盤科目(必修)</b>	<b>応用・演習系科目 (3科目以上選択)</b>	<b>展開科目群(選択)</b>
新産業創出論	プロジェクトマネジメント演習	経営戦略(5科目)
知的財産権論	商品開発演習	知的財産(3科目)
プロジェクトマネジメント特論	知的財産戦略演習	財務・経済(2科目)
企業経営特論	ビジネスプラン演習	地域(2科目)
会計・財務特論		ベンチャー(2科目)
組織と人材マネジメント特論		技術戦略(2科目)
		技術管理(4科目)
		先端技術(3科目)
特定課題研究(必修)		

図2 本研究科のカリキュラム構成と MOT 教育コア・カリキュラムの基礎知識項目ならびに中核知識項目に対応する範囲 (朱書きの枠)

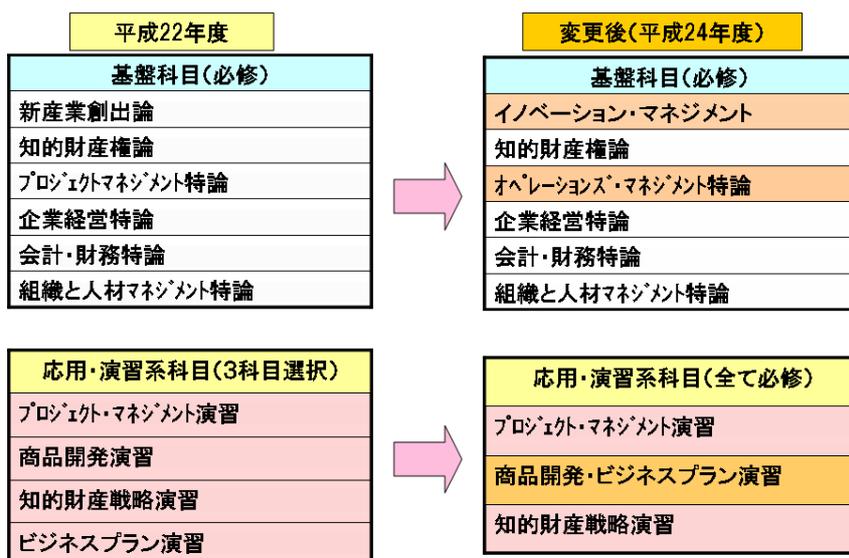


図3 平成22年度のカリキュラムから改訂した平成24年度カリキュラム

平成23年度における教育改善の取り組みとして、教育カリキュラムの更なる継続的な向上を目指し、図4に示す改訂計画を検討した。

平成25年度 基盤科目・応用科目

科目分類	科目名
基盤科目	イノベーション・マネジメント
	オペレーションズ・マネジメント特論
	ビジネス法務
	会計・エコノミクス特論
	テクノロジー・マーケティング特論
	企業戦略特論
応用科目	知財MOT特論
	グリーンMOT特論
	ライフサイエンスMOT特論
	ものづくりMOT特論

平成25年度 展開科目

科目分類	科目名	
展開科目	戦略立案	技術戦略特論
		オープンイノベーション戦略特論
	施策展開	マーケティングリサーチ特論
		R&D マネジメント特論
	ビジネスプランニング	ベンチャービジネス特論
		ビジネスファイナンス特論
	課題解決法	戦略思考特論
		創造的問題解決特論
	グループマネジメント	経営組織特論
		リーダーシップ論(新設)
	知財	知財戦略特論
	国際知財法務特論	

新設する科目を黄色で示す

図4 平成25年度 新カリキュラムのフレームワーク (案)

(2) 技術経営教育コア／カリキュラムに基づく到達度評価システムの検討

MOT 教育コア・カリキュラムで示される MOT 修了者に必須の能力について自己評価し、自分の能力を数値化することにより弱点を認識し自己成長することを目指し、到達度評価システムの構築を検討した。評価結果は項目別に集計され、レーダーチャート形式で表示される。



図5 到達度評価システムの概要

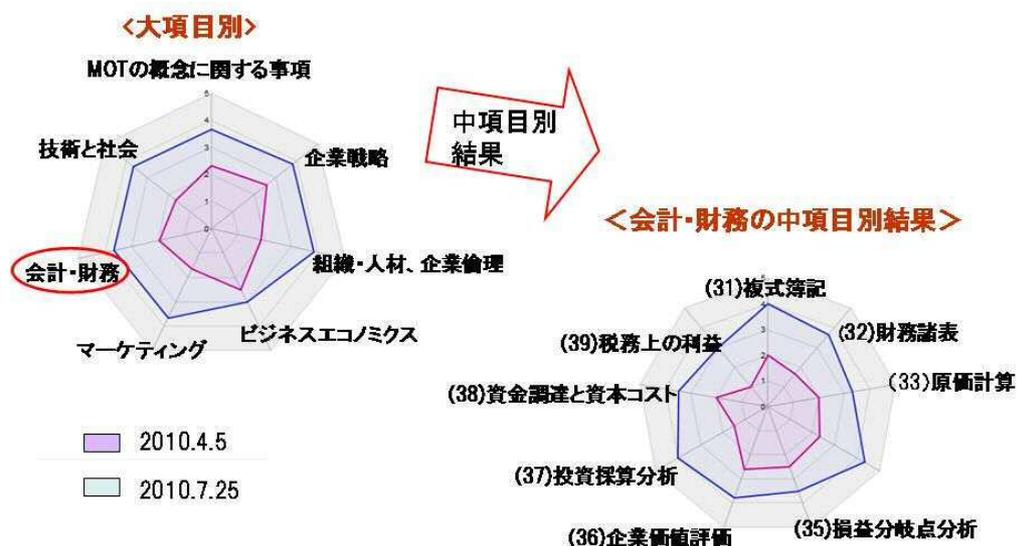


図6 到達度評価結果（レーダーチャート）

## 第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

教育改善を目的とした評価活動

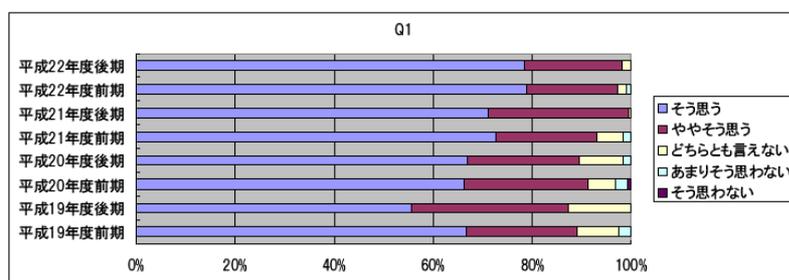
### (1) 学生授業評価

[学習指導法に対する学生授業評価]

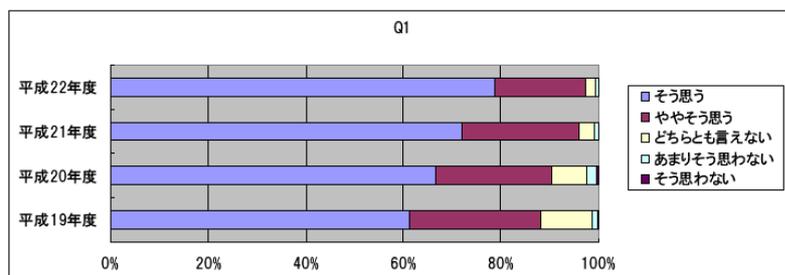
学習指導法に対する学生による5段階の授業評価の結果では、「そう思う」から「どちらとも言えない」までを含めた肯定的な意見が、6項目とも80～90%を締めている。同時に、年度ごとに指標が良くなっていることが見出せる。

質問(Q1)：教員の話し方が明瞭で、聞き取りやすかったと思いますか？

講義科目



演習科目

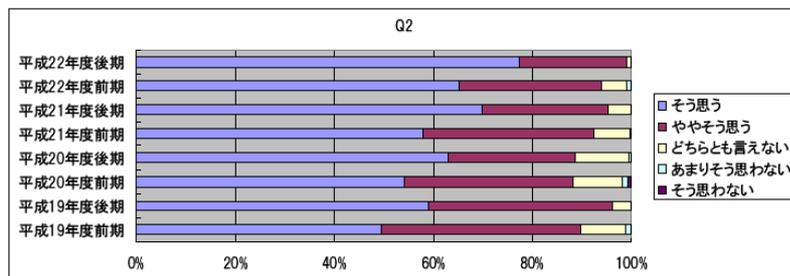


平成23年度 授業科目総合平均 4.6

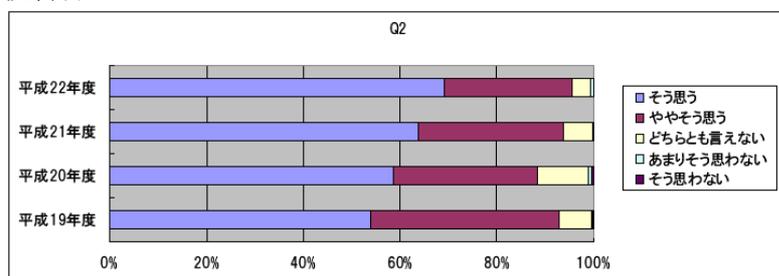
平成23年度 演習科目総合平均 4.8

質問 (Q2) : 理論や考え方、専門用語などが、わかりやすく説明されたと思いますか？

講義科目



演習科目

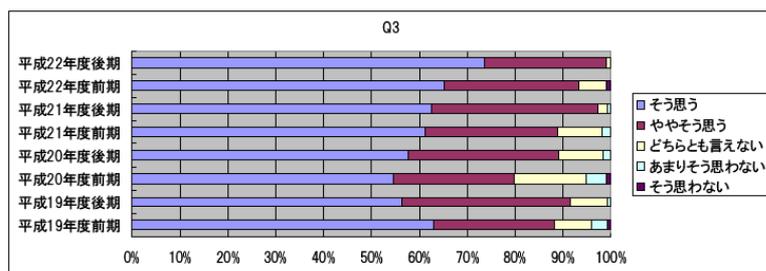


平成 23 年度 授業科目総合平均 4.70

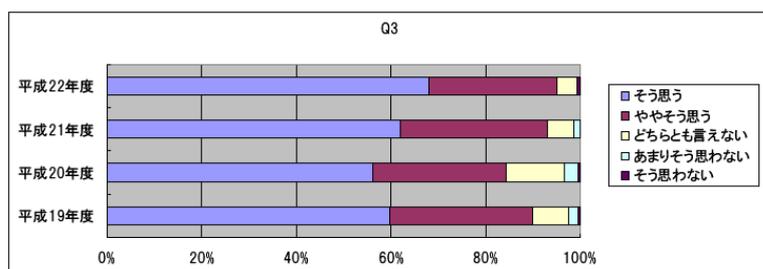
平成 23 年度 演習科目総合平均 4.76

質問 (Q3) : 教材、板書、プロジェクターなどに授業の理解を促す工夫がなされていたと思いますか？

講義科目



演習科目

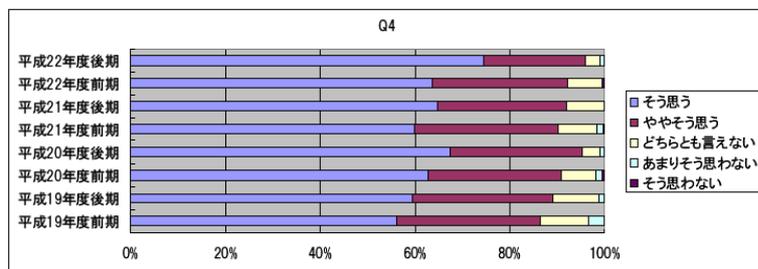


平成 23 年度 授業科目総合平均 = 4.7、

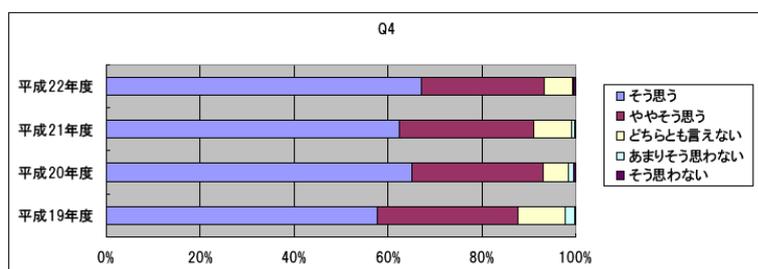
平成 23 年度 演習科目総合平均 = 4.7

質問 (Q4) : 練習問題、課題・宿題、参考文献の例示など授業外での学習を促す工夫がなされていたと思いますか？

講義科目



演習科目

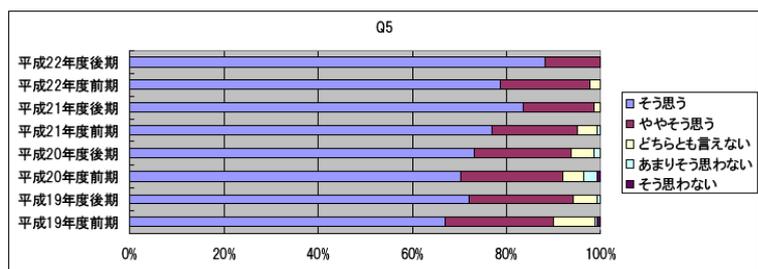


平成 23 年度 授業科目総合平均 4.70 点

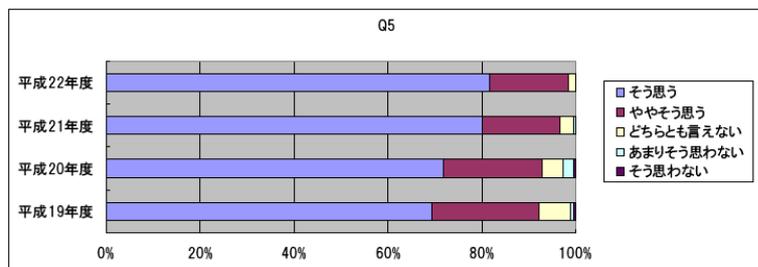
平成 23 年度 演習科目総合平均 4.60 点

質問 (Q5) : 学生の疑問・質問への対応が十分であったと思いますか？

講義科目



演習科目

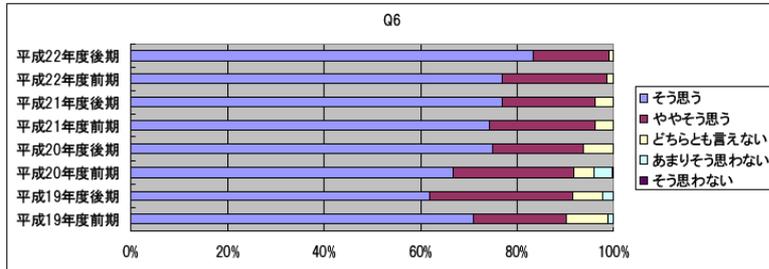


平成 23 年度 授業科目総合平均 4.73 点

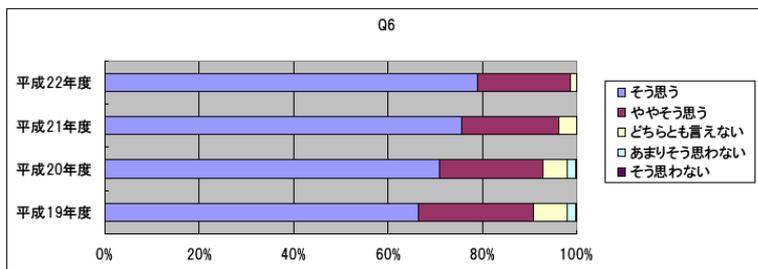
平成 23 年度 演習科目総合平均 4.70 点

質問（Q6）：担当教員の熱意を感じましたか？

講義科目



演習科目



平成 23 年度 授業科目総合平均 4.79 点

平成 23 年度 演習科目総合平均 4.75 点

回答選択肢					
	そう思う	ややそう思う	どちらとも言えない	余りそう思わない	そう思わない

[授業の成果に対する学生授業評価]

授業の成果に対する5段階による選択式の学生による授業評価の結果では、「そう思う」から「ややそう思う」の肯定的な意見の占める割合は、質問(Q8)学習目標の達成については80%、質問(Q9)授業の理解については89%、質問(Q10)授業に対する満足度は96%であり、これら3項目はいずれも高い評価を得た。

質問(Q8)：あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？

平成23年度 授業科目総合平均 4.3点

平成23年度 演習科目総合平均 4.4点

質問(Q9)：あなたは、授業の内容を理解できましたか？

平成23年度 授業科目総合平均 4.4点

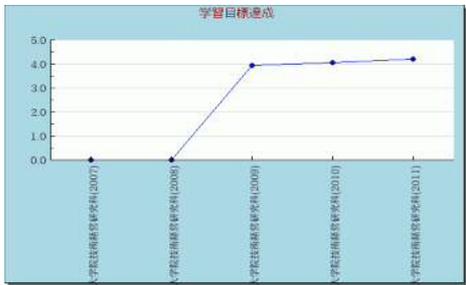
平成23年度 演習科目総合平均 4.5点

質問(Q10)：この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？

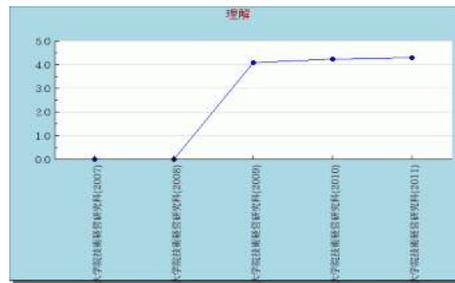
平成23年度 授業科目総合平均 4.7点

平成23年度 演習科目総合平均 4.7点

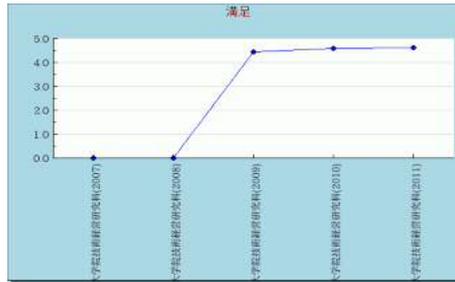
学生\_授業外学習時間等集計データ

<p>学生_授業外学習時間 経年変化</p>	 <table border="1"> <caption>授業外学習時間 (推定値)</caption> <thead> <tr> <th>年度</th> <th>平均値</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>平成19年度(2007)</td> <td>0.0</td> </tr> <tr> <td>平成20年度(2008)</td> <td>0.0</td> </tr> <tr> <td>平成21年度(2009)</td> <td>3.8</td> </tr> <tr> <td>平成22年度(2010)</td> <td>4.2</td> </tr> <tr> <td>平成23年度(2011)</td> <td>3.8</td> </tr> </tbody> </table>	年度	平均値	平成19年度(2007)	0.0	平成20年度(2008)	0.0	平成21年度(2009)	3.8	平成22年度(2010)	4.2	平成23年度(2011)	3.8
年度	平均値												
平成19年度(2007)	0.0												
平成20年度(2008)	0.0												
平成21年度(2009)	3.8												
平成22年度(2010)	4.2												
平成23年度(2011)	3.8												
<p>学生_学習目標達成 経年変化</p>	 <table border="1"> <caption>学習目標達成 (推定値)</caption> <thead> <tr> <th>年度</th> <th>平均値</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>平成19年度(2007)</td> <td>0.0</td> </tr> <tr> <td>平成20年度(2008)</td> <td>0.0</td> </tr> <tr> <td>平成21年度(2009)</td> <td>4.0</td> </tr> <tr> <td>平成22年度(2010)</td> <td>4.0</td> </tr> <tr> <td>平成23年度(2011)</td> <td>4.2</td> </tr> </tbody> </table>	年度	平均値	平成19年度(2007)	0.0	平成20年度(2008)	0.0	平成21年度(2009)	4.0	平成22年度(2010)	4.0	平成23年度(2011)	4.2
年度	平均値												
平成19年度(2007)	0.0												
平成20年度(2008)	0.0												
平成21年度(2009)	4.0												
平成22年度(2010)	4.0												
平成23年度(2011)	4.2												

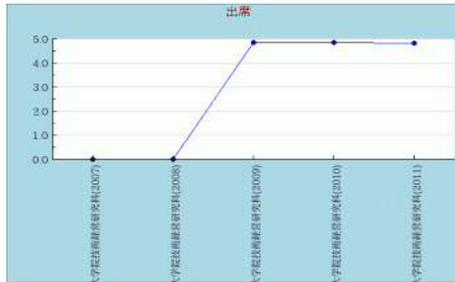
学生\_理解  
 経年变化



学生\_満足  
 経年变化



学生\_出席  
 経年变化



## 第5節 FD実施経費報告書

部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額 (千円)	FD活動の効果（簡潔に）
技術経営研究科	講演及び教員の授業啓発の指導助言	講師謝金・旅費 1名	34	技術経営教育の授業内容の改善・充実について知見を得た。
	FD 特別講演	講師謝金・旅費 1名	73	技術経営教育においてグローバルな視点をもつことが重要であることの認識を深めた。
<b>計</b>			<b>107</b>	

## 第6節 来年度の課題

技術経営研究科では、平成22年度のFD活動として取り組んだ下記の二つの成果を継続的に実施する。

平成24年度の課題

- (1) コア・カリキュラムに基づく平成26年度カリキュラムの編成

平成24年度から新しいカリキュラムに移行するのにあたって、新規に開講する授業科目の教材開発ならびに既存科目の教材の見直しを図る。

- (2) 技術経営教育コア／カリキュラムに基づく到達度評価システムの検討

MOT教育コア・カリキュラムに準拠した到達度の評価を継続的に実施する。

# 第19章 連合獣医学研究科のFD活動

## 第1節

山口大学大学院連合獣医学研究科は山口大学、鳥取大学および鹿児島大学の共同獣医学部あるいは農学部獣医学科の教員組織並びに研究設備、施設を連合した基本的に修業年数4年の大学院博士課程である。大学院博士課程の学生は主指導教員の属する大学に配属されて研究指導を受ける。

教育活動

- 1、共通ゼミナール
- 2、各大学における特別講義
- 3、Eラーニング

## 第2節 共通ゼミナール

山口大学大学院連合獣医学研究科 学生授業評価（結果）

<授業科目名> 平成23年度獣医学共通ゼミナール セミナー（平成23年8月26日 実施）

<担当教員名> 鳥取大学

<学年>

- |        |      |
|--------|------|
| 1. 1年生 | 17 人 |
| 2. 2年生 | 22 人 |
| 3. 3年生 | 17 人 |
| 4. 4年生 | 1 人  |
| 5. 無回答 | 1 人  |

<学生区分>

- |         |      |
|---------|------|
| 1. 一般学生 | 18 人 |
| 2. 留学生  | 20 人 |
| 3. 社会人  | 19 人 |
| 5. 無回答  | 1 人  |

<質問 I >

1) 教員の話し方は聞き取りやすかったと思いますか？

- |              |      |
|--------------|------|
| 1. そう思わない    | 0 人  |
| 2. 余りそう思わない  | 0 人  |
| 3. どちらとも言えない | 6 人  |
| 4. ややそう思う    | 23 人 |
| 5. そう思う      | 29 人 |
| 6. 無回答       | 0 人  |

2) 理論や考え方、専門用語などがわかりやすく説明されましたか？

- |  |           |    |   |
|--|-----------|----|---|
| 1.                                       | そう思わない    | 0  | 人 |
| 2.                                       | 余りそう思わない  | 2  | 人 |
| 3.                                       | どちらとも言えない | 12 | 人 |
| 4.                                       | ややそう思う    | 26 | 人 |
| 5.                                       | そう思う      | 18 | 人 |
| 6.                                       | 無回答       | 0  | 人 |
| <b>3) テキストやプリントなどの教材が効果的に使われましたか？</b>    |           |    |   |
| 1.                                       | そう思わない    | 0  | 人 |
| 2.                                       | 余りそう思わない  | 3  | 人 |
| 3.                                       | どちらとも言えない | 9  | 人 |
| 4.                                       | ややそう思う    | 24 | 人 |
| 5.                                       | そう思う      | 22 | 人 |
| 6.                                       | 無回答       | 0  | 人 |
| <b>4) コンピュータなどの視聴覚メディアが効果的に使われましたか？</b>  |           |    |   |
| 1.                                       | そう思わない    | 0  | 人 |
| 2.                                       | 余りそう思わない  | 0  | 人 |
| 3.                                       | どちらとも言えない | 3  | 人 |
| 4.                                       | ややそう思う    | 16 | 人 |
| 5.                                       | そう思う      | 39 | 人 |
| 6.                                       | 無回答       | 0  | 人 |
| <b>5) 学生の疑問・質問などに対して適切な回答が得られましたか？</b>   |           |    |   |
| 1.                                       | そう思わない    | 0  | 人 |
| 2.                                       | 余りそう思わない  | 0  | 人 |
| 3.                                       | どちらとも言えない | 6  | 人 |
| 4.                                       | ややそう思う    | 23 | 人 |
| 5.                                       | そう思う      | 28 | 人 |
| 6.                                       | 無回答       | 1  | 人 |
| <b>6) 教員の身振りや手振り、目を見て話すなどの態度は適切でしたか？</b> |           |    |   |
| 1.                                       | そう思わない    | 0  | 人 |
| 2.                                       | 余りそう思わない  | 3  | 人 |
| 3.                                       | どちらとも言えない | 5  | 人 |
| 4.                                       | ややそう思う    | 22 | 人 |
| 5.                                       | そう思う      | 27 | 人 |
| 6.                                       | 無回答       | 1  | 人 |
| <b>7) 教員のセミナーに対する熱意を感じましたか？</b>          |           |    |   |
| 1.                                       | そう思わない    | 0  | 人 |
| 2.                                       | 余りそう思わない  | 3  | 人 |
| 3.                                       | どちらとも言えない | 7  | 人 |
| 4.                                       | ややそう思う    | 22 | 人 |
| 5.                                       | そう思う      | 25 | 人 |
| 6.                                       | 無回答       | 1  | 人 |
| <b>8) あなたはセミナーの内容を理解しましたか？</b>           |           |    |   |
| 1.                                       | そう思わない    | 1  | 人 |
| 2.                                       | 余りそう思わない  | 1  | 人 |
| 3.                                       | どちらとも言えない | 13 | 人 |
| 4.                                       | ややそう思う    | 33 | 人 |
| 5.                                       | そう思う      | 9  | 人 |
| 6.                                       | 無回答       | 1  | 人 |

9) このセミナーはあなたにとって満足のいくものでしたか？

- |              |      |
|--------------|------|
| 1. そう思わない    | 0 人  |
| 2. 余りそう思わない  | 1 人  |
| 3. どちらとも言えない | 8 人  |
| 4. ややそう思う    | 28 人 |
| 5. そう思う      | 20 人 |
| 6. 無回答       | 1 人  |

10) このセミナーは、あなたの研究にとって有意義でありましたか？

- |              |      |
|--------------|------|
| 1. そう思わない    | 1 人  |
| 2. 余りそう思わない  | 2 人  |
| 3. どちらとも言えない | 7 人  |
| 4. ややそう思う    | 25 人 |
| 5. そう思う      | 22 人 |
| 6. 無回答       | 1 人  |

平成23年度山口大学大学院連合獣医学研究科  
獣医学共通ゼミナールに関するアンケート結果（抜粋）

期 日	平成23年8月24日（水）～8月27日（土）
場 所	鳥取大学
参加学生	64名      アンケート回収      55名分

1) 英語論文の書き方について

1. 具体的説明が分かりやすく、また、やる気の出てる、前向きな気持ちを起こさせる内容だった。資料も2種類あり、有意義だった。
2. 英語論文の書き方というより、論文の書き方を学ぶことができた。
3. 非常に良かったです。このような授業は他にないので参考になりました。
4. Course was good but I think rather than video class a class with a teacher speaking in front of us is good too understanding.

2) 実践プレゼンテーション論について

1. 今まで自分が行っていたプレゼンテーション方法と異なり、新たな方法を知った。これを踏まえて、今後プレゼンを行っていこうと思う。
2. 人に短い時間で要点を伝えることの難しさを考えさせられました。ですが、すぐに実践できそうな事も沢山あったので、少しずつしようと思います。
3. 前日のポスター発表を例に説明して下さったのでとてもわかりやすかったです。
4. Like as No.1 question a prefer class with teacher who speaks in front of us. In that case we can ask question in places of confusion.

3) セミナーC, D 2年生以上

1. スライドにもう少し日本語訳を入れて欲しいです。話すのは英語でも良いのですが、専門用語など(病名など)は分からないものも多く、日本語訳がわかればもっと理解が深まるのに…と思いました。
2. 分野が違う方はちょっと分かりづらかったけど、内容は興味の持ちやすいものだったので、おもしろく聞くことができました。

3. 講義形式で先生方の話を聞くのは久しぶりなので刺激になります。
4. 自分と異なる分野のセミナーは理解できなかった。
5. These Seminars provided interesting information for us. We can update some wen things. However, professors should give more time to discuss with students.

#### 4) ポスター研究紹介について

1. 様々な分野のポスターを見て分かりやすい表現やまとめ方を参考にすることができた。
2. 今回発表だったのですが、できれば、ポスター間をもう少しあけていただけた方が、質問を受けやすいように感じました。お互いききとりにくかったようです。
3. 時間に余裕がありすぎた気がする。偶数奇数入れ替えで行ったので、パネル前が込みすぎずに見やすかった。
4. 研究している分野が異なると、理解しにくいことが残念でした。皆さん分かりやすくまとめていただいていたと思うのですが、英語と日本語の2つのバージョンがあれば他の専門の理解がさらに出来、交流ができるのではと思いました。
5. The posters of the Japanese students were written in Japanese. All the posters should have been written in English so the Foreign students may understand us well, especially for international students with poor ability to read (and communicate) in Japanese.

#### 5) 研究交流会について

1. 実施時間、発表スタイル、内容等多くの改善が必要であると思いました。
2. 食事をとりながらだと、宗教上の理由で参加できなかつたり、食べることのほうに気がいってしまうので、30分でも15分でも時間をとって、交流会にしたほうが良いと思います。飲み物だけでいいと思います。
3. 他大学の学生との交流は楽しいものであり、また良い刺激を受けました。社会人院生とお話出来たことは特に視野を広げる良い機会だったと思います。
4. The question - answer session, students and participants should speak and take all in English if it is possible.

#### 6) 学生研究紹介について

1. 来年自分も発表なので、発表のやり方等参考になりました。こういう機会がないと英語で発表することがないと思うので非常に良い勉強になると思います。
2. 英語でのプレゼンテーションに若干疑問を感じます。内容がなかなかうまく伝わらず、活発なDiscussionが得られない為、日本語での発表の方が有益なのは?と感じました。あと、演題とのプロジェクターの角度がきつく、画面を見ながらの発表が困難だった為、出来れば演題の場所、角度をもう少し考えて設置していただきたかったです。
3. とても良く勉強されていたと思いました。座長の先生方が発表学生を助けていたのがとても良かったです。来年の座長の先生は、発表者を助けてあげてください。
4. It was a good chance to practice our English, and know which kind of researches was being done in the united graduate school.

#### 7) 特別講演について

1. 英語、要所では日本語も交えて頂きわかりやすい講演でした。その分野に関わったことがなくてもわかりやすい内容でした。
2. 最新の技術について御紹介いただき、とても良かったと思います。もっと時間があればよかったともったいなく思いました。
3. 「衝撃」を受けました。研究領域の広さ、深さ、高度さ全てにおいて衝撃的で大変よい刺激を頂きました。これからの意欲にもつながりました。
4. 臨床に近い内容のこともしてほしいです。
5. 最先端の興味深い内容だった。スライド内容のプリントが欲しかった。

## その他全体に関する意見、要望など

1. セミナーの開始・終了時間を電車の時刻に合わせて頂けると良かったと思います。
2. H23入学であり初めての参加でしたが、全体を通して大変有意義なセミナーであり、山口大連合大学院に入学できたことに対して嬉しく思うとともに今後の研究への意欲にもつなげることができるものと思います。
3. 座長や質問者および講演の先生方には、日本語と英語の両方で説明していただくか、通訳の先生をつけるかしていただけると、より理解が深まり助かります。よろしくお願いします。また、日本語で説明していただいた後は英語にしてあげて下さい。4日間ありがとうございました。
4. 食事を取ることができないムスリムの方がいたので、交流会で食事を各自で行うのは良いと思いました。
5. 専門領域によるとは思いますが、実践講義があっても面白いと思う。
6. すこし室温がさむかったです。
7. 開催の時期がインターシップとかぶっているので、できればお盆前に開催して欲しいです。
8. 特別講演に押村先生のような方を呼んで頂きありがとうございます。このような先生を囲んで座談会があれば大変嬉しいです。お忙しいので無理なことだと思いますが…。
9. もう少し時間を合理的に使って、セミナーを短くして欲しい。
10. That seminar is very good for researcher and we can know different type of work and at all is very useful.
11. If you consider the seminar time other than Ramadan, it will be better for muslims students.
12. I am third year international student. So, I have 3 times experience for summer seminar. 2009 & 2010 seminar is very nice and impressive. In 2011, some oral presentation section, there were no professor for chairman and advisor. Also, when chairman introduce advisor (professor) to audience, most of the professor were not active and not professional. If professors, students, and staffs are not serious and stress for our seminar, our future and impression of UYU is not so good. This is not my negative view.
13. Differences between seminar in Tottori and other university.
  1. using big auditorium is better than lecturer room
  2. Feel relax and not stress in Tottori
14. Thank you very much for giving me this chance to enjoy this perfect summer seminar. Although I have not any presentation, I have learned a lot from others. I take these as my most important treasure.
15. I am very glad that all Japanese students made effort to speak and explain in English.

## 第3節 各大学における特別講義

### 平成23年度第1回 山口大学大学院連合獣医学研究科 特別講義 アンケート結果

〈授業科目名〉	平成23年度第1回山口大学大学院連合獣医学研究科特別講義
〈実施日〉	平成23年6月10日(金) 10時30分～12時00分
〈実施大学〉	鳥取大学
〈担当教員名〉	山口大学 『Invasion mechanism of intracellular bacteria 細胞内寄生菌の細胞侵入機構』 山口大学 『Lessons from animals (動物から学ぶ)』

〈受 講 者〉

1. 連合獣医学研究科1年生	3名
2. 連合獣医学研究科2年生	4名
3. 連合獣医学研究科3年生	2名
4. 農学部獣医学科4年生	29名
5. 農学部獣医学科6年生	1名
6. その他	1名
	合計40名

〈特別講義はあなたにとって有意義でしたか?〉

1. はい	35名 (87.5%)
2. いいえ	2名 ( 5%)
3. 無回答	3名 ( 7.5%)

〈講義についての意見・感想〉

- ・ 細菌がどのようにターゲットされずにマクロファージ内に入るかについてとてもおもしろかったです。
- ・ 人と動物との関わりの大切さを再認識でき、良かったです。
- ・ 私の実験と研究の目的や背景を考えるのに何が必要か、どう説明すると興味を引きつけられるのか、ということについてとても参考になりました。
- ・ 普段授業で聞いていることをより詳しく実践的な形式で聞くことができたので良かったです。
- ・ 英語だけでよかったと思います。日本語でも話すと同じことを2回聴くことになるので、うまく集中できませんでした。

## 平成23年度第2回 山口大学大学院連合獣医学研究科 特別講義 アンケート結果

〈授業科目名〉 平成23年度第2回山口大学大学院連合獣医学研究科特別講義

〈実施日〉 平成23年10月7日(金) 10時20分～11時50分

〈実施大学〉 山口大学

〈担当教員名〉 鳥取大学

『Characterization of the spermatogenesis related genes in maturing rat testis  
ラット精子形成関連遺伝子の機能解析』

鹿児島大学

『Prevalence of feline hemoplasma infection in Japan』

〈受 講 者〉

1. 連合獣医学研究科1年生	4名
2. 連合獣医学研究科2年生	2名
3. 連合獣医学研究科3年生	2名
4. 連合獣医学研究科4年生	1名
4. 農学部獣医学科2年生	29名
5. 農学部獣医学科4年生	19名
6. その他	1名
	合計58名

〈特別講義はあなたにとって有意義でしたか?〉

- |        |           |
|--------|-----------|
| 1. はい  | 53名 (91%) |
| 2. いいえ | 1名 (2%)   |
| 3. 無回答 | 4名 (7%)   |

〈講義についての意見・感想〉

- ・ 他大学の先生がどのような研究を行っているか知るよい機会になりました。
- ・ 途中で休憩が欲しかった。
- ・ 現在研究室でやっているようなことと同じような手技で色々なことを調べていて、興味深く思いました。
- ・ 英語による講義はグローバル社会に出る私たちにはとても重要である。今後もこのような英語による講義を取り入れることは英語への抵抗感をなくすために必要ではないかと思う。
- ・ 日本語でも説明してくださったので理解することができ、安心しました。

## 平成23年度第3回 山口大学大学院連合獣医学研究科 特別講義 アンケート結果

〈授業科目名〉 平成23年度第3回山口大学大学院連合獣医学研究科特別講義

〈実施日〉 平成23年11月18日(金) 10時30分～12時00分

〈実施大学〉 鹿児島大学

〈担当教員名〉 山口大学

『GI motility and Intestinal resident macrophages

消化管運動と腸管常在型マクロファージ』

山口大学

『Biology of uterine natural killer cells』

〈受講者〉

- |                |       |
|----------------|-------|
| 1. 連合獣医学研究科1年生 | 1名    |
| 2. 連合獣医学研究科2年生 | 2名    |
| 3. 連合獣医学研究科3年生 | 3名    |
| 4. 農学部獣医学科4年生  | 18名   |
| 5. 農学部獣医学科5年生  | 3名    |
| 6. その他         | 2名    |
|                | 合計29名 |

〈特別講義はあなたにとって有意義でしたか?〉

- |        |           |
|--------|-----------|
| 1. はい  | 24名 (83%) |
| 2. いいえ | 3名 (10%)  |
| 3. 無回答 | 2名 (7%)   |

〈講義についての意見・感想〉

- ・ 英語の授業は慣れていないし、内容も難しかったのでなかなか理解はできなかったが、大学院授業の雰囲気は少しわかった気がしました。
- ・ 今日の講義の目的がわからなかった。対象は?何を伝えたかった?
- ・ 難しくわからない部分もありましたが、内容はとてもおもしろかったので、また機会があったら参加したいです。
- ・ 時間が少し短かったので、ちょっと残念でありました。
- ・ 実験に関するお話は普段あまりきく機会がないので、良かったです。

## 平成 23 年度 山口大学 教学委員会 名簿

部 局 名	職 名	氏 名	任 期	備 考
	副学長 (教育学生担当)	吉 田 一 成		大学教育 機構長
大学教育センター	センター長	岩 部 浩 三		
学生支援センター	センター長	吉 村 誠		
保健管理センター	所 長	平 野 均		
留学生センター	センター長	服 部 幸 夫		
人文学部	教 授	池 園 宏	H22.4.1~H24.3.31	
人文学部	教 授	武 本 雅 嗣	H23.4.1~H25.3.31	
教育学部	教 授	五 島 淑 子	H22.4.1~H24.3.31	
教育学部	教 授	千々和 一 豊	H23.4.1~H25.3.31	
経済学部	教 授	有 村 貞 則	H22.4.1~H24.3.31	
経済学部	教 授	陳 建 平	H23.4.1~H25.3.31	
理学部	教 授	内 野 英 治	H22.4.1~H24.3.31	
理学部	教 授	川 俣 純	H23.4.1~H25.3.31	
医学部	教 授	渡 部 省 二	H22.4.1~H24.3.31	保健学科
医学部	教 授	松 山 豪 泰	H23.4.1~H25.3.31	医学科
工学部	教 授	今 井 剛	H22.4.1~H24.3.31	
工学部	教 授	麻 生 稔 彦	H23.4.1~H25.3.31	
農学部	教 授	山 本 晴 彦	H22.4.1~H24.3.31	
農学部	准教授	赤 壁 善 彦	H23.4.1~H25.3.31	
学生支援部	学生支援部長	藤 井 純 朗		
学生支援部	教育支援課長	佐 藤 晃 一		
学生支援部	学生支援課長	杉 山 宏		

## 平成 23 年度 山口大学 学部・研究科 FD 担当者 名簿

部 局 名	職 名	氏 名	備 考
人文学部 人文科学研究科	教 授	太 田 聡	
教育学部 教育学研究科	准教授	野 村 厚 志	
経済学部 経済学研究科	教 授	中 田 範 夫	
理学部 医学系研究科（理学） 理工学研究科（理学）	教 授 教 授	内 野 英 治 野 崎 浩 二	H23.4.1～H23.5.31 H23.6.1～H24.3.31
医学部（医学科） 医学系研究科（医学）	教 授	原 田 規 章	
医学部（保健学科）	教 授	正 村 啓 子	
工学部 理工学研究科（工学） 医学系研究科（工学）	教 授 教 授	田 中 幹 也 今 井 剛	2名
農学部 農学研究科 医学系研究科（農学）	准教授	赤 壁 善 彦	
東アジア研究科	准教授	森 野 正 弘	
技術経営研究科	准教授	大 島 直 樹	
連合獣医学研究科	教 授	前 田 健	

平成 23 年度 山口大学 大学教育センター 名簿

部 局 名	職 名	氏 名	備 考
大学教育センター	センター長	岩 部 浩 三	
//	主 事	糸 長 雅 弘	
//	主 事	渡 邊 幹 雄	
//	主 事	中 田 充	
//	教 授	小 川 勤	
//	准教授	吉 田 香 奈	
//	准教授	木 下 真	
//	講 師	岡 田 耕 一	

平成 23 年度 山口大学 FD 報告書「山口大学の FD 活動」  
平成 25 年 5 月発行

編集・発行 山口大学大学教育機構、山口大学教学委員会  
山口市吉田 1677-1  
TEL (083) 933-5150 (学生支援部教育支援課)